

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第400集

本庄市

川越田遺跡 III

女堀川河川改修事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告 II

2013

埼玉県

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 川越田遺跡H地点第1号祭祀跡出土遺物



2 川越田遺跡H地点出土遺物（古墳時代後期）

序

埼玉県は、「安心の確立、成長の実現、そして自立自尊の埼玉へ」の基本理念のもとに、危機・災害に備えるため、治水・治山対策を推進しています。台風や想定を超えた集中豪雨などによる河川の氾濫を防ぐための改修事業は、その一つの柱であります。

本庄市街を流れる女堀川についても、大雨による流域の浸水被害の軽減を図るため、河道拡幅や護岸工事等が行われております。

事業地内には、これまでの発掘調査によって、古墳時代の大規模な集落跡である川越田遺跡が存在することが知られています。今回の調査は、埼玉県県土整備部河川砂防課の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

発掘調査の結果、古墳時代（1700～1400年前）の竪穴住居跡が幾重にも重なった状態で見つかりました。また、河川跡の岸辺からおびただしい量の土器や玉、鉄鏃が出土しました。川や水にかかる祭りの跡と考えられます。当時の人々が川とともに生活し、川に祈りを捧げていた様子がわかりました。

本書は、これらの発掘調査の成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、埼玉県県土整備部河川砂防課、本庄県土整備事務所、本庄市教育委員会並びに地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成25年2月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 中 村 英 樹

例 言

1. 本書は、本庄市児玉町大字高闘に所在する川越田遺跡H地点の発掘調査報告書である。

2. 遺跡の略号と代表地番、及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

川越田遺跡H地点 (KWGED H地点)

児玉郡児玉町大字高闘字北川添出口117-2 他
教生文第2-53号

川越田遺跡H地点 (KWGED H地点)

本庄市児玉町大字高闘字北川添出口181-1 他
教生文第2-84号

3. 発掘調査は、女堀川河川改修工事に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。調査は埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、埼玉県県土整備部河川砂防課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。また、報告書作成事業も同課から委託を受け、当事業団が実施した。

4. 事業の委託事業名は、下記のとおりである。

発掘調査事業（平成22・23年度）

「河川改修工事事業に伴う埋蔵文化財発掘調査」（平成22年度）

「河川改修工事（埋蔵文化財発掘調査委託）」

（平成23年度）

整理報告書作成事業（平成24年度）

「地域自主戦略交付金（河川）工事（埋蔵文化財発掘調査（整理）委託）」

5. 発掘調査・整理報告書作成事業はI-3に示した組織により実施した。

H地点第1次調査は、平成23年2月1日から平成23年2月28日まで、木戸春夫が担当した。

H地点第2次調査は、平成23年4月27日から平成23年10月7日まで、剣持和夫、瀧瀬芳之、岩瀬譲、田中広明が担当した。

整理報告書作成事業は、平成24年4月9日から平成24年12月28日まで、福田聖が担当して実

施し、平成25年2月に事業団報告書第400集として印刷・刊行した。

6. 基準点測量は井田起業株式会社に、空中写真撮影は株東京航業研究所に委託した。

7. 出土炭化材の樹種同定は、(株)パレオ・ラボに委託した。

8. 発掘調査における写真撮影は各担当者が行った。整理報告書作成における出土遺物の写真撮影は福田が行い、大屋道則の協力を得た。口絵用の遺物写真撮影は、小川忠博氏に委託した。

9. 出土品の整理・図版作成は福田が行い、大谷徹・大屋の協力を得た。

10. 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、IIを大谷、IVの石製品、(5)の出土状況を大屋が、Vをパレオ・ラボが、その他を福田が行った。

11. 本書の編集は福田が行った。

12. 本書にかかる諸資料は、平成25年3月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。

13. 発掘調査や本書の作成にあたり、下記の機関、方々から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします。

本庄市教育委員会 恋河内昭彦 篠原祐一
藤野一之

凡 例

1. 遺跡全体におけるX・Yの数値は、世界測地系による国土標準平面直角座標第IX系（原点北緯 $36^{\circ}00'00''$ 、東経 $139^{\circ}50'00''$ ）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位はすべて座標北を示す。

H - 4 グリッド北西杭の座標は、X = 24250.00m、Y = -60690.00m（北緯 $36^{\circ}12'59.987''$ 、東経 $139^{\circ}09'29.917''$ ）で、杭上の標高は70.156mである。（小数点第3位以下切り捨て）

2. 調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく $10 \times 10\text{m}$ の範囲を基本（1グリッド）とし、調査区全域をカバーする方眼を設定した。

3. グリッド名称は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット（A・B・C…）、西から東方向に数字（1・2・3…）を付し、両者を組み合わせて、B-7 グリッドと表記した。

4. グリッド内部の名称は、北西隅を基点とし、西から東方向に数字（1・2・3…）を付して呼称し、B7g-10と表記した。

5. 本書の本文、挿図、表、写真図版中に記した主な遺構の略号は、以下のとおりである。

SJ…竪穴住居跡 SD…溝跡
SK…土壙 P…小穴・柱穴

6. 本書における挿図の縮尺は、原則として以下のとおりであるが、一部例外もある。縮率は、個々の図面内に記す。

全測図 1/300
遺構図 1/60・1/30
遺物実測図・拓本 1/4・1/3
土製品・金属製品・石製品 1/3・1/2・1/1

7. 実測図の表記方法は以下のとおりである。断面を黒塗りしたものは須恵器。また、彩色された土器についてはその範囲に網を掛けて示した

（赤彩10%・黒色処理30%）

8. 遺構断面図に表記した水準数値は、海拔標高（単位：m）を示す。

9. 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。

・器種は弥生土器→弥生、土師器、須恵器、須恵系土師と表記した。

・遺物の計測値は土器はcm、石製品はmm、重さはgを単位とする。

・土器計測値の（ ）は復元推定値を示す。

・胎土は土器中に含まれる特徴的な鉱物等を記号で示した。

A : 雲母 B : 片岩 C : 角閃石 D : 長石

E : 石英 F : 軽石 G : 砂粒子 H : 赤色粒子 I : 白色粒子 J : 針状物質 K : 黒色粒子 L : その他 M : チャート

・焼成は良好・普通・不良の3段階に分けて示した。

・残存率は図示した器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。

・備考には出土位置、注記No.、赤彩の有無、煤の付着、推定される須恵器の生産地などを記した。

・臼玉の加工痕は記号で表記した。

A : 横位回転痕 B : 横位回転痕（磨滅）

C : 横位回転痕と縦位擦痕 D : 縦位擦痕

E : 不明瞭

・遺物観察表に記した色調は、すべて農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』によった。

10. 本書に掲載した地図類は、国土地理院発行1/25,000地形図、および本庄市都市計画図1/2,500を編集・使用した。

11. 文中の引用文献等は、（著者 発行年）の順で表現し、その他の参考文献とともに巻末に一覧を掲載した。

目 次

卷頭図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	(6) 河川跡	122
1. 発掘調査に至る経過	1	(7) ピット	127
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	4. 平安時代の遺構と遺物	127
(1) 発掘調査	2	(1) 住居跡	127
(2) 整理報告書の作成	2	5. 中・近世の遺構と遺物	130
3. 発掘調査・報告書作成の組織	3	(1) 溝跡	130
II 遺跡の立地と環境	4	(2) 土壙	132
1. 地理的環境	4	(3) 畠跡	133
2. 歴史的環境	5	6. グリッド出土の遺物	133
III 遺跡の概要	10	(1) 土器	133
IV 検出された遺構と遺物	18	(2) 鉄製品	138
1. 縄文・弥生時代の遺物	18	(3) 石製品	138
2. 古墳時代前期の遺構と遺物	19	V 科学分析	140
(1) 住居跡	19	1. 川越田遺跡出土炭化材の樹種同定	140
(2) 土壙	25	VI 調査のまとめ	146
3. 古墳時代後期の遺構と遺物	27	1. 調査の成果	146
(1) 住居跡	27	2. 出土土器について	146
(2) 住居跡出土の石製品	79	3. 遺構の変遷	147
(3) 溝跡	83	4. 祭祀跡について	150
(4) 土壙	87	写真図版	
(5) 祭祀跡	88		

挿図目次

第1図 埼玉県の地形	4	第35図 第5号住居跡	36
第2図 周辺の地形	5	第36図 第5号住居跡出土遺物	37
第3図 周辺の遺跡	6	第37図 第6号住居跡	39
第4図 基本土層	10	第38図 第6号住居跡出土遺物	39
第5図 川越田遺跡周辺地形図	11	第39図 第7号住居跡・出土遺物	40
第6図 川越田遺跡調査区位置図	12	第40図 第8号住居跡・出土遺物	40
第7図 川越田遺跡グリッド網図	13	第41図 第9・10号住居跡	41
第8図 川越田遺跡A区全体図	14	第42図 第9号住居跡出土遺物	42
第9図 川越田遺跡B区全体図	14	第43図 第9・10号住居跡出土遺物	43
第10図 川越田遺跡C区全体図	15	第44図 第12号住居跡	43
第11図 川越田遺跡D区全体図	15	第45図 第12号住居跡出土遺物	44
第12図 川越田遺跡上層全体図	17	第46図 第13号住居跡	45
第13図 繩文・弥生時代出土遺物	18	第47図 第13号住居跡出土遺物	46
第14図 第11号住居跡・出土遺物	19	第48図 第14号住居跡・出土遺物	48
第15図 第11・12号住居跡出土遺物	20	第49図 第15号住居跡	49
第16図 第34号住居跡	20	第50図 第15号住居跡出土遺物	49
第17図 第34号住居跡出土遺物	21	第51図 第16号住居跡	50
第18図 第35号住居跡	21	第52図 第16号住居跡出土遺物	50
第19図 第35号住居跡出土遺物	22	第53図 第17号住居跡・出土遺物	51
第20図 第37号住居跡	23	第54図 第18号住居跡	52
第21図 第37号住居跡出土遺物	24	第55図 第18号住居跡出土遺物	52
第22図 第38号住居跡・出土遺物	25	第56図 第19号住居跡	53
第23図 第39号住居跡	25	第57図 第20号住居跡	54
第24図 第5号土壙	26	第58図 第20号住居跡出土遺物	54
第25図 第5号土壙出土遺物	26	第59図 第21号住居跡	55
第26図 第2号住居跡	28	第60図 第22号住居跡・出土遺物	55
第27図 第3号住居跡	29	第61図 第23号住居跡	56
第28図 第3号住居跡出土遺物	30	第62図 第24号住居跡	58
第29図 第4号住居跡	31	第63図 第24号住居跡出土遺物	59
第30図 第4号住居跡遺物出土状況	32	第64図 第24・28号住居跡出土遺物	59
第31図 第4号住居跡カマド	32	第65図 第25号住居跡	60
第32図 第4号住居跡出土遺物（1）	33	第66図 第26号住居跡	60
第33図 第4号住居跡出土遺物（2）	34	第67図 第26号住居跡出土遺物	61
第34図 第4号住居跡出土遺物（3）	35	第68図 第27号住居跡・出土遺物	62

第69図 第27・28号住居跡出土遺物	62	第105図 第1号祭祀跡出土遺物（2）	103
第70図 第28号住居跡	63	第106図 第1号祭祀跡出土遺物（3）	105
第71図 第28号住居跡出土遺物	64	第107図 第1号祭祀跡出土遺物（4）	107
第72図 第29号住居跡	64	第108図 第1号祭祀跡出土遺物（5）	108
第73図 第29号住居跡出土遺物	65	第109図 第1号祭祀跡出土遺物（6）	109
第74図 第30号住居跡・カマド	67	第110図 第1号祭祀跡出土遺物（7）	110
第75図 第30号住居跡出土遺物	68	第111図 第1号祭祀跡出土遺物（8）	111
第76図 第30・31号住居跡出土遺物	69	第112図 第1号祭祀跡出土遺物（9）	112
第77図 第31号住居跡	70	第113図 第1号祭祀跡出土遺物（10）	113
第78図 第31号住居跡出土遺物（1）	71	第114図 第1号祭祀跡出土遺物（11）	114
第79図 第31号住居跡出土遺物（2）	72	第115図 第1号祭祀跡出土遺物（12）	115
第80図 第32号住居跡	73	第116図 河川跡全体図	122
第81図 第32号住居跡出土遺物	74	第117図 河川跡（A区）	123
第82図 第33号住居跡	76	第118図 河川跡（B・C区）	124
第83図 第33号住居跡出土遺物	77	第119図 第2号河川跡出土遺物（1）	125
第84図 第36号住居跡	78	第120図 第2号河川跡出土遺物（2）	126
第85図 第36号住居跡出土遺物	78	第121図 第1号住居跡	128
第86図 住居跡出土の石製品	80	第122図 第1号住居跡出土遺物	129
第87図 第4・6・10・11号溝跡	84	第123図 第1・2・3・5・7・8・9号溝跡	
第88図 第12・13号溝跡	85		131
第89図 溝跡出土遺物	86	第124図 第2号溝跡出土遺物	132
第90図 第3・4号土壙	88	第125図 第1・2号土壙	132
第91図 第4号土壙出土遺物	88	第126図 第1・2号畠跡	133
第92図 第1号祭祀跡全体図	89	第127図 グリッド出土遺物（1）	134
第93図 第1号祭祀跡遺物全体図	90	第128図 グリッド出土遺物（2）	135
第94図 第1号祭祀跡遺物出土状況図（1）	91	第129図 グリッド出土鉄製品	138
第95図 第1号祭祀跡遺物出土状況図（2）	92	第130図 グリッド出土石製品	139
第96図 第1号祭祀跡遺物出土状況図（3）	93	第131図 川越田遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真（1）	143
第97図 第1号祭祀跡遺物出土状況図（4）	93	第132図 川越田遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真（2）	144
第98図 第1号祭祀跡遺物分布図（1）	94	第133図 遺構変遷図	148
第99図 第1号祭祀跡遺物分布図（2）	95		
第100図 第1号祭祀跡遺物分布図（3）	96		
第101図 第1号祭祀跡遺物分布図（4）	97		
第102図 第1号祭祀跡遺物分布図（5）	98		
第103図 第1号祭祀跡遺物分布図（6）	99		
第104図 第1号祭祀跡出土遺物（1）	101		

表 目 次

第1表 第11号住居跡出土遺物観察表	20	第29表 第27・28号住居跡出土遺物観察表	62
第2表 第11・12号住居跡出土遺物観察表	20	第30表 第28号住居跡出土遺物観察表	64
第3表 第34号住居跡出土遺物観察表	21	第31表 第29号住居跡出土遺物観察表	65
第4表 第35号住居跡出土遺物観察表	22	第32表 第30号住居跡出土遺物観察表	69
第5表 第37号住居跡出土遺物観察表	24	第33表 第30・31号住居跡出土遺物観察表	69
第6表 第38号住居跡出土遺物観察表	25	第34表 第31号住居跡出土遺物観察表	72
第7表 第5号土壙出土遺物観察表	27	第35表 第32号住居跡出土遺物観察表	75
第8表 第3号住居跡出土遺物観察表	30	第36表 第33号住居跡出土遺物観察表	78
第9表 第4号住居跡出土遺物観察表	35	第37表 第36号住居跡出土遺物観察表	79
第10表 第5号住居跡出土遺物観察表	38	第38表 住居跡出土石製品観察表	81
第11表 第6号住居跡出土遺物観察表	39	第39表 溝跡出土遺物観察表	87
第12表 第7号住居跡出土遺物観察表	40	第40表 第4号土壙出土遺物観察表	88
第13表 第8号住居跡出土遺物観察表	41	第41表 第1号祭祀跡出土遺物観察表	116
第14表 第9号住居跡出土遺物観察表	42	第42表 第1号祭祀跡出土鉄製品観察表	119
第15表 第9・10号住居跡出土遺物観察表	43	第43表 第1号祭祀跡出土石製品観察表	120
第16表 第12号住居跡出土遺物観察表	44	第44表 第2号河川跡出土遺物観察表	126
第17表 第13号住居跡出土遺物観察表	47	第45表 第2号河川跡出土石製品観察表	127
第18表 第14号住居跡出土遺物観察表	48	第46表 第1号住居跡出土遺物観察表	129
第19表 第15号住居跡出土遺物観察表	50	第47表 第2号溝跡出土遺物観察表	132
第20表 第16号住居跡出土遺物観察表	51	第48表 グリッド出土遺物観察表	136
第21表 第17号住居跡出土遺物観察表	52	第49表 グリッド出土鉄製品観察表	138
第22表 第18号住居跡出土遺物観察表	53	第50表 グリッド出土石製品観察表	139
第23表 第20号住居跡出土遺物観察表	55	第51表 川越田遺跡出土炭化材の樹種同定結果	
第24表 第22号住居跡出土遺物観察表	56		141
第25表 第24号住居跡出土遺物観察表	59	第52表 今井川越田遺跡出土木材の樹種同定結果	
第26表 第24・28号住居跡出土遺物観察表	59		142
第27表 第26号住居跡出土遺物観察表	61	第53表 川越田遺跡出土炭化材の樹種同定	145
第28表 第27号住居跡出土遺物観察表	62		

写 真 図 版 目 次

卷頭図版

- 1 川越田遺跡H地点第1号祭祀跡出土遺物
- 2 川越田遺跡H地点出土遺物（古墳時代後期）

図版1

- 1 川越田遺跡遠景（1）（北から）
- 2 川越田遺跡遠景（2）（南西から）

図版2

- 1 川越田遺跡H地点空中写真（北から）
- 2 川越田遺跡H地点空中写真（西から）

図版3

- 1 A区上層全景（北東から）
- 2 A区畠跡（東から）
- 3 B区上層全景（北東から）
- 4 B区上層全景（南西から）
- 5 C区上層全景（北から）
- 6 C区上層全景（南から）
- 7 第1号溝跡（西から）
- 8 D区上層全景（北から）

図版4

- 1 D区上層全景（南から）
- 2 第2号溝跡（西から）
- 3 第3号溝跡（西から）
- 4 A区下層全景（南から）
- 5 A区下層全景（北から）
- 6 B区下層全景（北から）
- 7 B区下層全景（南西から）
- 8 C区北半下層全景（北西から）

図版5

- 1 D区下層全景（北から）
- 2 D区下層全景（南から）
- 3 第1号住居跡（西から）
- 4 第1号住居跡カマド（西から）
- 5 第2号住居跡（南から）
- 6 第2号住居跡カマド（南から）
- 7 第3号住居跡（南西から）
- 8 第3号住居跡カマド（南西から）

図版6

- 1 第4号住居跡（南西から）
- 2 第4号住居跡カマド（1）（南東から）
- 3 第4号住居跡カマド（2）（南東から）
- 4 第4号住居跡カマド（3）（北西から）
- 5 第4号住居跡カマド（4）（北西から）
- 6 第4号住居跡カマド（5）（南東から）

7 第4号住居跡カマド（6）（南東から）

- 8 第4号住居跡カマド煙道（北東から）

図版7

- 1 第4号住居跡遺物出土状況（北から）
- 2 第5号住居跡（北から）
- 3 第5号住居跡カマド（北から）
- 4 第6号住居跡（西から）
- 5 第6号住居跡カマド（西から）
- 6 第7号住居跡（西から）
- 7 第8号住居跡（西から）
- 8 第9・10号住居跡（北から）

図版8

- 1 第9号住居跡（北から）
- 2 第9号住居跡カマド（北から）
- 3 第11・12号住居跡・第9号溝跡（西から）
- 4 第11号住居跡ピット2 炭化材（東から）
- 5 第12号住居跡（北西から）
- 6 第13号住居跡（西から）
- 7 第13号住居跡カマド（西から）
- 8 第13号住居跡貯蔵穴（西から）

図版9

- 1 第13号住居跡遺物出土状況（1）（西から）
- 2 第13号住居跡遺物出土状況（2）（北から）
- 3 第4・14・15・21号住居跡（西から）
- 4 第14号住居跡（南東から）
- 5 第14号住居跡カマド（南東から）
- 6 第15号住居跡（南西から）
- 7 第16号住居跡（西から）
- 8 第17号住居跡（北西から）

図版10

- 1 第18号住居跡（南西から）
- 2 第19号住居跡（南から）
- 3 第20号住居跡（西から）
- 4 第20号住居跡カマド（西から）
- 5 第21号住居跡（西から）
- 6 第21号住居跡カマド（北西から）
- 7 第22号住居跡（西から）

8 第23号住居跡（南西から）

図版11

- 1 第24号住居跡（西から）
- 2 第24号住居跡カマド1・2（西から）
- 3 第24号住居跡カマド1（西から）
- 4 第24号住居跡カマド2 白玉出土状況（西から）
- 5 第25号住居跡（北西から）
- 6 第26号住居跡（南西から）
- 7 第26号住居跡カマド（南西から）
- 8 第26号住居跡第1号土壙（北西から）

図版12

- 1 第27号住居跡（北西から）
- 2 第28号住居跡（西から）
- 3 第28号住居跡カマド・貯蔵穴（西から）
- 4 第29号住居跡（東から）
- 5 第30号住居跡（南西から）
- 6 第30号住居跡カマド遺物出土状況（南西から）
- 7 第30号住居跡カマド（南西から）
- 8 第30号住居跡遺物出土状況（南西から）

図版13

- 1 第31号住居跡（南西から）
- 2 第31号住居跡ピット1（南西から）
- 3 第32号住居跡（東から）
- 4 第33号住居跡（1）（北西から）
- 5 第33号住居跡（2）（南東から）
- 6 第33号住居跡遺物出土状況（南東から）
- 7 第34・37・38号住居跡（北東から）
- 8 第34号住居跡（南西から）

図版14

- 1 第35号住居跡遺物出土状況（1）（南西から）
- 2 第35号住居跡遺物出土状況（2）（南西から）
- 3 第35号住居跡遺物出土状況（3）（南西から）
- 4 第35号住居跡ピット1遺物出土状況（南から）
- 5 第36号住居跡（南から）
- 6 第36号住居跡カマド（南から）
- 7 第37号住居跡（北東から）

8 第37号住居跡遺物出土状況（南西から）

図版15

- 1 第38号住居跡（北東から）
- 2 第39号住居跡炉跡（南から）
- 3 第4号溝跡（1）（西から）
- 4 第4号溝跡（2）（西から）
- 5 第5号溝跡（西から）
- 6 第6・7号溝跡（西から）
- 7 第12号溝跡（西から）
- 8 第13号溝跡（西から）

図版16

- 1 第1号祭祀跡最上層（1）
- 2 第1号祭祀跡最上層（2）
- 3 第1号祭祀跡最上層（3）
- 4 第1号祭祀跡最上層（4）
- 5 第1号祭祀跡確認面D 5 G-69

図版17

- 1 第1号祭祀跡上層（1）
- 2 第1号祭祀跡上層（2）
- 3 第1号祭祀跡上層（3）
- 4 第1号祭祀跡上層（4）
- 5 第1号祭祀跡東西断面

図版18

- 1 第1号祭祀跡下層（1）
- 2 第1号祭祀跡下層（2）鉄製品
- 3 第1号祭祀跡下層（3）（第112図200）
- 4 第1号祭祀跡下層（4）（第112図190）
- 5 第1号祭祀跡下層（5）（第114図252・257）

図版19

- 1 第1号祭祀跡下層E 5 G -4付近（1）
- 2 第1号祭祀跡下層E 5 G -4付近（2）
- 3 第1号祭祀跡下層E 5 G -4付近（3）
- 4 第1号祭祀跡下層E 5 G -24・25付近（1）
- 5 第1号祭祀跡下層E 5 G -24・25付近（2）
- 6 第1号祭祀跡下層E 5 G -16付近（1）
- 7 第1号祭祀跡下層E 5 G -16付近（2）

8 第1号祭祀跡下層遺物出土状況（第113図211）

図版20

- 1 第1号祭祀跡下層D 5 G -97
- 2 第1号祭祀跡下層D 5 G -60 白玉（1）
- 3 第1号祭祀跡下層D 5 G -60 白玉（2）
- 4 第1号祭祀跡下層D 5 G -60 白玉（3）
- 5 第1号祭祀跡下層D 5 G -60 白玉（4）
- 6 第1号祭祀跡下層D 5 G -60 白玉（5）
- 7 第1号祭祀跡下層ベルト下（1）
- 8 第1号祭祀跡下層ベルト下（2）

図版21

- 1 第1号祭祀跡下層ベルト下（3）
- 2 第1号祭祀跡下層ベルト下（4）
- 3 第1号祭祀跡最下層（1）（西から）
- 4 第1号祭祀跡最下層（2）（北から）
- 5 第1号祭祀跡最下層（3）（北西から）
- 6 第1号祭祀跡最下層（4）（北西から）
- 7 第1号祭祀跡最下層（5）D 5 G -69・70・79・80（西から）
- 8 第1号祭祀跡最下層（6）

図版22

- 1 第1号祭祀跡最下層（7）
- 2 第1号祭祀跡最下層（8）
- 3 第1号祭祀跡最下層（9）D 5 G -68
- 4 第3号土壤（南西から）
- 5 第4号土壤（南から）
- 6 第5号土壤（南東から）
- 7 D 5 グリッドピット6 白玉
- 8 D 5 グリッドピット8

図版23

- 1 第1号住居跡（第122図6）
- 2 第3号住居跡（第28図1）
- 3 第3号住居跡（第28図2）
- 4 第3号住居跡（第28図3）
- 5 第3号住居跡（第28図4）
- 6 第4号住居跡（第32図1）

7 第3号住居跡（第28図13）

図版24

- 1 第4号住居跡（第32図5）
- 2 第4号住居跡（第32図15）
- 3 第4号住居跡（第32図16）
- 4 第4号住居跡（第32図19）
- 5 第4号住居跡（第32図20）
- 6 第4号住居跡（第33図30）
- 7 第4号住居跡（第33図31）

図版25

- 1 第4号住居跡（第33図32）
- 2 第4号住居跡（第34図33）
- 3 第4号住居跡（第34図34）
- 4 第4号住居跡（第34図36）
- 5 第5号住居跡（第36図1）
- 6 第5号住居跡（第36図2）
- 7 第5号住居跡（第36図3）
- 8 第5号住居跡（第36図8）

図版26

- 1 第5号住居跡（第36図10）
- 2 第5号住居跡（第36図13）
- 3 第5号住居跡（第36図19）
- 4 第9・10号住居跡（第43図1）
- 5 第9・10号住居跡（第43図2）
- 6 第11号住居跡（第14図1）
- 7 第12号住居跡（第45図1）
- 8 第12号住居跡（第45図4）
- 9 第13号住居跡（第47図1）

図版27

- 1 第13号住居跡（第47図2）
- 2 第13号住居跡（第47図4）
- 3 第13号住居跡（第47図10）
- 4 第13号住居跡（第47図11）
- 5 第13号住居跡（第47図15）
- 6 第13号住居跡（第47図20）
- 7 第13号住居跡（第47図21）

図版28

- 1 第13号住居跡 (第47図22)
- 2 第13号住居跡 (第47図24)
- 3 第15号住居跡 (第50図2)
- 4 第15号住居跡 (第50図1)
- 5 第15号住居跡 (第50図3)
- 6 第15号住居跡 (第50図4)
- 7 第16号住居跡 (第52図2)
- 8 第16号住居跡 (第52図4)

図版29

- 1 第15号住居跡 (第50図5)
- 2 第17号住居跡 (第53図2)
- 3 第20号住居跡 (第58図1)
- 4 第20号住居跡 (第58図2)
- 5 第26号住居跡 (第67図1)
- 6 第26号住居跡 (第67図5)
- 7 第27号住居跡 (第68図5)
- 8 第27・28号住居跡 (第69図3)

図版30

- 1 第28号住居跡 (第71図4)
- 2 第29号住居跡 (第73図1)
- 3 第29号住居跡 (第73図4)
- 4 第29号住居跡 (第73図7)
- 5 第30号住居跡 (第75図1)
- 6 第30号住居跡 (第75図2)
- 7 第30号住居跡 (第75図3)
- 8 第30号住居跡 (第75図4)
- 9 第30号住居跡 (第75図5)

図版31

- 1 第30号住居跡 (第75図8)
- 2 第30号住居跡 (第75図9)
- 3 第30号住居跡 (第75図11)
- 4 第30号住居跡 (第75図12)
- 5 第30号住居跡 (第75図13)
- 6 第30号住居跡 (第75図10)
- 7 第30・31号住居跡 (第76図1)
- 8 第30・31号住居跡 (第76図2)

図版32

- 1 第31号住居跡 (第78図1)
- 2 第31号住居跡 (第78図4)
- 3 第31号住居跡 (第78図14)
- 4 第31号住居跡 (第78図7)
- 5 第31号住居跡 (第78図10)
- 6 第31号住居跡 (第78図17)
- 7 第31号住居跡 (第78図18)

図版33

- 1 第31号住居跡 (第79図25)
- 2 第32号住居跡 (第81図2)
- 3 第32号住居跡 (第81図3)
- 4 第32号住居跡 (第81図5)
- 5 第32号住居跡 (第81図6)
- 6 第32号住居跡 (第81図7)
- 7 第32号住居跡 (第81図12)
- 8 第32号住居跡 (第81図15)
- 9 第32号住居跡 (第81図16)

図版34

- 1 第32号住居跡 (第81図17)
- 2 第32号住居跡 (第81図18)
- 3 第33号住居跡 (第83図1)
- 4 第33号住居跡 (第83図3)
- 5 第33号住居跡 (第83図8)
- 6 第33号住居跡 (第83図9)
- 7 第33号住居跡 (第83図4)

図版35

- 1 第33号住居跡 (第83図5)
- 2 第33号住居跡 (第83図6)
- 3 第33号住居跡 (第83図7)
- 4 第34号住居跡 (第17図1)
- 5 第34号住居跡 (第17図2)
- 6 第34号住居跡 (第17図5)
- 7 第34号住居跡 (第17図4)

図版36

- 1 第35号住居跡 (第19図1)
- 2 第35号住居跡 (第19図4)

- 3 第35号住居跡 (第19図7)
4 第36号住居跡 (第85図6)
5 第37号住居跡 (第21図2)
6 第37号住居跡 (第21図3)
7 第37号住居跡 (第21図4)
8 第37号住居跡 (第21図5)
- 図版37
- 1 第37号住居跡 (第21図10)
2 第37号住居跡 (第21図6)
3 第37号住居跡 (第21図14)
4 第4号溝跡 (第89図3)
5 第4号溝跡 (第89図4)
6 第5号土壤 (第25図2)
7 第5号土壤 (第25図8)
8 第5号土壤 (第25図11)
9 第5号土壤 (第25図16)
- 図版38
- 1 第2号河川跡 (第119図1)
2 第2号河川跡 (第119図3)
3 第2号河川跡 (第119図6)
4 第2号河川跡 (第119図9)
5 第2号河川跡 (第119図17)
6 第2号河川跡 (第119図19)
7 第2号河川跡 (第119図15)
- 図版39
- 1 A区グリッド (第127図1)
2 A区グリッド (第127図2)
3 A区グリッド (第127図3)
4 A区グリッド (第127図5)
5 A区グリッド (第127図8)
6 A区グリッド (第127図9)
7 A区グリッド (第127図10)
8 A区グリッド (第127図12)
9 B区グリッド (第128図27)
10 C区グリッド (第127図19)
- 図版40
- 1～10 第1号祭祀跡 (第109図135～144)
- 図版41
- 1 第1号祭祀跡 (第109図145)
2 第1号祭祀跡 (第109図146)
3 第1号祭祀跡 (第109図148)
4 第1号祭祀跡 (第109図149)
5 第1号祭祀跡 (第110図155)
6 第1号祭祀跡 (第110図157)
7 第1号祭祀跡 (第110図158)
8 第1号祭祀跡 (第110図167)
9 第1号祭祀跡 (第110図169)
10 第1号祭祀跡 (第110図171)
- 図版42
- 1 第1号祭祀跡 (第110図172)
2 第1号祭祀跡 (第110図173)
3 第1号祭祀跡 (第111図175)
4 第1号祭祀跡 (第111図174)
5 第1号祭祀跡 (第111図176)
6 第1号祭祀跡 (第111図177)
7 第1号祭祀跡 (第111図180)
8 第1号祭祀跡 (第111図181)
9 C区グリッド (第128図24)
- 図版43
- 1～12 第1号祭祀跡 (第104図1～12)
- 図版44
- 1～12 第1号祭祀跡 (第104図13～24)
- 図版45
- 1～12 第1号祭祀跡 (第104図25～第105図36)
- 図版46
- 1～12 第1号祭祀跡 (第105図37～48)
- 図版47
- 1～12 第1号祭祀跡 (第105図49～第106図60)
- 図版48
- 1～12 第1号祭祀跡 (第106図61～72)
- 図版49
- 1～12 第1号祭祀跡 (第106図73～第107図84)
- 図版50
- 1～12 第1号祭祀跡 (第107図85～96)

- 図版51
1～12 第1号祭祀跡 (第107図97～第108図108)
- 図版52
1～12 第1号祭祀跡 (第108図109～120)
- 図版53
1～12 第1号祭祀跡 (第108図121～132)
- 図版54
1 第1号祭祀跡 (第108図133)
2 A区グリッド (第128図30)
3 C区グリッド (第128図31)
4 A区グリッド (第128図32)
5 A区グリッド (第128図33)
6 A区グリッド (第128図34)
7 D区グリッド (第128図35)
8 A区グリッド (第128図36)
9 C区グリッド (第128図37)
10 A区グリッド (第128図38)
11 B区グリッド (第128図39)
12 A区グリッド (第128図40)
- 図版55
1 第3号住居跡 (第28図14)
2 第4号住居跡 (第86図1)
3 第4号住居跡 (第86図2)
4 第13号住居跡 (第86図3)
5 第14号住居跡 (第86図4)
6 第14号住居跡 (第86図5)
7 第17号住居跡 (第86図6)
8 第19号住居跡 (第86図8)
9 第19号住居跡 (第86図9)
10 第24号住居跡 (第86図10)
11 第24号住居跡 (第86図11)
12 第24号住居跡 (第86図12)
13 第24号住居跡 (第86図13)
14 第24号住居跡 (第86図14)
15 第24号住居跡 (第86図15)
16 第24号住居跡 (第86図16)
17 第24号住居跡 (第86図17)
- 18 第24号住居跡 (第86図18)
19 第24号住居跡 (第86図19)
20 第24号住居跡 (第86図20)
21 第27号住居跡 (第86図21)
22 第28号住居跡 (第86図22)
23 第28号住居跡 (第86図23)
24 第28号住居跡 (第86図24)
25 第28号住居跡 (第86図25)
26 第28号住居跡 (第86図26)
- 図版56
1 第16号住居跡 (第86図7)
2～20 第1号祭祀跡 (第113図211～229)
- 図版57
1～24 第1号祭祀跡 (第113図230～第114図253)
- 図版58
1～24 第1号祭祀跡 (第114図254～第115図277)
- 図版59
1～5 第2号河川跡 (第120図20～24)
6～17 グリッド (第130図1～12)
- 図版60
1 第4・5・6・8・13号住居跡
2 第14・26・28・29・30・31・34・37・38号住居跡
3 第31号住居跡
4 第1号祭祀跡
5 鉄製品 (1)
6 鉄製品 (2)
7 鉄製品 (3)

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では「埼玉県5か年計画」の中で、危機・災害に備えるための施策として「治水・治山対策の推進」を掲げ、台風や集中豪雨、また、それらによって引き起こされる浸水被害や土砂災害から県民の生命や財産を守るために、河川改修や調節池の整備等の治水対策を積極的に進めている。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、このような施策に伴う文化財の保護について、従前より関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

女堀川築堤護岸工事にかかる埋蔵文化財の所在及び取扱いについて、埼玉県本庄県土整備事務所長から生涯学習文化財課長あて、平成22年4月29日付け本整第128号で照会があった。

これに対し、生涯学習文化財課では平成22年6月2~3日、15~17日に試掘調査を行ったところ、埋蔵文化財を確認し、平成22年6月30日付け教生文第625-1号で、本庄県土整備事務所長あて次のとおり回答した。

発掘調査については、実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（当時）と、埼玉県本庄県土整備事務所、生涯学習文化財課の三者で調整協議を行った。

協議の結果、事業工程の関係から、年度を分割して調査を実施することになった。調査の期間は、平成23年2月1日から平成23年2月28日、平成23年4月27日から10月7日であった。

文化財保護法第94条の規定に基づく埋蔵文化財発掘通知が本庄県土整備事務所長から、また、同法第92条の規定に基づく発掘調査届が、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出され、発掘調査が実施された。なお、発掘調査届に対する県教育委員会教育長からの通知番号は、平成22年度は教生文第2-53号、平成23年度は教生文第2-84号である。

（生涯学習文化財課）

1 埋蔵文化財の所在

工事予定地内には次の埋蔵文化財が所在します。

名称(No.)	種別	時代	所在地
川越田遺跡 (No.54-275)	集落跡	古墳	本庄市児玉町 大字高閑地内

2 法手続き

工事予定地内には、上記の埋蔵文化財包蔵地が所在しますので、工事を行う場合には、工事着手前に文化財保護法第94条の規定による発掘通知を提出してください。

3 取扱いについて

別図「発掘調査を要する区域」について、工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、記録保存のための発掘調査を実施してください。

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

川越田遺跡の発掘調査は女堀川の河川改修事業に伴うもので、H地点1,323.64m²を対象とし、第1次調査（平成22年度）・第2次調査（平成23年度）の2回に分けて実施した。

第1次調査（平成22年度）

平成23年2月1日から2月28日まで上面の調査を実施し、第2次調査は、平成23年4月27日から10月7日まで下面の調査を実施した。

平成23年2月1・2日に発掘事務所の設置、危険防止のための囲柵の敷設を行い、3日に重機による表土除去を開始した。4日に補助員による遺構確認作業を行ったところ、中・近世と考えられる遺構を検出した。直ちに精査を開始し、順次土層断面図・遺構平面図の作成及び写真撮影等の記録作業を行った。また、遺構実測作業のための基準点測量及びグリッド杭敷設作業を実施した。

遺構・遺物の調査を完了した後、25日に機材の撤収、28日に発掘事務所の撤去を行い、すべての作業を終了した。

第2次調査（平成23年度）

平成23年4月下旬より重機による表土除去及び危険防止の囲柵の敷設等の作業を開始し、引続いて発掘事務所の設置を行った。また、遺構実測作業のための基準点測量及びグリッド杭敷設作業を、表土掘削の進捗に合わせて実施した。

5月上旬、重機による表土除去の後、補助員による遺構確認作業を行い、古墳時代後期を主体とした竪穴住居跡・溝跡・土壙・祭祀跡など多数の遺構を検出した。直ちに精査を開始し、順次土層断面図・遺構平面図の作成及び写真撮影等の記録作業を行った。

遺構・遺物の調査を完了した後、9月28日に機材の撤収、発掘事務所の撤去を行い、並行して埋め戻しを実施し、すべての作業を終了した。

(2) 整理報告書の作成

整理報告書作成事業は、平成24年4月9日から平成24年12月28日まで実施した。

出土遺物の整理作業は、まず水洗・注記作業を行い、その後、遺構単位に接合作業および欠損箇所を石膏で補てんする復元作業を実施した。また、接合・復元作業が完了したものから、順次実測用遺物や拓本用遺物を抽出した。実測作業は、5月中旬より開始した。完形に近い遺物については、機械実測機で素図を作成して行った。破片遺物については、断面実測と拓本作業を行った。完成した実測図・断面図のトレース作業は6月中旬から開始し、トレースを終了したのから、遺構ごとに遺物図版の版組作業を行った。

遺構図面の整理作業は、遺物の整理作業に並行して行った。始めに各種図面を分類・整理した上で、平面図と断面図の整合性をとって第二原図を作成した。遺構図面のトレース作業はパソコン上で行い、4月下旬より開始した。第二原図をスキャナーで取り込み、専用ソフトを用いてトレース図を作成した。遺構図版の作製は7月上旬より開始し、トレースした遺構図と土層説明等の入力データを組み合わせて版下を作成した。また、遺物を計測して観察表を作成した。

写真図版の編集は、9月から開始した。遺構写真は発掘調査時に撮影したものを使用し、遺物写真はスタジオで撮影した。報告書掲載用に選別した写真は画像処理ソフトでトリミング等を行い、パソコン上で割り付け・写植等を行って写真図版を完成させた。

8月中旬から、完成した図版・表および本文の割付作業と原稿執筆を開始し、12月下旬に印刷業者に入稿した。また、遺物・図面類・写真等の記録類は分類・整理し、報告書との対照が可能な状態で収納作業を行った。

印刷原稿の校正は3回行い、平成25年2月に報告書を刊行した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成22年度（発掘調査）

理 事 長	藤 野 龍 宏	調査部	
常務理事兼総務部長	萩 元 信 隆	調 査 部 長	小 野 美代子
総務部		調査部副部長	昼 間 孝 志
総務部副部長	金 子 直 行	調査第二課長	細 田 勝
総務課長	田 中 雅 人	主 査	木 戸 春 夫

平成23年度（発掘調査）

理 事 長	藤 野 龍 宏	調査部	
常務理事兼総務部長	根 本 勝	調 査 部 長	小 野 美代子
総務部		調査部副部長	剣 持 和 夫
総務部副部長	金 子 直 行	主幹兼調査第二課長	瀧 瀬 芳 之
総務課長	矢 島 将 和	主 査	岩 瀬 讓
		主 査	田 中 広 明

平成24年度（報告書作成）

理 事 長	中 村 英 樹	調査部	
常務理事兼総務部長	根 本 勝	調 査 部 長	昼 間 孝 志
総務部		調査部副部長	剣 持 和 夫
総務部副部長	富 田 和 夫	主幹兼整理第二課長	赤 熊 浩 一
総務課長	矢 島 将 和	主 査	福 田 聖

II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

川越田遺跡は、本庄市児玉町大字高関に所在する古墳時代前期から後期にかけて営まれた、大規模な集落跡である。標高約69mを測る。遺跡は女堀川の形成した自然堤防上に立地し、北東には関越自動車道本庄・児玉インターチェンジが近接している。JR高崎線本庄駅の南西約3km、JR八高線児玉駅の北東約3.5kmに位置する。

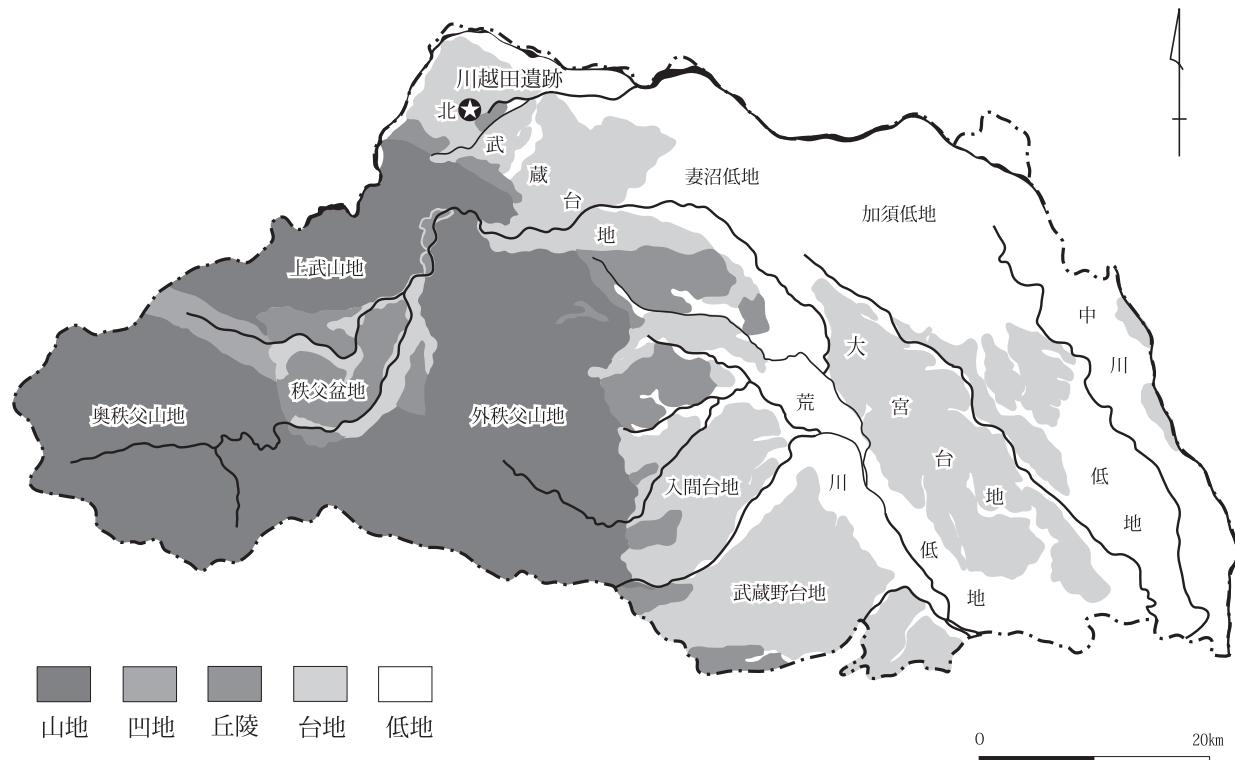
本庄市周辺の地形(第1・2図)は、北は利根川によって群馬県と境を接し、西は児玉丘陵を介して上武山地(秩父山地外縁)に連なる。

遺跡の立地する本庄台地は、神流川によって形成された洪積扇状地性地形(神流川扇状地)である。本庄台地は神川町池田付近が扇頂部にあたり、標高は約110mである。これより北西方向に緩やかに傾斜し、本庄市諏訪町で標高は約50mとなり、

扇端部は本庄段丘崖となり、妻沼低地に移行する。

本庄台地の南方には、独立丘陵(残丘)として生野山丘陵・浅見山(大久保山)丘陵があり、やや南東に離れて存在する山崎山丘陵とともに、「大和三山」にも喻えられる。生野山丘陵・浅見山丘陵の南側には小山川(身馴川)が東流し、西側から北側にかけては、川越田遺跡の面する女堀川が本庄市街地の南端部をかすめるように流れている。さらに、山崎山丘陵の西側には志戸川、東側には藤治川が北流する。これらの河川は、深谷市(旧岡部町)大字岡付近で合流して小山川となり、さらに深谷市大字高島付近で利根川本流に合流する。

妻沼低地は、利根川や小山川の乱流によって形成された沖積低地で、南は本庄台地と櫛挽台地で画され、北は利根川まで及んでいる。また、低地



第1図 埼玉県の地形

内では利根川をはじめとする河川の流向に沿うように、自然堤防と後背湿地が発達している。

本遺跡は、先述した神流川によって形成された神流川扇状地の扇央部東端に位置し、周辺一帯は南西から北東方向に向かって緩やかに傾斜している。神流川扇状地の東端には、南側の上武山地と児玉丘陵の境にあたる八王子—高崎構造線の断層崖付近に源を発する女堀川や金鑽川が流れしており、その開析による比較的広い沖積低地が河川の両側に開けている。

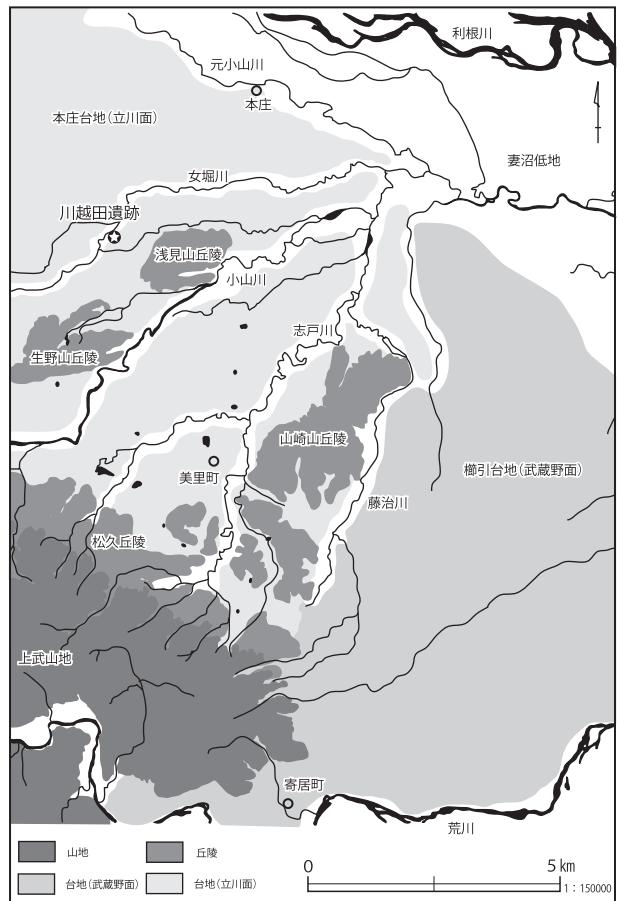
この沖積低地は、西側の児玉丘陵下から広がる低台地の本庄台地で、東側の児玉丘陵から河川の開析作用で分断された生野山・浅見山の残丘によって画されるため、帯状に展開したものとなっている。

2. 歴史的環境

ここでは、川越田遺跡周辺の古墳時代以降の主要遺跡について、その概略を述べる(第3図)。

古墳時代前期には女堀川流域の自然堤防・微高地上や、浅見山丘陵周囲の微高地上に大規模な集落が数多く形成される。西富田地区では社具路遺跡(25)、本庄・児玉インターチェンジ付近では川越田遺跡(1)・後張遺跡(5)、浅見山丘陵北側の下田遺跡(45)・七色塚遺跡(43)・久下東遺跡(42)、同じく丘陵西側では雷電下遺跡(59)など枚挙にいとまがない。これらの遺跡群からは、畿内系の小型精製土器群やタタキ甕、山陰系の鼓形器台、東海系のパレス壺やS字状口縁台付甕、北陸西部系の有段口縁甕、北陸東部系の千種甕等の外来系土器を伴う住居跡や方形周溝墓などの遺構が数多く検出されており、遠距離間交流の結節点として注目される。

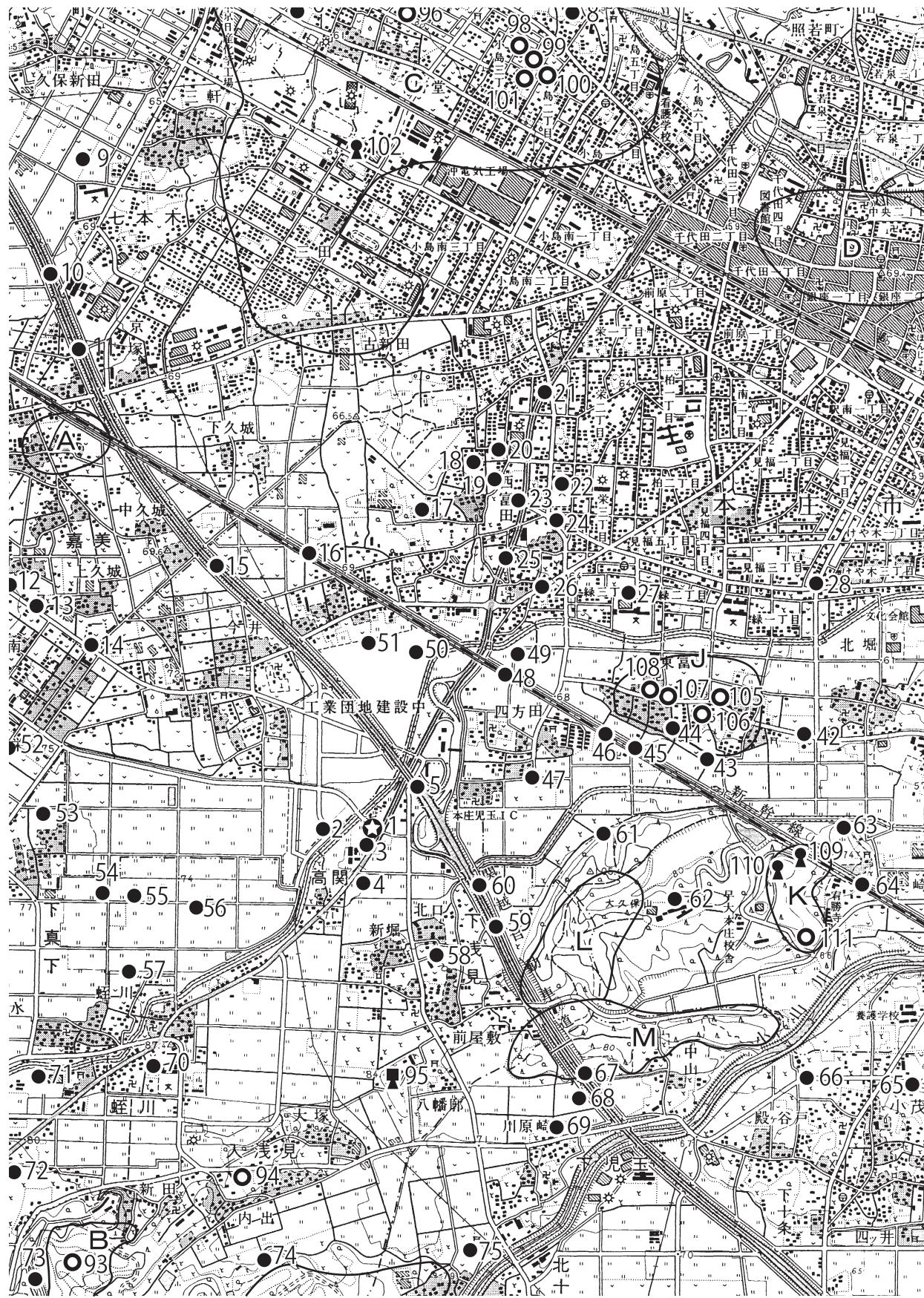
中期から後期にかけては、西富田地区周辺に展開する二本松遺跡(21)・夏目遺跡(23)・社具路遺跡(25)・今井諏訪遺跡(16)・西富田遺跡(20)・西富田新田遺跡(17)・西富田本郷遺跡(26)・薬師遺



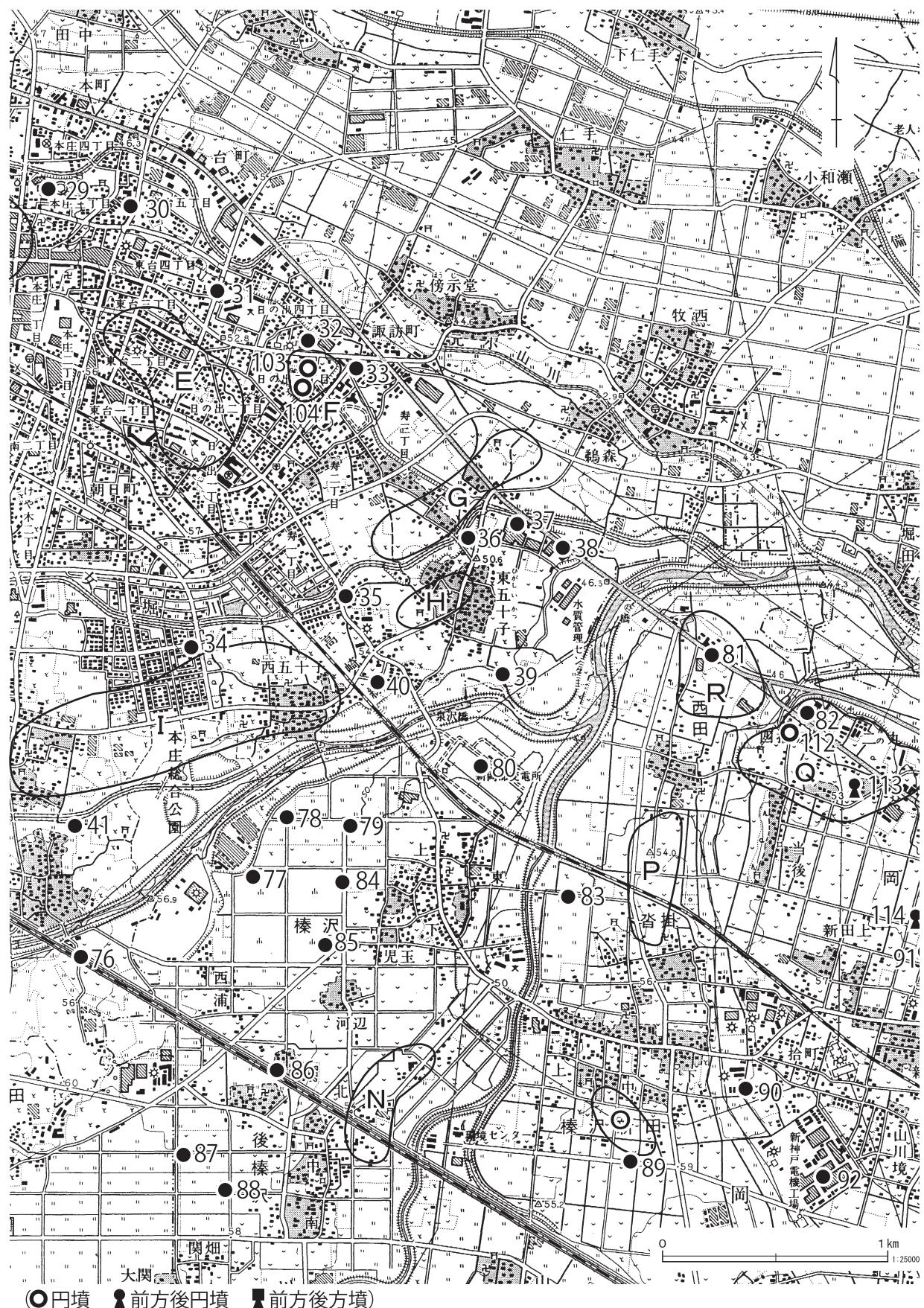
第2図 周辺の地形

跡(22)・薬師元屋舗遺跡(24)(南大通り線内)・雌濠遺跡(27)・笠ヶ谷戸遺跡(28)等、数多くの遺跡が集落形成のピークを迎える。また、この時期に住居内にカマドが取り入れられる。県下全域を見ても、初現期のカマド検出例がこの地域に集中している点は注目に値する。その背景に畿内地域からの渡来人の移動を想定する見解もある。

この時期に集落形成が活況を呈してくるのは、本庄市市街地北端の段丘崖付近(東五十子城跡・諏訪新田遺跡(33)・薬師堂遺跡(31)・小島本伝(7)・御堂坂遺跡)や、南の浅見山丘陵の東側微高地(東谷遺跡(64))、南東の小山川両岸付近(古川端遺跡(76))、西の今井地区の女堀川流域微高地(今井川越田遺跡(2)・地神遺跡(50)・塔頭遺跡(51))でも同様である。これらの集落遺跡は概ね6世紀半ばを前後する時期に廃絶していくものが多く、薬師元屋舗遺跡・夏目遺跡・下田遺跡・



第3図 周辺の遺跡



周辺の遺跡

1 川越田遺跡	28 笠ヶ谷戸遺跡	55 藤塚遺跡	82 四十坂遺跡	108 元富古墳
2 今井川越田遺跡	29 本庄城址遺跡	56 柿島遺跡	83 新井遺跡	109 前山2号墳
3 梅沢遺跡	30 天神林遺跡	57 左口遺跡	84 西浦北遺跡	110 前山1号墳
4 東牧西分遺跡	31 薬師堂遺跡	58 中畠遺跡	85 宮西遺跡	111 東谷古墳
5 後張遺跡	32 御堂坂遺跡	59 雷電下遺跡	86 東光寺裏遺跡	112 四十塚古墳
6 下野堂遺跡	33 諏訪新田遺跡	60 飯玉東遺跡	87 石蒔遺跡	113 寅稲荷古墳
7 小島本伝遺跡	34 西五十子田端遺跡	61 山根遺跡	88 地神祇遺跡	114 御手長山古墳
8 元屋敷遺跡	35 西五十子大塚遺跡	62 大久保山遺跡	89 地福院遺跡	—古墳群—
9 犀前遺跡	36 東五十子大塚遺跡	63 宥勝寺北裏遺跡	90 下道南遺跡	A 本郷古墳群
10 愛宕遺跡	37 赤坂埴輪窯跡	64 東谷遺跡	91 熊野遺跡	B 生野山古墳群
11 本郷東遺跡	38 東五十子遺跡	65 向田遺跡	92 西龍ヶ谷戸遺跡	C 旭・小島古墳群
12 八幡太神南遺跡	39 東五十子田端遺跡	66 村後遺跡	—古墳—	D 北原古墳群
13 熊野太神南遺跡	40 西五十子台遺跡	67 十二町遺跡	93 銚子塚古墳	E 塚合古墳群
14 今井遺跡群	41 東本庄遺跡	68 後田遺跡	94 金鑽神社古墳	F 御堂坂古墳群
15 久城前遺跡	42 久下東遺跡	69 砂田遺跡	95 鷺山古墳	G 鶴森古墳群
16 今井諏訪遺跡	43 七色塚遺跡	70 共和小学校校庭遺跡	96 八幡山古墳	H 東五十子古墳群
17 西富田新田遺跡	44 元富遺跡	71 蝶川坊田遺跡	97 三塙山古墳	I 西五十子古墳群
18 弥篠遺跡	45 下田遺跡	72 南街道遺跡	98 前の山古墳	J 東富田古墳群
19 夏目西遺跡	46 観音塚遺跡	73 吉田林割山遺跡	99 蟻影山古墳	K 前山古墳群
20 西富田遺跡	47 四方田遺跡	74 向田A・B遺跡	100 小島御手長山古墳	L 浅見山古墳群
21 二本松遺跡	48 九反田遺跡	75 宮ヶ谷戸遺跡	101 山の神古墳	M 塚本山古墳群
22 薬師遺跡	49 西富田前田遺跡	76 古川端遺跡	102 下野堂二子塚古墳	N 後榛沢古墳群
23 夏目遺跡	50 地神遺跡	77 大寄B遺跡	103 御堂坂1号墳	O 中南古墳群
24 薬師元屋舎遺跡	51 塔頭遺跡	78 大寄遺跡	104 御堂坂2号墳	P 水窪古墳群
25 社具路遺跡	52 將監塚・古井戸遺跡	79 稲荷前遺跡	105 公卿塚古墳	Q 四十塚古墳群
26 西富田本郷遺跡	53 將監塚東遺跡	80 六反田遺跡	106 元富東古墳	R 西田古墳群
27 離濠遺跡	54 堀向遺跡	81 原ヶ谷戸遺跡	107 熊野十二社古墳	

七色塚遺跡・古川端遺跡(76)等の長期継続型集落のような例外を除き、集落の占地を大幅に変更する社会的変動のあったことが指摘されている。おそらく、低地内の再開発のため、計画的な集落移動を伴う地域社会の再編が行われたことを物語るのであろう。

6世紀後半あるいは7世紀以降に集落形成が始まる遺跡は、本庄市域ではさほど多くはない。市街地北西部の石神境遺跡、西富田地区の薬師遺跡や、浅見山丘陵の大久保山遺跡(62)、今井地区から児玉工業団地にかけての区域の立野南遺跡・八幡太神南遺跡(12)・熊野太神南遺跡(13)・今井遺跡群(14)G地点や、将監塚・古井戸遺跡(52)等の遺跡は、薬師遺跡の6世紀中頃を除くと、他は7世紀中頃から後半にかけて集落を形成し始め、律令期集落として成立する。将監塚・古井戸遺跡では、9世紀初頭前後と考えられる官衙的な掘立柱建物跡群が確認されており、「計画村落」的な位置づけがされている。市街地周辺では奈良・平安時代の集落跡の調査例は多くないが、薬師元屋舎遺跡(24)から出土した石製紡錘車には、「武藏國児玉郡草田郷戸主大田部身万呂」と刻字されてお

り、この集落が児玉郡草田郷に含まれていたと推定されている。

本庄市域では、数多くの古墳も確認されており、市街地北西部から上里町域にかけて分布する旭・小島古墳群(C)、浅見山丘陵南斜面の塚本山古墳群等は、分布密度がかなり高い群集墳として著名である。川越田遺跡に近い塚本山古墳群(M)は総数200基を超す大規模な群集墳で、模様積横穴式石室を埋葬施設にもつ後・終末期古墳が主体である。また、近年の本庄市教育委員会の調査によって、旭・小島古墳群や市域東端部の東五十子古墳群(H)、西五十子古墳群(I)などの初期群集墳の具体相が明らかにされつつある。この他にも鶴森古墳群(G)、塚合古墳群(E)、北原古墳群(D)、御堂坂古墳群(F)、東富田古墳群(J)・浅見山古墳群(L)等々が所在する。

出現期古墳としては、川越田遺跡の南約1kmの浅見山丘陵最西部、鷺山残丘の頂部に全長60mの前方後方墳、鷺山古墳(95)が知られる。周溝の一部が調査され、口縁部に円形の透孔をもつ二重口縁壺や手焙形土器等が出土している。

この時期には弥生時代以来の方形周溝墓が盛ん

に造られており、古墳よりも一般的である。本庄市市街地周辺では、旭・小島古墳群の一角をなす下野堂遺跡(6)において、方形周溝墓・円形周溝墓・方墳・円墳等が検出されている。このうち10号墓からは碧玉製石鉤が出土しており、注目される。近隣に位置する一辺25mの方墳、万年寺つづじ山古墳からは、刀子・鎌・短冊形鉄斧などの石製模造品が出土している。また、塚本山古墳群では、4世紀代に属する方形周溝墓が前方後方形を含めて9基確認されている。その他にも今井地区の諏訪遺跡、浅見山丘陵上の浅見山I遺跡・宥勝寺北裏遺跡(63)、浅見山丘陵北側の飯玉東遺跡(60)、浅見山丘陵北東側低地部の北堀新田前遺跡等で前方後方形を含む方形周溝墓群が調査されている。

児玉地域における最古の前方後円墳としては、まず、前期末の4世紀後半に浅見山丘陵東部の前山古墳群(K)内の北堀前山1号墳(110)(全長70m)が築造され、続いて5世紀初頭に粘土櫛を主体部とする方墳の北堀前山2号墳(109)が築造される。また、女堀川左岸の微高地の東富田古墳群内の公卿塚古墳(105)は、最近の調査で径約60m、造出しの長さ約5mの造出し付き円墳であることが明らかにされた。滑石製模造品や格子叩き目の円筒埴輪片を数多く出土したことから、5世紀前半頃の時期が想定されている。同じ格子叩き目埴輪をもつ古墳では、本庄市金鑽神社古墳(94)(円墳:68m)、生野山將軍塚古墳(円墳:60m)など大型円墳が相次いで築造されており、中期後半から後期にかけての集落の広範な出現を理解する上で重要視される。

本庄市街地の古墳にも旭・小島古墳群内の三塹山古墳(97)(円墳:69m)、万年寺八幡山古墳(96)(円墳:約40m)のような横穴式石室導入以前の大型円墳がある。これらは時期決定の材料がやや不足しているが、5世紀代の築造が想定される。また、下野堂二子塚古墳(102)は全長55mの前方後

円墳とされるが、墳丘は現存せず、築造時期については不明である。

6世紀以降は市域各所で古墳築造が相次ぐ。旭・小島古墳群内では、前の山古墳(98)や御手長山古墳(114)が当該期に位置づけられる。御手長山古墳は直径約50mの大型円墳で、角閃石安山岩の削石を用いた胴張横穴式石室を埋葬施設とする。6世紀後半から7世紀前半に角閃石安山岩を使用する横穴式石室は、本庄台地扇端部の旭・小島古墳群や塚合古墳群(E)を中心に分布しており、結晶片岩河原石を主体とする模様積み石室と対照的な分布域を形成している点は、注目される。

平安時代の9世紀後半以降になると、丘陵・台上地上に占地していた拠点的集落は縮小・解体し、周辺の沖積地に小規模集落が数多く派生するようになる。将監塚・古井戸遺跡の集落も10世紀前半でほぼ終息し、中下田遺跡・塚畠遺跡・柿島遺跡(56)・左口遺跡(57)などの小規模集落が形成されていく。浅見山丘陵付近でも、雷電下遺跡(59)・根田遺跡など、丘陵下の微高地へ集落の主体は移行する。一方、大久保山遺跡や深谷市大寄遺跡(78)・宮西遺跡(85)、美里町向田遺跡(65)などでは、10世紀後半以降の内黒塙や羽釜を伴う集落が展開しており、中世への胎動を示す資料として注目される。

古墳時代から奈良・平安時代の水田遺構や溝跡は、今井条里遺跡、児玉条里遺跡、将監塚・古井戸遺跡、八幡太神南遺跡、熊野太神南遺跡、往来北遺跡、真下境東遺跡、堀向遺跡(54)、下田遺跡、諏訪遺跡等で検出されており、古代の水利と農業経営を考える上で、重要な手掛かりとなっている。

III 遺跡の概要

川越田遺跡は、女堀川中流域の自然堤防上に立地する古墳時代の大規模集落である。

本遺跡の乗る自然堤防は、女堀川の乱流によって形成されたもので、地形図上の地境や用水路部分には、蛇行する旧流路の痕跡が良く現れている。

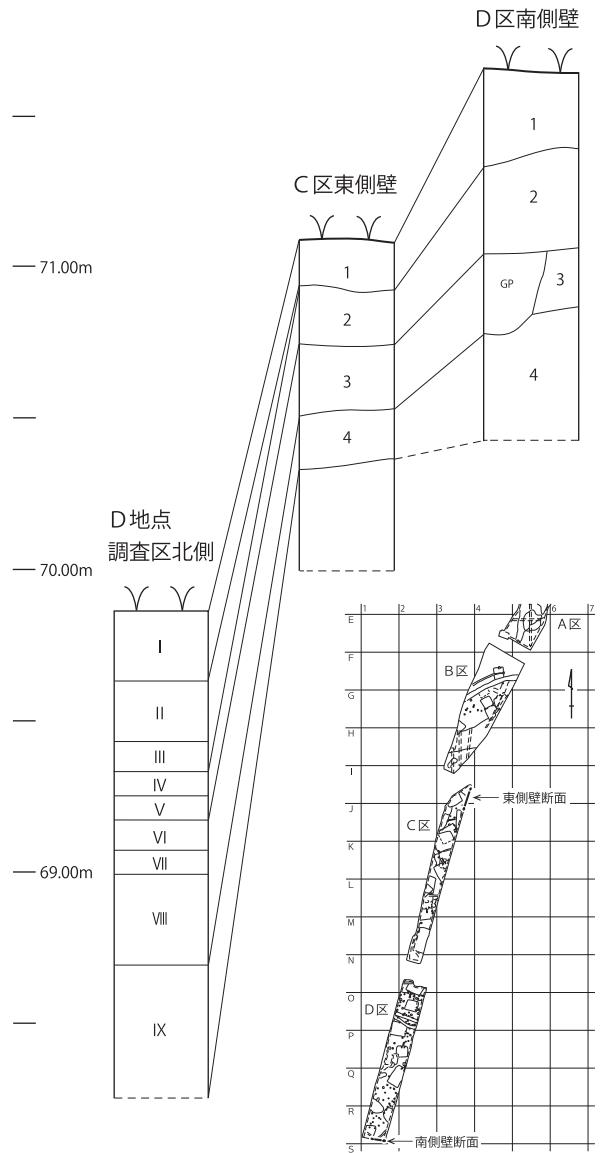
遺跡の北側には後張遺跡、西側には今井川越田遺跡、東側には梅沢遺跡、東牧西分遺跡がそれぞれ接している。今回の調査区は遺跡の南限にあたり、これより南側には遺構の分布は見られない。

遺跡は基本的に低地部に展開しており、現在では大部分が水田下に埋没している。標高は一様でなく、南側の部分は島状の高まりとなるため、高くなっている。基本土層に浅間A軽石を含むかつての水田跡が認められるのは、川越田遺跡IIで報告したD地点から今回調査のH地点A区までである。B区より南側は現在の地目でも畑地や果樹園、竹林などになっており、水田跡は観察できない。南北の比高差は1.5mほどである。

今回の調査では、基本土層は4層に分層した。上述のように、これまでの調査で認められた中・近世の水田面はA区に認められるのみで、B区以南では確認できなかった。中・近世の遺構の検出面は第2層の上面である。第3層は古墳時代から古代の遺物包含層で、本来はこの層中に古墳時代の地表面があるが、状態の良い遺構を除き、検出できなかった。古墳時代の遺構検出面は、第4層上面である。淡黄褐色のシルト、もしくは砂である。北側は標高が低く、土質は砂質、南側は標高が高く、土質は粘土質で硬い。

川越田遺跡では、昭和56・57年に当事業団が実施したA地点の調査を端緒として、平成4・5年に児玉町遺跡調査会がB・C地点、平成17・18年に当事業団が第3・4次(D地点)、平成18年に本庄市教育委員会がE～G地点、そして今回報告のH地点

— 72.00m



D地点調査区北側:D-15 グリッド付近

基本土層

第I層	黒色土	現耕作土
第II層	暗褐色土	近世水田層(浅間A軽石を含む)
第III層	暗褐色土	中世水田層(浅間B軽石を含む)
第IV層	黒色土	上面:古代遺構検出面
第V層	暗褐色土	河川氾濫土
第VI層	黒色土	古墳時代後期遺物包含層
第VII層	淡褐色土	上面:古墳時代後期遺構検出面
第VIII層	黒色土	上面:古墳時代前期遺構検出面
第IX層	黃褐色土	再堆積ローム土

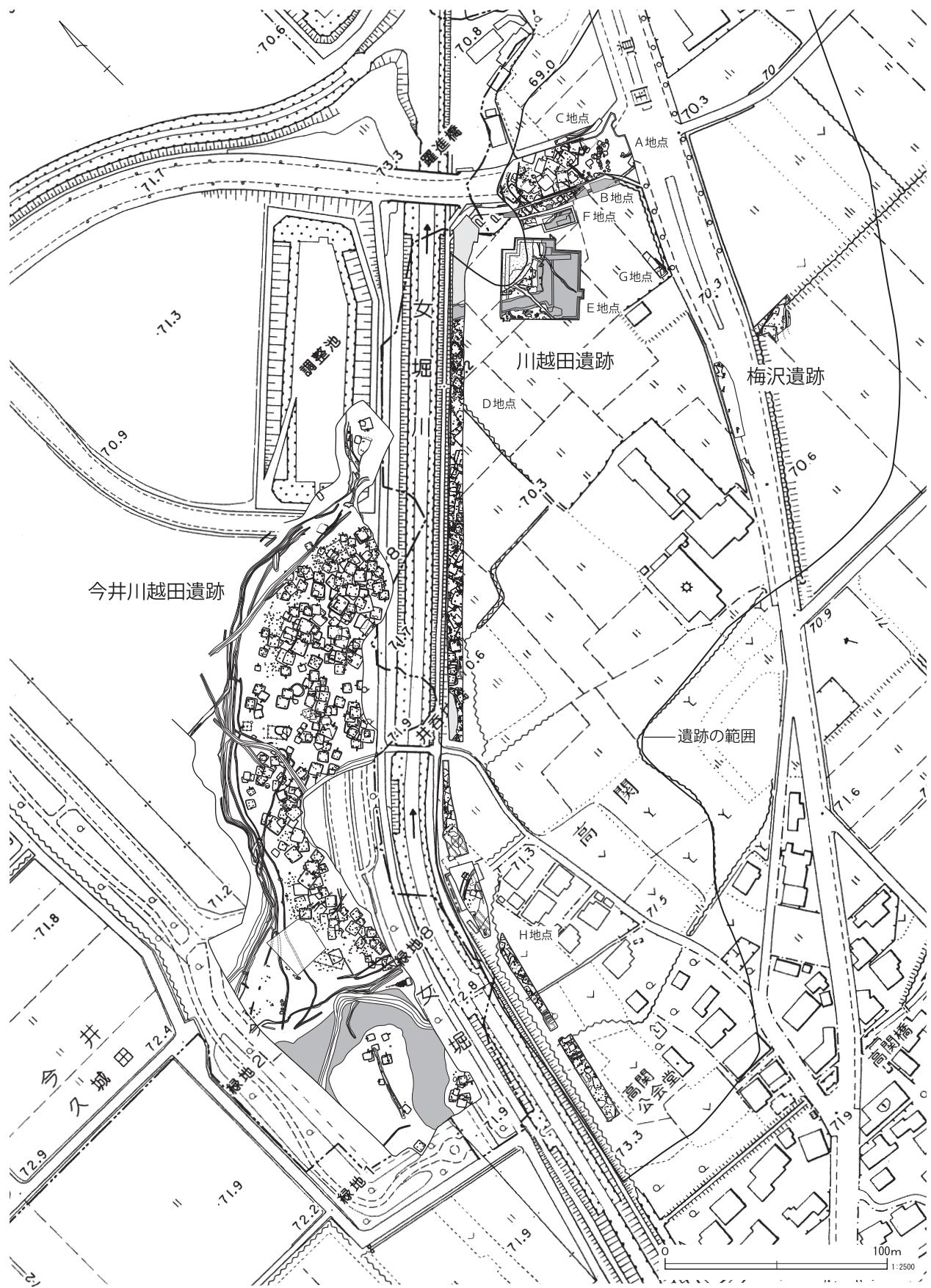
C区東側壁面

1 明褐色土	耕作土
2 暗黃褐色土	旧耕作土 土器片微量 炭化物なし 粘性弱
3 暗褐色土	古墳時代後期の包含層 土器片・焼土・炭化物 含む
4 黄褐色土	ロームの二次堆積土 炭化物・焼土なし

D区南側壁面

1 暗灰色土	表土 竹の根が強く張る しまりなし 粘性弱
2 淡褐色土	炭化物・焼土粒子微量 粒子粗い 粘性強
3 淡褐色土	古墳時代遺構検出面を含む 炭化物・焼土含む 粘性強
4 黄褐色土	硬くしまる ロームの二次堆積土 礫(2-5cm) 少量

第4図 基本土層



第5図 川越田遺跡周辺地形図

の合計8地点の調査が実施されている。これまでの調査によって検出された竪穴住居跡の総数は、192軒を数える。その内訳は、前期38軒、中期9軒、後期129軒、平安時代1軒、不明15軒である。中期には一時的に縮小するが、古墳時代を通じてほぼ継続的に営まれた、安定性の高い集落といえる。

後期の集落は5世紀末葉から6世紀初頭を中心に一度ピークを迎えた後、6世紀後半から7世紀初頭に最盛期を迎えるが、7世紀中葉頃に住居跡が激減して終焉を迎える。第3・4次調査区（D地点）では、6世紀後半には遺構数が減少する傾向が窺えた。

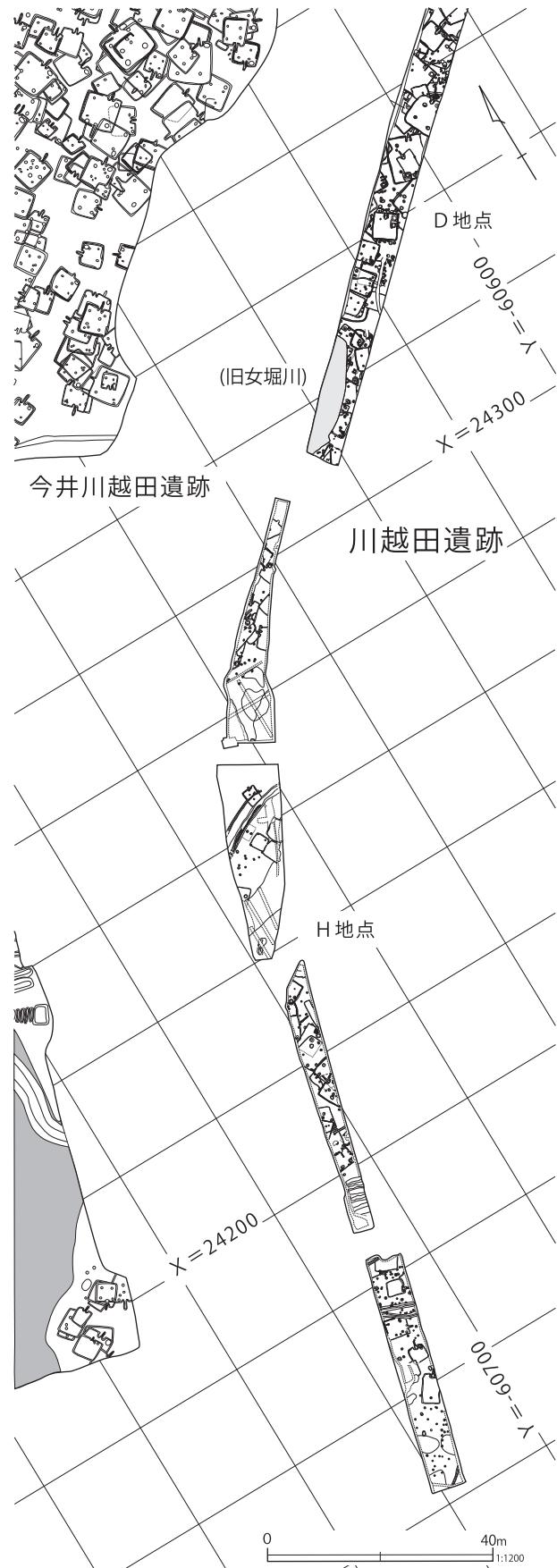
周辺の同一自然堤防上には、北東約350mに後張遺跡が、南約100mに梅沢遺跡がある。これらは本遺跡とともに、同一集落を構成するものと考えられている。また現女堀川の対岸にも、古墳時代から平安時代の住居跡が328軒検出された大規模集落の今井川越田遺跡が所在している（第5図）。

今井川越田遺跡の南西端で検出された古墳時代の旧河道が大きく蛇行しながら北東方向に向きを変え、川越田遺跡B・E地点で検出された旧河道に繋がっていたと仮定するならば、これらの遺跡群が同一河川の左岸自然堤防上に大きく展開した一連の遺跡群であった可能性が考えられる。今回調査の川越田遺跡B・C区の間を通る河川もその流路の一つである可能性が考えられる。

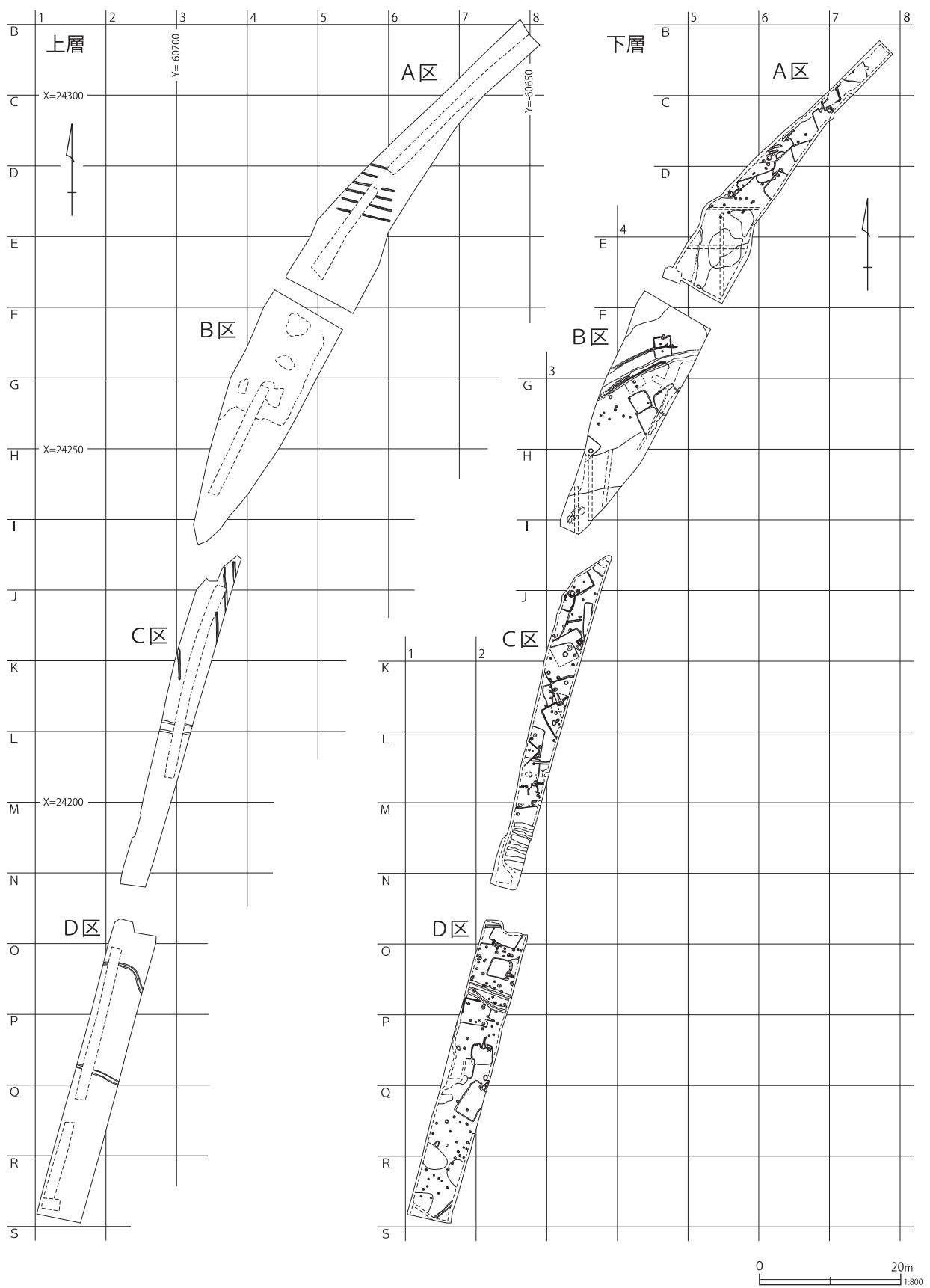
市町境となっていた旧女堀川は、今回調査のA・B区で検出された古代から近世まで流れていた新しい流路と考えられる。

今回の調査は女堀川河川改修工事に伴い、平成22・23年度にかけて実施した。男堀川との合流点から井呑坊橋の間の右岸堤防沿いの長さ約190m、幅約7～10mの狭長な調査区である。発掘調査では、二面の遺構面が確認された。上層は中・近世の遺構確認面、下層は古墳時代の遺構確認面である。

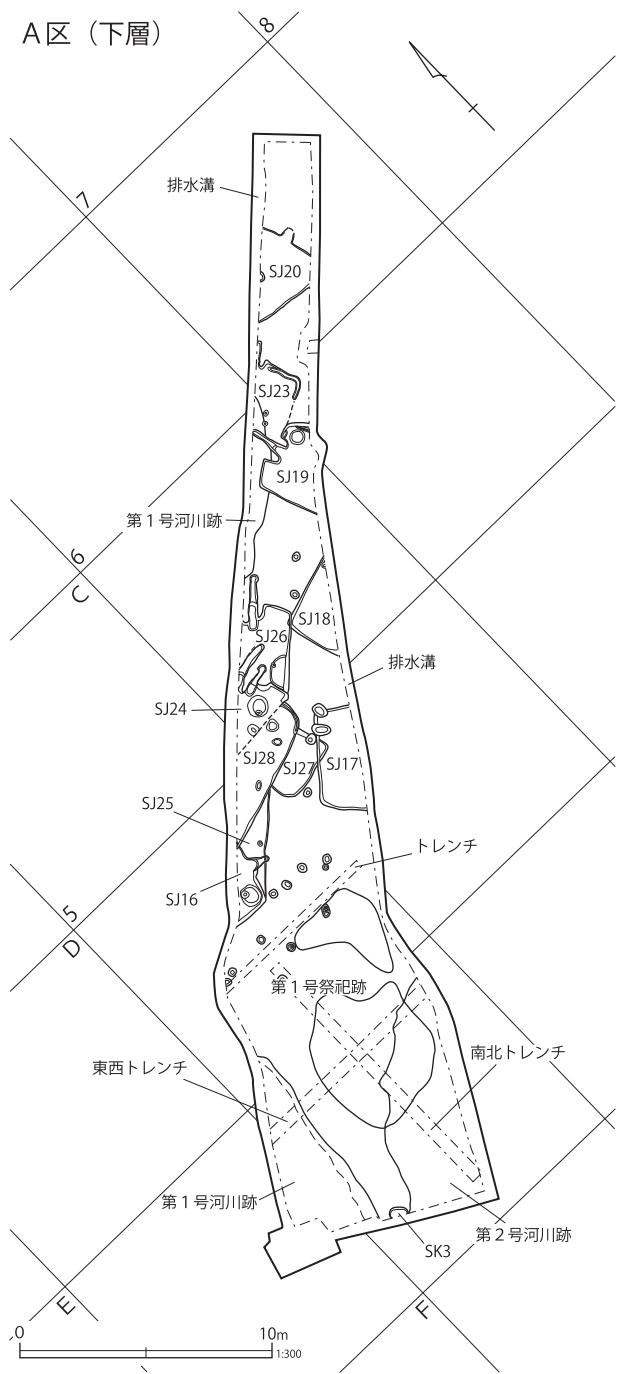
上層の遺構確認面からは、中・近世の溝跡3条、竈跡2箇所、河川跡1箇所が検出された（第



第6図 川越田遺跡調査区位置図



第7図 川越田遺跡グリッド網図

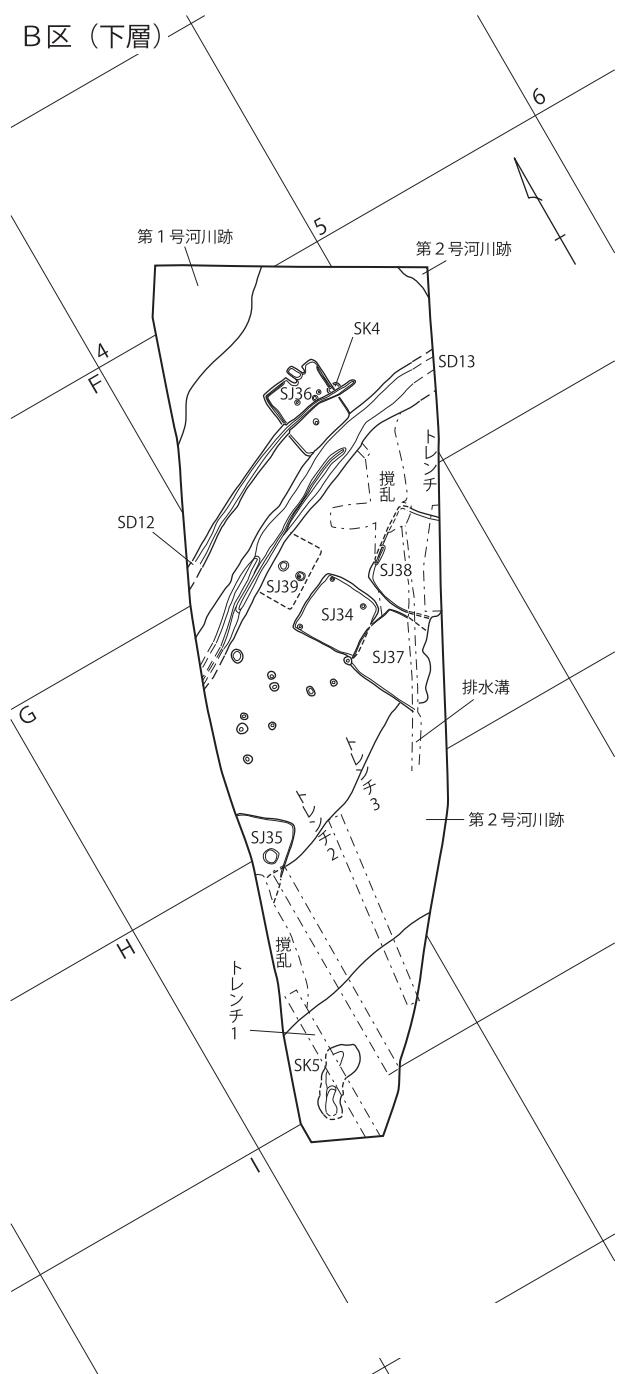


第8図 川越田遺跡A区全体図

12図)。河川跡は古代から近世における旧女堀川の流路跡である。

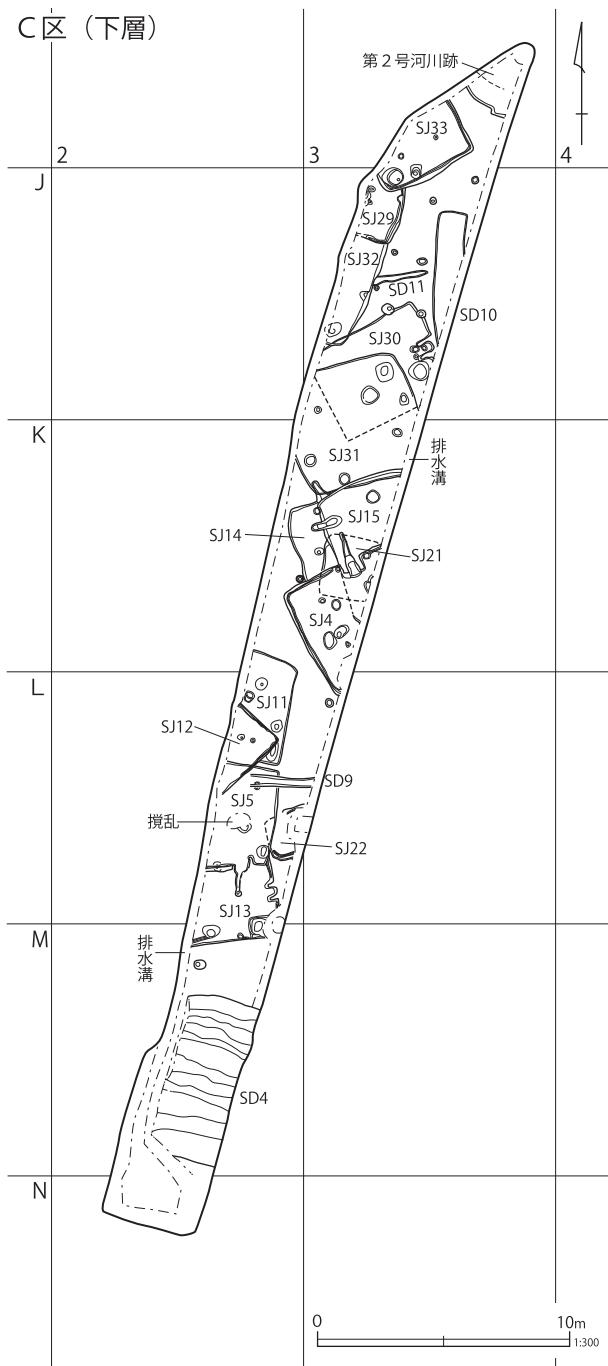
下層の遺構確認面では、B・C区から古墳時代前期の住居跡が、A～D区のほぼ全域から古墳時代後期の住居跡が検出された。遺構総数は住居跡39軒、溝跡13条、土壙5基、祭祀跡1箇所、河川跡2箇所、ピット120基である(第8～11図)。

古墳時代前期の遺構はC区第11号住居跡を除



第9図 川越田遺跡B区全体図

き、ほぼB区に限って分布している。当初はB区全体が居住可能な場所であったが、南側に古墳時代前期末に第2号河川跡が形成されたため、居住の適地ではなくなったようである。第36号住居跡を除き、古墳時代後期には住居跡が見られなくなる。一方、A・C・D区には古墳時代後期に遺構が広く展開する。C区の第13・15号住居跡を嚆矢に、初めはC・D区に造営され、後にA区にも拡

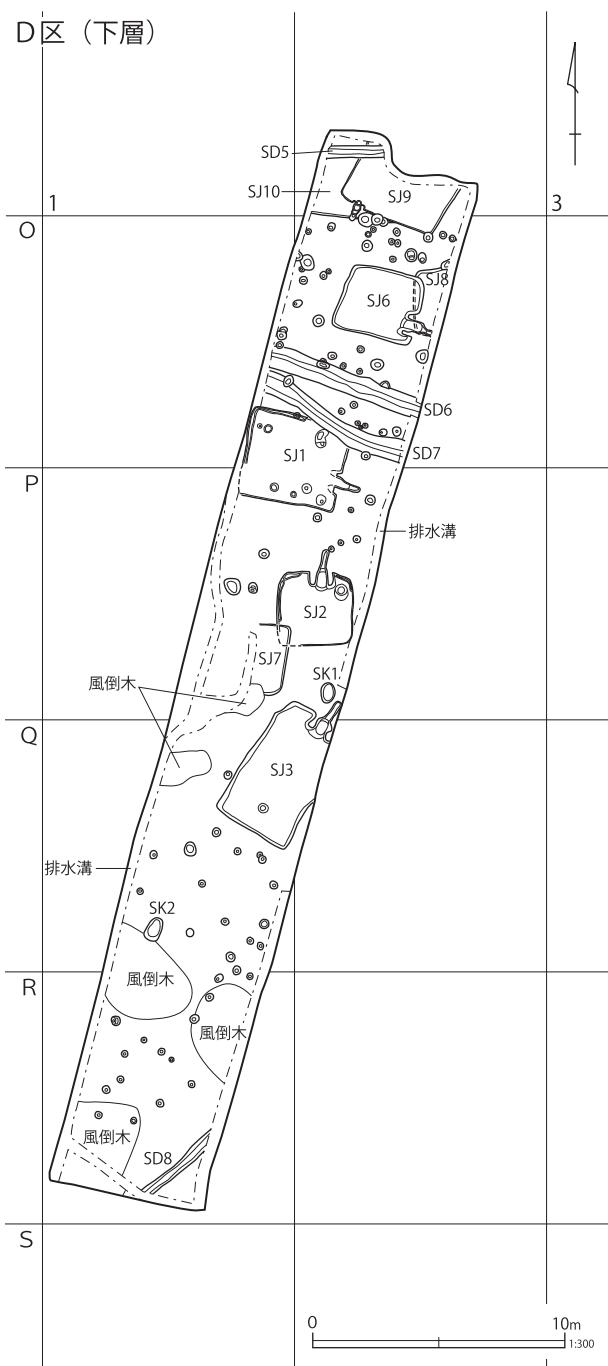


第10図 川越田遺跡C区全体図

大する。遺構分布密集度が高い点は、川越田遺跡A～G地点の調査区や今井川越田遺跡などと共に通している。

また、A区の南側には、6世紀第2四半期を中心とする100個以上の手捏ね土器などからなる第1号祭祀跡が検出されている。

河川跡は7箇所で検出されたが、蛇行する二つの流路跡として整理できた。第1号河川跡は現在



第11図 川越田遺跡D区全体図

の女堀川の旧流路である。A区中央の西側と、南端の西側から検出されている。第2号河川跡は古墳時代前中期に流路が形成されたもので、B区の古墳時代前期の住居跡群を壊している。最下層からは古墳時代前中期の遺物、それより上層からは古墳時代中～後期の遺物がそれぞれ出土している。A区南端の東側をかすめ、B区南側から北西方向へ流れる。C区北端の部分は支流と考えられ

る。

古墳時代前期の住居跡は4世紀中葉から後半に位置づけられる。第11・34・35・37～39号住居跡が該当するが、いずれも一辺2～4mと小型である。軸方向はほぼ揃っており、短期間に展開したと考えられる。柱穴、壁周溝等の施設が検出されている。第11号住居跡ではP2から炭化材が出土している。第34・37号住居跡からも炭化材が出土しており、一時期に焼失した可能性も考えられる。

出土遺物はほとんどが破片である。器種は壺、甕、小型壺、埴、台付甕、高坏、器台、鉢である。本地域の特徴である、色調が白色を呈するS字状口縁台付甕を組成に含む。他に北陸系の大型器台が出土している。

古墳時代後期の住居跡は、5世紀後半～7世紀中葉にかけて展開する。6世紀前半の遺構が最も多く、それ以降は小規模に継続している。

住居跡は調査区が狭小なため、ほとんどが一辺を欠くなど、規模が窺えるのは20軒にとどまる。一辺5～6mの大型、4m前後の中型、3m以下の小型の3タイプが認められ、特に大規模のものは検出されなかった。

カマドは東カマドが最も多く10軒、次いで北カマドが多く6軒である。南カマドや西カマドの例も僅かに認められる。第24号住居跡は、カマドが同方向で、隣に造り替えられている。カマドの袖は黄灰色の粘土、もしくはシルトの貼り付けによって構築されている。第4号住居跡はカマドの構築材に土師器甕の破片を用いている。土製支脚はカマド内からは検出されなかつたものの、グリッドから数点出土している。石製支脚が確認できたのは、第3・13号住居跡の2軒のみである。

カマド以外の施設としては、第2・3号住居跡

に代表されるように、貯蔵穴、柱穴、壁周溝がある。貯蔵穴は径80cmほどで、いずれもカマドの右側に造られていた。柱穴は径0.2～0.4m、深さ0.1～0.3mのものが多く、位置的に主柱穴に当たるものもあるが、いずれも深度が浅く明瞭なものはない。また柱痕も認められなかった。壁周溝は12軒で検出された。幅0.1～0.2m、深さ0.05mで、ほとんどが部分的に設けられているのみである。第4号住居跡には床下土壙が認められた。第26号住居跡の東壁際にも土壙状の掘り込みが認められた。

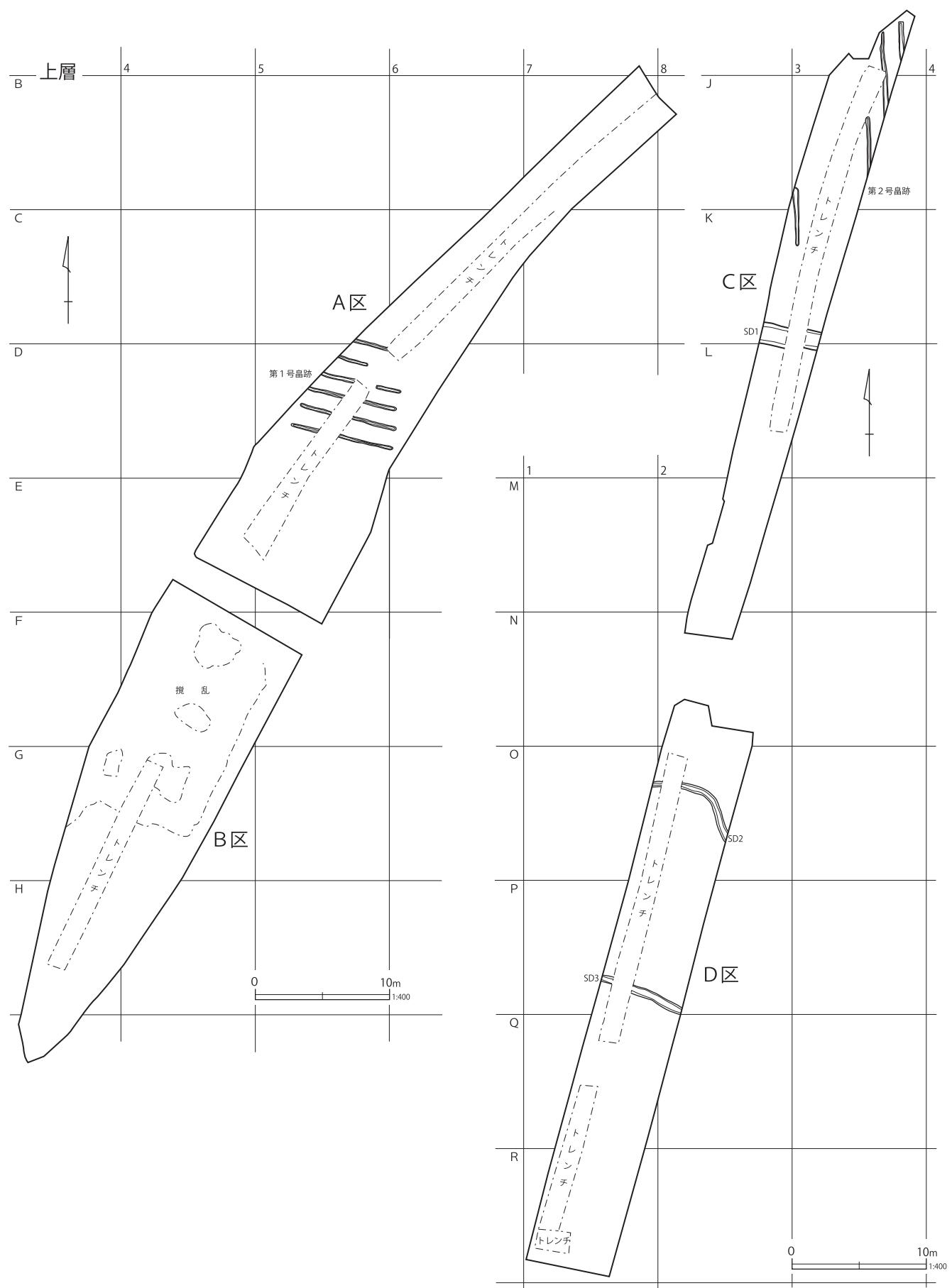
遺物は覆土中から分散して出土する場合がほとんどだが、第30・33号住居跡では床面から多量の完形に近い土器が出土している。

出土遺物は、土師器坏・高坏・鉢・甕が主体を占め、他に須恵器坏、坏蓋、高坏、聰、提瓶、フラスコ型瓶、臼玉、紡錘車、土錐である。この他に拳大の礫がコンテナ1箱分出土している。

古墳時代後期では、A区南側で検出された第1号祭祀跡が特筆される。100個余りの手捏ね土器を主体に、土師器坏、甕、高坏、臼玉、鉄鏃によって構成されている。A区南東隅の古墳時代の流路跡に面して行われた河川祭祀の跡と考えられる。手捏ね土器は、大型で調整痕が明瞭なものである。臼玉は直径1cm以上の大型品で特徴的である。

平安時代の住居跡はD区第1号住居跡の1軒のみが検出されている。須恵器坏、長頸瓶、甕、土師器甕、台付甕、須恵系土師質土器の高台付坏が出土している。

中・近世の遺構からは、遺物がほとんど出土していない。A区北側は水田、B区以南は畠として利用されていたと考えられる。



第12図 川越田遺跡上層全体図

IV 検出された遺構と遺物

1. 縄文・弥生時代の遺物

今回の調査では、古墳時代の遺構中から、縄文時代後期、弥生時代前期、弥生時代中期の土器の破片が混入して出土している。

1は弥生時代前期の無文の甕の口縁部である。口唇部に棒状工具による押捺が施されている。外面はヘラナデである。色調は黄灰色で、風化が進んでいる。胎土には石英、角閃石を含む（図版60-2）。

2は縄文時代後期の浅鉢と考えられる。粗製土器で口縁部内面に沈線が巡らされている。色調はにぶい黄橙色で硬質である。雲母を多く含む（図版60-2）。

3は弥生時代前期の甕である。双頭状の小波状口縁で、口唇部下には太い2条の沈線が引かれている。内面には突帯が貼付されている。色調は黒褐色で、風化が進んでいる。胎土は砂粒が多く、雲母、角閃石を含む。

4は弥生時代前期末の甕の胴部である。3条の沈線が斜行して施されている。色調は褐灰色で、

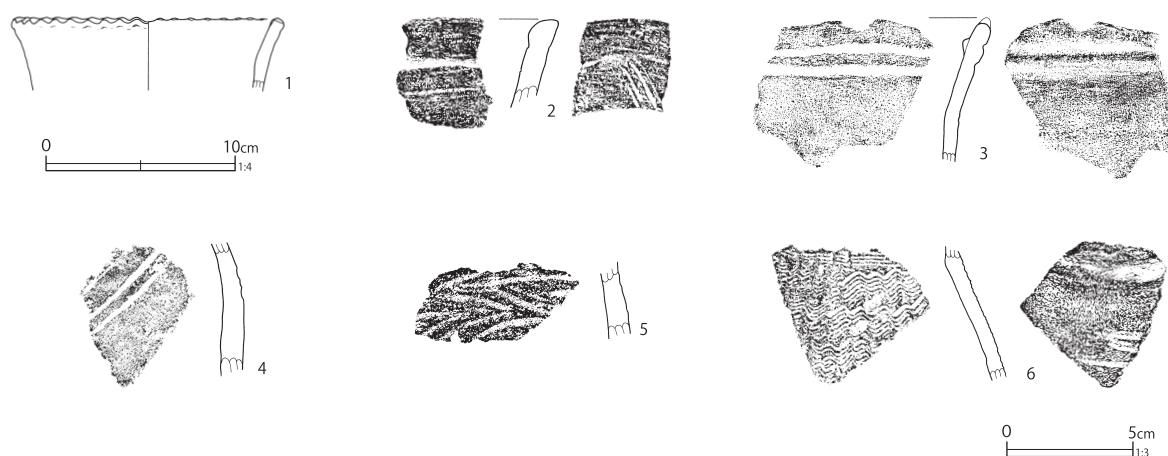
風化が進んでいる。胎土は砂粒が多く、雲母、角閃石を含む。

5は弥生時代中期初頭壺の頸部である。棒状工具を用いた太い沈線によって、横位に区画された矢羽状の文様が施されている。色調はにぶい橙色で、胎土には石英、角閃石を含む。

6は弥生時代後期の樽式土器の壺の破片である。上位に2連止めの簾状文、下位に5条1単位の波状文が3段以上施されている。内面はヘラナデである。焼成が良く、硬質である（図版60-2）。

川越田遺跡からは、これまで縄文時代の石器が出土している。今回の資料もローリング等を受けていないことから、調査区近傍に縄文時代、弥生時代前・中期の遺構が存在する可能性が高い。

各資料の出土遺構は、1—第34号住居跡、2—第38号住居跡、3—B区グリッド・トレチ2、4—B区グリッド、5—第35号住居跡、6—第14号住居跡である。



第13図 縄文・弥生時代出土遺物

2. 古墳時代前期の遺構と遺物

(1) 住居跡

第11号住居跡（第14図）

C区の中央よりやや南側、K・L-2グリッドに位置する。遺構の西側は調査区域外にかかる。同じ時期の住居跡は北側のB区に分布し、50mほど離れている。第12号住居跡と重複し、本住居跡の方が古い。

遺構の大半が調査区域外にかかるため、確実ではないが、調査区内の様相からは、方形、もしくは隅丸方形と考えられる。調査区内の長軸方位はN-11°-Eである。規模は、長軸方向4.10m、直交軸方向2.50mである。深さは0.15~0.20mである。

覆土は、暗褐色土で、自然堆積である。第1層には、テフラの可能性のある白色粒子が認められた。床面はほぼ平坦である。

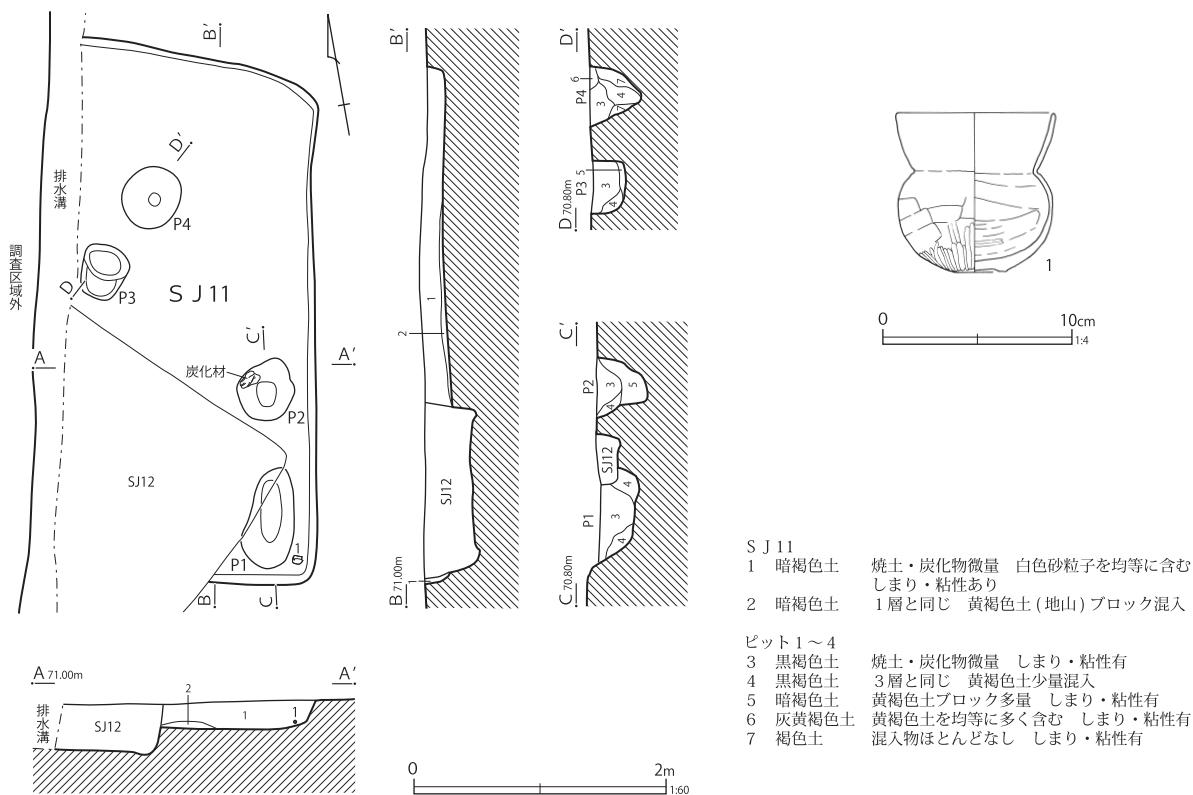
施設は、炉跡、貯蔵穴は検出できず、調査区域外の部分にある可能性が高い。柱穴は4本検出された。P1は長楕円形、P2は不整方形、P3・

4は不整円形である。規模はP1が長軸0.80m、短軸0.40m、深さ0.30mである他は径0.50m、深さ0.25~0.40mである。P2からは、コナラ属コナラ節の炭化材が出土している。

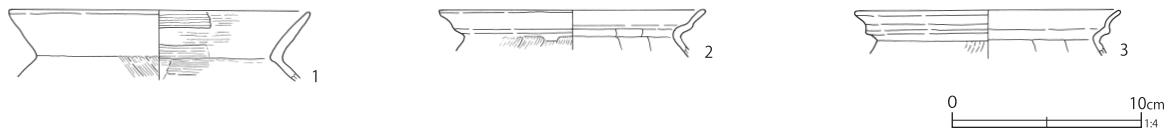
遺物は少なく、覆土中、床面から出土した。床面からは古墳時代前期の遺物が出土している。器種は、本住居跡に伴うと考えられる古墳時代前期の小型壺、甕、S字状口縁台付甕、高坏が床面近くから出土し、混入と考えられる古墳時代後期の坏、甕が覆土中から出土している。

1は甕である。器面は風化が進んでいる。内面の見込み周辺にヘラ磨きが施されている。

また、当初、第12号住居跡と一体の遺構と考え、調査を進めたことから、一括して取り上げられた資料がある。遺物は、古墳時代前期、後期の甕で、ここで掲載する。1は甕である。内外面刷毛目後横ナデ。2・3はS字状口縁台付甕であ



第14図 第11号住居跡・出土遺物



第15図 第11・12号住居跡出土遺物

第1表 第11号住居跡出土遺物観察表(第14図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	小型壺	(8.2)	8.4	2.7	A B C E H I	50	普通	橙	No.1	26-6

第2表 第11・12号住居跡出土遺物観察表(第15図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	甕	(16.0)	3.7	—	A C D H I K	5	普通	橙		
2	土師器	台付甕	(14.0)	2.1	—	A H I	5	普通	浅黄橙		
3	土師器	台付甕	(14.0)	2.5	—	A D H I K	5	普通	にぶい黄橙		

る。いずれも在地の胎土で模倣品である。口縁部内外面横ナデ、頸部外面刷毛目、内面ヘラナデである。

第34号住居跡(第16・17図)

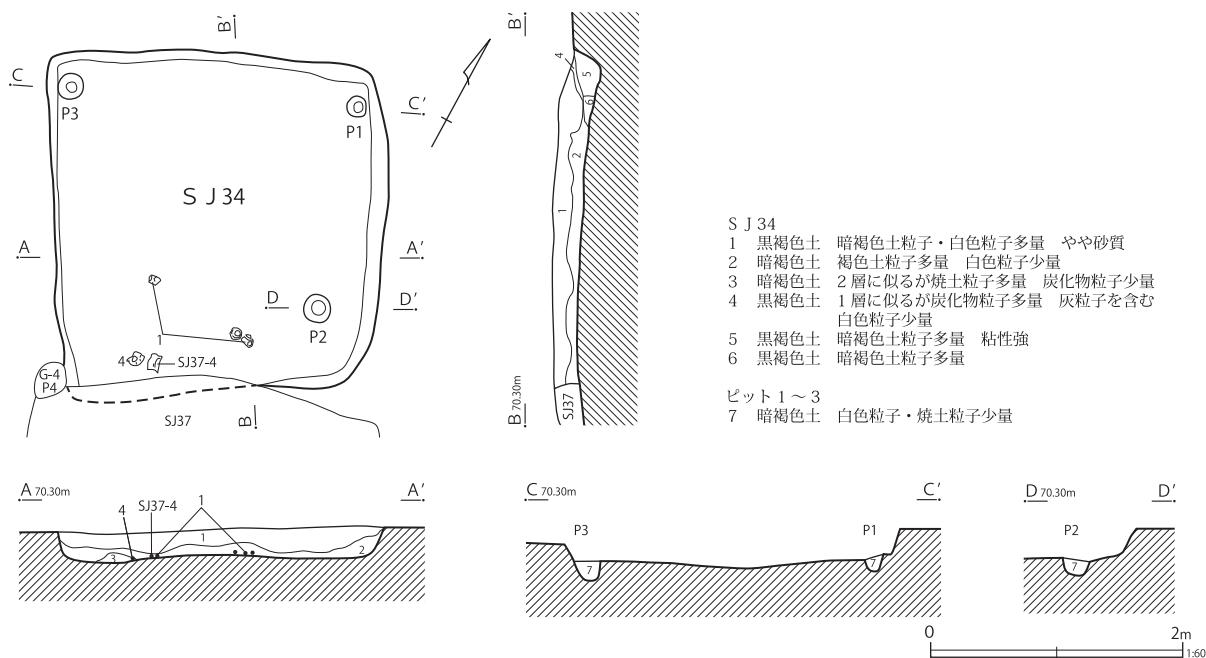
B区のほぼ中央、G-4グリッドに位置する。本住居跡の周辺には、同時期の第37~39号住居跡が密集して分布する。河川跡がこの住居跡群の南側に接して、東西に延びている。第37号住居跡と重複し、本住居跡の方が新しい。

平面形は、ほぼ正方形である。調査区内の長

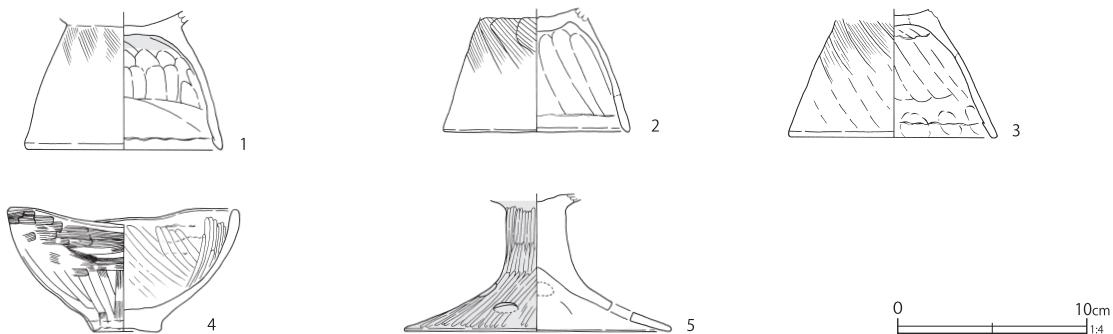
軸方位はN-33°-Wである。規模は、長軸方向2.70m、直交軸方向2.60mである。深さは0.15~0.20mである。

覆土は、黒褐色土、暗褐色土で、自然堆積である。第1層には白色粒子が認められた。床面はほぼ平坦である。

炉跡、貯蔵穴は検出できなかった。柱穴は、コーナーに近い位置から3本検出された。径0.15~0.20m、深さ0.10~0.15mの円形で、柱痕は認められなかった。



第16図 第34号住居跡



第17図 第34号住居跡出土遺物

第3表 第34号住居跡出土遺物観察表（第17図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	台付甕	—	7.3	10.2	A C D E H	70	普通	にぶい黄橙	No.1・3 SJ37と接合	35-4
2	土師器	台付甕	—	6.5	9.8	A B C E G H I K	75	普通	にぶい橙		35-5
3	土師器	台付甕	—	6.7	(10.9)	A C E G H I K	40	普通	にぶい黄橙		
4	土師器	鉢	12.0	6.5	3.6	A C H I K	55	普通	橙	No.5	35-7
5	土師器	高坏	—	7.3	14.0	A C H I K	40	普通	にぶい橙	外面赤彩	35-6

遺物は少なく、覆土中、床面から出土した。器種は甕、台付甕、S字状口縁台付甕、高坏、鉢である。床面からはクワ属の炭化材が出土している。

1～3はS字状口縁台付甕である。箱形の脚台部が砂混じりの粘土で貼付されている。外面は刷毛目が等間隔にナデ消されている。内面は指ナデである。4は鉢で、口縁部の歪みが著しい。5は高坏で、短い柱状の脚部を呈し、千鳥状に透穴が施されている。内面は風化が著しい。

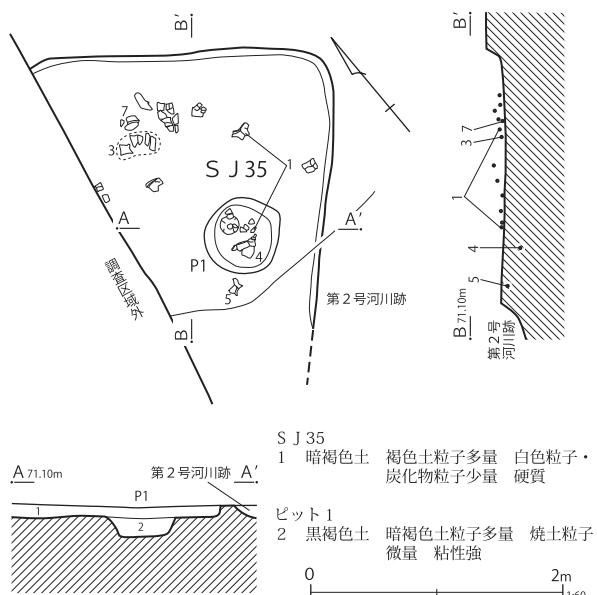
第35号住居跡（第18・19図）

B区の中央よりやや南側、G・H-3グリッドに位置する。遺構の西側は調査区域外にかかり、南側は第2号河川跡によって壊されており、東コーナー付近の一部の調査に留まる。北東側7.0mに、同時期の第34・37～39号住居跡が密集して分布する。河川跡が本住居跡の南側に接して東西に延びる。河川跡が本住居跡より新しい。

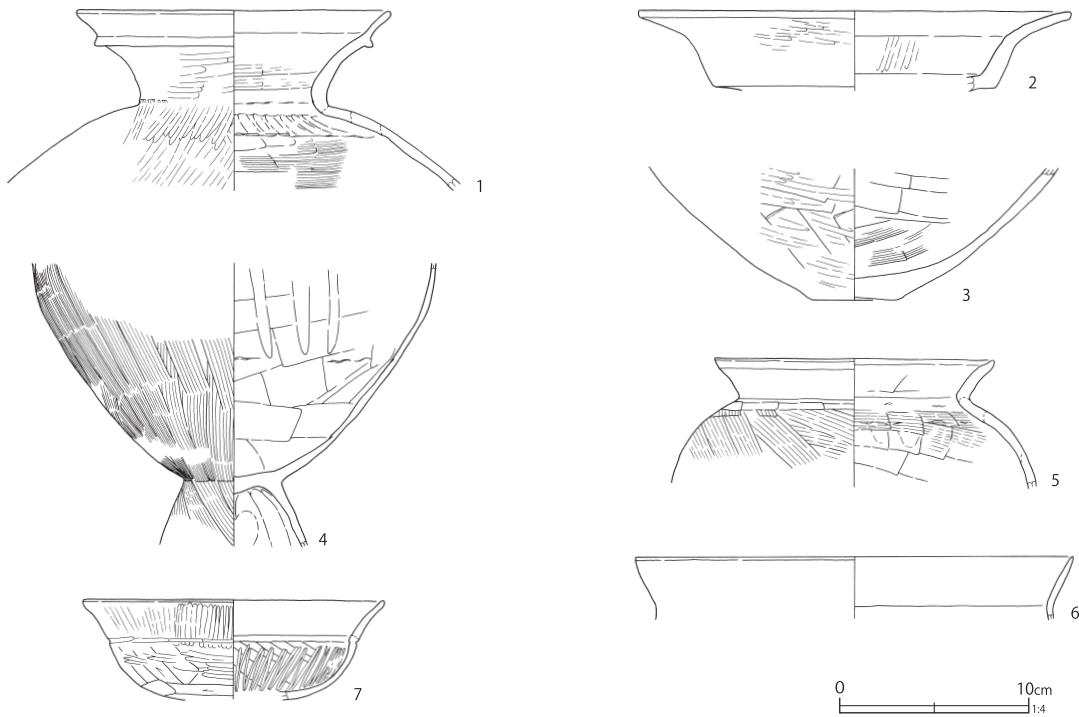
平面形は、一部の調査のため、確実ではないが方形と考えられる。調査区内の長軸方位はN-49°-Wである。検出できた規模は、長軸方向2.40m、直交軸方向2.20mである。深さは0.10～0.15mである。

覆土は、暗褐色土の単層で、自然堆積である。第1層には白色粒子が認められた。床面はほぼ平坦である。

施設は、炉跡、貯蔵穴は検出できなかった。柱穴は南東壁に近い位置から1本検出された。径0.60m、深さ0.15mの円形である。西側が一段下



第18図 第35号住居跡



第19図 第35号住居跡出土遺物

第4表 第35号住居跡出土遺物観察表 (第19図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	壺	(16.4)	9.5	—	A C E H I K	20	普通	橙	No.7・11 P1	36-1
2	土師器	壺	(22.8)	4.2	—	A B C E H I	15	普通	明赤褐	H3と接合	
3	土師器	壺	—	7.0	4.6	A E H I K	70	普通	橙	No.2	
4	土師器	台付甕	—	14.9	—	C D E H I	40	普通	にぶい黄橙	No.15 脊部内外面煤付着	36-2
5	土師器	甕	(14.8)	6.7	—	A C H I K	20	普通	橙	No.14	
6	土師器	甕	(23.2)	3.3	—	A C H I K	5	普通	橙		
7	土師器	鉢	(16.0)	5.2	—	A C E H I K	20	普通	橙	No.1	36-3

がっている。

遺物は少なく、床面、覆土中から古墳時代前期の壺、小型壺、台付甕、鉢が出土している。

1・2は二重口縁壺である。1は口縁部が大きく開き上段が短い。段の部分は突帯の貼付によって表現されている。脣部は肩の張る球形脣と考えられる。2は口縁部が長く、厚みがあり、内外面ヘラ磨きが施されている。4はS字状口縁台付甕である。脣部の器肉は薄い。外面の刷毛目は単斜方向である。脚台部は外面刷毛目、内面は脣部同様ヘラナデ後指ナデが加えられている。7の鉢は扁平で、内外面ヘラ磨きが施されている。

第37号住居跡 (第20・21図)

B区の中央、G-4グリッドに位置する。南側は第2号河川跡によって壊されている。第34号住居跡と重複し、本住居跡の方が古い。

本住居跡に接して、同時期の第34・38・39号住居跡が密集して分布する。

平面形は、方形もしくは長方形と考えられる。調査区内の長軸方位はN-27°-Wである。検出できた規模は、長軸方向3.20m、直交軸方向3.00mである。深さは0.10~0.15mである。覆土は黒褐色土の单層で、自然堆積である。第1層には、白色粒子が認められた。床面は西側方向に傾斜している。

炉跡、貯蔵穴等の施設は検出できなかった。

遺物は少なく、古墳時代前期の遺物が床面からやや浮いた状態で出土し、後期の遺物は覆土上層を中心に出土した。後者は混入と考えられる。器種は、古墳時代前期の甕、台付甕、混入の古墳時代後期の壺、鉢、甕、須恵器甕、土錐である。床面からはモミ属の炭化材が出土している。

1～3はS字状口縁台付甕である。1は口縁部が短い。頸部の内面にはヘラナデが施されている。胴部外面は櫛目に近い深い刷毛目である。同一個体と考えられる細片が多く出土している。2・3は箱型の脚台部で、胴部との接合に砂粒を多く含む粘土を用いている。4～10は甕である。いずれも口縁部が直線的に開き、胴部は球形である。胴部外面の調整はいずれも刷毛目だが、4・5・10はヘラケズリが加えられている。9は平底

の底部で外周にヘラケズリが加えられている。11～16は古墳時代後期のものである。11～13は壺蓋模倣壺である。12・13は口縁部上端が短く外反する。14は鉢である。器肉が厚く、ヘラケズリが施されている。15・16は須恵器甕の口縁部である。同一個体の可能性が高い。5条1単位の波状文が施されている。群馬産。17は完形の土錐である。風化が進み、調整は不明である。

第38号住居跡（第22図）

B区の中央、G-4グリッドに位置する。東側は調査区域外にかかる。遺構の南側と上部は河川跡によって壊されている。

出土遺物が少なく、時期を決め難いが、軸方向、覆土の様相から古墳時代前期と判断した。

本住居跡の西側に接して、同時期の第34・37号住居跡が密集して分布する。

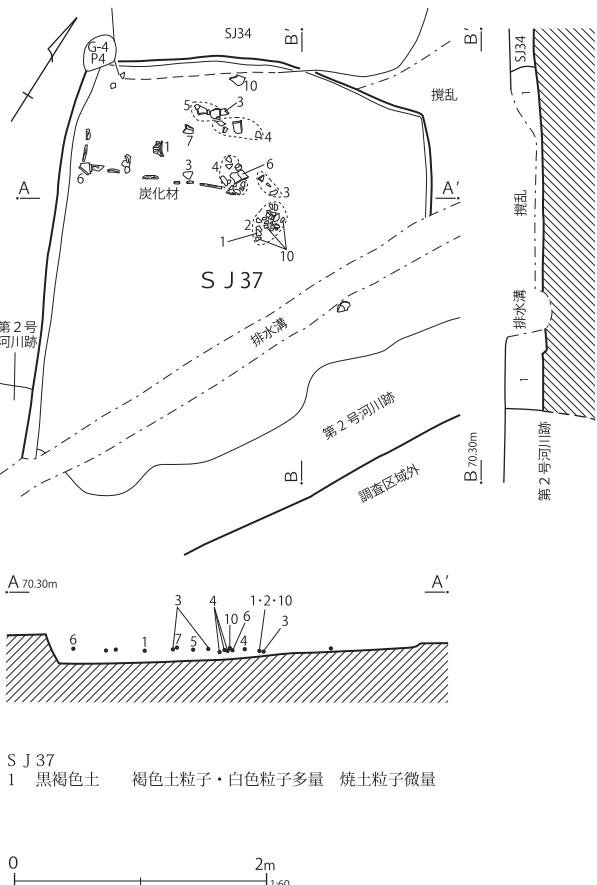
調査区内の様相から、平面形は方形と考えられる。調査区内の長軸方位はN-55°-Eである。検出できた規模は、長軸方向3.90m、直交軸方向2.00mである。確認面からの深さは0.25mだが、調査区法面では深さ0.40mを確認した。

覆土は小礫を含む灰黄褐色土、褐色土、黒褐色土で、自然堆積である。砂質の部分もあり、河川による影響を多く受けた堆積と考えられる。第1層には白色粒子が多く認められた。床面は平坦である。

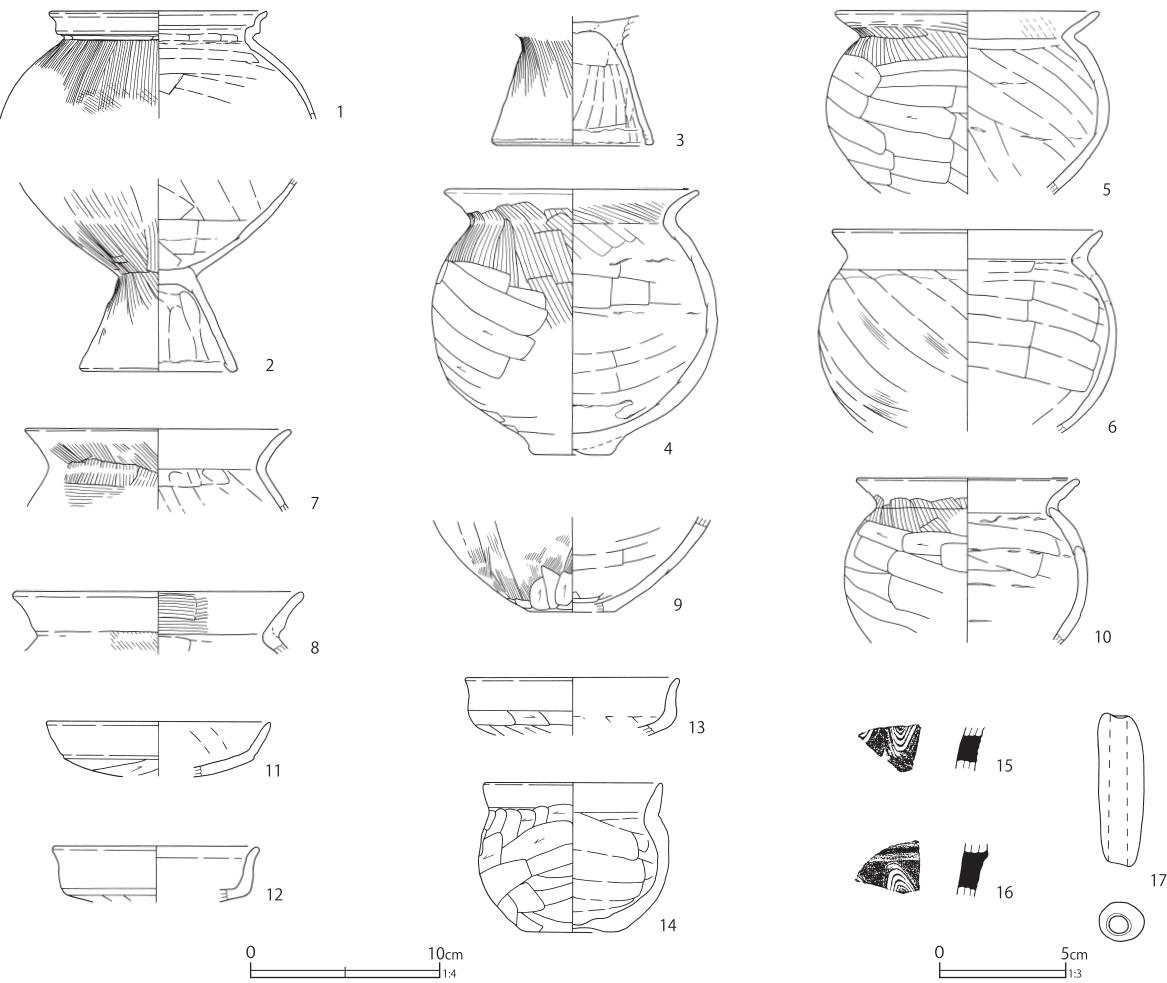
施設は、北壁中央西寄りで壁周溝を検出した。長さ0.85m、幅0.15m、深さ0.06mである。

遺物は、覆土中から出土した。古墳時代前期の遺物が多く、少量の古墳時代後期の遺物が出土した。器種は、古墳時代前期の甕、高壺が出土し、古墳時代後期の壺、甕は混入である。

1・2は古墳時代後期の有段口縁壺である。2は風化が著しい。両者とも黒色処理されている可能性がある。1の内面にはヘラ磨きが施されている。



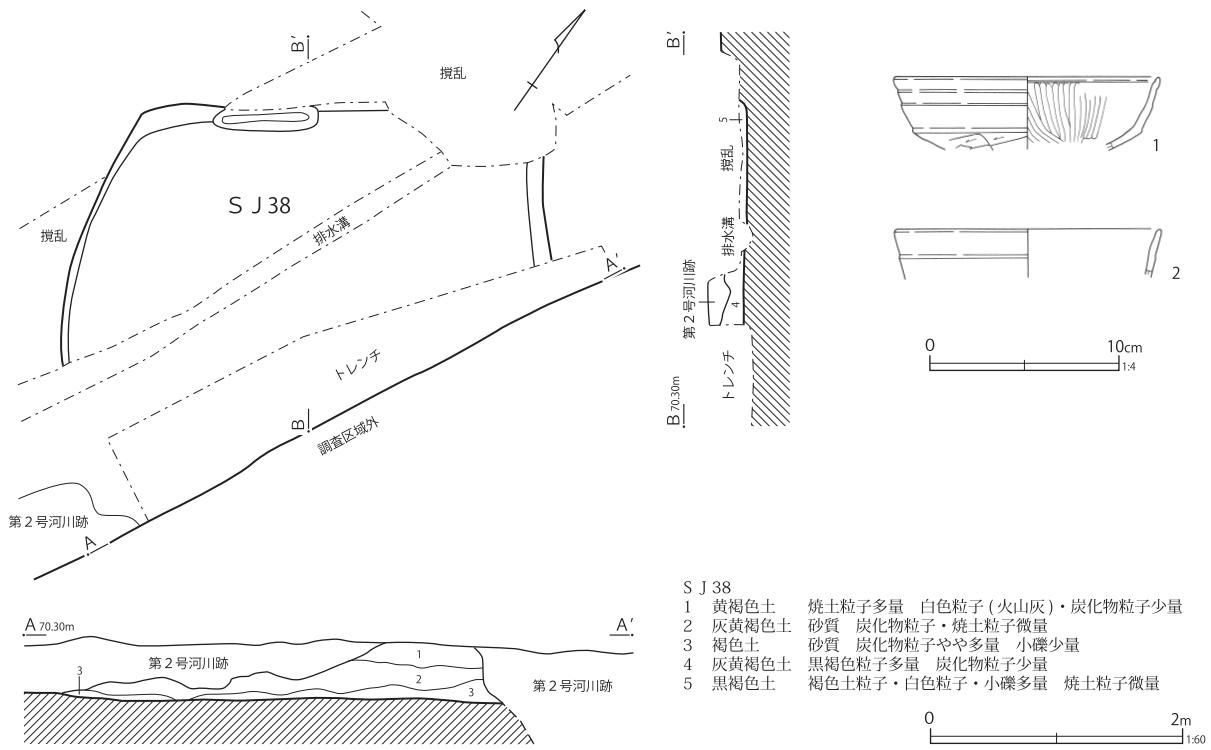
第20図 第37号住居跡



第21図 第37号住居跡出土遺物

第5表 第37号住居跡出土遺物観察表 (第21図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	S字甕	(11.5)	5.6	—	A H I K	45	普通	浅黄橙	No.8・16	
2	土師器	台付甕	—	10.2	8.2	C E H I	40	普通	にぶい黄橙	No.16	36-5
3	土師器	台付甕	—	6.8	8.3	B C H I K	70	普通	にぶい黄橙	No.3・8・11・15	36-6
4	土師器	甕	13.0	14.0	(4.2)	A C E H I	80	普通	明赤褐	No.2・4・5・12・13 SJ34No.6と接合 全体に被熱	36-7
5	土師器	甕	(14.0)	9.7	—	A B C E H	30	良好	明赤褐	No.2・4 二次加熱 赤変 内外煤付着	36-8
6	土師器	甕	(14.2)	10.7	—	A C E H I K	65	良好	にぶい赤褐	No.10・14	37-2
7	土師器	甕	(14.0)	3.3	—	A B C H I K	20	普通	橙	No.7	
8	土師器	甕	(15.2)	3.3	—	A B C H I K	5	普通	橙		
9	土師器	甕	—	5.0	4.6	A C E H I	40	普通	橙	全面煤付着	
10	土師器	小型甕	(11.6)	8.7	—	A H I K	70	普通	にぶい赤褐	No.1・16 内外面煤 赤変	37-1
11	土師器	坏	(11.8)	2.9	—	A B C E H I K	20	普通	橙		
12	土師器	坏	(10.8)	2.9	—	A C H I K	10	普通	橙		
13	土師器	坏	(11.7)	2.5	—	A C H I K	15	普通	橙		
14	土師器	鉢	9.4	7.8	4.7	A B C D H I	95	普通	明赤褐		37-3
15	須恵器	甕	—	1.7	—	C I K	5	良好	灰	群馬産	
16	須恵器	甕	—	2.1	—	I K	5	良好	灰	群馬産	
17	土製品	土錐	長さ5.9cm 幅1.5cm 孔径0.7cm 重さ17.0g		—	A C H I	100	—	—		60-2



第6表 第38号住居跡出土遺物観察表 (第22図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	壺	(14.0)	3.9	—	A CHIK	20	良好	にぶい褐	有段口縁壺 黒色処理か	
2	土師器	壺	(14.0)	2.6	—	A HIK	5	普通	灰褐	黑色処理か	

第39号住居跡 (第23図)

B区の中央、F・G-4グリッドに位置する。

炉跡を検出したのみである。本調査区では、古墳時代前期の遺構のみが検出されているため、前期の住居跡の施設と判断した。

本住居跡の南側に接して、同時期の第34・37・38号住居跡が密集して分布する。

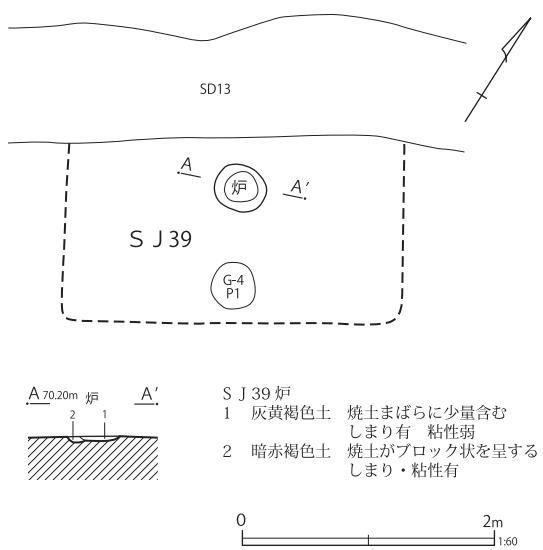
炉跡は不整な楕円形である。長径0.40m、短径0.35m、深さ0.03mである。火床面はよく焼けていた。

(2) 土 壤

第5号土壤 (第24・25図)

B区の南端、H・I-3グリッドに位置する。北側6.0mに第35号住居跡が位置する。

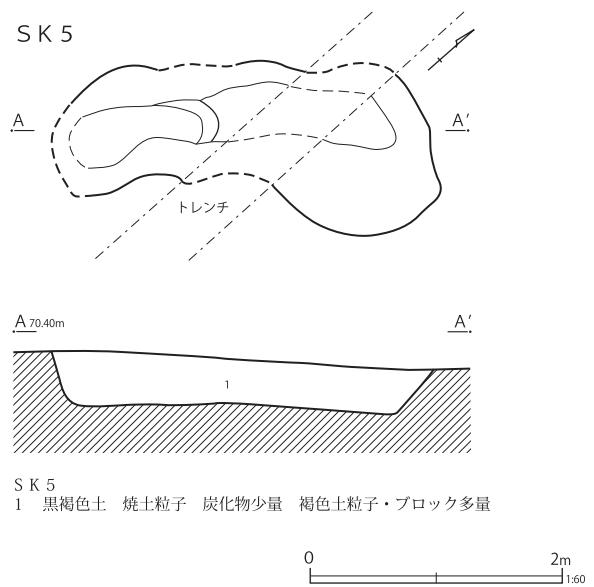
平面形は、不整な長楕円形である。長軸方位はN-42°-Eである。規模は長軸3.00m、短軸は



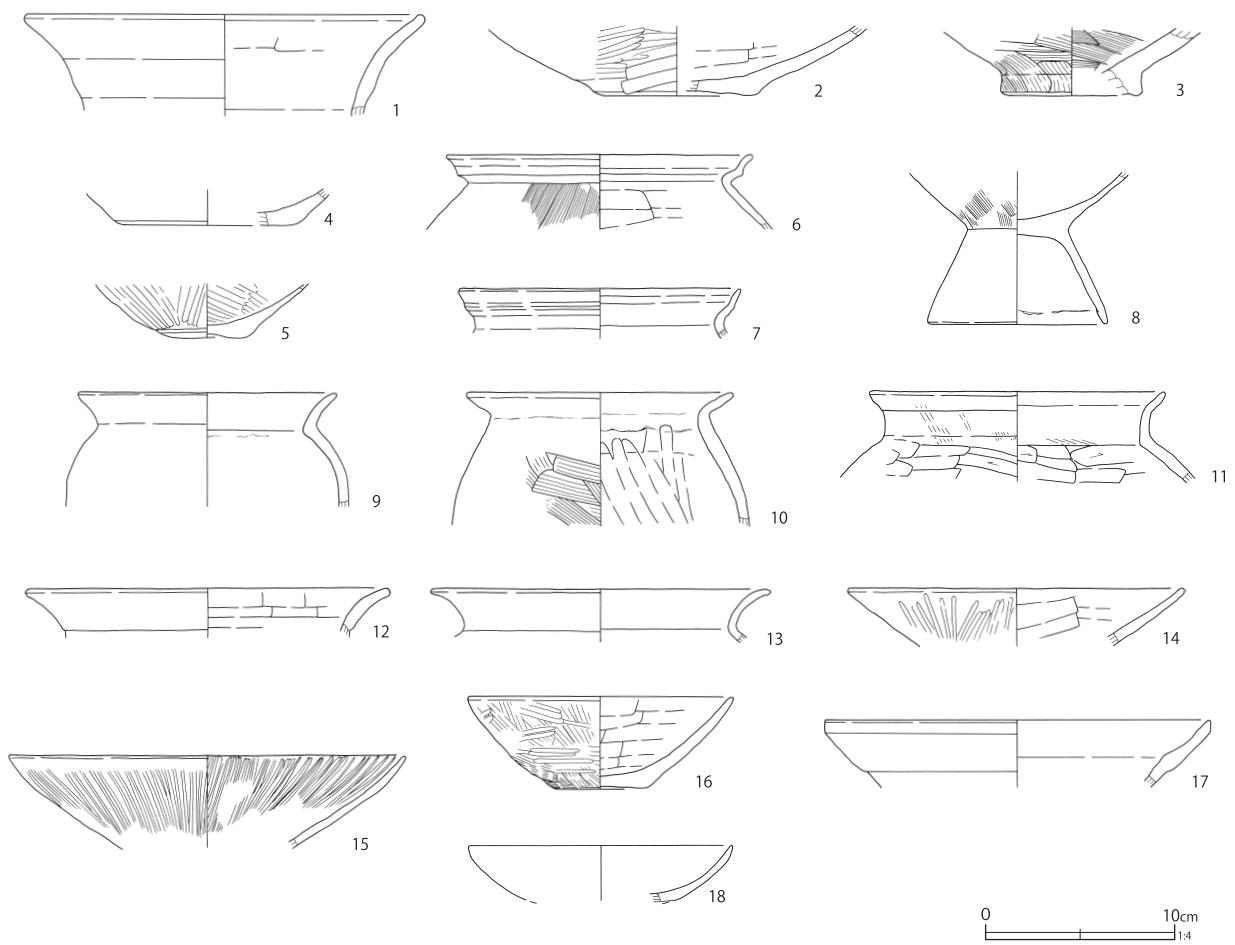
北東側が1.30m、南西側が0.90mである。深さは0.40mである。断面形は逆台形である。底面は北東側に若干傾斜している。覆土は黒褐色土の単層で、埋め戻しと考えられる。

遺物は多く、古墳時代前期の土師器壺、小型壺、台付甕、甕、高坏、鉢が出土している。

1は壺の口縁部で、ヘラナデ後横ナデが施されている。8は風化が著しく、調整が確認できないが、箱形の脚台部で、接合部に砂を多く混ぜた粘土が使用されており、S字状口縁台付甕と考えられる。11は刷毛目後胴部内外面ヘラケズリ調整で、古墳時代後期になる可能性がある。



第24図 第5号土壙



第25図 第5号土壙出土遺物

第7表 第5号土壙出土遺物観察表(第25図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	壺	(21.0)	5.4	—	A B C E H I	10	普通	橙		
2	土師器	壺	—	3.7	8.8	B C E H I	60	普通	明赤褐		37-6
3	土師器	壺	—	3.6	(7.6)	A C E H I K	20	普通	橙		
4	土師器	壺	—	1.9	(10.0)	A E H I K	20	普通	橙		
5	土師器	小型壺	—	2.8	5.0	A C E H I	50	普通	橙		
6	土師器	台付甕	(16.1)	4.0	—	A C E H I K	5	普通	浅黄橙		
7	土師器	台付甕	(15.0)	2.7	—	A C E H I K	25	普通	橙		
8	土師器	台付甕	—	8.0	(9.4)	A B E H I K	65	普通	橙		37-7
9	土師器	甕	(13.6)	6.0	—	A B C E H I K	20	普通	橙		
10	土師器	甕	(14.0)	7.1	—	A B C E H I K	15	普通	にぶい黄橙		
11	土師器	甕	(15.5)	4.8	—	A B C H I K	20	良好	にぶい赤褐		37-8
12	土師器	甕	(19.0)	2.6	—	A B C E H I K	5	普通	橙		
13	土師器	甕	(17.4)	2.8	—	A C E H I K	20	普通	明赤褐		
14	土師器	高坏	(17.6)	3.1	—	A C E H I	10	普通	明赤褐		
15	土師器	高坏	(21.0)	4.9	—	A C E H I	40	普通	橙		
16	土師器	鉢	13.9	8.8	5.0	A C H I K	45	普通	明赤褐		37-9
17	土師器	鉢	(20.4)	3.6	—	A E H I K M	5	普通	橙		
18	土師器	鉢	(13.6)	2.9	—	B C H I K	10	普通	橙		

3. 古墳時代後期の遺構と遺物

(1) 住居跡

第2号住居跡(第26図)

D区のほぼ中央、P-1・2グリッドに位置する。第7号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。第1号住居跡が北側2.5m、第3号住居跡が南側2.0mに位置する。

平面形は隅丸方形である。主軸方位はN-10°-Eで、北カマドである。規模は、主軸方向2.90m、直交軸方向3.00mである。深さは0.15~0.20mで、床面は平坦である。覆土は黒褐色土で、自然堆積である。床面のほぼ中央付近に焼土が堆積していた。

カマドは北壁に設けられていた。規模は全長1.65m、幅1.10mで、潰れた状態である。燃焼部は若干壁を切り込んで造られ、段を持って煙道に至る。燃焼部幅は0.30~0.40mである。底面はよく焼けていた。灰層はほとんど認められなかつた。袖は黒褐色と黄褐色の混土層の貼り付けにより造られていた。両側面はよく焼けていた。煙道は長さ0.75m、幅0.20m、深さ0.20mである。底面

と両側壁が良く焼けていた。11・14層中に薄い灰層を含む。

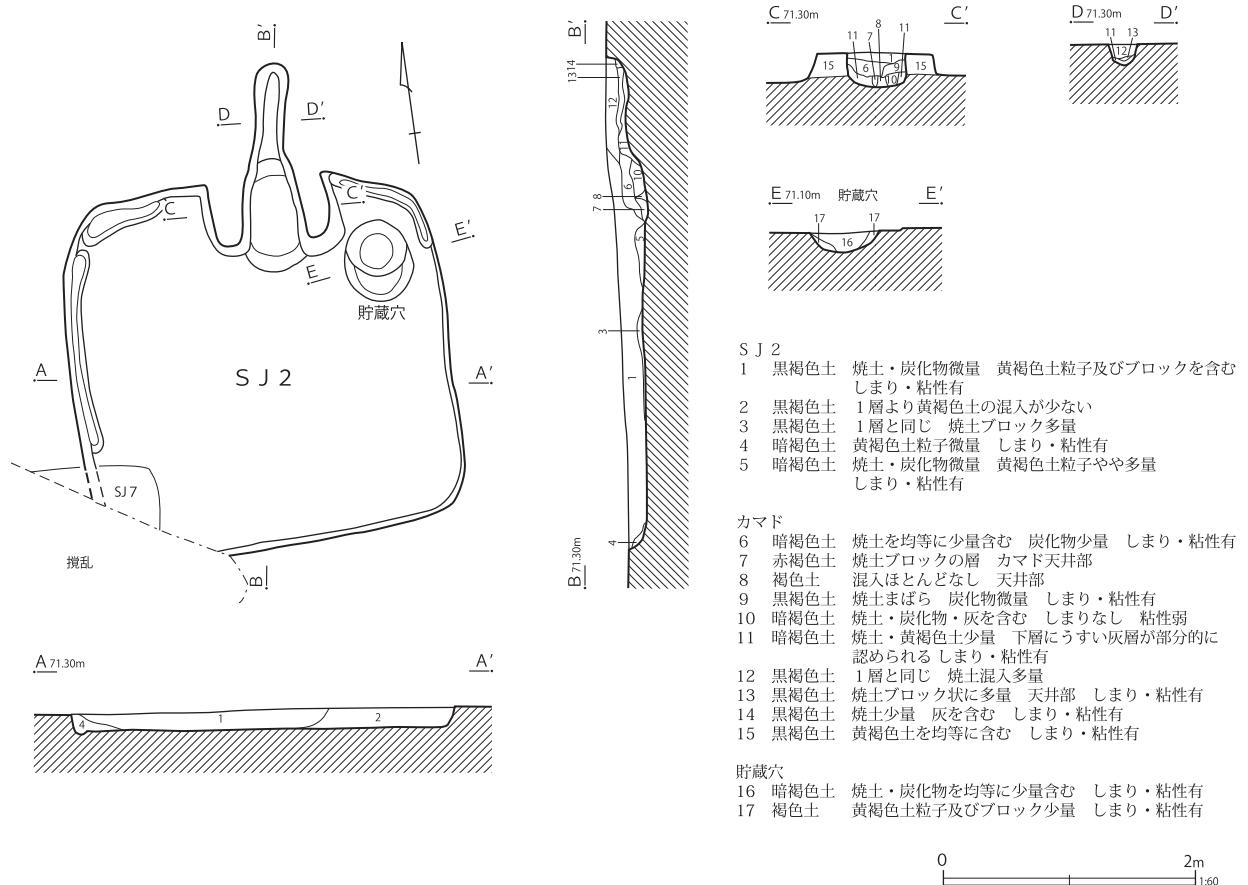
貯蔵穴は、カマドの右側に造られていた。平面形は不整な橢円形である。長径0.65m、短径0.50m、深さ0.15mで、自然堆積である。壁周溝は遺構の北側から西側に設けられていた。幅0.10~0.15m、深さ0.05mほどである。

遺物は古墳時代後期の壺、甕、高坏の破片が少量出土したのみである。

第3号住居跡(第27・28図)

D区のほぼ中央、P・Q-1・2グリッドに位置する。遺構の東隅は、調査区域外にかかる。本住居跡の南側からは住居跡が確認されておらず、分布の南限を示すと考えられる。周辺からは風倒木痕が多く検出されている。

平面形は長方形である。主軸方位はN-34°-Eで、北カマドである。規模は、主軸方向5.35m、直交軸方向3.25mである。深さは0.25~0.30mで、床面は平坦である。覆土は黒褐色土で、自然堆積



第26図 第2号住居跡

である。

カマドは北壁に設けられていた。規模は全長1.50m、幅は調査区内で最大1.20mである。全体に天井部が崩落している。燃焼部は壁内に収まっている。燃焼部幅は0.40mほどである。底面はあまり焼けておらず、右側に片岩の支脚が置かれていた。7層下位に灰層が認められた。袖は黄灰色の粘土の貼り付けである。両側面はよく焼けていた。燃焼部から段をもって煙道に至る。煙道は長さ0.90m、幅0.25m、深さ0.15mである。底面と両側壁はあまり焼けていなかった。

柱穴は1本検出された。径0.40m、深さ0.15mである。覆土は黒褐色土で、自然堆積である。

遺物は、床面近くからやや多く出土した。器種は土師器壺、壺、甕、瓶である。混入の古墳時代前期の壺、甕の破片も出土している。

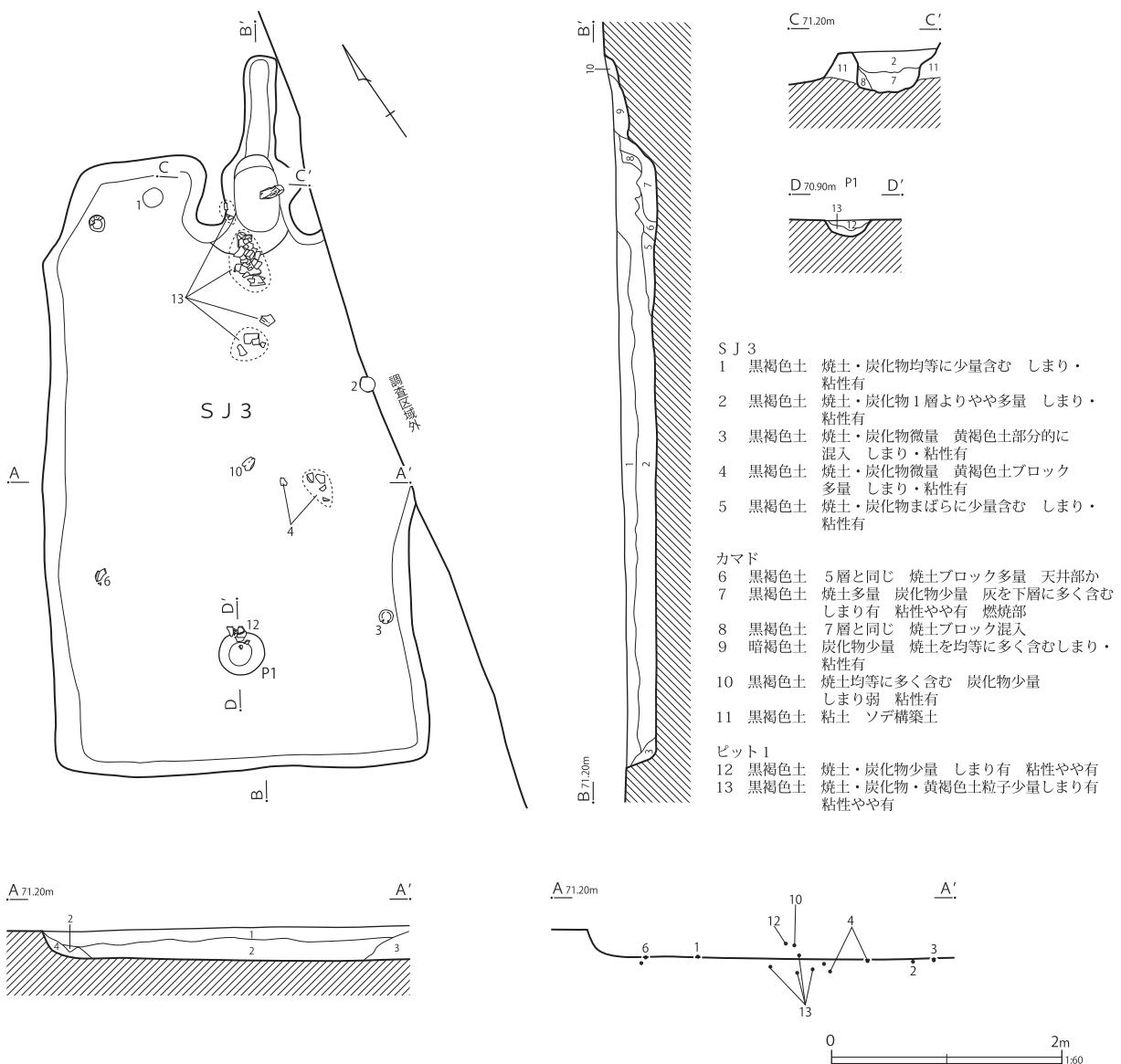
1は有段口縁壺である。外面が黒色処理されて

いる。2～7は壺蓋模倣壺である。4は分厚く、黄白色を呈しており、内面が黒色処理されている。7は口縁部が短く、器肉が厚い。8は皿である。9は壺身模倣壺である。径が小さくて、器高が高くやや異質である。風化が進み、調整は不明である。10・13は長胴の甕である。13は風化が著しい。底面はヘラケズリである。11は古墳時代前期の小型壺である。12は単孔の瓶である。2次加熱を受け、傷みが著しい。

第4号住居跡（第29～34図）

C区のほぼ中央、K-2・3、L-3グリッドに位置する。遺構の東側は調査区域外にかかる。第14・15・21号住居跡と重複し、いずれの住居跡よりも本住居跡が新しい。最も遺構が密集する箇所の南端に当たる。第12号住居跡が南西側3.0mに位置する。

平面形は方形と推定される。主軸方位はN-



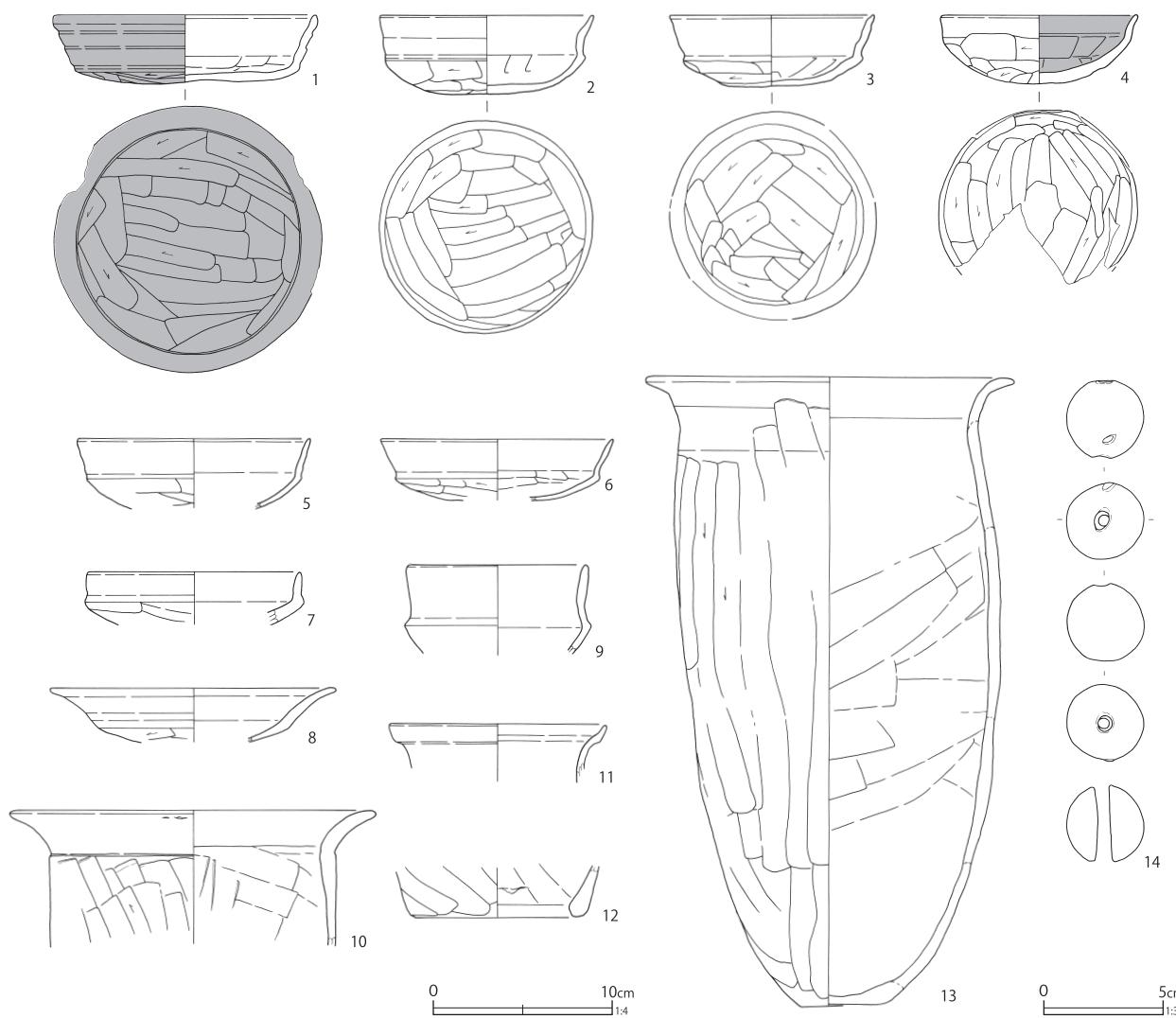
第27図 第3号住居跡

20°-Wで、北カマドである。規模は、調査範囲で、主軸方向4.65m、直交軸方向4.45mである。平面の状況から、本来は横長の形態になる可能性が高い。深さは0.30mで、床面は平坦である。覆土は黒褐色土で、自然堆積である。床面には炭化物が広がっていた。床下土壌が2箇所認められた。長径0.70m、短径0.40~0.50m、深さ0.10mで、東側のものは一段深くなっている。

カマドは北壁に設けられていた。規模は全長1.85m、幅1.00mで、天井が崩落している。燃焼部は若干壁を切り込んで造られ、段を持って煙道

に至る。燃焼部は手前側がやや広がり、幅は奥壁0.35m、焚口0.50mほどである。底面、側壁はよく焼けていた。10層は灰層である。袖は黒褐色粘土の貼り付けにより造られていた。両側面はよく焼けていた。焚口部分の補強材として、長胴甕5個体分(30~34)が用いられていた。32は焚口の横架材、33・34は袖の支持材として用いられ、30・31はその補強と考えられる。煙道は長さ1.00m、幅0.15~0.25m、深さ0.20mである。下層に灰が多く含まれ、底面と両側壁がよく焼けていた。

柱穴は5本検出された。位置としては、P1・



第28図 第3号住居跡出土遺物

第8表 第3号住居跡出土遺物観察表(第28図)

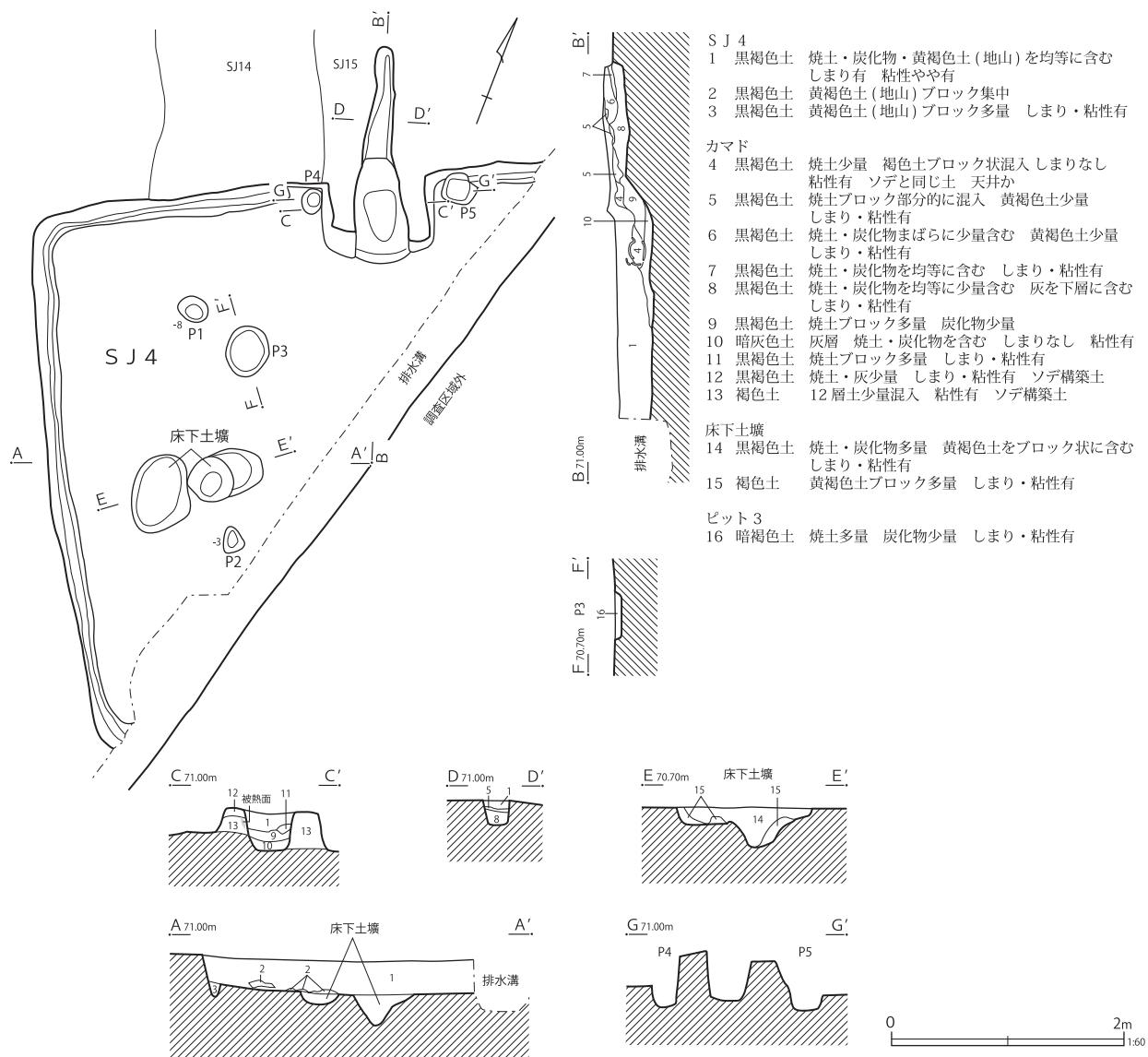
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	壺	14.6	3.7	—	A B C D E H I K	95	良好	明褐	No.1 外面黒色処理	23-2
2	土師器	壺	11.9	4.4	—	A C D E H I	100	普通	橙	No.4	23-3
3	土師器	壺	11.4	3.9	—	A B C E H I K	90	普通	橙	No.10	23-4
4	土師器	壺	10.8	3.8	—	A B C D H I K	70	普通	橙	No.5・7 内面黒色処理	23-5
5	土師器	壺	(13.0)	3.9	—	A E H I	10	普通	橙		
6	土師器	壺	(13.0)	3.9	—	A E H I	25	普通	橙	No.8	
7	土師器	壺	(11.7)	2.9	—	A C H I K	20	普通	にぶい黄橙		
8	土師器	皿	(15.9)	3.0	—	A C E H I	10	普通	橙		
9	土師器	壺	(9.8)	5.0	—	H I	30	普通	橙		
10	土師器	甕	(20.0)	7.5	—	A C E H I K	10	普通	橙	No.6	
11	土師器	小型壺	(12.0)	3.2	—	H I	10	普通	橙	五領	
12	土師器	甕	—	2.8	(9.0)	A E H I K	20	普通	橙	No.9	
13	土師器	甕	19.8	35.2	4.9	A C E H I K	70	普通	橙	No.2・No.3・カマドNo.1・No.3	23-7
14	土製品	土玉	径 33.0mm	厚さ 32.3mm	孔径 8.0mm	重さ 1.24g			黒褐		55-1

2が主柱穴の可能性がある。P 3は径0.40m、深さ0.05mほどである。P 4・5は壁際のカマド両脇に設けられており、何らかの施設の可能性がある。P 4は径0.20m、深さ0.15m、P 5は径0.30m、深さ0.10mである。壁周溝は北側から西側に設けられていた。幅0.10~0.20m、深さ0.05mである。

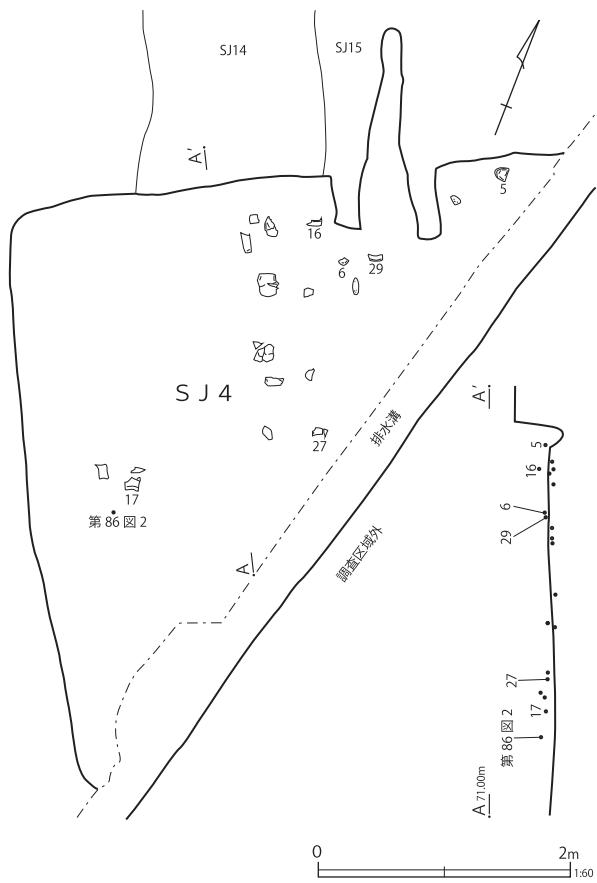
遺物は床面近くから少量出土した。器種は、土師器壺、小型壺、高壺、鉢、壺、甕、ミニチュア、須恵器壺、甕、高壺が出土し、前期の壺、甕が混入している。

1・2は内屈口縁壺、3~8は壺蓋模倣壺、9・10は有段口縁壺である。2は内面にヘラ磨き

が施されている。5は内面が黒色処理され、器肉が極端に薄い。10は内面に木口ナデが残る。11は高壺で、柱状部の下方に径1.2cmの透穴が穿たれている。14は須恵器の壺である。群馬産。白色針状物質を含む。15は大型の鉢である。丸底で、器肉は薄い。16~28は甕の口縁部である。17・19は胴部が球形の可能性がある。それ以外は長胴甕と考えられる。頸部以下に横位のヘラケズリが加えられるものと胴部に連続する縦方向のヘラケズリのみのものが相半ばしている。30~34は長胴甕である。31・32は胴部上位に斜め下からのヘラケズリが施されている。35~37は混入である。35は



第29図 第4号住居跡

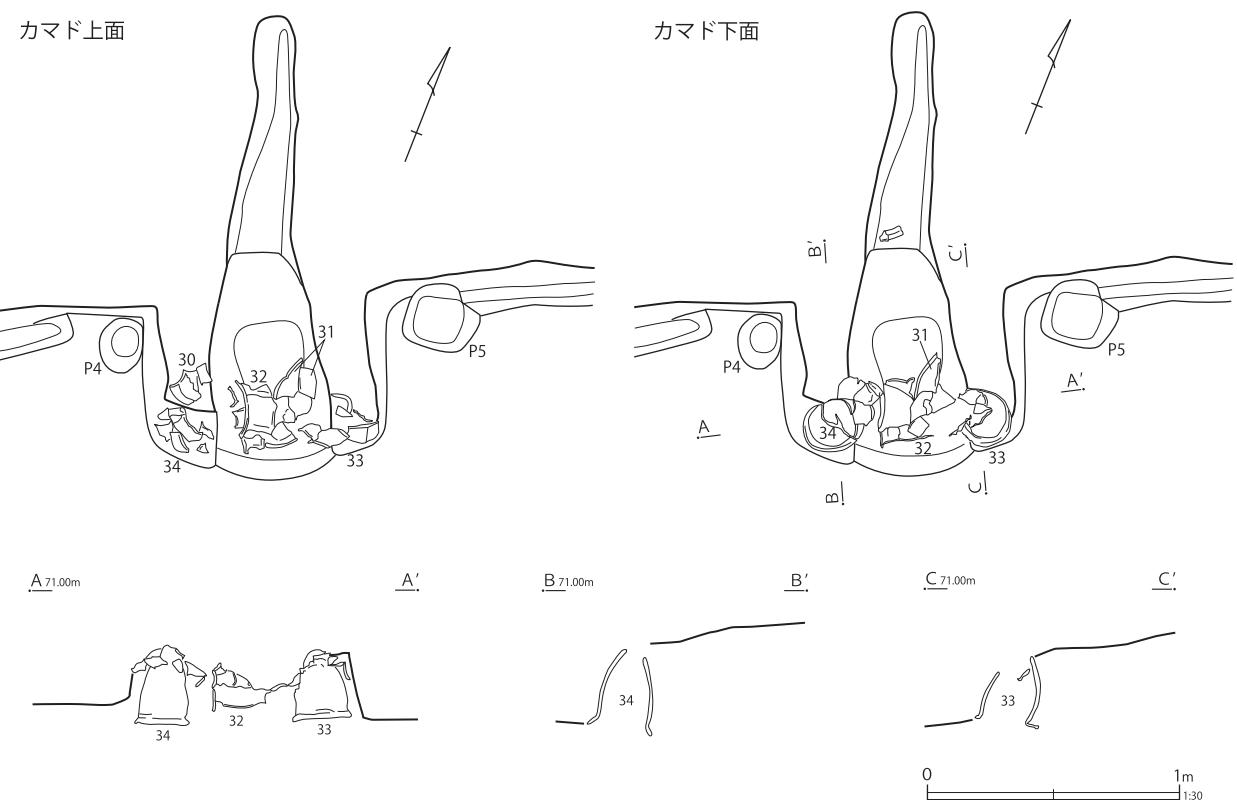


皿状のミニチュアである。短く立ち上がる側縁部が一部残存しており、挿図のような形態と考えられる。体部は全体にヘラナデ調整で、台部は輪台状を呈している。36・37は古墳時代前期の壺である。36は風化著しいが、内外面とも刷毛目後ヘラナデが施されている。底面には木葉痕が認められる。37は外面に単節RLの縄文が施されている。

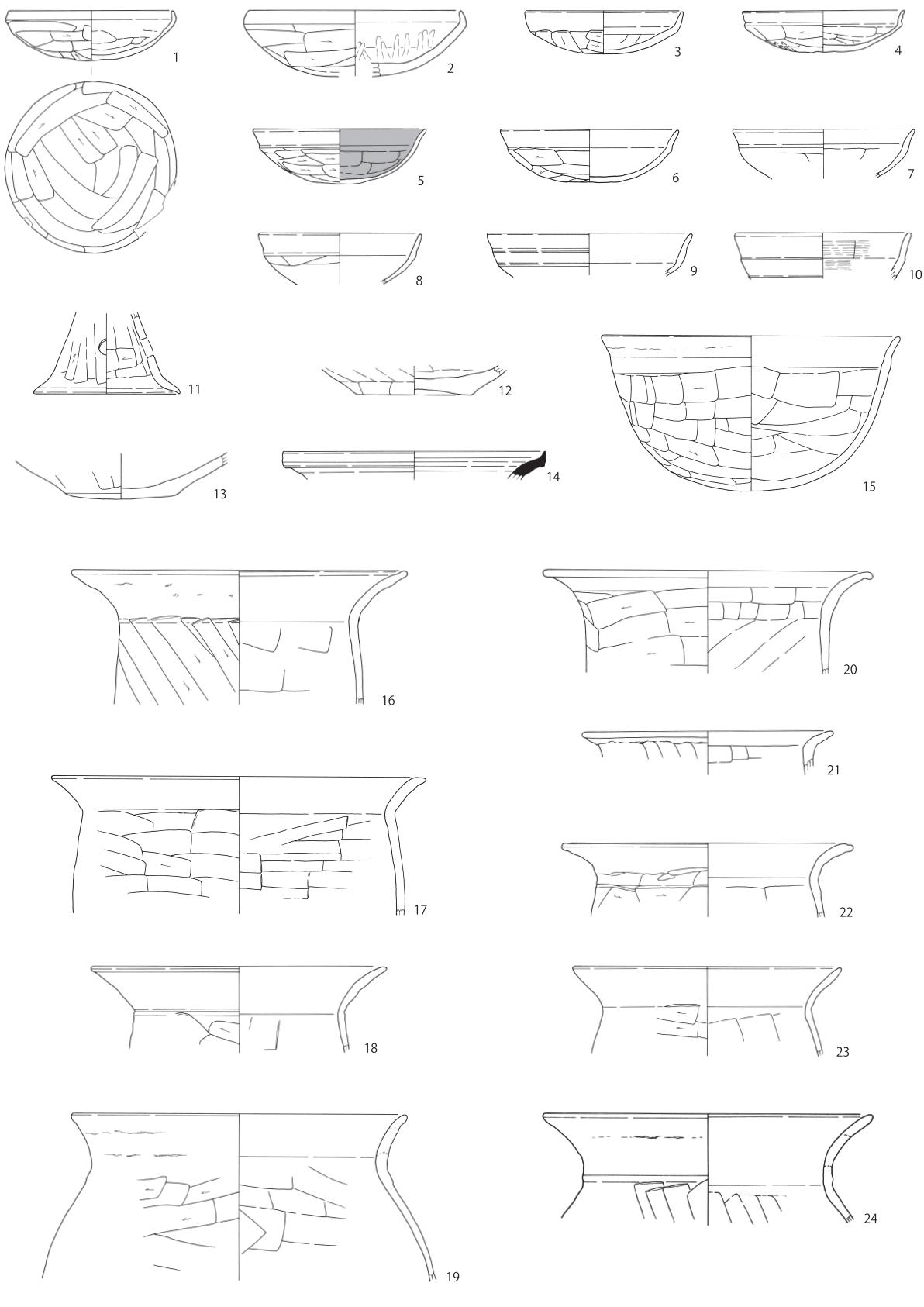
第5号住居跡（第35・36図）

C区のやや南側、L-2グリッドに位置する。遺構の西側は調査区域外にかかる。最も遺構が密集する箇所で、第12・13・22号住居跡、第9号溝跡と重複し、いずれの住居跡よりも本住居跡が新しく、第9号溝跡よりも古い。

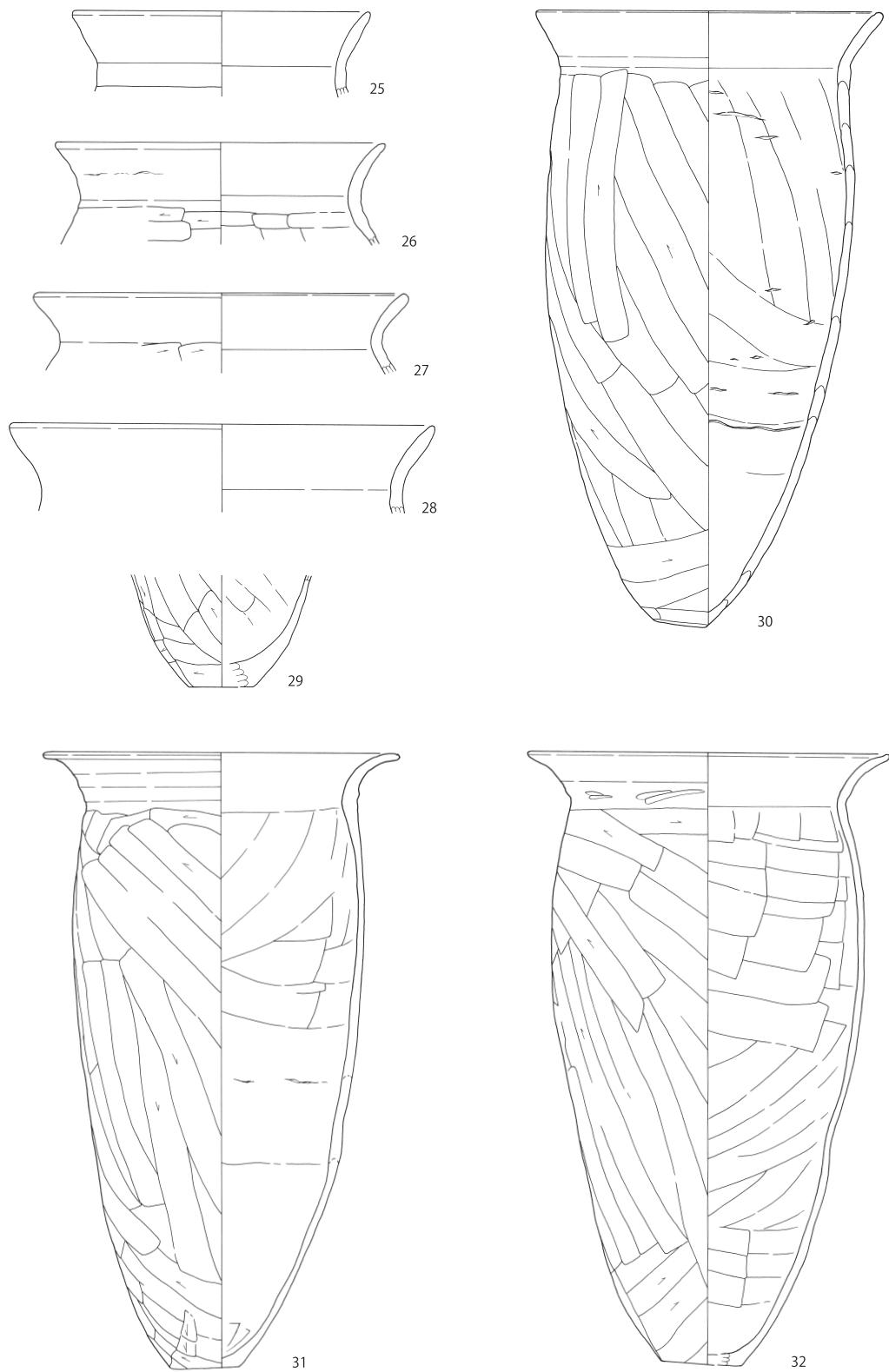
平面形は長方形と推定される。主軸方位S-6°-Wで、南カマドである。規模は、主軸方向4.10m、直交軸方向は調査範囲で、2.50mである。カマドが東側に寄っており、歪んだ長方形になると考えられる。深さは0.20~0.30mで、床面は平坦である。覆土は黒褐色土で、自然堆積である。



第31図 第4号住居跡カマド

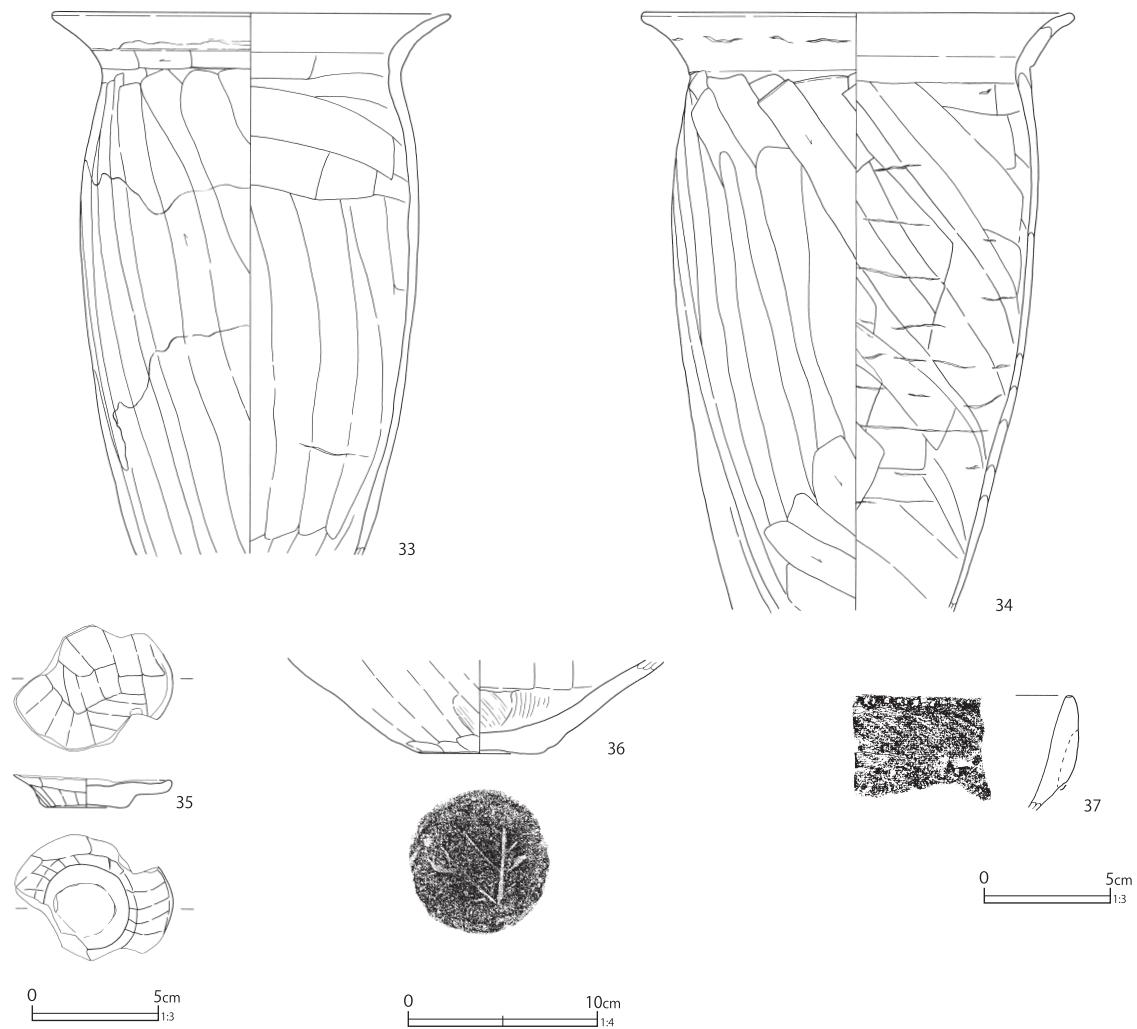


第32図 第4号住居跡出土遺物（1）



0 10cm
1:4

第33図 第4号住居跡出土遺物（2）

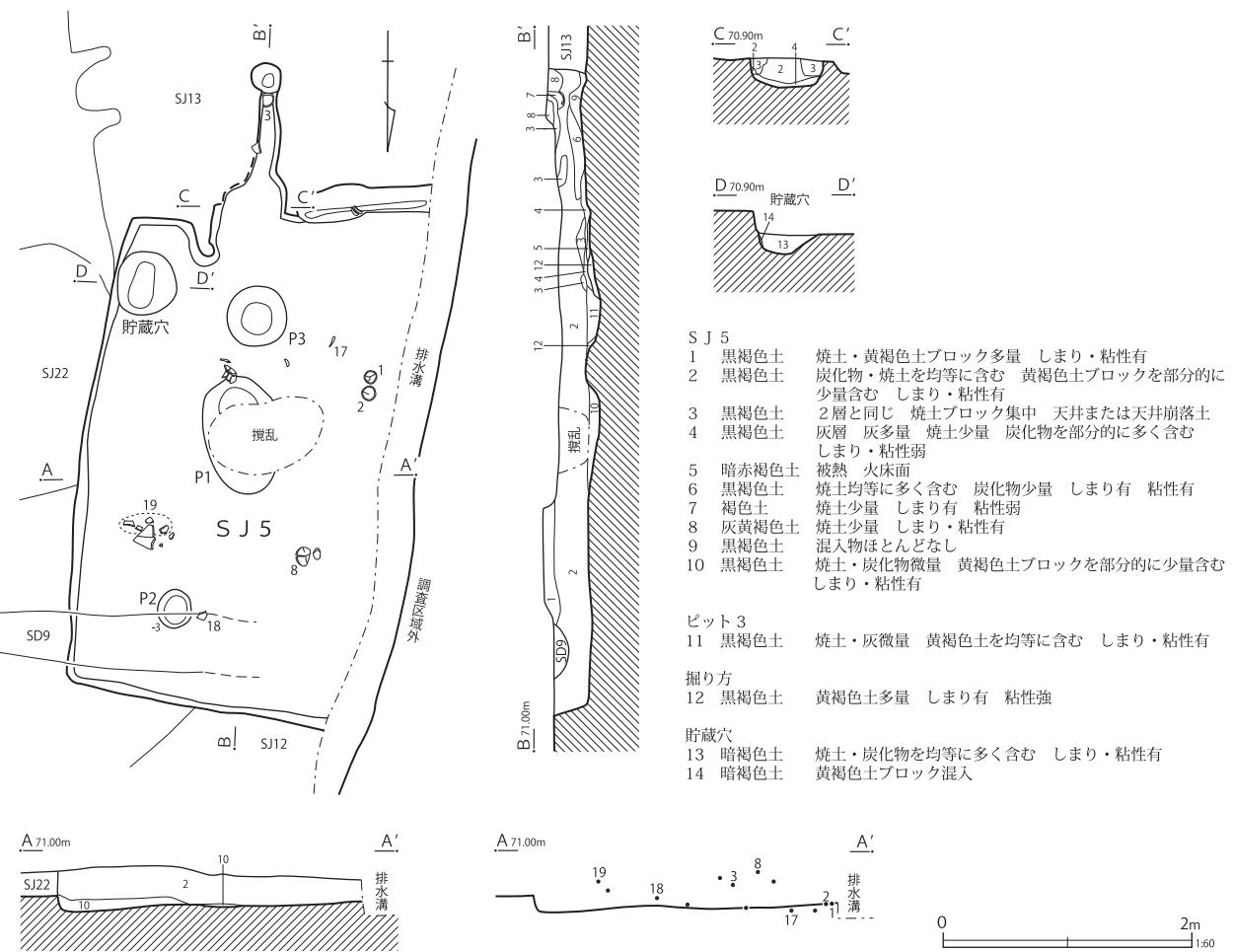


第34図 第4号住居跡出土遺物（3）

第9表 第4号住居跡出土遺物観察表（第32~34図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	壺	11.1	3.4	—	A C D E H I K	90	普通	橙		23-6
2	土師器	壺	(14.4)	4.5	—	A C D E H I K	30	普通	橙		
3	土師器	壺	(10.6)	2.9	—	B C H I K	40	普通	橙		
4	土師器	壺	(11.0)	2.8	—	A C D E H I K	30	普通	橙		
5	土師器	壺	11.7	3.7	—	A B D E H I K	50	普通	橙	No.19 内面黒色処理	24-1
6	土師器	壺	(6.0)	3.5	—	A B D E H I K M	20	普通	明赤褐	カマドNo.12・21	
7	土師器	壺	(10.4)	3.2	—	A C E H I K	20	普通	橙		
8	土師器	壺	(11.0)	3.5	—	A B C H I K	25	普通	橙		
9	土師器	壺	(13.9)	2.8	—	A E H I K	5	良好	橙		
10	土師器	壺	(11.9)	3.2	—	A C H I K	5	普通	褐灰		
11	土師器	高壺	—	5.5	(9.8)	A B E H I K	20	普通	にぶい褐	内外面黒色	
12	土師器	壺	—	2.0	(8.0)	A C D E H I	45	普通	にぶい赤褐		
13	土師器	壺	—	3.1	(8.0)	A B E H I	40	普通	橙		
14	須恵器	壺	(18.0)	1.9	—	E I J K	5	良好	灰	群馬産	60-1
15	土師器	鉢	(20.4)	10.5	—	A C D H I K	30	普通	灰黄褐		24-2
16	土師器	甕	(22.8)	9.1	—	A C E H I K	65	普通	にぶい橙	カマドNo.17・22	24-3
17	土師器	甕	(25.0)	9.3	—	A C E H I K	15	普通	橙	No.2	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
18	土師器	甕	(20.0)	5.8	—	A C E H I K	10	普通	橙		
19	土師器	甕	(22.8)	11.3	—	A C D H I K	5	普通	にぶい橙		24-4
20	土師器	甕	(22.0)	6.9	—	A C D E H I	30	普通	明赤褐		24-5
21	土師器	甕	(17.0)	3.0	—	A C E H I K	5	良好	明赤褐	カマド	
22	土師器	甕	(18.6)	5.0	—	A B E H I K	20	普通	橙		
23	土師器	甕	(18.2)	6.0	—	A C E H I K	15	普通	にぶい橙		
24	土師器	甕	(22.4)	7.3	—	A C E H I K	15	普通	黄橙		
25	土師器	甕	(18.0)	5.1	—	A C E H I K	5	普通	明赤褐		
26	土師器	甕	(20.0)	6.2	—	A C E H I K	20	普通	にぶい橙	No.6	
27	土師器	甕	(22.4)	4.9	—	A B E H I K	10	普通	橙		
28	土師器	甕	(25.5)	5.3	—	A C E H I K	5	普通	にぶい褐		
29	土師器	甕	—	6.7	(4.0)	A B C E H I K	40	普通	にぶい橙	カマドNo.20 外面二次加熱赤変	
30	土師器	甕	20.8	37.3	3.4	A C H I K	95	普通	にぶい橙	カマドNo.20・21・22・23	24-6
31	土師器	甕	21.4	37.4	4.2	A C D E H I K	90	普通	橙	カマドNo.20・21・22・24	24-7
32	土師器	甕	(21.8)	37.4	4.8	A B H I K	80	普通	にぶい橙	カマドNo.20・21・24 外面二次加熱 全体に淡く赤変	25-1
33	土師器	甕	20.6	28.8	—	A B C D E H I K	70	普通	橙	カマドNo.20	25-2
34	土師器	甕	22.4	31.7	—	A B C H I K	90	普通	にぶい橙	カマドNo.23	25-3
35	土師器	ミニチュア	—	1.3	3.4	A C H I K	70	普通	にぶい黄橙		
36	土師器	壺	—	5.0	7.1	A C D E H I K	50	普通	にぶい黄橙	底部木葉痕 五領	25-4
37	土師器	壺	—	4.5	—	A E H I K M	5	普通	にぶい黄橙	五領	60-1



第35図 第5号住居跡

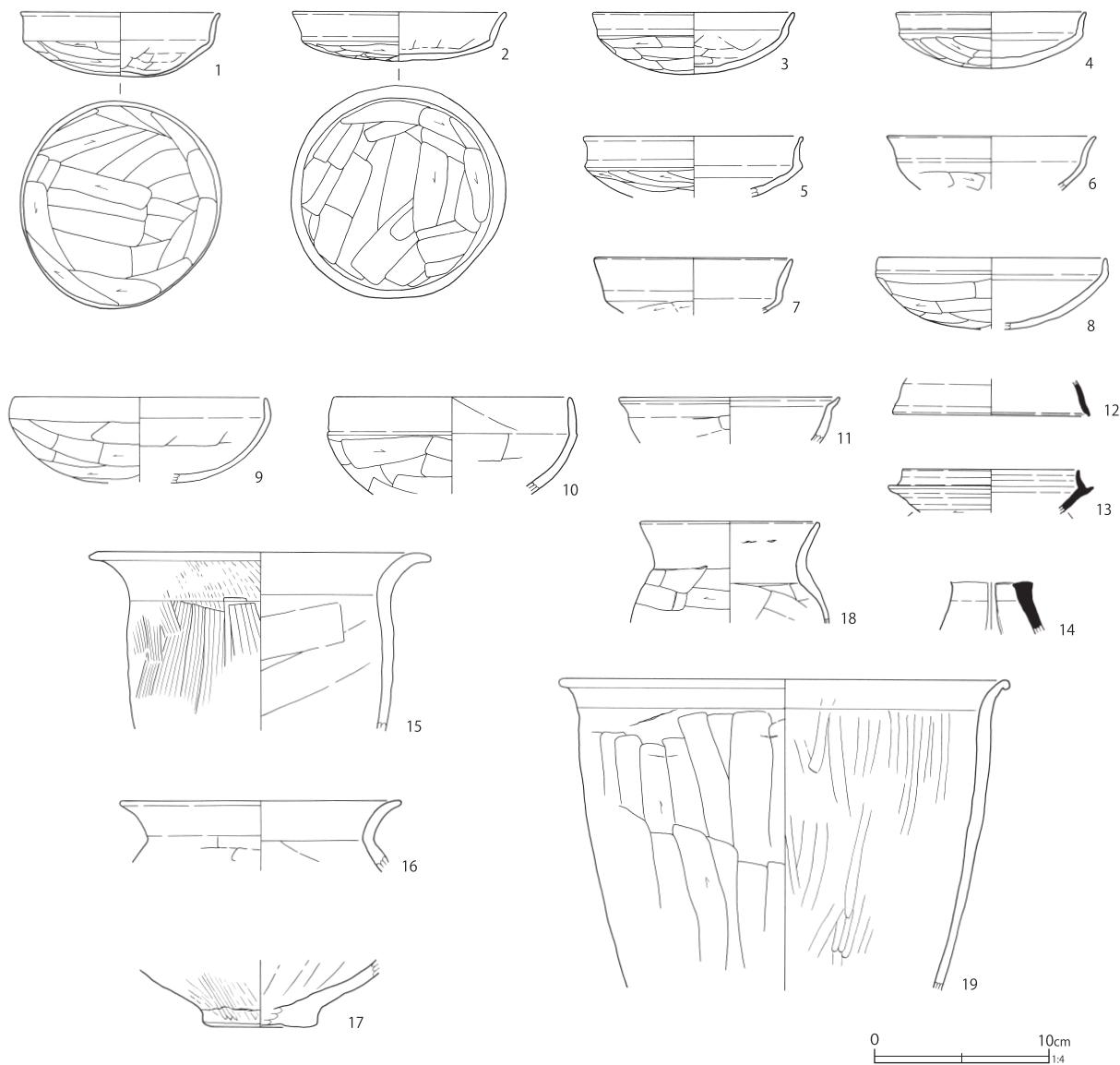
最上層の第1層は埋戻しの可能性がある。床面の南側には掘り方が認められた。

カマドは南壁に設けられていた。規模は全長1.70m、幅0.90mである。潰れた状態で、3層が天井と考えられる。右側の袖は不明瞭で、検出できなかった。燃焼部は若干壁を切り込んで造られ、緩やかに煙道に至る。燃焼部は幅0.50mほどである。底面、側壁はよく焼けていた。4層は灰層である。袖は黒褐色粘土の貼り付けにより造られていた。床面、側面下位はよく焼けていた。煙道は長さ0.90m、幅0.15m、深さ0.25mである。端部はピット状である。底面と側壁がよく焼けていた。

貯蔵穴が南東隅に検出された。径0.50m、深さ0.15mで、覆土は焼土、炭化物を多く含む。柱穴は3本検出された。P1は長径0.90m、短径0.60m、深さ0.05mで、土壌状である。P2は径0.25m、深さ0.03mである。P3は径0.50m、深さ0.10mである。双方とも円形である。幅0.20~0.30m、深さ0.05mの壁周溝が南側に設けられていた。

遺物は少なく、覆土中から出土した。器種は、土師器壺、塊、壺、甕、須恵器高壺、蓋、壺である。

1・2は、床面中央西側から並んだ状態で出土した。1~7は壺蓋模倣壺、8・9は内屈口縁壺、



第36図 第5号住居跡出土遺物

第10表 第5号住居跡出土遺物観察表（第36図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	壺	11.4	3.6	—	A B C D H I	100	普通	橙	No.4	25-5
2	土師器	壺	12.1	2.8	—	A C D H I K	100	普通	橙	No.5	25-6
3	土師器	壺	11.4	3.5	—	A B C D H K	100	普通	橙	No.1	25-7
4	土師器	壺	(10.6)	3.2	—	A C E H I	20	普通	橙		
5	土師器	壺	(12.4)	3.5	—	A C E H I	10	普通	橙		
6	土師器	壺	(12.0)	3.1	—	B H I K	20	不良	橙		
7	土師器	壺	(11.2)	3.1	—	A H I K	10	普通	橙		
8	土師器	壺	12.9	4.1	—	A C E H I	50	普通	橙	No.11	25-8
9	土師器	壺	(14.4)	4.9	—	A C D E H I K	40	普通	橙	攪乱・L2G-18	
10	土師器	壺	13.5	5.5	—	A D H I K	30	普通	明赤褐		26-1
11	土師器	壺	(12.6)	2.6	—	A H I K	5	普通	にぶい橙	攪乱	
12	須恵器	蓋	(11.3)	2.1	—	A I K	5	良好	灰	藤岡産	
13	須恵器	壺身	(10.0)	2.5	—	A E I J K	25	良好	灰	南北トレンチ 群馬産	26-2
14	須恵器	高壺	—	3.0	—	A H I	5	普通	黄灰	カマド 短脚1段か 藤岡産	60-1
15	土師器	甕	(19.6)	10.1	—	A C D E H	15	普通	明赤褐	攪乱 内外面二次加熱 下位赤変	
16	土師器	甕	(16.0)	4.0	—	A C E H I K	10	普通	にぶい赤褐	攪乱	
17	土師器	壺	—	3.9	(6.6)	A E H I K	25	普通	にぶい黄褐	No.3 五領	
18	土師器	小型甕	(10.0)	5.8	—	A E H I K	20	普通	橙	No.8	
19	土師器	甕	(25.4)	17.6	—	A C H I K	15	不良	橙	No.10	26-3

10は壺形の壺である。11は端部のみが外側に開く壺である。12～14は須恵器である。12は壺蓋、13は壺身、14は高壺である。いずれもTK209段階と考えられる。12はやや多孔質で藤岡産である。13は全体に黒ずんでいる。群馬産。14は短脚1段の透穴と考えられる。焼成が甘く、藤岡産である。15・16は甕である。15は外面調整が刷毛目で、器肉が厚い。18は小型の甕である。19は砲弾形の甕である。内面にヘラ磨き状のナデが施されている。17は混入の古墳時代前期の壺である。

第6号住居跡（第37・38図）

D区の北側、O-2グリッドに位置する。カマドの煙道の先端が排水溝にかかっている。第8号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。北側2.0mに第9号住居跡が、南側10.0mに第2号住居跡が位置する。

平面形はやや歪んだ長方形である。主軸方位はS-67°-Eで、東カマドである。規模は主軸方向3.10m、直交軸方向2.70mである。カマドが南側に寄り、住居とはやや軸が異なるため、住居

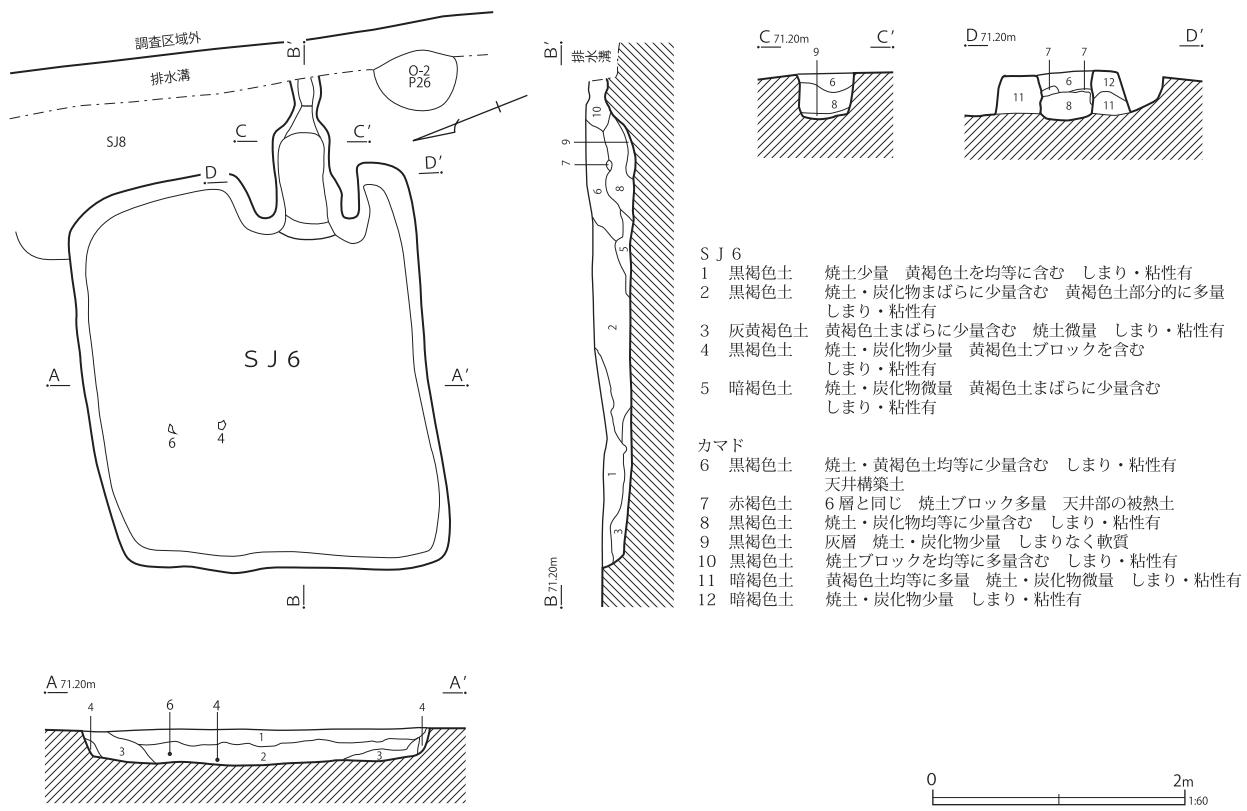
全体が歪んだ長方形になっている。深さは0.20～0.30m、床面は平坦である。覆土は黒褐色土で自然堆積である。

カマドは東壁に設けられていた。規模は検出範囲で全長1.30m、幅1.15mである。潰れた状態で、6・7層が天井崩落土と考えられる。燃焼部は壁を切り込んで造られ、突出している。燃焼部から段を持って煙道に至る。燃焼部は幅0.40～0.50mほどである。床面はあまり焼けていないが、壁はよく焼けていた。9層は灰層である。袖は暗褐色粘土の貼り付けにより造られていた。側面がよく焼けていた。煙道は長さ0.20m分が検出できたのみである。幅0.10m、深さ0.15mである。両側壁がよく焼けていた。

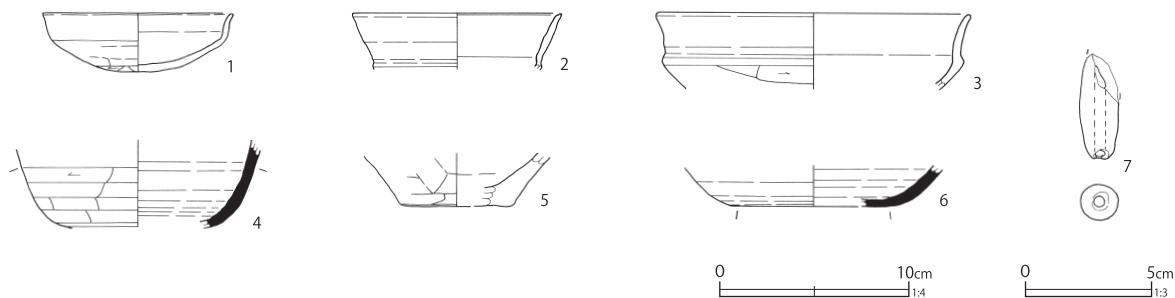
貯蔵穴等の施設は認められなかった。

遺物は少なく、覆土中から古墳時代後期の土師器壺、壺、甕、須恵器壺が出土した。

1～3は壺蓋模倣壺である。1・2は口径が小さく、3は大振りである。1がカマドから出土していることから、本来の時期を示す可能性が高い。



第37図 第6号住居跡



第38図 第6号住居跡出土遺物

第11表 第6号住居跡出土遺物観察表 (第38図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	壺	(10.0)	3.1	—	A C H I	15	良好	褐灰	カマド 黒色処理か	
2	土師器	壺	(11.0)	3.0	—	A E H I K	10	普通	にぶい赤褐		
3	土師器	壺	(16.4)	4.0	—	A H I K	10	普通	橙		
4	須恵器	短頸壺	—	4.7	—	I J K	25	良好	灰	No.2 SD2と接合 南北企産	
5	土師器	甕	—	2.8	(6.0)	A C E H I K	20	普通	明赤褐		
6	須恵器	壺	—	2.2	(8.0)	I K	15	良好	灰	No.1	
7	土製品	土錐	長さ4.1cm 幅1.5cm 孔径0.45cm 重さ7.1g			A C I	—	—	にぶい黄橙	多孔質	60-1

4・6は須恵器である。4は短頸壺、6は壺身と考えられる。4は白色針状物質を含む。南北企産。

第7号住居跡 (第39図)

D区の中央、P-1グリッドに位置する。遺構の西側は、調査時に排水施設を設けたため、調査できなかった。南側は風倒木により壊されている。

第2号住居跡と重複し、本住居跡が古い。南側0.4mに同時期の第3号住居跡が位置する。

カマドは確認できなかったが、出土遺物から古墳時代後期に帰属すると考えられる。

平面形は方形と推定される。検出できた長辺の軸方位はN-10°-Eである。規模は、長軸方向2.80m、直交軸方向は検出範囲で1.50mである。深さは0.10mで、床面はやや西側に傾いている。覆土は確認できなかった。

遺物は少なく、覆土中から土師器甕の破片が出土したのみである。

1は甕の底部で、ヘラケズリ調整である。内面は風化が著しい。

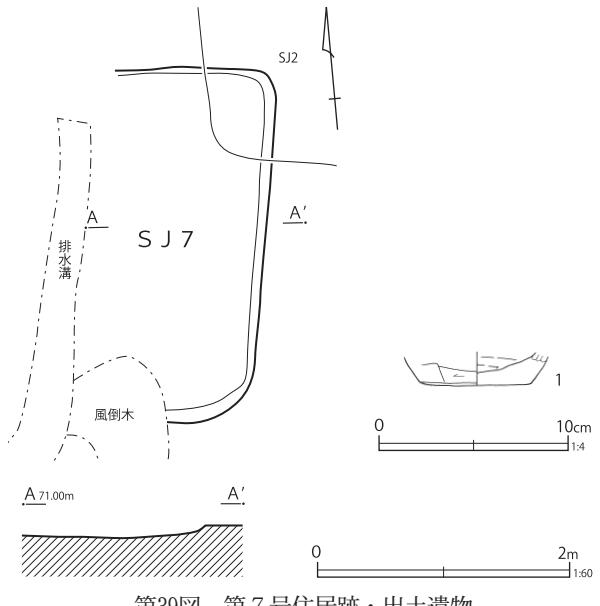
第12表 第7号住居跡出土遺物観察表（第39図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	甕	-	1.7	(6.0)	A C H I K	25	普通	にぶい褐色		

第8号住居跡（第40図）

D区の北側、O-2グリッドに位置する。遺構の東側は調査区域外にかかる。第6号住居跡と重複し、本住居跡が古い。北側2.0mに第9号住居跡が、南側10.0mに第2号住居跡が位置する。

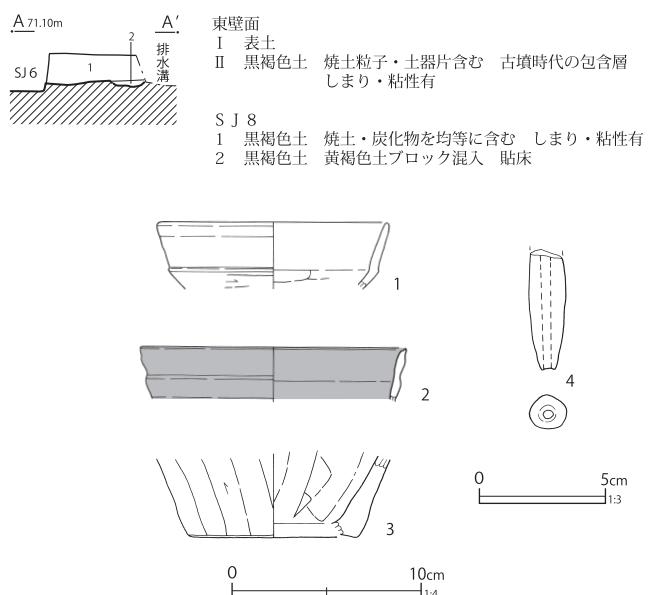
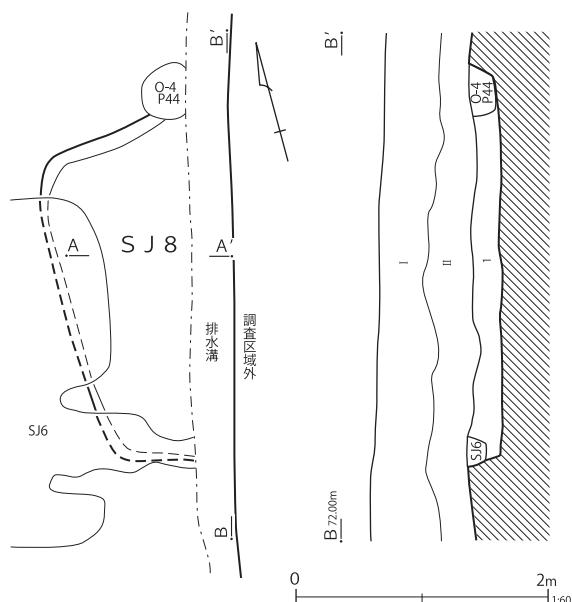
カマドは確認できなかったが、出土遺物から古



第39図 第7号住居跡・出土遺物

墳時代後期に帰属すると考えられる。

遺構の北側と西側の一部の調査にとどまるが、東側法面で遺構の断面を確認した。平面形は方形と推定される。確認できた南北方向を長軸とすると、軸方位はN-2°-Wである。規模は、長軸方向が推定2.60m、直交軸方向は検出範囲で



第40図 第8号住居跡・出土遺物

第13表 第8号住居跡出土遺物観察表（第40図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	壺	(12.0)	3.5	—	A E H I K	10	普通	橙		
2	土師器	壺	(14.0)	2.8	—	A C H I	10	普通	にぶい褐	内外面黑色処理	
3	土師器	甕	—	4.3	(9.0)	A C E H I K	20	普通	橙		
4	土製品	土錘	長さ4.7cm 幅1.4cm 孔径0.4cm 重さ8.5g			A E H K	—	普通	にぶい黄褐		60-1

1.30mである。深さは0.20mで、床面はやや南側に傾いている。覆土は黒褐色土で、焼土・炭化物を多く含む。貼床を遺構の東側で確認した。

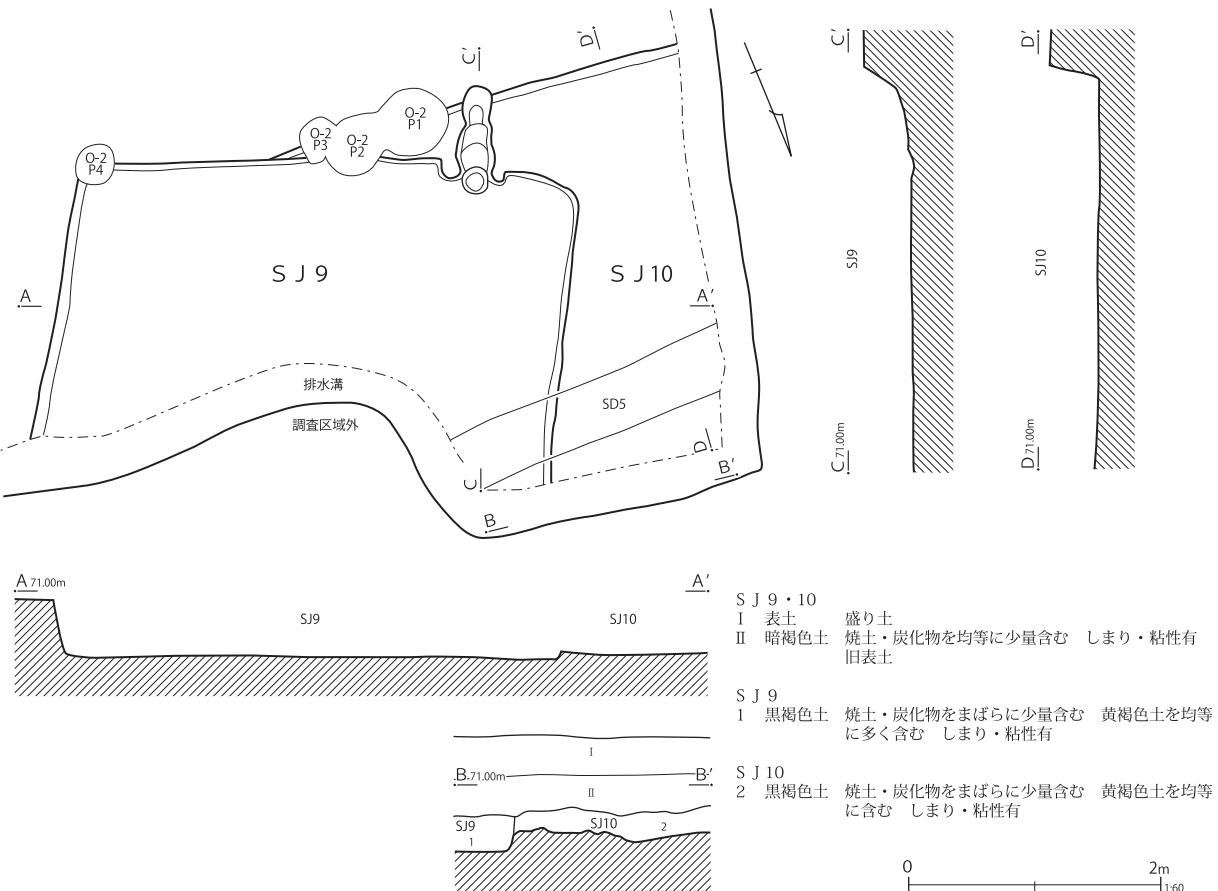
遺物は少なく、覆土中から出土した。器種は、古墳時代後期の土師器壺、甕が出土し、古墳時代前期の壺、台付甕、甕の破片が混入している。1は壺蓋模倣壺で、風化が著しい。2は有段口縁壺で内外面黑色処理が施されている。3は甕底部の外周のみの破片で、形態から甕の可能性がある。4の土錘には弱い面取りが見られる。

第9号住居跡（第41～43図）

D区の北側、N・O-2グリッドに位置する。遺構の北側は調査区域外にかかる。第10号住居跡より新しく、第5号溝跡より古い。南側2.0mに同時期の第6・8号住居跡が位置する。

湧水が激しく、土層断面を観察できなかったため、調査区法面で確認した。

平面形は方形もしくは長方形である。主軸方位はS-23°-Wで、南カマドである。規模は主軸方向2.50m、直交軸方向4.05mである。深さは0.35



第41図 第9・10号住居跡

～0.45mで、床面は平坦である。覆土は黒褐色土で自然堆積と考えられる。

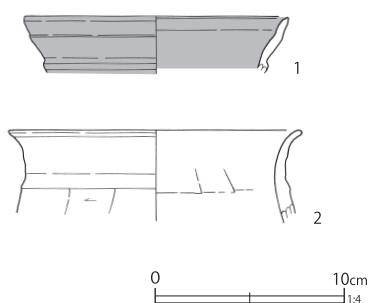
カマドは南壁の西寄りに設けられていた。規模は全長0.85m、幅0.55mである。燃焼部は壁を切り込んで造られ、突出している。燃焼部から段を持って煙道に至る。燃焼部は幅0.20mほどである。床面と側壁はよく焼けていた。袖は暗褐色粘土の貼り付けにより造られていた。煙道は長さ0.40m、幅0.15m、深さ0.25mである。

貯蔵穴等、床面に施設は認められなかった。

遺物は古墳時代後期の土師器壊、甕の破片が覆土中から出土した。1は有段口縁壊で内外面とも黒色処理が施されている。2の甕は口縁部に強く横ナデが施されている。

また、当初同一の遺構と考え、第9・10号住居跡で一括して遺物を取り上げたため、本項で報告する。

器種は古墳時代後期の土師器壊、高壊、壺、甕、古墳時代前期の壺の破片である。1～6は壊蓋模倣壊、7は壊身模倣壊である。7は低平で、口縁部が分厚い。いずれも器面の風化が著しい。8・9は有段口縁壊である。10は塊形の壊である。内面にヘラ磨きが施されている可能性がある。13は古墳時代前期の壺である。かなり大型になると考えられる。



第42図 第9号住居跡出土遺物

第14表 第9号住居跡出土遺物観察表（第42図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	壊	(14.0)	3.0	—	A C E H I K	15	普通	灰褐	内外面黑色処理	
2	土師器	甕	(15.0)	4.8	—	A B E H I K	15	普通	にぶい橙		

第10号住居跡（第41・43図）

D区の北側、N・O-2グリッドに位置する。遺構の北・西側は調査区域外にかかる。第9号住居跡、第5号溝跡と重複し、いずれよりも本住居跡が古い。南側2.0mに同時期の第6・8号住居跡が位置する。

遺物は出土していないが、覆土の様相から古墳時代後期と判断した。

平面形は、方形と考えられる。検出できた南壁の軸方位はS-85°-Wである。検出できた規模は長軸方向3.40m、直交軸方向3.20mである。深さは0.35～0.45mで、床面は平坦である。覆土は黒褐色土で自然堆積と考えられる。

カマド、貯蔵穴等の施設は検出できなかった。

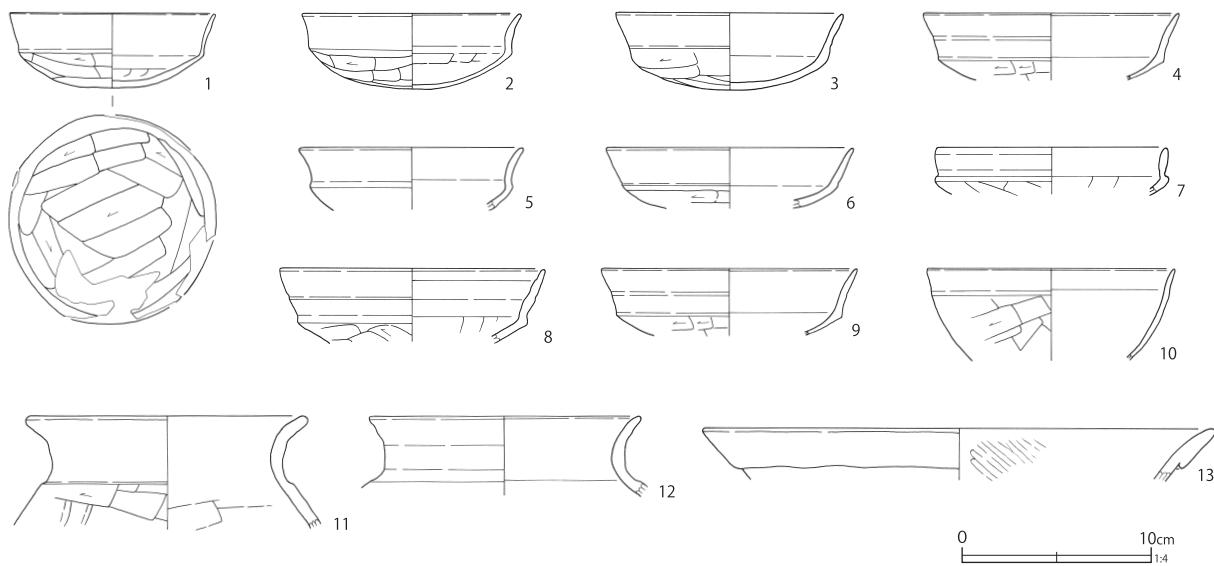
第12号住居跡（第44・45図）

C区の中央よりやや南側、L-2グリッドに位置する。遺構の西側は調査区域外にかかり、調査できたのは遺構の北東側と南東側のみである。第11号住居跡と重複し、本住居跡の方が新しい。

遺構の大半が調査区域外にかかるため、確実ではないが、調査区内の状況から方形と考えられる。調査区内の長軸方位はN-11°-Eである。規模は、長軸方向3.10m、直交軸方向2.15mである。深さは0.40mである。

覆土は、暗褐色土で、自然堆積である。第1層には、テフラの可能性のある白色砂粒子が認められた。床面はほぼ平坦である。

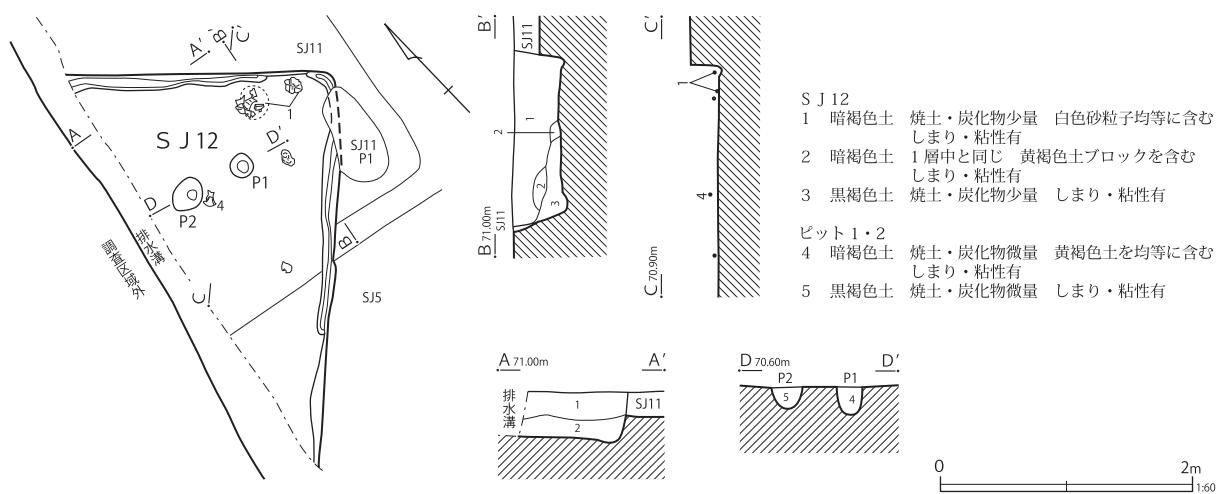
施設は、柱穴2本、壁周溝が検出された。柱穴はいずれも不整円形である。規模はP1が径0.20m、深さ0.20m、P2が径0.25m、深さ0.15mである。柱痕は認められなかった。壁周溝は両辺に設けられていた。幅0.10～0.15m、深さ0.05mほ



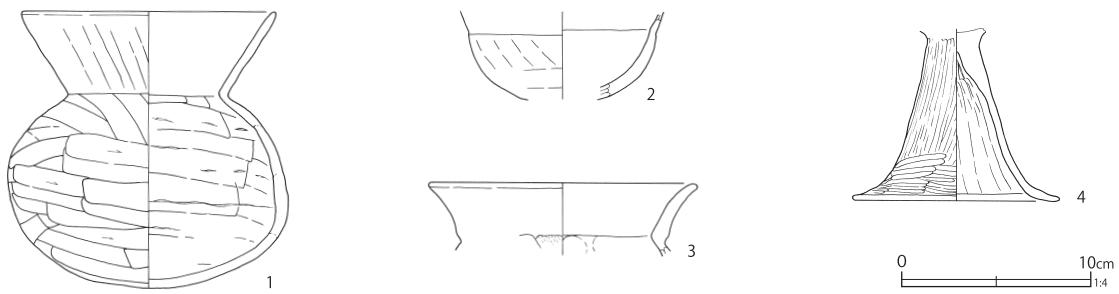
第43図 第9・10号住居跡出土遺物

第15表 第9・10号住居跡出土遺物観察表 (第43図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	壺	10.9	3.9	—	A E H I K	80	普通	橙		26-4
2	土師器	壺	11.6	4.0	—	A C H I K	85	不良	橙		26-5
3	土師器	壺	(11.9)	4.0	—	H I K	30	普通	にぶい橙		
4	土師器	壺	(13.4)	3.5	—	A C H I K	10	普通	橙		
5	土師器	壺	(11.8)	3.3	—	H I K	15	不良	橙		
6	土師器	壺	(13.0)	3.2	—	A H I K	15	普通	橙		
7	土師器	壺	(11.9)	2.5	—	A C E H I	15	普通	にぶい橙		
8	土師器	壺	(13.8)	3.8	—	A C H I K	15	普通	橙		
9	土師器	壺	(14.0)	3.7	—	A B E H I K	15	普通	にぶい褐		
10	土師器	壺	(13.0)	4.8	—	A H I	20	普通	橙		
11	土師器	甕	(14.4)	5.9	—	A B C H I K	20	普通	橙		
12	土師器	甕	(14.2)	4.2	—	A B C E H I K	10	普通	にぶい橙		
13	土師器	壺	(27.0)	2.7	—	A B C E H I K	5	普通	橙	五領	



第44図 第12号住居跡



第45図 第12号住居跡出土遺物

第16表 第12号住居跡出土遺物観察表（第45図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	小型壺	(13.4)	14.6	—	A C E H I K	70	普通	橙	No.1・3	26-7
2	土師器	壺	—	4.6	—	A C H I K	20	普通	橙	五領	
3	土師器	甕	(14.0)	3.8	—	A C H I	5	普通	にぶい橙	五領	
4	土師器	高壺	—	9.1	(11.0)	A C D H I K	50	普通	橙	No.4 五領	26-8

どである。

P 1・2からは甕の破片が出土している。遺物はやや多く、床面から古墳時代後期の壺、甕が出土し、覆土中から混入の古墳時代前期の壺、小型壺、甕、S字状口縁台付甕、高壺が出土した。

1は小型壺である。丸底風で、口縁部の調整は不明瞭である。器面は風化が進んでいる。内面の見込み周辺にヘラ磨きが施されている。2は塊形の壺である。調整は不明瞭。3・4は古墳時代前期のものである。4は高壺の脚部で、柱状だが裾部に連続するように大きく開いている。

第13号住居跡（第46・47図）

C区のやや南側、L・M-2グリッドに位置する。遺構の西側は調査区域外にかかる。また、遺構の南東コーナーは排水溝を設けたため調査できなかった。第5号住居跡と重複し、本住居跡の方が古い。第4号溝跡の北側で、遺構が密集する箇所の一番南側に当たる。

平面形は方形と推定される。主軸方位はN-75°-Eで、東カマドである。重複によって全体の規模は不明である。検出範囲で、主軸方向3.75m、直交軸方向は調査範囲で3.20mである。深さは0.15~0.25mで、床面はやや凹凸がある。

覆土は暗褐色土で、自然堆積である。第1層に

は、テフラの可能性のある白色粒子が多く認められた。

カマドは東壁に設けられていた。規模は全長0.40m、幅0.95mである。煙道は認められず、削平されていると推定される。燃焼部は天井が崩落しており、3層が天井構築土の可能性がある。燃焼部は若干壁を切り込んで造られている。燃焼部は幅0.30mほどで、焚口側がやや開いている。左側の袖の内側に、長さ15cm、幅7cmの片岩が倒れた状態で出土し、支脚と考えられる。現状の袖の部分より手前が良く焼けており、本来はこの部分までが燃焼部であったと考えられる。底面、側壁はよく焼けていた。焚口部分の中層から、20・22の甕が破片が重なる状態で出土している。全体に左側の袖に接した状態で出土しており、2個掛けの可能性がある。袖は灰黄褐色土の貼り付けにより造られていた。側面下位がよく焼けていた。

貯蔵穴は南東隅に造られていた。長方形を呈し、径0.80m、深さ0.35mで、覆土は自然堆積である。上層から土師器壺（2・3）、壺（15）が出土した。柱穴は3本検出された。平面形は円形、橢円形である。P 1は径0.25m、深さ0.20m、P 2は長径0.70m、短径0.50m、深さ0.30m、P 3は長径0.40m、短径0.30m、深さ0.40mである。柱

痕は認められなかった。壁周溝が東側、南側に設けられていた。幅0.15~0.20m、深さ0.05mである。

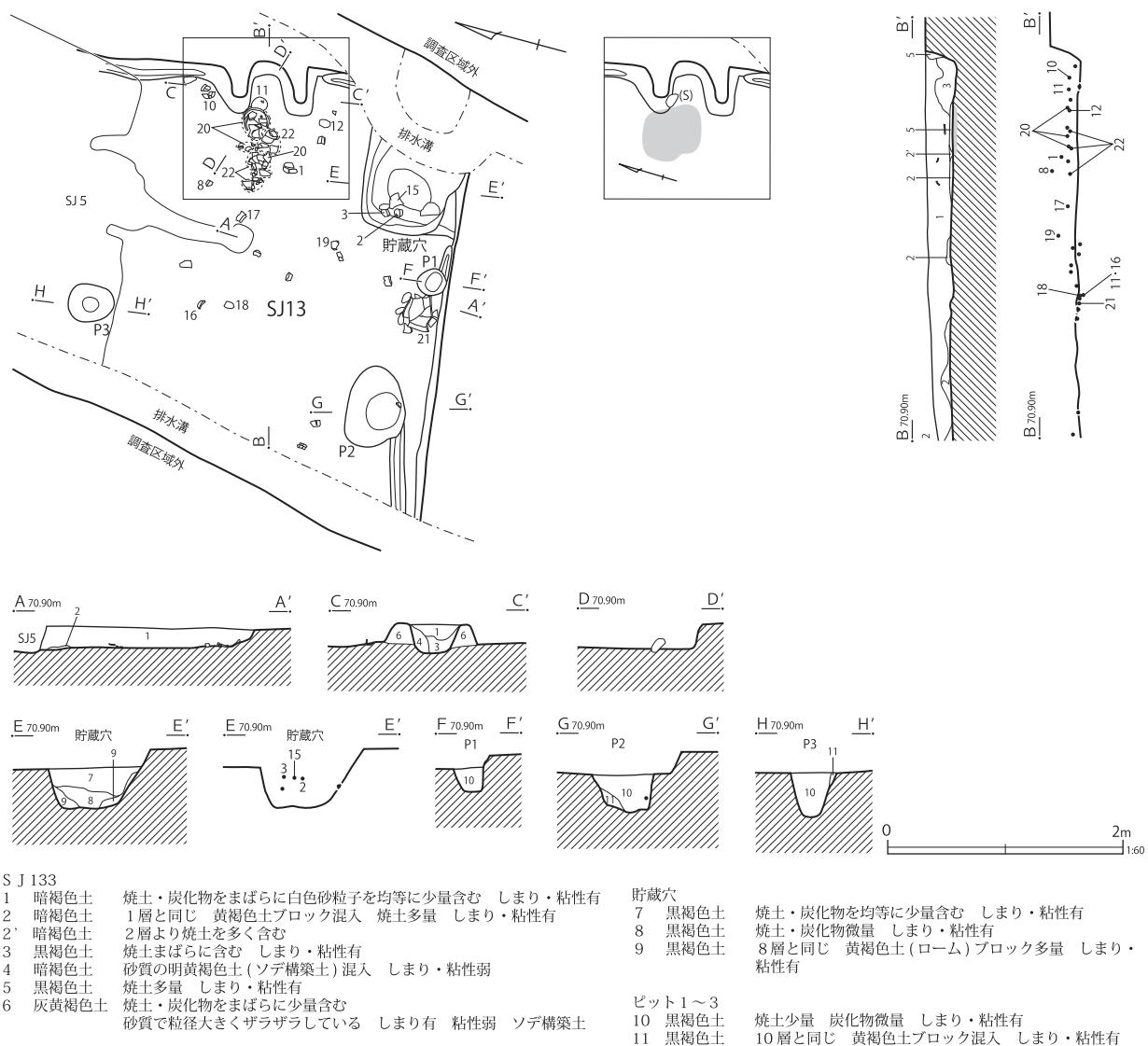
遺物はやや多い。21の大型甌は、大型の破片が、内側を上に向け、重なる状態で南壁際から出土している。また、本住居跡からは編み物石と考えられる大型の礫が出土している。

出土土器の器種は、床面から出土した。器種は土師器壺、高壺、鉢、壺、甌、須恵器壺、高壺である。前期の壺、大型器台が混入している。

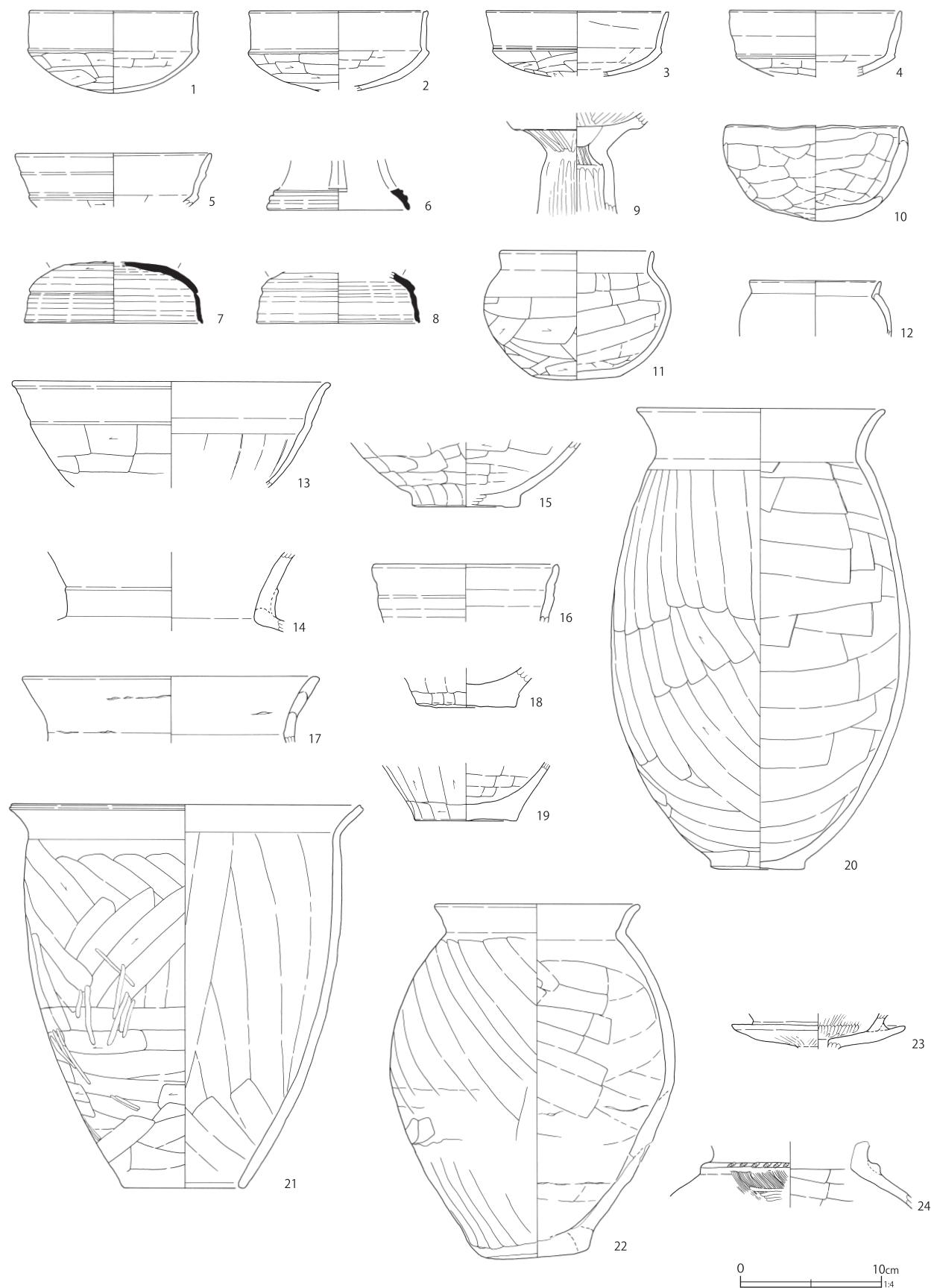
1~4は壺蓋模倣壺、5は有段口縁壺である。3は内面に横ナデの抜き痕が見られる。4は分厚

く、5は器面が荒れている。6~8は須恵器である。6は高壺で短脚1段透かしとして推定、図化した。胎土、焼成は7同様で、あまり焼成は良くない。藤岡産。7・8は壺蓋である。口クロ左回転、口唇部は若干摘みあげられ、天井部は回転ヘラケズリである。TK47併行。藤岡産。

9は土師器高壺の接合部である。壺部は下方に段があり、柱状部が太くなっている。ホゾ接合である。10~13は鉢で、形態が各々異なる。10はナデと横ナデのみの調整で手捏ね土器のような印象を受ける。11・12は短い口縁部が付く。11はヘラケズリ調整、12は風化のため不明である。12は内



第46図 第13号住居跡



第47図 第13号住居跡出土遺物

第17表 第13号住居跡出土遺物観察表（第47図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	壺	(12.0)	5.9	—	A C H I J K	30	普通	明赤褐	No.18	26-9
2	土師器	壺	(12.5)	5.6	—	A C E H I	25	普通	橙	貯蔵穴No.3	27-1
3	土師器	壺	(13.0)	4.6	—	A C H I J K	20	良好	明赤褐	貯蔵穴No.2	27-2
4	土師器	壺	(12.2)	4.7	—	A C E H I K	20	普通	橙		
5	土師器	壺	(14.0)	3.8	—	A C H I	15	良好	橙	有段口縁壺	
6	須恵器	高壺	—	1.5	(10.0)	A C H K	5	普通	灰	多孔質 藤岡産	60-1
7	須恵器	蓋	(12.6)	4.3	—	A C E I J K	25	普通	灰	藤岡産	60-1
8	須恵器	蓋	(11.6)	3.7	—	I J K	5	良好	灰	No.16 藤岡産	60-1
9	土師器	高壺	—	7.0	—	A B C H I K	50	普通	橙		
10	土師器	鉢	12.3	6.8	—	A B C E H I K	90	普通	にぶい橙	No.27 貯蔵穴	27-3
11	土師器	鉢	(10.8)	9.1	6.4	A C H I K	70	普通	明赤褐	No.31 貯蔵穴	27-4
12	土師器	鉢	(9.2)	3.9	—	A B E H I K	10	普通	明赤褐	No.20 二次被熱か 内面煤	
13	土師器	鉢	(22.1)	7.4	—	A B C E H I K	15	普通	橙		60-1
14	土師器	壺	—	5.6	—	A H I K	10	不良	橙		
15	土師器	壺	—	4.6	(7.6)	A C D E H I K	30	良好	褐灰	貯蔵穴No.4	27-5
16	土師器	壺	(13.0)	4.1	—	A B C E H I K	25	普通	橙	No.13	
17	土師器	甕	(11.0)	4.7	—	A C E H I K	20	普通	にぶい橙	No.15	
18	土師器	甕	—	2.7	(7.2)	A C H I K	70	普通	にぶい橙	No.12	
19	土師器	甕	—	4.1	(7.2)	A B E H I K	35	普通	にぶい赤褐	No.11	
20	土師器	甕	(17.2)	32.8	6.7	A C E H I	60	普通	橙	No.22・26・30	27-6
21	土師器	甕	(24.4)	27.3	(8.7)	C E H I	70	普通	橙	No.1 赤彩	27-7
22	土師器	甕	(14.2)	25	7.4	A B C E H I	50	普通	にぶい黄橙	No.23・25・29	28-1
23	土師器	器台	—	2.4	—	A C I K	15	普通	にぶい橙	五領	
24	土師器	壺	—	4.7	—	A C E H I K	20	普通	橙	五領	28-2

面に煤が付着している。13は大型で、全体が大きく開く。14～16は土師器の壺である。15の底面はヘラケズリである。17～20、22は甕である。20を除いて風化が著しい。いずれも、口縁部は内外面横ナデ、胴部は外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、底面はヘラケズリである。20の内面には帯状に炭化物が付着している。21は単孔の大型甕である。外面に赤彩とヘラ磨きが認められ、本来の用途とは異なる使用法が考えられる。23・24は、混入の古墳時代前期のものである。23は大型器台の鐔の部分である。24は頸部に突帯が添付される壺である。突帯には木口状工具による押捺が施されている。

第14号住居跡（第48図）

C区のほぼ中央、K-2・3グリッドに位置する。第4・15・21号住居跡と重複する。21号が最も古く、15号、14号、4号の順で新しくなる。遺構が密集する箇所の西端に当たる。

平面形は方形と推定される。主軸方位はN-38°-Wで、北カマドである。重複によって全体の規模は不明である。検出範囲で、主軸方向3.50m、直交軸方向は調査範囲で2.00mである。深さは0.15mほどで、床面はやや凹凸がある。覆土は暗褐色土で、自然堆積である。第1層には、テフラの可能性のある白色粒子が認められた。

カマドは北壁に設けられていた。規模は検出できた範囲で、長さ1.00m、幅0.65mである。重複のため、燃焼部の詳細は不明である。残存部分からは、幅0.40mほどで焚口側がやや開いた形態と推定される。袖は検出できなかった。煙道はやや軸が西に触れた方向で延びる。燃焼部から段を持たずに煙道に至ると考えられる。3・4層が煙道の天井構築土、5層が灰層と考えられる。煙道は幅0.25m、深さ0.30mで、底面、側壁がよく焼けていた。

柱穴は2本検出された。平面形は円形である。P1は楕円形で、長径0.40m、短径0.30m、深さ0.25m、P2は径0.45m、深さ0.10mである。自然堆積で、柱痕は認められなかった。

遺物は僅少で、床面近くから古墳時代後期の壺、甕が出土し、混入の古墳時代前期の甕が覆土中から出土している。1は壺蓋模倣壺である。所謂大型壺である。器肉が厚い。

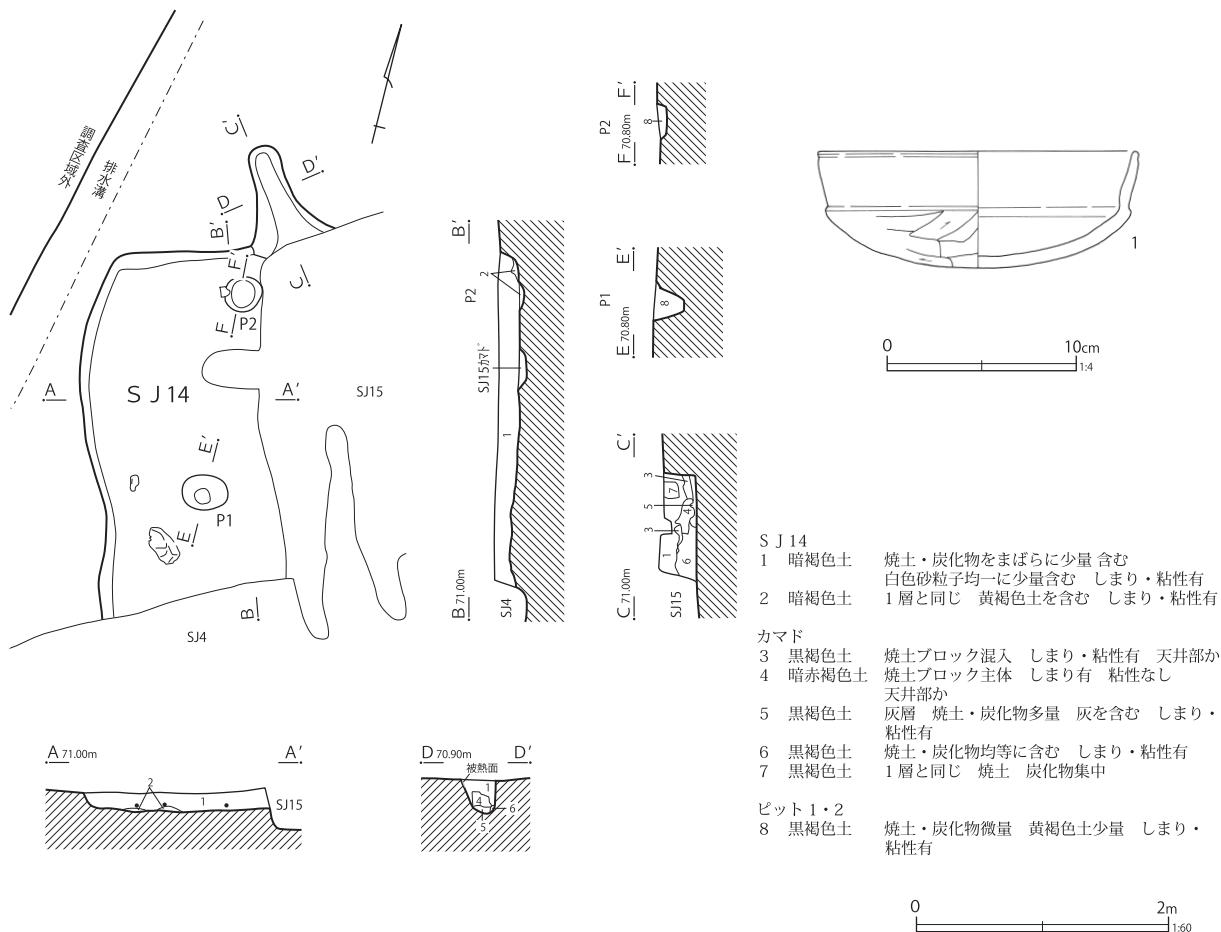
第15号住居跡（第49・50図）

C区のほぼ中央、K-3グリッドに位置する。遺構の東側は調査区域外にかかる。第4・14・21・31号住居跡と重複する。31号より新しく、他

の住居跡との新旧は第14号住居跡の項で示した。最も遺構が密集する箇所のほぼ真ん中にあたる。

平面形は横長の長方形と推定される。主軸方位はS-63°-Wで、西カマドである。規模は、調査範囲で、主軸方向5.50m、直交軸方向3.60mである。深さは0.30~0.35mで、床面は平坦である。覆土は黒褐色土で、自然堆積である。

カマドは西壁に設けられていた。規模は全長1.25m、幅0.45mで、両袖は検出できなかった。カマドの構築材と考えられる土層も検出されず、カマドを壊した際に片付けられたと考えられる。燃焼部はほぼ壁内に収まっており、段を持って煙



第48図 第14号住居跡・出土遺物

第18表 第14号住居跡出土遺物観察表（第48図）

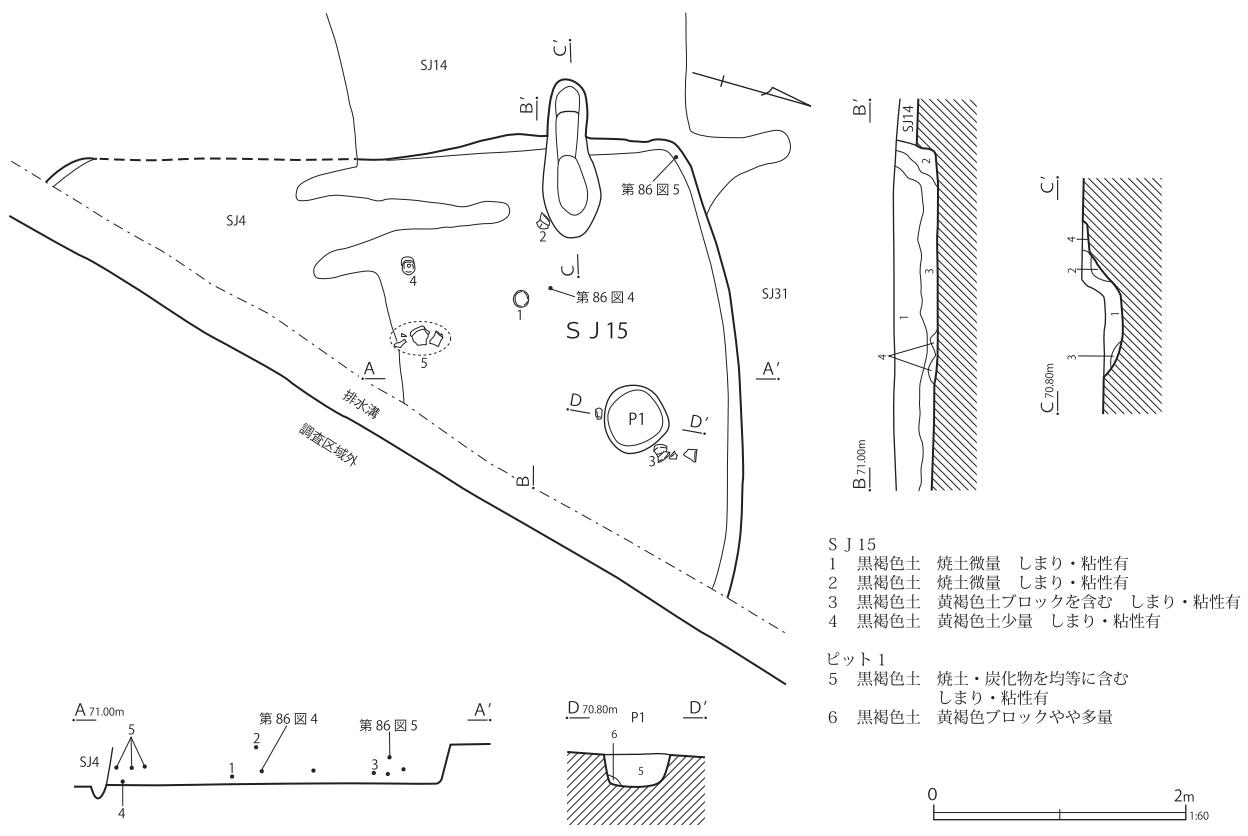
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	壺	(16.6)	6.0	-	A C H I	15	普通	橙		

道に至る。燃焼部は一段下がって土壌状になつてゐる。幅は0.50mほどである。煙道は長さ0.50m、幅0.20m、深さ0.05mである。いずれも底面、側壁は、あまり焼けていなかつた。

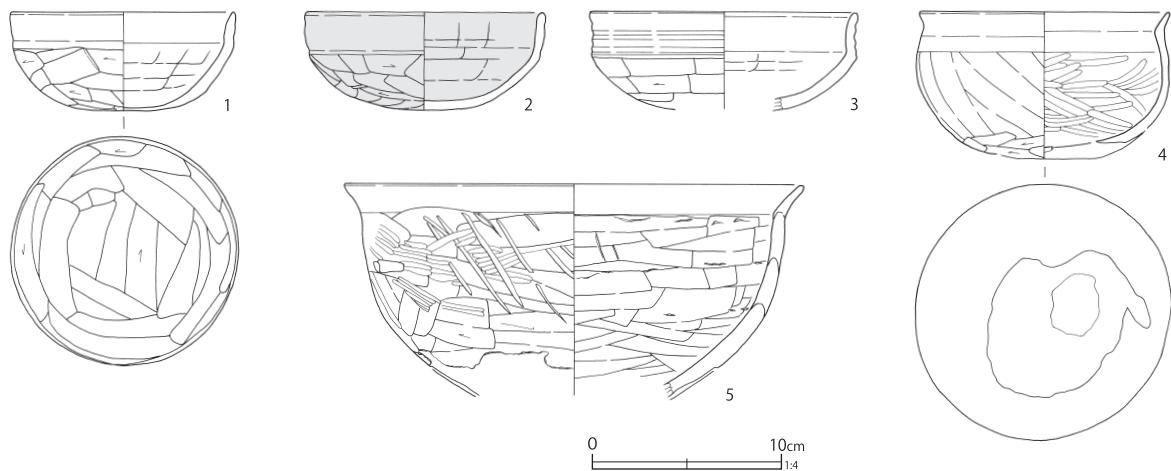
柱穴は北壁際から1本検出された。径0.40m、深さ0.05mほどである。覆土は焼土・炭化物を含む黒褐色土で、自然堆積である。柱痕は認められ

なかつた。

遺物は床面からやや浮いて、土師器の壺、鉢、臼玉、管玉が出土している。1～3は壺蓋模倣壺である。2は内外面赤彩されている。3は器肉が厚い。口縁部下段は、数回にわたつて強く横ナデが加えられている。4の鉢は内側からの穿孔が見られる。5の鉢は大型で、器肉が厚い。外面は部



第49図 第15号住居跡



第50図 第15号住居跡出土遺物

第19表 第15号住居跡出土遺物観察表（第50図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	壺	11.8	5.2	—	A B C E H I K	100	普通	橙	No.6	28-4
2	土師器	壺	(12.4)	5.2	—	A C D H I K	55	普通	橙	No.10 SJ14と接合 内外面赤彩	28-3
3	土師器	壺	14.0	5.2	—	A E H I K	60	普通	橙	No.3	28-5
4	土師器	鉢	13.0	7.5	—	A C E H I	80	良好	橙	No.8 穿孔	28-6
5	土師器	鉢	(24.2)	11.2	—	A C E H I	30	良好	にぶい赤褐	No.7	29-1

分的にヘラ磨きが施されている。

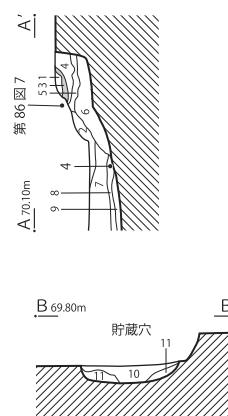
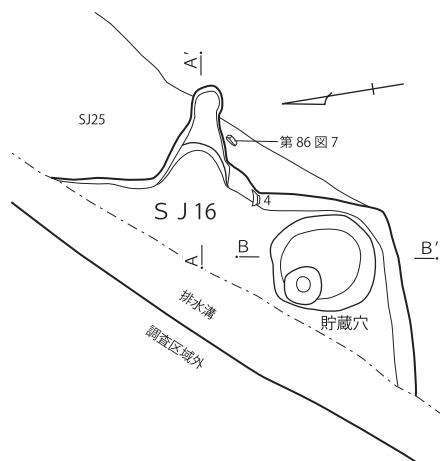
第16号住居跡（第51・52図）

A区の中央よりやや南側、D-5グリッドに位置する。遺構の西側は調査区域外にかかる。調査できたのは遺構の南東側の一部のみである。第25号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。遺構が密集する箇所の南端に当たる。

平面形は方形と推定される。主軸方位はS-77°-Eで、東カマドである。規模は、調査範囲で、主軸方向1.50m、直交軸方向2.80mである。深さは0.30～0.35mである。床面は調査範囲では西側へ向かって傾斜している。覆土は上層が灰黄褐色土、暗褐色土、下層が黒褐色土で、自然堆積

である。

カマドは東壁に設けられていた。規模は全長0.80m、幅0.50mで、両袖は検出できなかった。燃焼部は壁を切り込んで造られ、突出している。燃焼部から段を持って煙道に至る。煙道の天井の一部が残存していたが、燃焼部、煙道の大部分は天井が崩落している。燃焼部は幅0.40～0.50mほどである。床面はあまり焼けていないが、壁面はよく焼けていた。燃焼部には、天井崩落土と考えられる土層は認められず、カマドを廃絶した際に片付けられたと考えられる。8層が灰層と考えられる。煙道は長さ0.40m、幅0.20～0.30m、深さ0.30mである。天井部、両側壁、奥壁がよく焼け

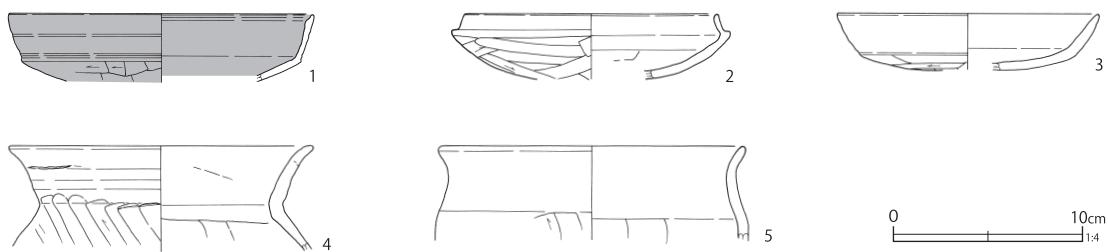


SJ 16	
1	灰黄褐色土 白色粒子多量 やや砂質 焼土粒子微量 白色粒子多量 やや砂質
2	暗褐色土 焼土層 暗褐色土粒子多量 煙道天井部
3	暗赤褐色土 焼土粒子・白色粒子少量
4	暗褐色土 焼土ブロック・焼土粒子多量 天井の崩落土か
5	黒褐色土 焼土粒子・灰粒子少量
6	黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・白色粒子微量
7	黒褐色土 焼土粒子少量 灰少量
8	黒褐色土 焼土ブロック・焼土粒子多量 灰少量
9	黒褐色土 焼土粒子微量

貯蔵穴	暗褐色土ブロック・暗褐色土粒子多量 粘性強 黒褐色土粒子多量 粘性強
10 黒褐色土 11 暗褐色土	

0 2m 1:60

第51図 第16号住居跡



第52図 第16号住居跡出土遺物

第20表 第16号住居跡出土遺物観察表（第52図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	壺	(16.0)	3.5	—	A B H I K	20	普通	にぶい橙	内外面黒色処理	
2	土師器	壺	(13.4)	3.4	—	A B H I K	40	良好	にぶい橙	内面煤	28-7
3	土師器	壺	(13.8)	3.0	—	A C D E H I	20	普通	橙		
4	土師器	甕	(16.0)	5.5	—	A C E H I K	25	普通	にぶい黄橙	No.2	28-8
5	土師器	甕	(15.8)	5.0	—	A E H I K	10	普通	にぶい黄橙		

ていた。奥壁部分は径0.25mほどの煙突状の部分が一部認められた。

貯蔵穴は南東隅で検出された。やや横長の円形である。径0.80m、深さ0.10mで、手前側に径0.40m、深さ0.05mほどの凹みが見られる。覆土は黒褐色土、暗褐色土で埋戻しの可能性がある。有段口縁壺、壺身模倣壺、甕の小破片が出土している。

遺物は覆土中から、土師器の有段口縁壺、壺身模倣壺、長胴甕の破片が出土した。

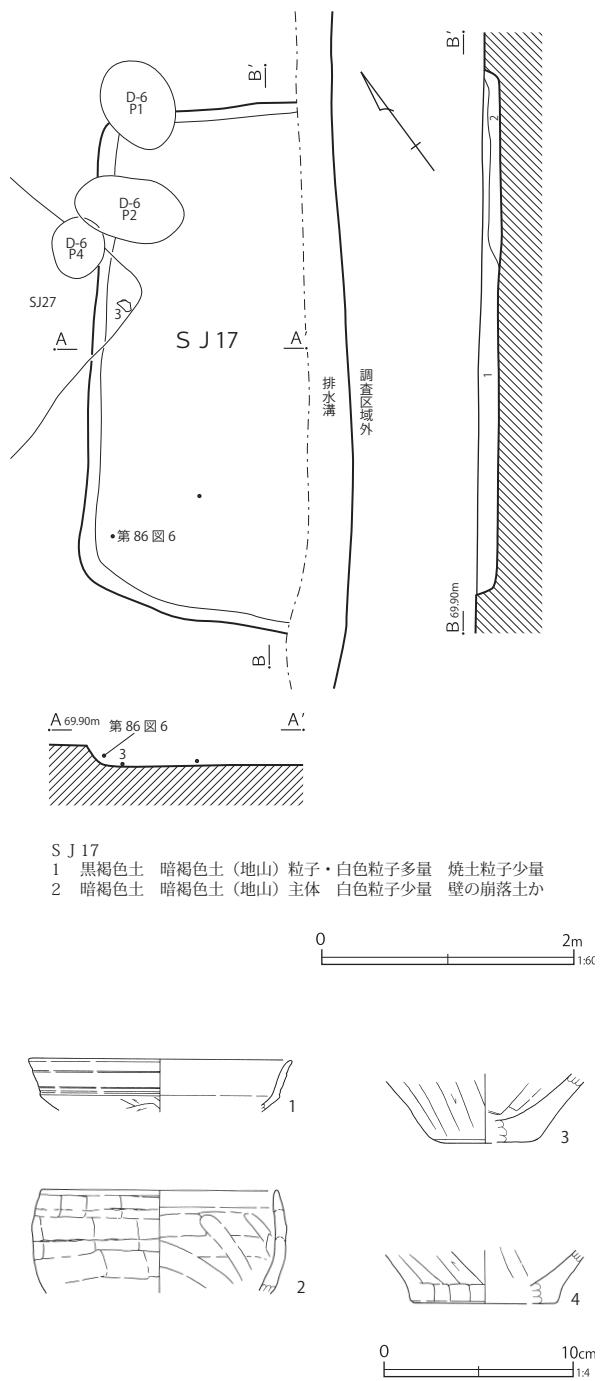
1は有段口縁壺である。径がやや大きく、黒色処理されている。2は壺身模倣壺である。器肉が厚く、黒褐色を呈する。内面煤付着。3は壺蓋模倣壺である。器面は風化が著しい。4・5はやや小型の甕である。

第17号住居跡（第53図）

A区のほぼ中央、D-6グリッドに位置する。遺構の南東側は調査区域外にかかる。調査できたのは遺構の北西側である。第27号住居跡と重複し、本住居跡が古い。北東側2.0mに第8号住居跡が、南西側3.0mに第1号祭祀跡の遺物集中地点がある。

平面形は方形と推定される。調査範囲での長軸方位はN-35°-Eで、カマドは確認できなかつた。規模は、調査範囲で長軸方向4.20m、直交軸方向1.70mである。深さは15mほどで、床面は平坦である。覆土は黒褐色土で、自然堆積である。白色粒子を多く含む。柱穴等の施設は検出できなかつた。

遺物は少量で、ほぼ床面近くから出土した。器種は壺身模倣壺、高壺、鉢、甕である。また、上



第21表 第17号住居跡出土遺物観察表（第53図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	壺	(14.0)	2.7	—	A C H I K	10	普通	橙		
2	土師器	鉢	(12.4)	5.4	—	A B C E H I K	25	普通	橙		29-2
3	土師器	甕	—	3.6	(5.6)	A H I K	30	普通	橙	No.1	
4	土師器	甕	—	2.8	(7.6)	A B H I	20	普通	にぶい赤褐		

層からは臼玉が2点出土している。

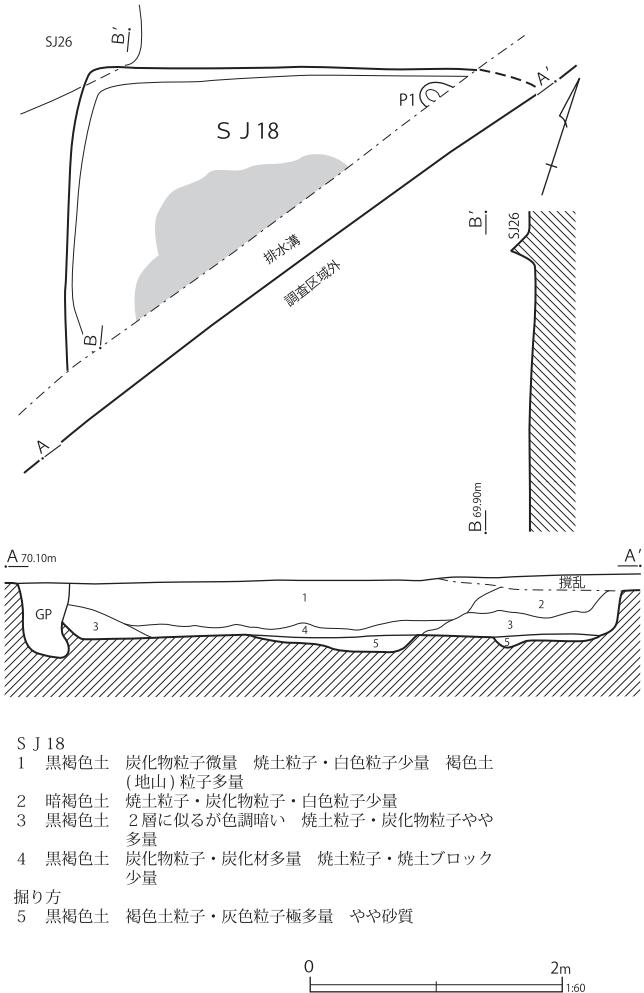
1は有段口縁壺で、黒色処理されている可能性が高い。2は鉢で、粘土の積み上げ単位が明瞭に認められる。内面は横位のナデ後、更にナデが加えられている。風化が著しい。

第18号住居跡（第54・55図）

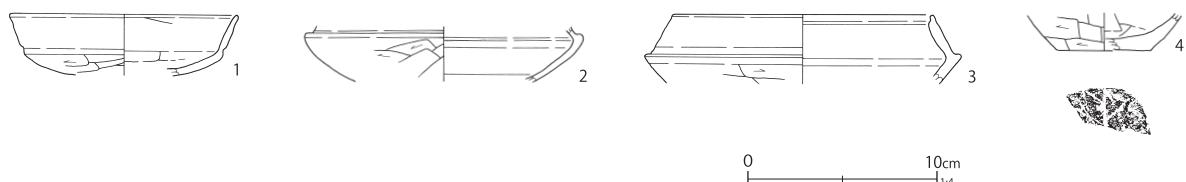
A区のほぼ中央、C-6グリッドに位置する。遺構の南東側は調査区域外にかかる。調査できたのは遺構の北西側である。第26号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。北東側2.0mに第19号住居跡が、南西側2.0mに第17号住居跡がある。

平面形は方形と推定される。調査範囲での長軸方位はN-73°-Eで、カマドは確認できなかった。規模は、調査範囲で長軸方向3.25m、直交軸方向2.40mである。深さは法面で確認すると0.45mほどで、床面は平坦である。覆土は黒褐色土、暗褐色土で、自然堆積である。白色粒子を多く含む。床面には炭化物が広がっていた。5層は掘り方と考えられる。

遺物は僅少で、覆土中から出土した。器種は、古墳時代後期の土師器壺蓋模倣壺、壺身模倣壺、甕である。1は壺蓋模倣壺で、内面に横ナデの引き上げ痕が明瞭にみられる。2・3は壺身模倣壺である。2は口縁端部を欠く。胎土に片岩を含む。3は器肉が厚く、径が大きい。端部が摘み上げられている。4は甕の底部で、木葉痕が認められる。



第54図 第18号住居跡



第55図 第18号住居跡出土遺物

第22表 第18号住居跡出土遺物観察表（第55図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	壺	(12.0)	4.2	—	A C H I	10	普通	橙		
2	土師器	壺	—	2.9	—	A B H I K	15	良好	にぶい褐		
3	土師器	壺	(13.6)	3.6	—	A C D H I J	15	良好	にぶい橙		
4	土師器	甕	—	2.0	(5.0)	A C E H I K	25	普通	にぶい赤褐	底部木葉痕	

第19号住居跡（第56図）

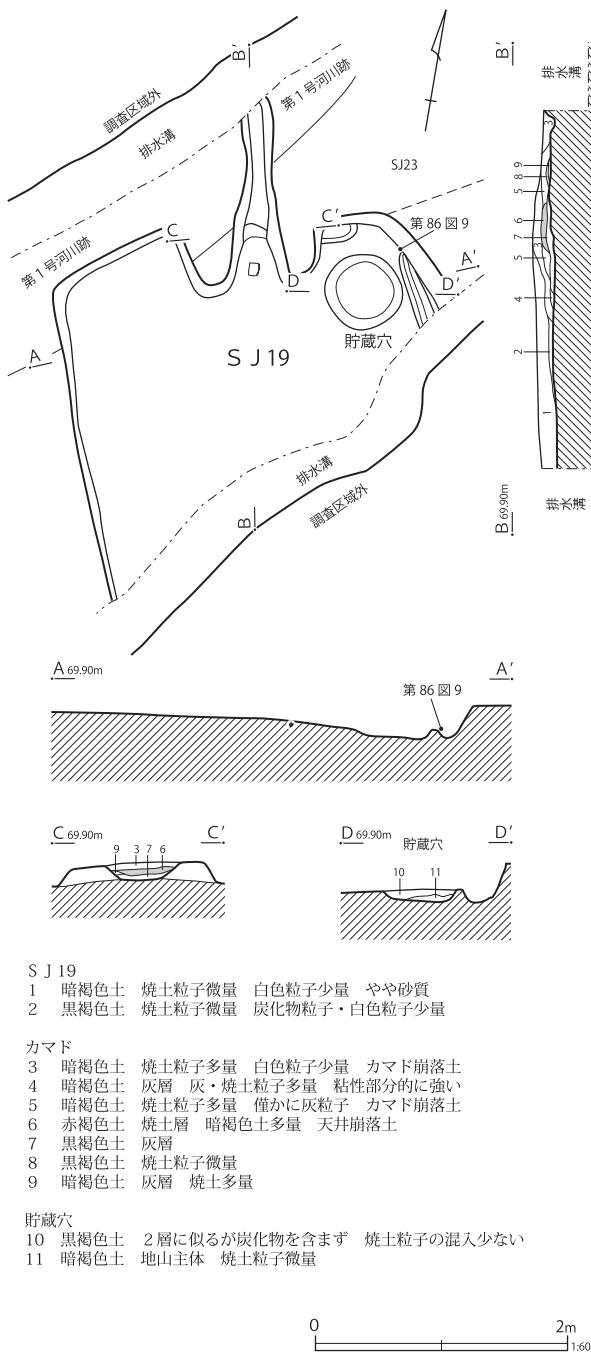
A区の中央よりやや北側、C-6・7グリッドに位置する。遺構の南側、北側の煙道の先端は調査区域外にかかる。また、旧女堀川（第1号河川跡）と重複するが、その肩の部分であったため、辛うじて破壊を免れている。第23号住居跡と重複し、本住居跡が古い。南西側2.0mに第18号住居跡が、4.0mに第26号住居跡がある。

平面形は歪んだ方形と推定される。主軸方位はN-10°-Eで、北カマドである。カマドの軸方向は、住居跡全体よりやや東に振れている。規模は、調査範囲で、主軸方向2.70m、直交軸方向2.90mである。深さは0.15mである。床面は調査範囲では東側へ向かって傾斜している。覆土は上層が暗褐色土、下層が黒褐色土で、自然堆積である。

カマドは北壁に設けられていた。規模は煙道の先端を欠くが、全長1.50m、幅1.20mである。全体の天井が崩落した状態で検出された。燃焼部は幅0.25~0.40mほどで、ほぼ壁内に収まっている。床面はあまり焼けていないが、壁面はよく焼けていた。3・5・6層が天井崩落土、7・9層が灰層と考えられる。段を持って煙道に至る。煙道は長く、長さ1.00m、幅0.10~0.20m、深さ0.05mである。天井部、両側壁、奥壁がよく焼けていた。

貯蔵穴は北東隅で検出された。円形で、径0.60m、深さ0.10mである。覆土は黒褐色土で、自然堆積である。壁周溝は東側に設けられていた。幅0.10m、深さ0.05mである。

遺物はカマドから土師器の壺蓋模倣壺、甕の破片が、貯蔵穴から甕の破片が出土したのみである。



第56図 第19号住居跡

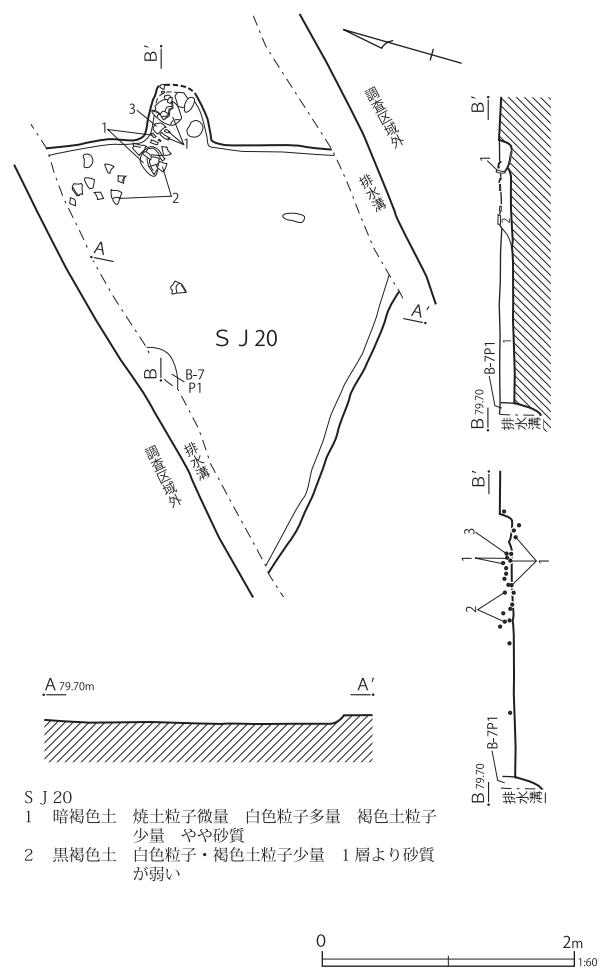
第20号住居跡（第57・58図）

A区の北側、B-7グリッドに位置する。遺構の北西側、南東コーナーは調査区域外にかかる。南西側1.0mに第23号住居跡がある。

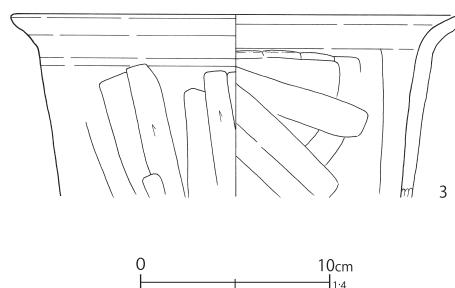
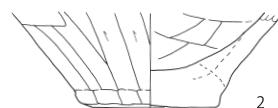
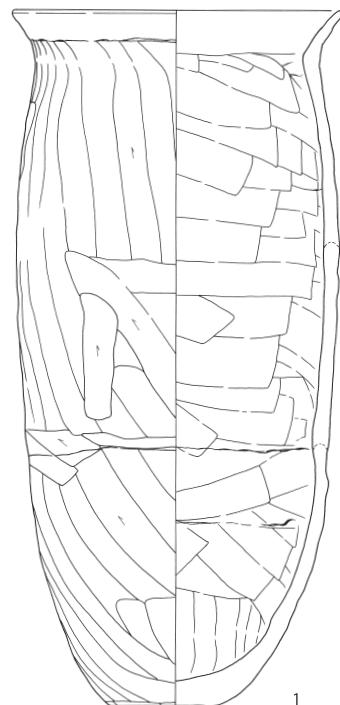
平面形は不整な方形と推定される。主軸方位はN-75°-Eで、東カマドである。規模は、調査範囲で、主軸方向3.40m、直交軸方向2.70mである。深さは0.05~0.10mである。床面はほぼ平坦である。

覆土は暗褐色土、黒褐色土で自然堆積である。砂質が強い。

カマドは東壁に設けられていた。規模は全長0.50m、幅0.60mで、両袖は検出できなかった。燃焼部は壁を切り込んで造られ、突出している。煙道は削平されている。燃焼部は幅0.30~0.50m



第57図 第20号住居跡



0 10cm
1:4

第58図 第20号住居跡出土遺物

ほどである。床面はあまり焼けていないが、壁面はよく焼けていた。燃焼部には、天井崩落土や灰層と考えられる土層は認められず、カマドを廃絶した際に片付けられたと考えられる。

貯蔵穴、柱穴等の施設は検出されなかった。

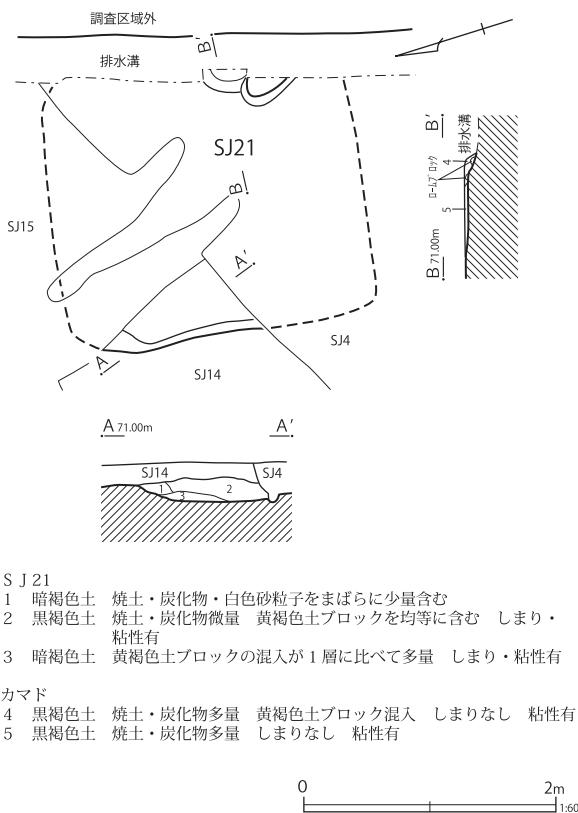
第23表 第20号住居跡出土遺物観察表（第58図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	甕	(17.2)	36.7	5.8	A C D E H I K	40	普通	にぶい黄橙	No.1・3・4・5・6・11 B7g-57・66 トレンチ 底部木葉痕	29-3
2	土師器	甕	—	5.0	7.4	A B C E H I K	65	普通	にぶい橙	No.9・22 B7g-57 B7g-67	29-4
3	土師器	甌	(23.6)	9.5	—	A B E H I K	20	良好	にぶい褐	No.4	

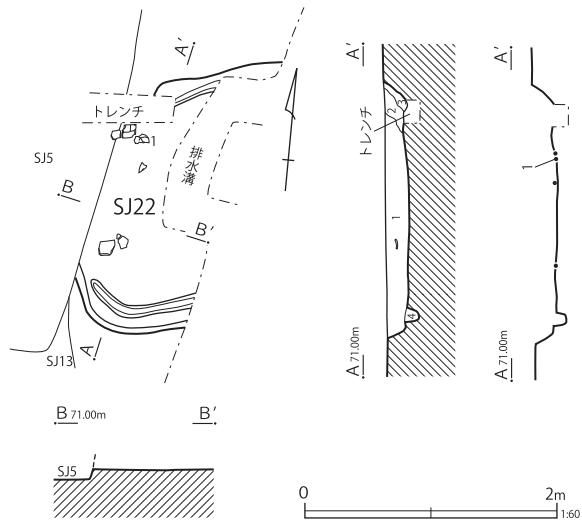
遺物はカマドの床面を中心に、甕、甌が出土した。本住居跡のカマドで使用したものと考えられるが、土層の状況とは対応せず、カマドで使用した状態で、残されたとは考え難い。片付けた土器片を廃棄した可能性が考えられる。1は長胴甕である。やや下位に大きな粘土接合単位が認められる。底面は木葉痕にヘラケズリを加えている。2の甕、3の大型甌は胎土に片岩を含んでいる。2の底面はヘラケズリである。

第21号住居跡（第59図）

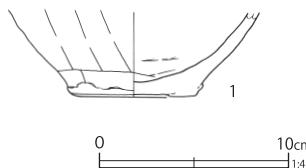
C区のほぼ中央、K-3グリッドに位置する。遺構の東側は調査区域外にかかる。第4・14・15号住居跡と重複し、そのいずれよりも古い。西側



第59図 第21号住居跡



S J 22
1 黒褐色土 焼土・炭化物少量 黄褐色土均等に少量含む しまり・粘性有
2 暗褐色土 焼土・炭化物微量 黄褐色土やや多量 しまり・粘性有
3 黒褐色土 焼土・炭化物微量 しまり・粘性有
4 暗褐色土 黄褐色土多量 しまり・粘性有



第60図 第22号住居跡・出土遺物

壁、北西コーナーの一角とカマドの一部を検出したのみである。

平面形は方形と推定される。主軸方位はS-77°-Eで、東カマドである。規模は、調査範囲で主軸方向2.05m、検出できた西壁の長さが1.30mである。深さは0.15mである。壁の立ち上がりは緩やかだが、床面はほぼ平坦である。覆土は暗褐色土、黒褐色土で、粘土ブロックが多く、埋戻しの可能性がある。

カマドは東壁に設けられていた。検出できた規模は長さ0.40m、幅0.75mに留まる。右側の袖

第24表 第22号住居跡出土遺物観察表（第60図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	壺	—	4.5	6.7	A C E H I K	30	普通	にぶい橙	No.2 外面二次加熱	

のみを検出した。燃焼部は幅0.40m、深さ0.05mほどの土壤状に凹んでいる。床面はよく焼けていた。4・5層は天井崩落土の可能性がある。袖は灰黄褐色粘土の貼り付けにより造られていた。側壁がよく焼けていた。

遺物は出土していない。

第22号住居跡（第60図）

C区のやや南側、L-2・3グリッドに位置する。遺構の東側は調査区域外にかかる。第5号住居跡と重複し、本住居跡が古い。調査できたのは南北の壁の一部のみである。

平面形は方形と推定される。調査範囲での長軸方位はN-14°-Wで、カマドは確認できなかつた。規模は、調査範囲で長軸方向1.90m、直交軸方向1.80mである。深さは0.20mほどで、床面は平坦である。覆土は黒褐色土、暗褐色土で、自然堆積である。床面には壁周溝が南北に設けられていた。幅0.05~0.10m、深さ0.05m前後である。

遺物は床面から、古墳時代後期の土師器壺蓋模倣坏、有段口縁坏、高坏、壺、甕の破片が出土した。1は壺の底部で、輪台状である。外面は2次加熱を受け、赤変している。

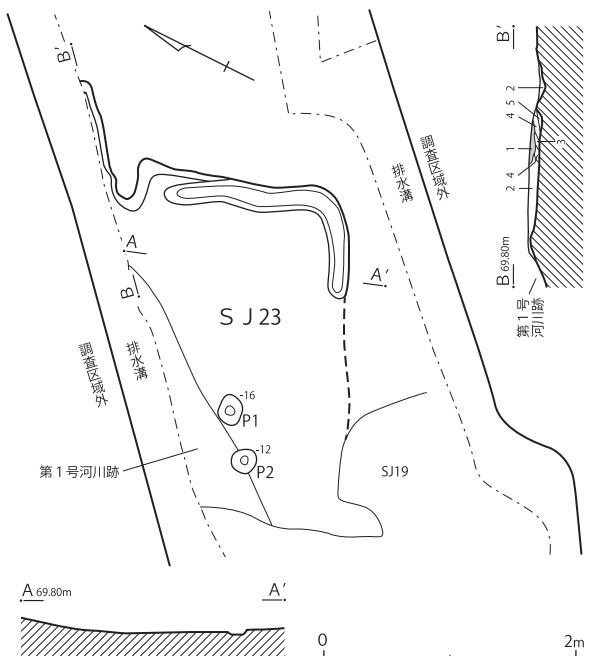
第23号住居跡（第61図）

A区の北側、B・C-6・7グリッドに位置する。遺構の北西側は調査区域外にかかる。また、旧女堀川（第1号河川跡）と重複し、遺構の南西側は全体に削平されている。そのため、南東壁の南側は検出できなかつた。第19号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。北東側1.0mに同時期の第20号住居跡がある。

平面形は歪んだ方形と推定される。主軸方位はN-48°-Eで、東カマドである。カマドの軸方向は、住居跡全体より西に振れている。規模は、

調査範囲で、主軸方向2.70m、直交軸方向1.90mである。深さは0.10mである。床面は調査範囲では東側へ向かって傾斜している。覆土は暗褐色土で、ほとんど検出できず、堆積状況は不明である。

カマドは南東壁に設けられていた。規模は全長1.10m、幅は調査範囲で0.40mである。燃焼部はほぼ壁内に収まり、緩やかに煙道に至る。全体に天井が崩落した状態である。燃焼部は袖の内側が確認できたのみである。1層が天井崩落土、4層が灰層の一部と考えられる。燃焼部の本体からはカマドの構築土と考えられる土層は認められなかつた。片付けられた可能性がある。床面はあまり焼けていないが、壁面はよく焼けていた。煙道は、長さ0.80m、深さは0.05mほどである。



- S J 23 カマド
 1 赤褐色土 燃土層 暗褐色土粒子多量 天井崩落土か
 2 暗褐色土 燃土粒子・炭化物粒子少量
 3 暗褐色土 燃土粒子微量
 4 黒色土 灰層 炭化物粒子多量 燃土粒子少量
 5 黑褐色土 灰多量 燃土粒子微量

第61図 第23号住居跡

床面からは、柱穴2本と壁周溝を検出した。P1は楕円形で、長径0.25m、短径0.20m、深さ0.16m、P2は円形で径0.20m、深さ0.12mである。覆土は確認できなかった。

壁周溝は全体に設けられていた。幅0.15～0.20m、深さ0.05mである。

遺物は、覆土中から壺蓋模倣壺、甕の小破片が出土したのみである。

第24号住居跡（第62～64図）

A区のほぼ中央、C-5・6グリッドに位置する。遺構の北西側は調査区域外にかかる。第26・28号住居跡と重複するが、本住居跡の方が確認レベルが0.20m以上高く、両者の上に造られている。東側2.5mに第18号住居跡が、南側1.0mに第17号住居跡がある。

重複が著しいが、平面形は方形と推定される。カマドが造り替えられており、並んで2基検出された。主軸方位はカマド1がN-83°-E、カマド2がN-74°-Eで、いずれも東カマドである。規模は、調査範囲で、主軸方向3.10m、直交軸方向2.20mである。深さは0.20～0.30mである。床面はほぼ平坦である。

覆土は暗褐色土、黒褐色土で、自然堆積である。上層に白色粒子を多く含む。

カマドは東壁に設けられていた。カマド2が古く、カマド1が新しい。カマド1は全長2.10m、幅は調査範囲で0.80mである。燃焼部は壁内に収まっている。燃焼部から段を持って煙道に至る。燃焼部は壊されており、カマド構築土は認められない。煙道は潰れた状態である。燃焼部は幅0.40mほどが確認できた。床面、壁面はよく焼けていた。煙道は長さ1.40m、幅0.20～0.30m、深さ0.20～0.25mである。床面、両側壁、奥壁がよく焼けていた。7層が天井崩落土、9層が灰層と考えられる。覆土中から、有段口縁壺、壺身模倣壺、甕の破片が出土している。

カマド2は全長1.50m、右袖の基部が大きく、

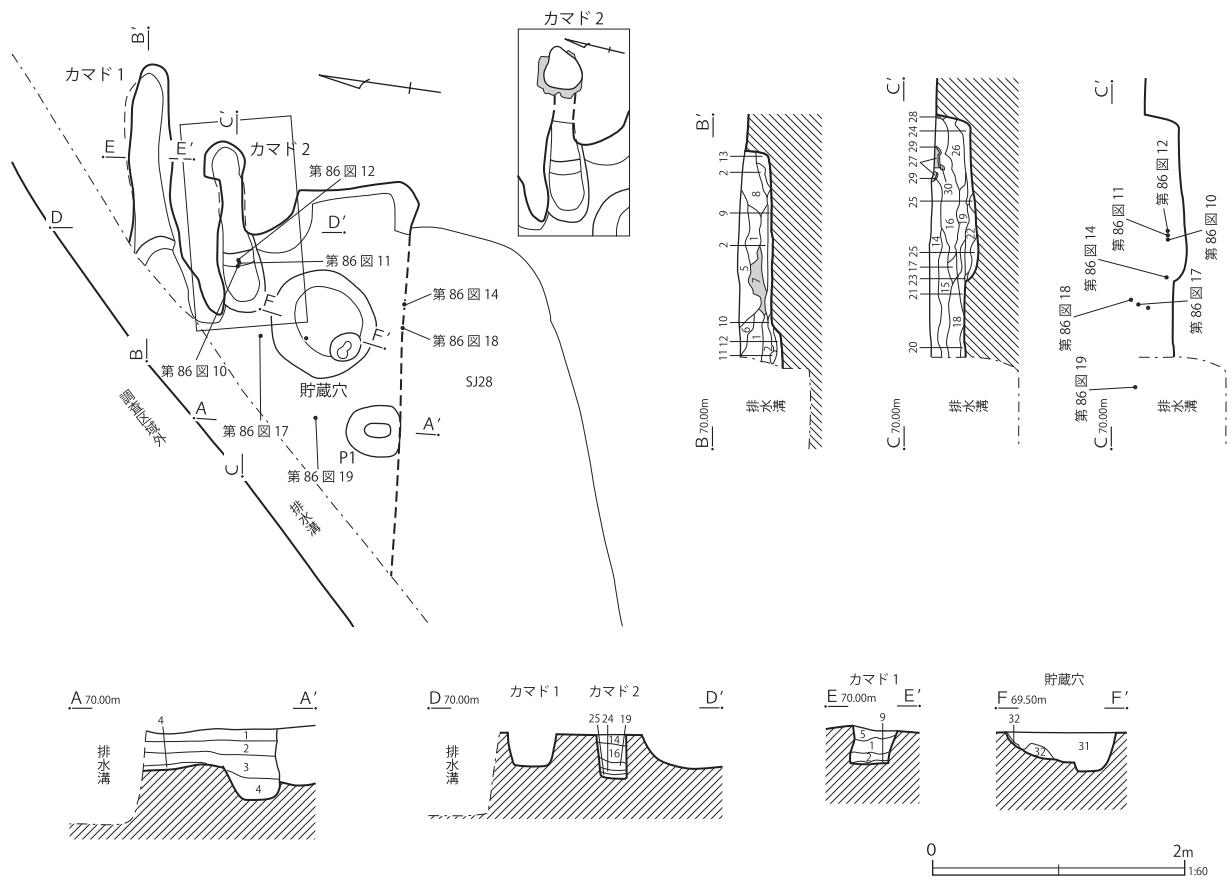
幅1.20mである。煙道の一部に天井が残存し、奥壁部分はピット状である。燃焼部は壁内に収まっている。燃焼部は壊されており、カマド構築土は認められない。また右側の袖も確認できず、やはり燃焼部を片付けた際に外されたのであろう。燃焼部は幅0.30mほどで、一段掘り窪められている。床面、壁面はよく焼けていた。袖は灰黄褐色粘土の貼り付けにより造られていた。燃焼部から緩やかに煙道に至る。煙道は長さ0.90m、幅0.15～0.20m、深さ0.30mである。床面、両側壁、奥壁がよく焼けていた。24・25層の層理面に灰が分布している。天井崩落土として認められる土層は認められず、手前側を壊して埋戻したと考えられる。覆土中から、高壺、甕の破片、白玉が出土している。

貯蔵穴と柱穴を検出した。貯蔵穴は南東隅、カマド2の右側の袖に当たる部分で検出された。カマドを造り替えた後に設けられたと考えられる。径0.60mの円形で、深さ0.20m、手前側に径0.20m、深さ0.05mの掘り込みがある。覆土は黒褐色土、暗褐色土で自然堆積である。覆土中から有段口縁壺、壺身模倣壺、長胴甕の破片、白玉が出土している。柱穴は南壁沿いで検出された。径0.40m、深さ0.20mで、暗褐色土の自然堆積である。柱痕は認められなかった。

遺物は覆土中から出土した。器種は壺蓋模倣壺、有段口縁壺、壺身模倣壺、高壺、壺、甕、甕、白玉である。

壺は径に大小がある。1～3は有段口縁壺で、扁平である。3は内外面黒色処理されている。4は小針型の壺、5は壺身模倣壺、6は壺蓋模倣壺である。いずれも径がやや小さい。6は器肉がやや厚く、高壺の可能性があるだろう。9は小型の甕である。10は単孔の甕である。

また、第28号住居跡と重複するため、一括して取り上げた遺物がある。本項で報告する。1・2は壺身模倣壺、3は壺蓋模倣壺である。1は径が小さく、内外面黒色処理されている。胎土に針状



S J 24
 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量 褐色土粒子・白色粒子極多量
 2 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量 白色粒子多量 褐色土粒子少量
 3 黑褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量 白色粒子多量
 4 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子微量 褐色土粒子ごく多量

カマド 1
 5 暗褐色土 焼土粒子・焼土ブロック少量 白色粒子多量
 6 暗褐色土 烧土粒子・白色粒子少量
 7 暗褐色土 烧土粒子・焼土ブロックの混土層 天井崩落土
 8 黑褐色土 烧土粒子少量 白色粒子多量
 9 黑褐色土 灰層 烧土粒子・暗褐色土粒子少量
 10 暗褐色土 灰・焼土粒子・暗褐色土粒子多量
 11 灰黄褐色土 粘土ブロック
 12 暗褐色土 烧土粒子・白色粒子少量
 13 黑褐色土 炭化物粒子微量

カマド 2
 14 暗褐色土 褐色土粒子・白色粒子ごく多量 烧土粒子・炭化物粒子少量
 15 黒褐色土 烧土粒子・炭化物粒子少量 白色粒子多量 褐色粒子少量
 16 暗褐色土 烧土粒子少量 炭化物粒子微量 白色粒子多量
 17 黑褐色土 烧土粒子少量 褐色粒子多量
 18 黑褐色土 烧土粒子・炭化物粒子少量 白色粒子多量
 19 黑褐色土 烧土粒子・炭化物粒子微量 褐色粒子ごく多量
 20 暗褐色土 烧土粒子・炭化物粒子微量 褐色粒子多量
 21 黑褐色土 烧土粒子微量 灰粒子・褐色粒子多量
 22 黑褐色土 炭化物粒子微量 烧土粒子少量
 23 暗褐色土 ブロック状を呈する 烧土粒子微量
 24 暗褐色土 烧土粒子微量 25 層との層理面に灰堆積
 25 暗褐色土 烧土粒子少量
 26 暗褐色土 烧土ブロック・烧土粒子少量
 27 赤褐色土 烧土層 硬化 天井の上の部分
 28 暗赤褐色土 烧土層 硬化 烟出部
 29 赤褐色土 硬化 天井部の烧土層
 30 赤褐色土 硬化 天井部の烧土層が剥落

貯藏穴
 31 黒褐色土 烧土・炭化物均等に少量含む 灰黄褐色シルト(地山) 少量
 32 灰黄褐色土 烧土・炭化物少量 灰黄褐色シルト(地山) 多量 しまり有 粘性弱

第62図 第24号住居跡

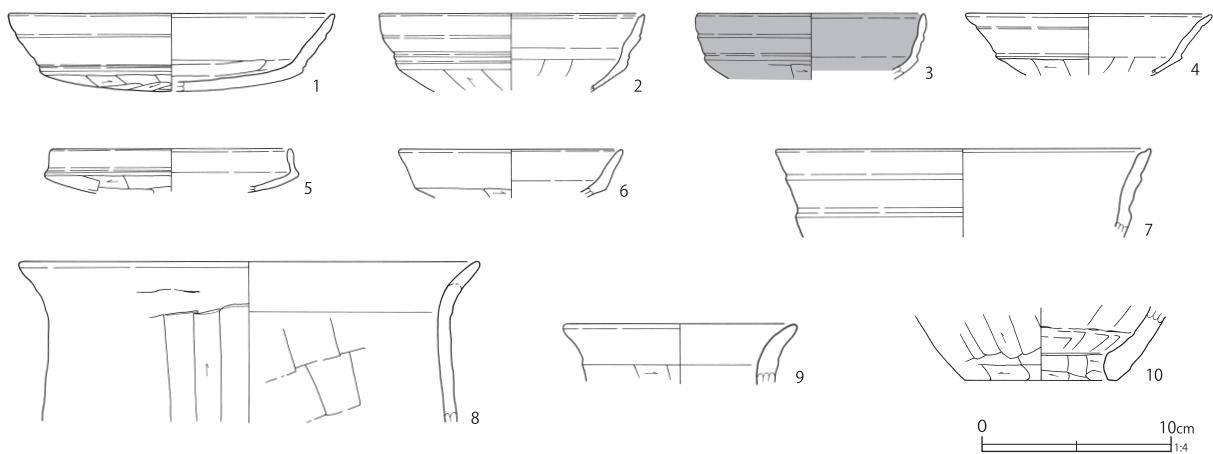
物質を含む。4は鉢で、口径が18.0cmに及ぶ。所謂大型壺である。5は皿である。焼成が非常に良く、堅緻である。

第25号住居跡（第65図）

A区の中央よりやや南側、D-5グリッドに位置する。遺構の西側は調査区域外にかかる。調査できたのは遺構の南東側の一部のみである。第

16・28号住居跡と重複し、本住居跡が最も古い。第16号住居跡同様遺構が密集する箇所の南端に当たると推定される。

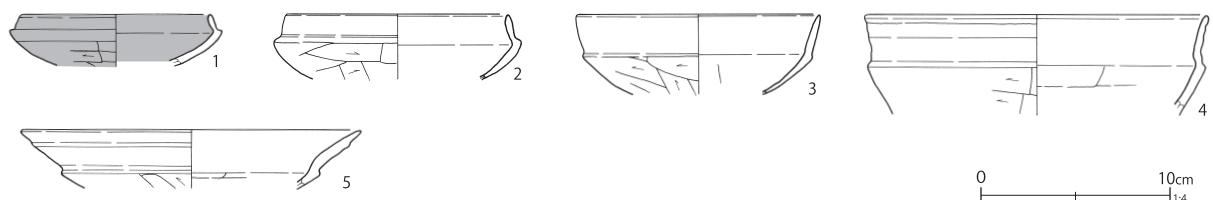
検出できた南東壁の方位はN-47°-Eである。検出できた規模は北東-南西方向4.20m、直交軸方向1.05mである。深さは0.10mで、床面はほぼ平坦である。覆土は黒褐色土の単層で、自然堆積



第63図 第24号住居跡出土遺物

第25表 第24号住居跡出土遺物観察表 (第63図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	壺	(17.2)	4.1	—	A E H I K	20	普通	明赤褐		
2	土師器	壺	(14.0)	4.1	—	A C H I K	15	良好	にぶい橙		
3	土師器	壺	(12.0)	3.5	—	A H I K	5	普通	黒褐	カマド1 内外面黑色処理	
4	土師器	壺	(13.0)	3.2	—	A B C E H I K	20	良好	橙		
5	土師器	壺	(12.6)	2.3	—	A C E H I K	10	普通	橙	内面黒斑状	
6	土師器	壺	(11.8)	2.6	—	A H I K	5	普通	にぶい黄橙	高壺の可能性あり	
7	土師器	壺	(19.8)	4.7	—	A C H I J K	5	良好	橙		
8	土師器	甕	(24.0)	8.5	—	A B C D H I K	15	普通	橙		
9	土師器	甕	(2.0)	3.2	—	A C E H I J	20	普通	明赤褐		
10	土師器	甕	—	3.8	(8.0)	A C E H I K	25	普通	灰褐		



第64図 第24・28号住居跡出土遺物

第26表 第24・28号住居跡出土遺物観察表 (第64図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	壺	(9.8)	2.7	—	A C H I J	5	普通	灰褐	黑色処理	
2	土師器	壺	(11.6)	3.4	—	A C H I K	15	普通	にぶい橙		
3	土師器	壺	(12.8)	4.2	—	A H I	10	普通	橙		
4	土師器	鉢	(18.0)	5.3	—	A C D H I K	5	良好	橙		
5	土師器	皿	(17.9)	3.1	—	A C H I K	5	良好	橙	非常に堅緻 硬質	

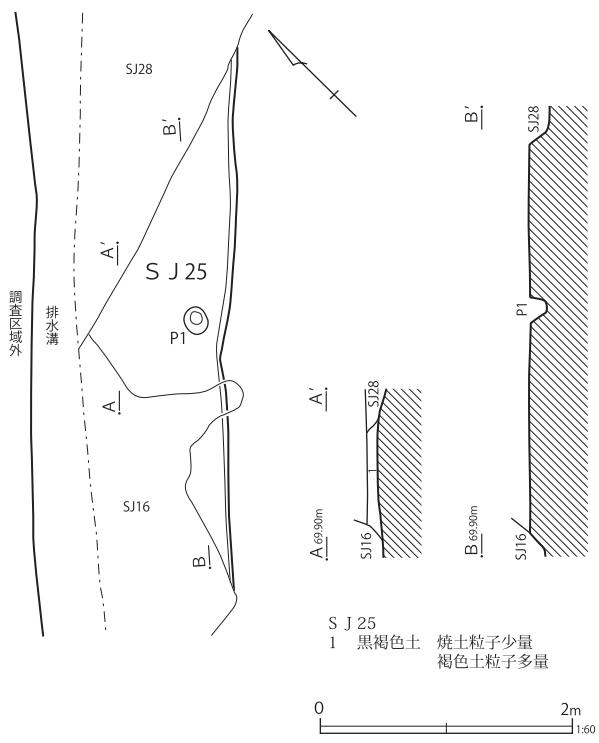
である。

床面からは柱穴1本を検出した。柱穴は壁沿いの中央付近で検出された。径0.20m、深さ0.15mで、覆土は確認できなかった。

遺物は出土していない。

第26号住居跡 (第66・67図)

A区のほぼ中央、C-6グリッドに位置する。遺構の北西側は調査区域外にかかる。第18・24号



第65図 第25号住居跡

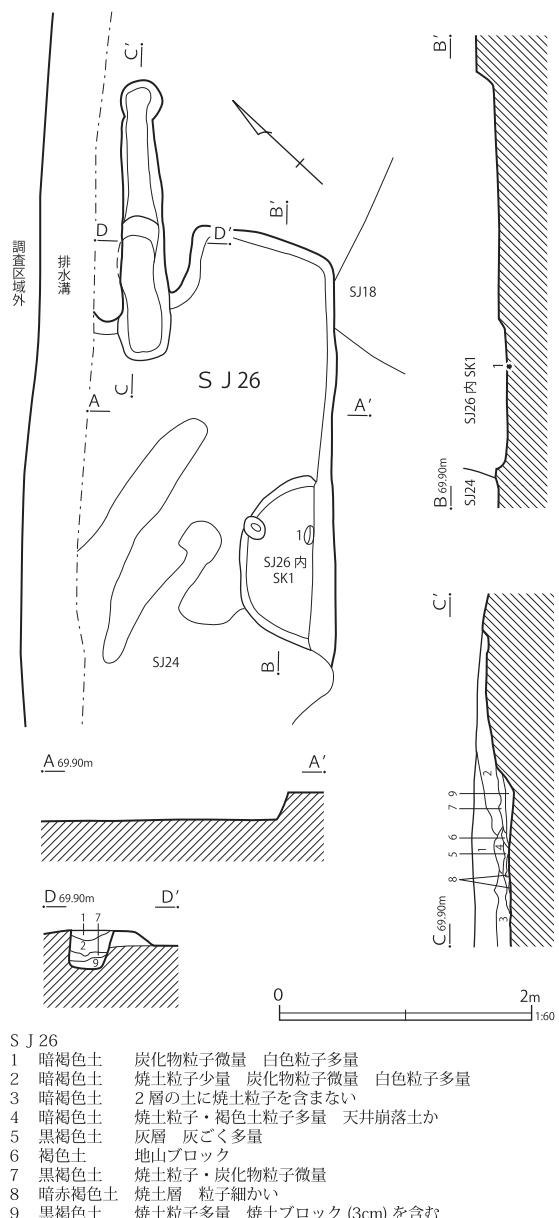
住居跡と重複する。前者より新しく、後者より古い。第24号住居跡は本住居跡の上面で確認した。北東側4.0mに同時期の第19号住居跡がある。

平面形はカマドの位置から、長方形の可能性がある。主軸方位はN-47°-Eで、東カマドである。規模は、調査範囲で、主軸方向3.40m、直交軸方向2.00mである。深さは0.15~0.25mで、床面は西側へやや傾斜している。覆土は暗褐色土で、自然堆積である。上層に白色粒子を多く含む。

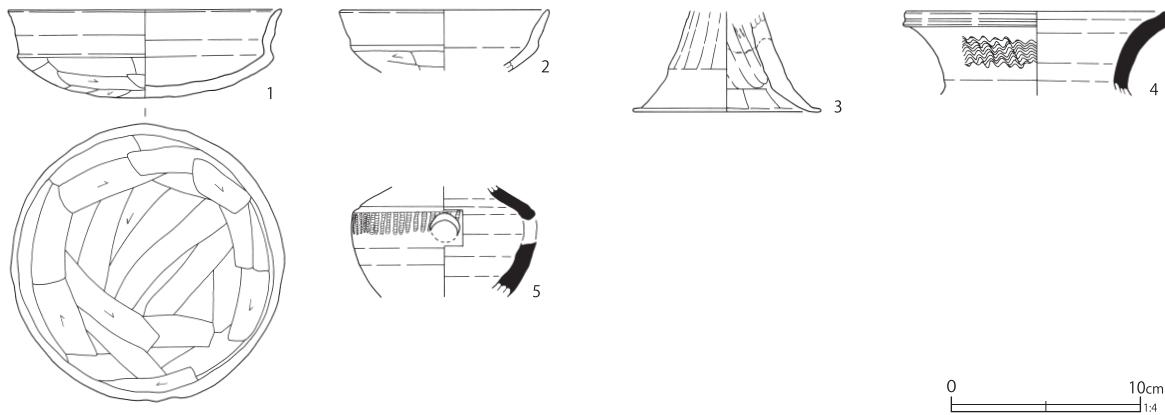
カマドは北東壁に設けられていた。全長2.20m、幅は調査範囲で0.90mである。燃焼部は壁内にはぼ収まっている。燃焼部から段を持って煙道に至る。カマドは潰れた状態である。燃焼部は幅0.25mで、細長い土壙状である。4層が天井崩落土、5層が灰層と考えられる。床面、壁面はよく焼けていた。袖は灰黄色粘土の貼り付けである。煙道は長さ1.05m、幅0.20m、深さ0.05～0.15mである。奥壁側へ向かって徐々に浅くなり、煙出部分はピット状を呈している。床面、両側壁、奥壁がよく焼けていた。

床面には、南東壁の南側に長径0.70m、短径0.30m、深さ0.05mの半円形の土壙が設けられていた。土壙の床面から完形の壺(1)が出土している。

遺物は僅少で、覆土中から、土師器有段口縁
坏、坏身模倣坏、高坏、甕、須恵器磈、壺の破片
が出土している。1・2は坏蓋模倣坏である。1
は完形である。3は脚部が細長く開く高坏である。4
は中型の須恵器壺である。8条1単位の波
状文が施されている。口クロ右回転。群馬産。5
は須恵器磈である。側面は沈線を引いた後に、9



第66図 第26号住居跡



第67図 第26号住居跡出土遺物

第27表 第26号住居跡出土遺物観察表（第67図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	壺	14.4	4.6	—	A C E H I	100	普通	橙	No.1	29-5
2	土師器	壺	(11.0)	3.3	—	A C E H I K	15	普通	橙		
3	土師器	高壺	—	5.4	(10.0)	A C H I J K	30	普通	にぶい橙		
4	須恵器	壺	(13.8)	4.4	—	H I K	10	良好	黄灰	群馬産	60-2
5	須恵器	甌	—	5.8	—	A H I K	30	普通	灰	SK1 カマド 群馬産	29-6

条1 単位の刺突が巡らされている。径1.40cmの穿孔が外側から施されている。肩には灰がかかる。MT15併行。色調は淡灰色で緻密。群馬産。

第27号住居跡（第68・69図）

A区のほぼ中央、D-5・6グリッドに位置する。第17・28号住居跡と重複し、前者より新しく、後者より古い。西側直近に第25号住居跡が、北東側3.0mに第18号住居跡がある。

平面形は方形と推定される。調査範囲での長軸方位はN-72°-Eで、カマドは確認できなかつた。規模は、調査範囲で長軸方向2.60m、直交軸方向1.40mである。深さは0.10~0.30mで、床面は平坦である。覆土は暗褐色土、黒褐色土で、自然堆積である。上層に白色粒子を多く含む。柱穴等の施設は認められなかつた。

遺物は少量で、覆土中から散在して出土した。器種は、古墳時代後期の土師器壺蓋模倣壺、高壺、鉢、甌、臼玉である。

1~3は壺蓋模倣壺である。1・3の胎土は粒子がごく細かい。4は高壺で、内面に明瞭な絞り目が見られる。5は大型の鉢である。

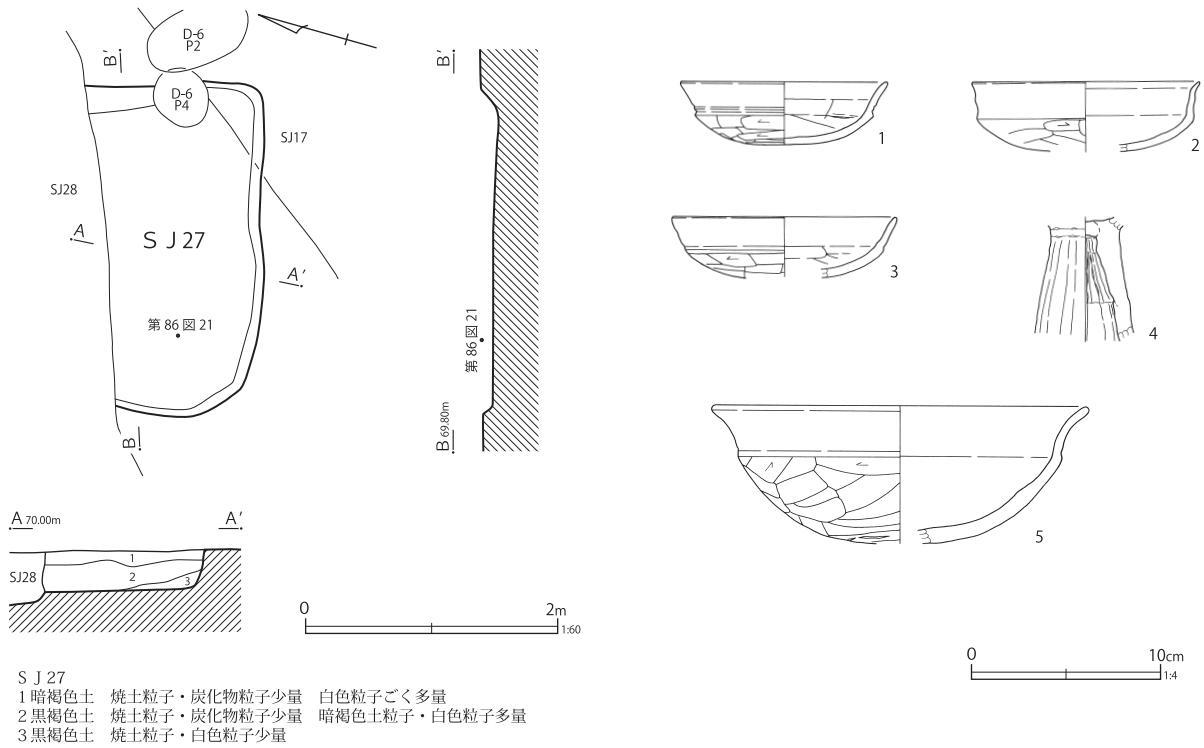
また、第28号住居跡と重複するため、一括して、古墳時代後期の壺蓋模倣壺、壺身模倣壺、高壺の破片を取り上げた。1は壺身模倣壺、2は有段口縁壺である。1は内外面黒色処理されている。3は長胴甌である。胎土に針状物質を含んでいる。

第28号住居跡（第64・69~71図）

A区のほぼ中央、C・D-5・6グリッドに位置する。第16・24・25・27号住居跡と重複し、第24号住居跡より古く、その他より新しい。北東側2.5mに第18号住居跡がある。

平面形は方形と推定される。調査範囲での長軸方位はN-68°-Eで、東カマドである。カマドの軸方向は北へかなりずれている。規模は、調査範囲で長軸方向6.20m、直交軸方向2.60mである。深さは0.15~0.25mで、床面は西側へ向かってやや傾斜している。覆土は黒褐色土で、自然堆積である。上層に白色粒子を多く含む。

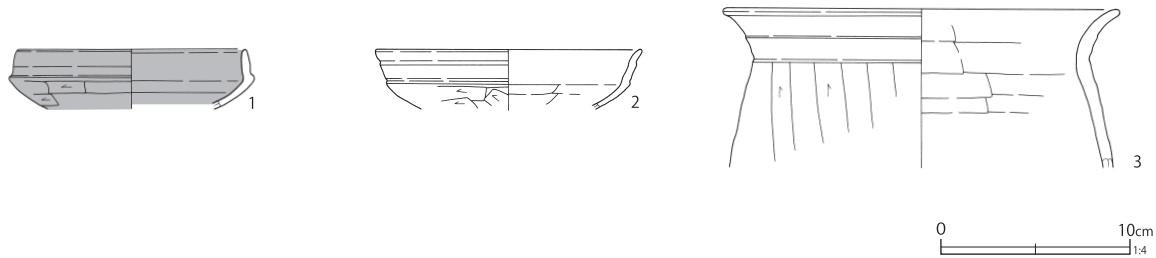
カマドは東壁に設けられていた。全長1.35m、幅は調査範囲で0.25mである。燃焼部は壁内にほぼ収まっている。全体に天井部が崩落している。燃焼部から段を持って煙道に至ると考えられる



第68図 第27号住居跡・出土遺物

第28表 第27号住居跡出土遺物観察表 (第68図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	壺	(10.8)	4.3	—	A H I K	20	普通	灰褐	内外面黒色処理か	
2	土師器	壺	(12.0)	3.7	—	A H I K	25	普通	橙		
3	土師器	壺	(11.8)	3.2	—	A C H I K	15	普通	にぶい黄橙	D6g-21・31・41と接合	
4	土師器	高壺	—	6.6	—	A C E H I K	80	良好	にぶい赤褐		
5	土師器	鉢	(19.5)	7.2	—	A H I K	25	不良	橙		29-7



第69図 第27・28号住居跡出土遺物

第29表 第27・28号住居跡出土遺物観察表 (第69図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	壺	(12.0)	3.2	—	A H I	20	普通	褐灰	内外面黒色処理	
2	土師器	壺	(14.0)	3.1	—	A E H I K	10	普通	橙		
3	土師器	甕	(20.7)	8.4	—	A B D E H I J K	20	普通	にぶい橙	D6g-4	29-8

が、煙道は削平されている。燃焼部は幅0.25mで、細長い土壙状である。あまり明瞭ではないが、5

層が天井崩落土、6層が灰層と考えられる。床面、壁面はよく焼けていた。袖は検出できなかった。

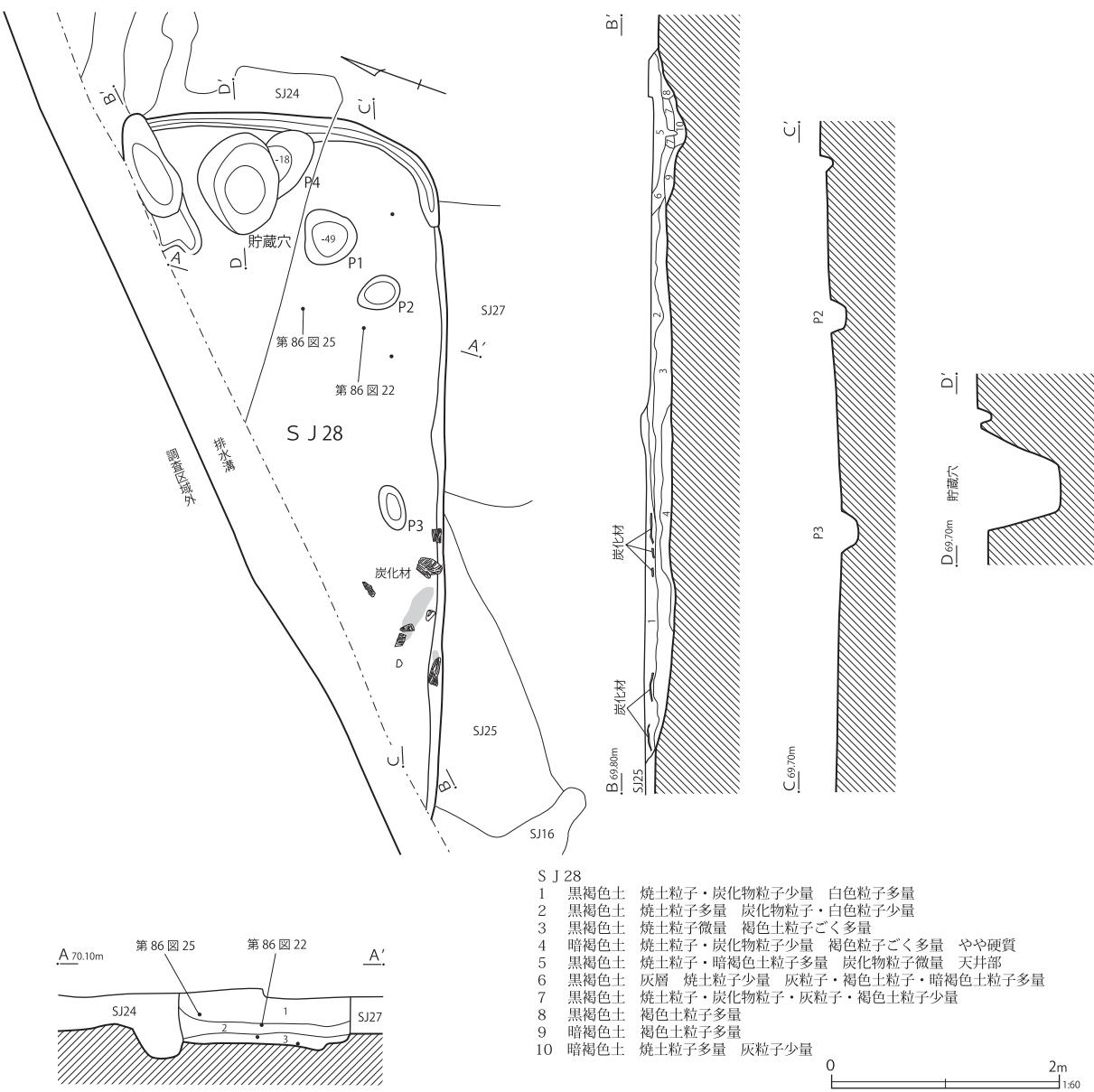
床面からは貯蔵穴、柱穴4本、壁周溝を検出した。貯蔵穴はカマドの右側で検出した。長径0.90m、短径0.70mの楕円形で、深さ0.65mである。覆土は確認できなかった。柱穴は円形、楕円形である。規模はP1が径0.50m、深さ0.49m、P2が長径0.40m、短径0.30m、深さ0.14m、P3が長径0.40m、短径0.25m、深さ0.13m、P4が長径0.50m、短径0.45m、深さ0.18mである。いずれも覆土は確認できなかった。P4からは、白玉が出土している。壁周溝は遺構の東側に設けられていた。幅0.10~0.20m、深さ0.05mである。覆土は

確認できなかった。

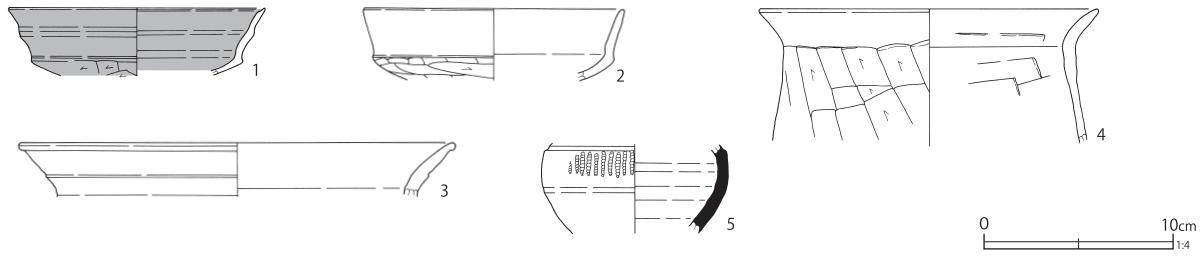
遺物は、覆土中から有段口縁壺、壊身模倣壺、長胴甕の破片、貝巣穴泥岩が出土した。また、土器以外の遺物として、1層から白玉が、下層（3層）から土玉、桃核が出土した。

遺構の東側の上層からは炭化材が出土している。出土状況からは、本住居跡に伴うものかは不明である。樹種はクリである。

1は有段口縁壺で、内外面とも黒色処理されている。2は壊身模倣壺である。色調が全体に黒褐色を呈し、黒色処理されている可能性がある。4



第70図 第28号住居跡



第71図 第28号住居跡出土遺物

第30表 第28号住居跡出土遺物観察表（第71図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	壺	(13.5)	3.6	—	A B E H I K	20	良好	にぶい橙	内外面黒色処理	
2	土師器	壺	(13.7)	3.8	—	A E I K	15	普通	にぶい黄橙	黑色処理か	
3	土師器	壺	(22.8)	2.8	—	A C D E H I K	5	普通	橙		30-1
4	土師器	甕	(17.8)	7.1	—	A B C E G H I K	20	普通	橙		60-2
5	須恵器	甕	—	4.6	—	H I K	10	普通	灰	床直 自然釉 群馬産	

の甕は風化が著しい。5は須恵器甕である。第26号住居跡5と同一個体の可能性がある。側面は沈線を引いた後に、9条1単位の刺突が巡らされている。径1.40cmの穿孔が外側から施されている。肩と見込み部分に灰がかかる。体部下半には指紋が付着している。TK10併行。色調は淡灰色で緻密。群馬産。

第29号住居跡（第72・73図）

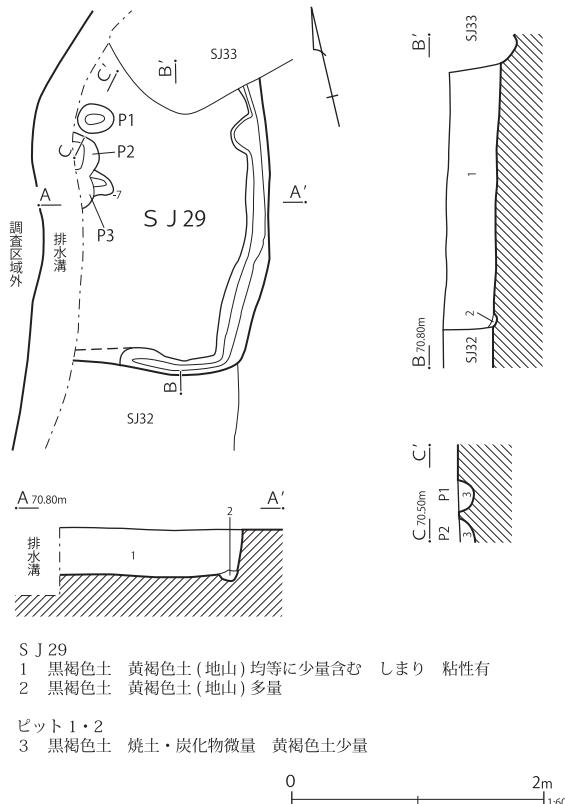
C区の北側、J-3グリッドに位置する。遺構の西側は調査区域外にかかる。第32・33号住居跡と重複し、前者より新しく、後者より古い。

平面形は方形と推定される。調査範囲での長軸方位はN-12°-Eで、カマドは確認できなかった。規模は、調査範囲で長軸方向2.50m、直交軸方向1.30mである。深さは0.35~0.40mで、床面は平坦である。覆土は黒褐色土で、自然堆積である。

床面からは、柱穴3本、壁周溝を検出した。柱穴は楕円形である。規模はP1が長径0.35m、短径0.25m、深さ0.10m、P2とP3は連続しており、西側は調査区域外にかかる。P2が径0.35m、深さ0.10m、P3が長径0.25m、深さ0.10mである。東側に長さ0.15m、幅0.20m、深さ0.07mの突出部がある。覆土は自然堆積で、柱痕等は認めら

れなかった。壁周溝は遺構の東側から南側に設けられていた。幅0.10~0.25m、深さ0.05mで、埋め戻しの可能性がある。

遺物は少ない。古墳時代後期の土師器高壺、鉢、甕が多く、混入の古墳時代前期の壺、小型壺、台付甕が少量である。



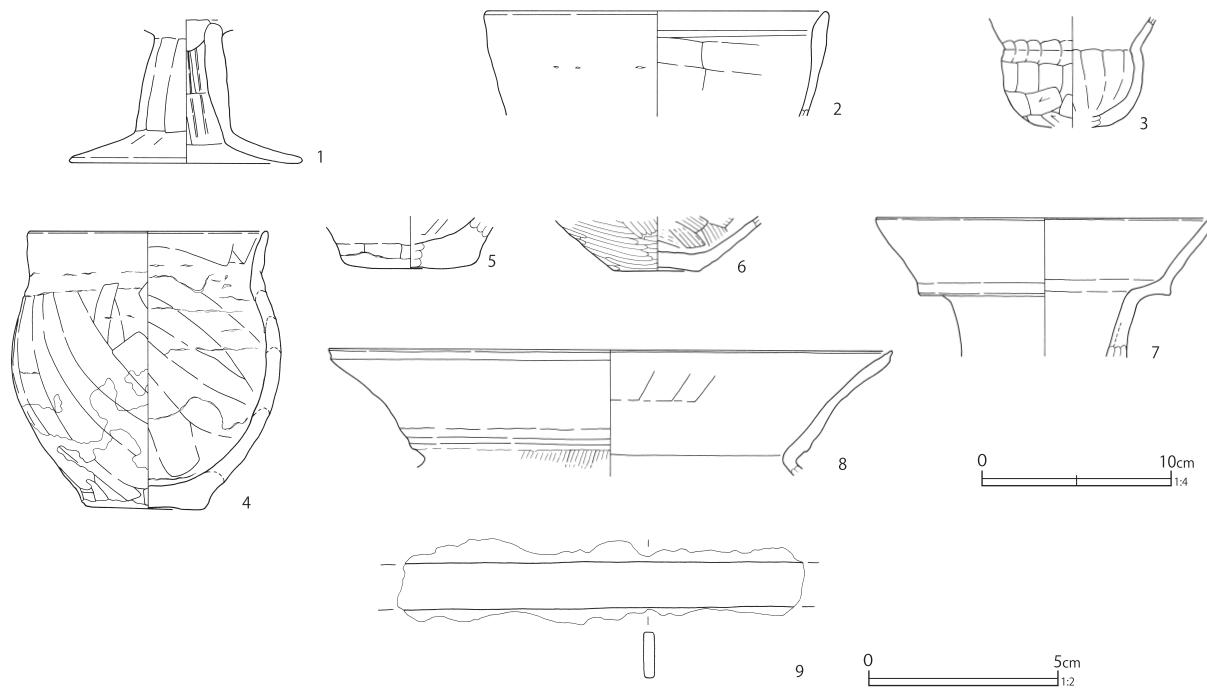
第72図 第29号住居跡

1は高坏である。柱状部が短く内外面ヘラナデが施されている。ホゾ接合である。2は体部が直立気味に立ち上がる鉢である。口縁部は内側に傾斜する。風化のため、調整は不明瞭である。3は壇である。内外面指ナデが施されている。4は内外面に亀裂が多く認められる小型甕である。外面はそれを埋めるため、粘土が多く付着している。6～8は古墳時代前期のものである。8は所謂山陰系口縁の甕と考えられる。口縁部はヘラナデ後横ナデ、頸部以下は外面刷毛目、内面ヘラナデが施されている。在地の粘土を使用しており、模倣品である。9は用途不明の棒状の鉄製品である。

第30号住居跡（第74～76図）

C区の中央、やや北側J・K-3グリッドに位置する。遺構の東西は調査区域外にかかる。第31・32号住居跡より新しい。遺構が密集する箇所のほぼ中央にあたる。

平面形は縦長の長方形である。遺構の東壁と南壁の立ち上がりは、第31号住居跡と同時に調査したために、確実に捉えられなかった。主軸方位はN-67°-Eで、東カマドである。規模は主軸方向4.90m、直交軸方向3.75mである。深さは0.15mで、床面は平坦である。覆土は黒褐色土で、自然堆積である。



第73図 第29号住居跡出土遺物

第31表 第29号住居跡出土遺物観察表（第73図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	高坏	-	7.5	12.0	A C E H I	50	普通	明赤褐		30-2
2	土師器	鉢	(18.0)	5.4	-	A B C H I K	10	普通	明赤褐		30-3
3	土師器	壇	-	5.9	-	A C D E H I K	20	普通	明赤褐	内外面二次加熱か	
4	土師器	甕	12.4	14.5	6.3	A B C E H I K	100	普通	明赤褐		30-4
5	土師器	壺	-	2.6	(7.0)	A C E H I K	40	普通	赤褐		60-2
6	土師器	壺	-	3.0	4.6	A C D H I K	60	普通	にぶい橙		60-2
7	土師器	壺	(17.8)	7.3	-	A B H I K	40	普通	橙		60-7
8	土師器	甕	(30.0)	6.6	-	A C D E H I	5	普通	にぶい黄橙	覆土上層	
9	鉄製品	棒状品	長さ10.7cm 幅1.7cm 厚さ0.3cm 重さ32.3g								

カマドは東壁に設けられていた。規模は全長0.75m、幅0.85mで、両袖は検出できなかった。燃焼部は壁内に収まり、奥壁は東壁まで達していない。段を持って煙道に至ると考えられるが、削平されている。燃焼部は幅0.30mである。天井部が崩落しており、あまり明瞭ではないが、4層が天井崩落土と考えられる。床面、壁面はよく焼けていた。床面中央からは、12の甕がやや掘り窪められた箇所から倒立した状態で出土した。支脚として使用されたと考えられる。焚口部分に長径0.40m、幅0.25m、深さ0.10mの掘り込みが燃焼面の下から検出された。カマドの掘り方の可能性がある。袖は黄灰色粘土の貼り付けである。

床面からは貯蔵穴を検出した。カマドの右側に接する位置に設けられていた。長径0.85m、短径0.75mの楕円形で、深さ0.20mである。覆土は黒褐色土で、自然堆積である。

遺物は多く、カマド、貯蔵穴付近の下層から床面を中心に完形品が出土した。器種は、古墳時代後期の土師器壺蓋模倣壺、壺身模倣壺、鉢、壺、長胴甕の破片である。

1・2・6は壺蓋模倣壺、3～5・7は壺身模倣壺である。5は内面に炭化物が付着し、7は黒色処理されている可能性がある。9は鉢で内面全体が黒斑になっている。底面はヘラケズリである。11・13は甕である。11の頸部内面はヘラケズリである。13は全体に開裂が多く、歪んでいる。

また、第31号住居跡と重複し、同時に調査したため、一括して古墳時代後期の壺蓋模倣壺、高壺、鉢、甕、須恵器壺、古墳時代前期の甕、貝巣穴泥岩の破片を取り上げた。ごく細かな破片が多い。1～5は壺身模倣壺である。5は口縁部が外反する。6の高壺は中期の可能性がある。7の鉢は器肉が厚く、器面の傷みが著しい。8は須恵器の壺である。側面は沈線を引いた後に、4条1単位の刺突が巡らされている。多孔質、藤岡産。

第31号住居跡（第76～79図）

C区の中央、やや北側J・K-2・3グリッドに位置する。遺構の東西は調査区域外にかかる。第14・15・30号住居跡と重複し、そのいずれよりも古い。遺構が密集する箇所のほぼ中央にあたる。

平面形は方形である。カマドは確認できなかった。東西の長軸方位はN-75°-Eである。規模は長軸方向5.20m、直交軸方向4.90mである。深さは0.20mで、床面は平坦である。覆土は黒褐色土で、自然堆積である。1層は焼土を多く含む。埋戻しの可能性がある。

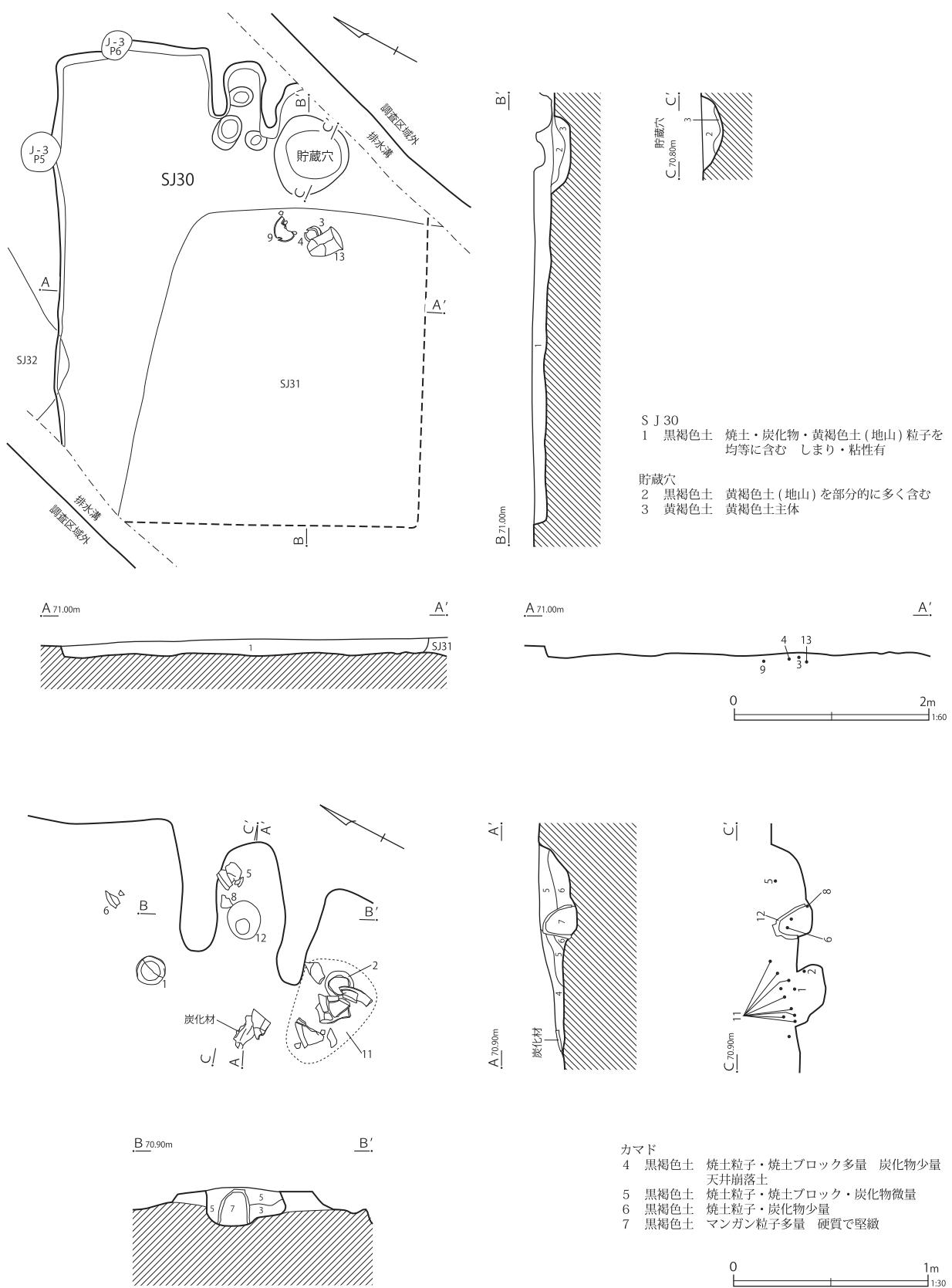
床面には、北壁際に径0.30mほど床が焼けている部分がある。

床面からは大型の土壙状の掘り込み2基（P1・2）、柱穴4本（P3～7）を検出した。P1が隅丸方形、P6・P7が不整楕円形であるほかは円形である。規模は、P1～5が、径0.70、0.70、0.30、0.50、0.45m、深さ0.55、0.15、0.45、0.20、0.10mである。P6が長径0.40m、短径0.30m、深さ0.15m、P7が長径0.50m、短径0.35m、深さ0.20mである。P1・2は遺構の北東側にある。P1は、7層が柱痕の可能性がある。1のほぼ完形の壺身模倣壺が、9・10層の層理面から正位の状態で出土している。10層は埋戻しのため、意識に入れられたと考えられる。P2は暗褐色土で、自然堆積、P3～7は黒褐色土の单層である。柱痕は認められなかった。

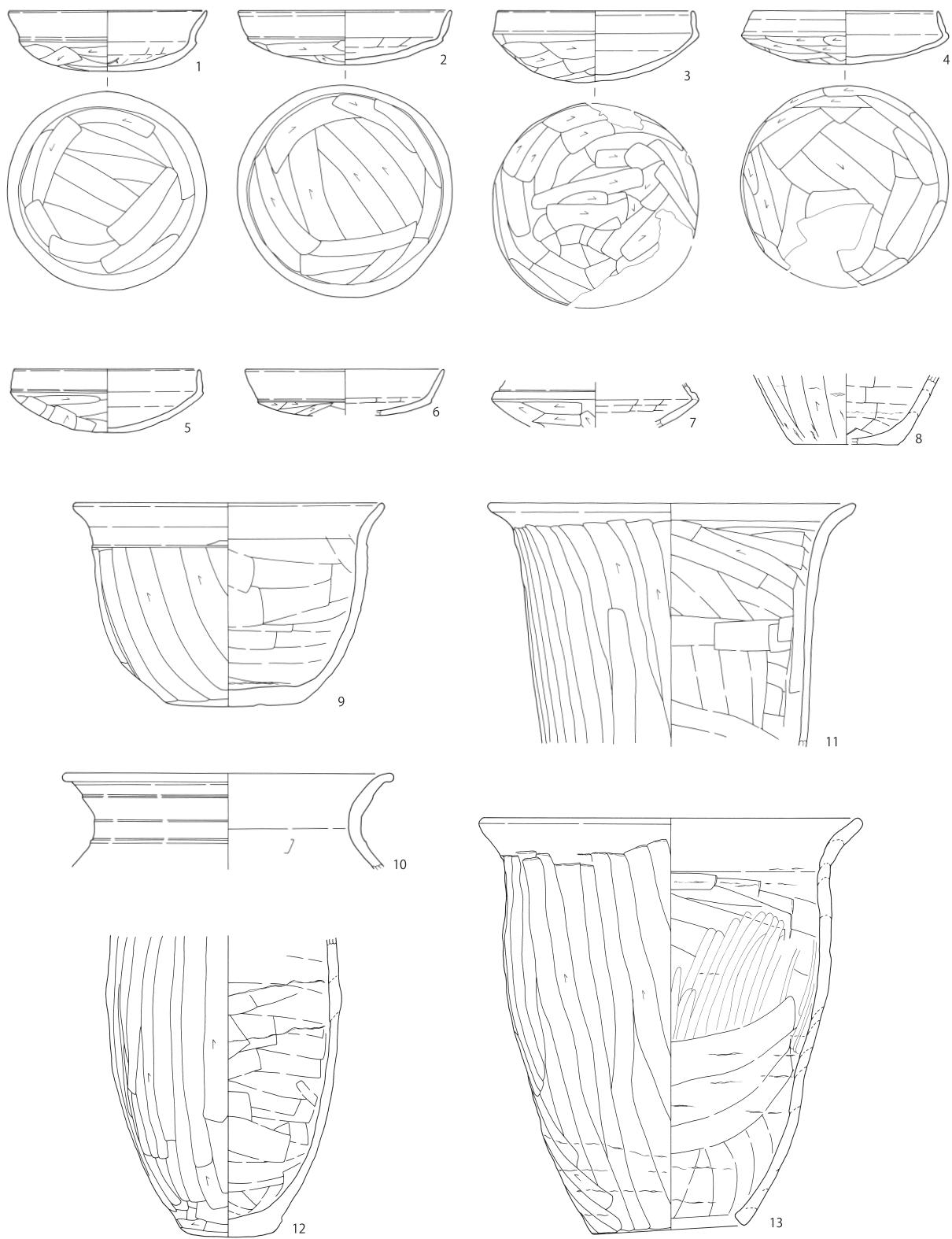
また、東側の側溝際確認面に、長さ1.50m、幅0.80mの範囲で、不整形の硬化した焼土が分布していた。本住居跡に伴うかは不明である。

遺物は多く、中層から下層を中心に、壺蓋模倣壺、壺身模倣壺、高壺、鉢、壺、長胴甕、甕、土錐が出土した。上層からは混入の古墳時代前期の甕、小型壺、鉢が出土した。

1は壺身模倣壺である。内面に放射状の暗文が施されている。内外面黒色処理。2～6は壺蓋模倣壺である。2は口縁部が大きく外反する。5は所謂大型壺の可能性がある。6は端部がやや外反



第74図 第30号住居跡・カマド

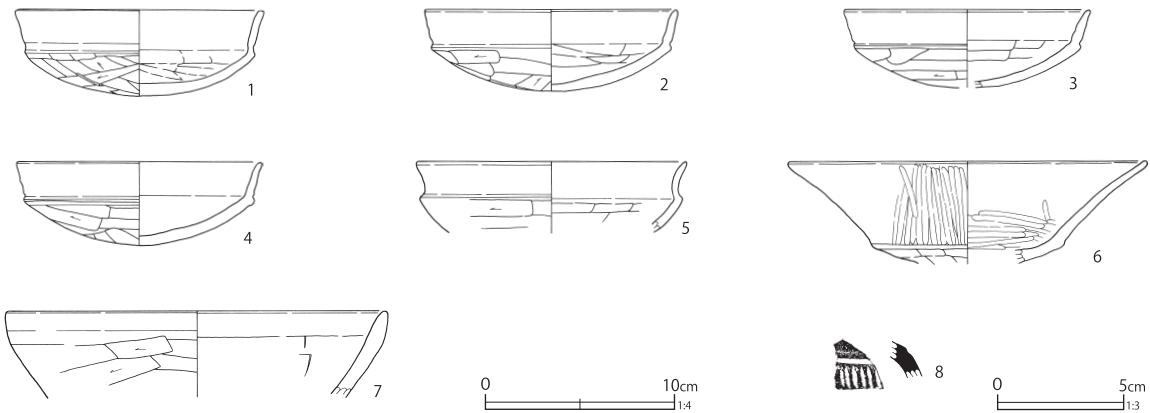


0 10cm
1:4

第75図 第30号住居跡出土遺物

第32表 第30号住居跡出土遺物観察表（第75図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	坏	13.2	4.1	—	A B C D H I K	100	普通	橙	No.5	30-5
2	土師器	坏	14.2	3.6	—	A C D E H I K	100	普通	にぶい橙	No.18	30-6
3	土師器	坏	13.0	4.8	—	A B I	70	普通	にぶい黄褐	No.4	30-7
4	土師器	坏	12.4	3.6	—	A B C D E H I K	80	普通	にぶい褐	No.3 SJ30・31	30-8
5	土師器	坏	12.5	4.2	—	A D E H I K	60	良好	にぶい褐	カマドNo.1 内面黒色付着物	30-9
6	土師器	坏	(13.4)	3.1	—	A C E H I J K	25	普通	橙	No.6	
7	土師器	坏	—	3.1	—	A C H I	5	良好	灰褐	黑色処理か	
8	土師器	甕	—	4.6	7.0	A C D E H I K	50	良好	橙	カマドNo.2 外面二次加熱 赤変	31-1
9	土師器	鉢	20.7	13.6	9.5	A B C D E H I K	80	普通	橙	No.1 内面全体が黒斑状	31-2
10	土師器	壺	(22.0)	6.4	—	A C H I K	15	普通	にぶい黄橙	カマド	31-6
11	土師器	甕	24.3	16.4	—	A C E H I	70	良好	橙	カマド No.3・8・9・10・11・12・13・15・16・17 外面煤 赤変	31-3
12	土師器	甕	—	20.1	6.4	A C E H I J K	80	普通	橙	カマドNo.3 二次加熱により赤変	31-4
13	土師器	甕	25.2	27.8	10.3	A C E H I K	100	普通	橙	No.2	31-5



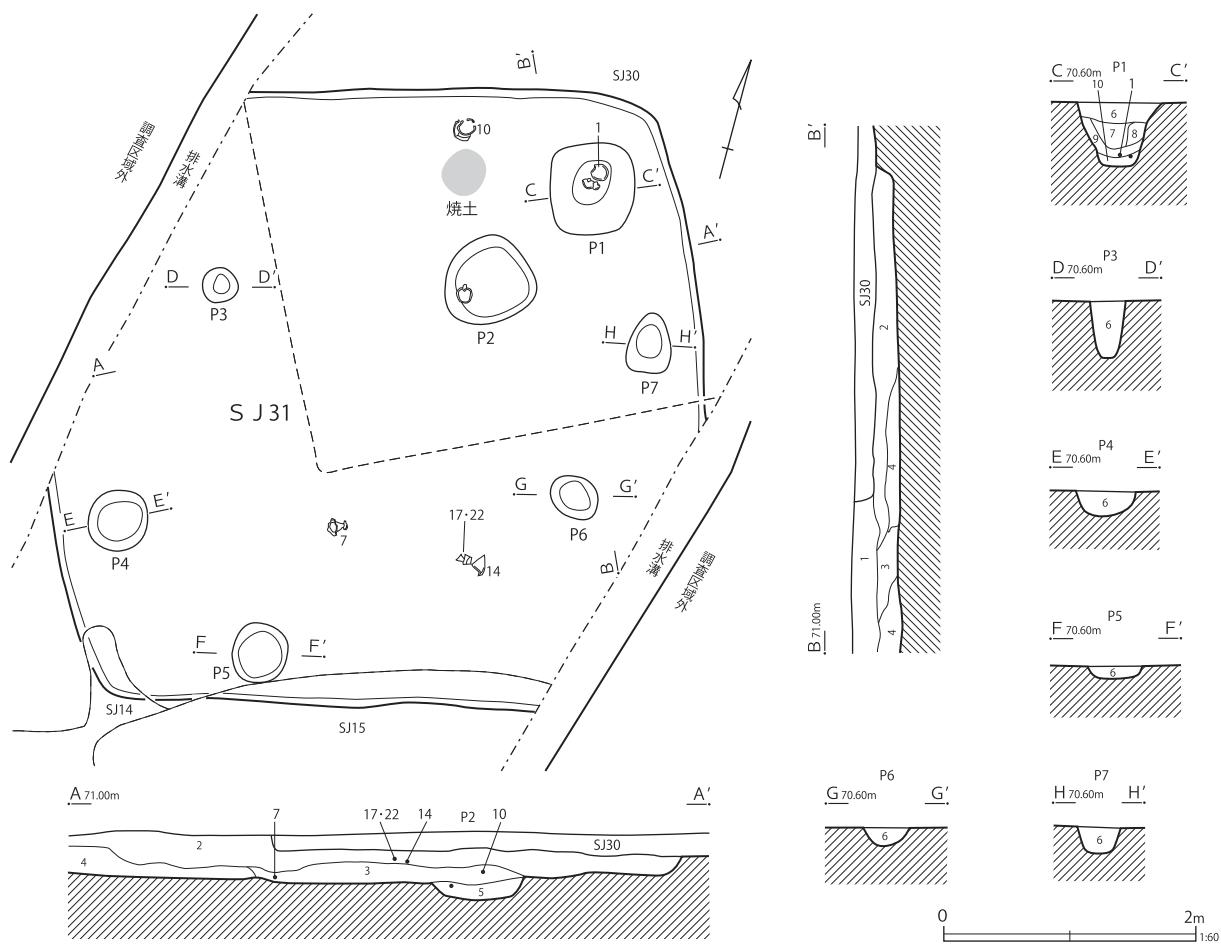
第76図 第30・31号住居跡出土遺物

第33表 第30・31号住居跡出土遺物観察表（第76図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	坏	(12.5)	4.6	—	A C H I K	30	普通	橙	ベルト内	31-7
2	土師器	坏	(13.4)	4.3	—	A C H I K	30	普通	橙	ベルト内	31-8
3	土師器	坏	(13.0)	4.1	—	A B H I K	20	普通	にぶい橙	ベルト内	
4	土師器	坏	(13.0)	4.4	—	A C H I K	20	普通	にぶい橙	ベルト内	
5	土師器	坏	(14.2)	4.8	—	A H I K	5	普通	にぶい橙		
6	土師器	高坏	(19.0)	5.4	—	A C D H I K	15	普通	にぶい橙		
7	土師器	鉢	(20.0)	4.5	—	A B C H I K	20	普通	橙	ベルト内	
8	須恵器	甕	—	1.4	—	I K	5	普通	灰	藤岡産	60-2

する。7～9は高坏の脚部である。ホゾ接合で、接合部は細く締まり、いずれも内面に絞り目が見られ、指ナデが加えられている。8の下地の調整は刷毛目である。9は接合部のホゾが抜けた状態で、剥離面にナデの痕跡が写し取られている。10～13は鉢である。いずれも器肉が厚く、形態はま

ちまちである。10は大型で、歪みが著しい。11・13は内外面に煤が付着し、11は外面が、13は内外面赤変している。12は玉縁状に折り返されている。14・15は壺である。14は大型だがスリット状に遺存するのみである。外面は刷毛目後ヘラケズリが加えられている。底部は輪台状で、ヘラナデが施



S J 31
 1 黒褐色土 焼土を均等に多く含む 炭化物少量 しまり・粘性有
 2 黒褐色土 焼土を均等に含む 炭化物少量 しまり・粘性有
 3 黒褐色土 焼土・炭化物少量 黃褐色土(地山) ブロックを部分的に含む
 しまり・粘性有
 4 黒褐色土 焼土・炭化物微量 しまり・粘性有

ピット 1 ~ 7
 5 暗褐色土 焼土・炭化物微量 黃褐色土(地山) ブロック少量
 しまり・粘性有
 6 黒褐色土 焼土・炭化物を均等にわずかに含む 黃褐色土粒子混入
 しまり・粘性有
 7 黒褐色土 焼土・炭化物少量 しまり・粘性有
 8 黒褐色土 焼土・炭化物微量 黃褐色土やや多量 しまり・粘性有
 9 黒褐色土 焼土・炭化物少量 しまり・粘性有
 10 黄褐色土 黄褐色土主体 9層土混入 しまり・粘性有

第77図 第31号住居跡

されている。15も輪台状である。16~25は甕である。16・17・19・25は小型である。17は器形としては鉢だが、2次加熱を受け、使用痕が明瞭なため甕とした。19は口縁部が短く、頸部が明瞭である。25は下膨れの器形で、胴部の径に対して底部径が大きい。それ以外のものは大型の長胴甕である。18は胴部上位が直線的で、下位が張ると考えられる。18・20は胎土に片岩を含んでいる。26~29は大型甕である。29はやや小ぶりであろうか。30・31は古墳時代前期のものである。30は小型壺、31は鉢と考えられる。

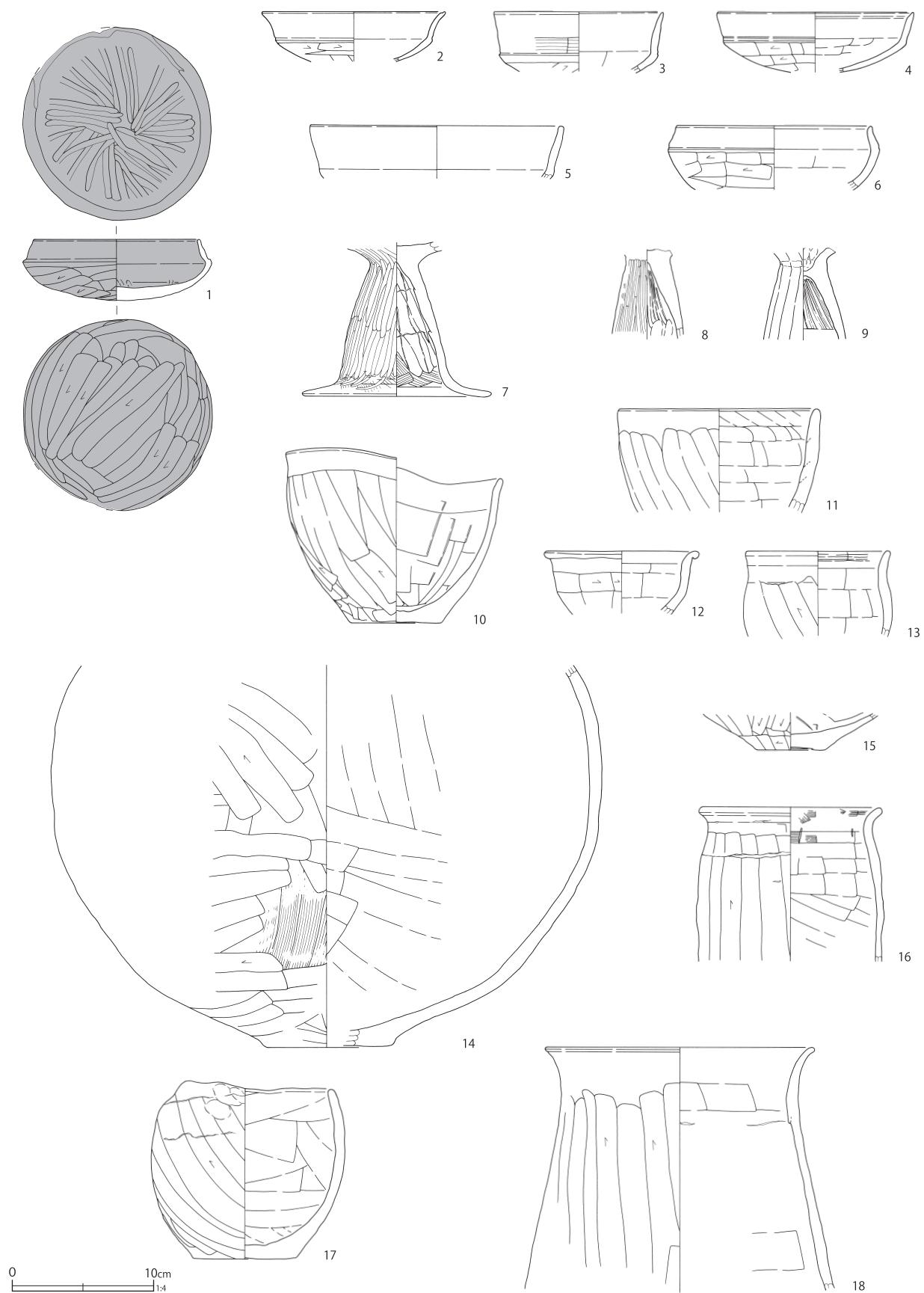
32・33は土錐である。外面は丁寧なナデによつ

て仕上げられている。

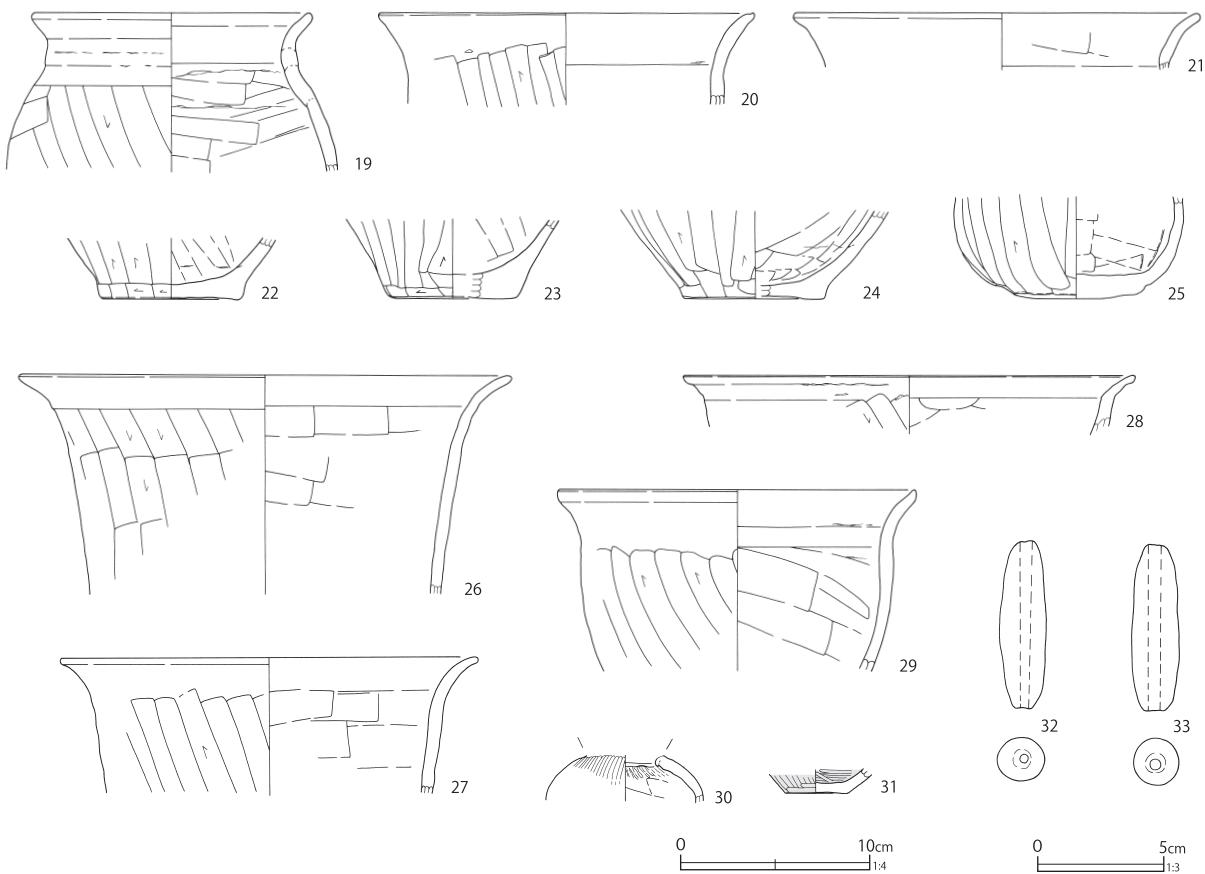
第32号住居跡（第80・81図）

C区の北側、J-3グリッドに位置する。遺構の西側は調査区域外にかかる。第29・30号住居跡、第11号溝跡と重複し、第29・30号住居跡、第11号溝跡より古い。

平面形は方形と推定される。調査範囲での長軸方位はN-21°-Eで、カマドは確認できなかつた。規模は、調査範囲で長軸方向4.40m、直交軸方向1.50mである。深さは0.35~0.40mで、床面は平坦である。覆土は黒褐色土で、自然堆積である。



第78図 第31号住居跡出土遺物（1）

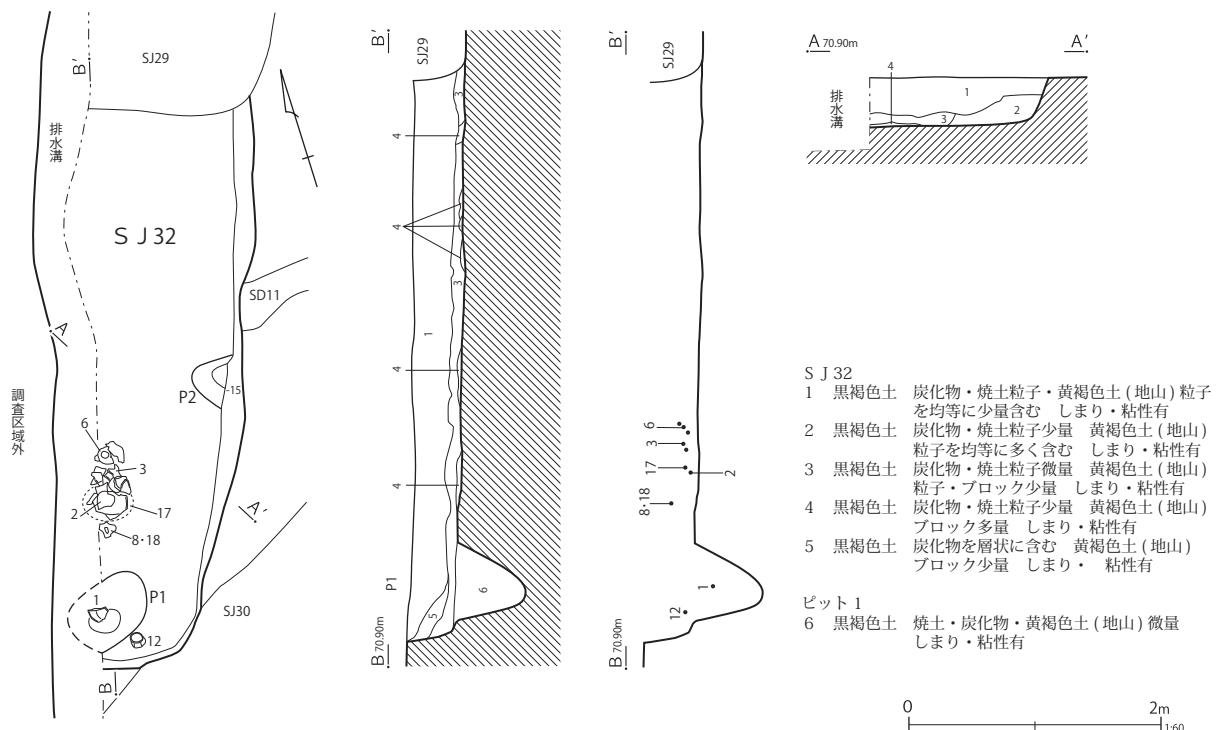


第79図 第31号住居跡出土遺物（2）

第34表 第31号住居跡出土遺物観察表（第78～79図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	壺	11.6	4.3	—	ADEIK	80	普通	にぶい赤褐	P1-No.1 内外面黒色処理	32-1
2	土師器	壺	(12.8)	3.5	—	ACEHIK	15	普通	橙		32-2
3	土師器	壺	(12.0)	4.3	—	AHIK	15	普通	橙		
4	土師器	壺	(13.8)	4.2	—	ACEHI	30	普通	橙		
5	土師器	壺	(17.8)	3.7	—	AHIK	25	不良	橙		
6	土師器	壺	(13.8)	4.5	—	ACDEHIK	15	普通	橙		
7	土師器	高壺	—	10.8	13.4	ACEHI	70	普通	橙	No.3	32-4
8	土師器	高壺	—	6.3	—	ACDEHIK	85	普通	橙		
9	土師器	高壺	—	6.4	—	ACEHIK	70	普通	橙		
10	土師器	鉢	15.2	11.6	6.5	C E H I	60	普通	明赤褐	No.4	32-5
11	土師器	鉢	(14.0)	7.3	—	AHI	25	良好	にぶい褐	外面赤変 内外面煤	
12	土師器	鉢	(10.6)	4.5	—	ACEHIK	25	普通	橙		
13	土師器	鉢	(10.0)	6.0	—	ACDEHIK	25	普通	橙	内外面加熱赤変 内外面煤	
14	土師器	壺	—	27.0	9.0	A CHIK	5	普通	橙	No.2 外面黒斑あり	32-3
15	土師器	壺	—	2.6	4.8	ACDEHIK	40	普通	橙	底部輪台状	
16	土師器	甕	(12.6)	10.9	—	AHIK	30	良好	にぶい赤褐	内外面煤	60-3
17	土師器	甕	10.2	12.0	7.4	ABEHIK	70	普通	にぶい赤褐	No.1 SI30・31ベルト内と接合 内面煤 外面二次加熱 赤変	32-6
18	土師器	甕	(19.0)	17.2	—	ABC EHI K	20	普通	橙		32-7
19	土師器	甕	(14.5)	8.4	—	A CHIK	20	普通	橙		
20	土師器	甕	(19.8)	4.9	—	ABC HIK	15	普通	橙	外面煤	
21	土師器	甕	(21.1)	3.0	—	A EHI K	25	普通	にぶい橙		
22	土師器	甕	—	3.3	(7.2)	ACEHIK	40	良好	明赤褐	No.1 二次加熱で真赤	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
23	土師器	甕	—	4.3	(6.8)	A C H I K	20	良好	にぶい橙		
24	土師器	甕	—	4.7	7.4	A C E H I K	45	普通	橙	SJ30・31と接合	
25	土師器	甕	—	5.4	6.6	A C H I K	70	普通	にぶい褐	外面煤	33-1
26	土師器	甕	(26.0)	11.5	—	A B C H I K	15	普通	にぶい褐		60-3
27	土師器	甕	(22.0)	7.2	—	A C D E H I	15	普通	橙		
28	土師器	甕	(23.8)	3.1	—	A B H I	5	普通	にぶい橙		
29	土師器	甕	(19.0)	9.6	—	A B C E H I K	20	普通	にぶい橙		
30	土師器	壺	—	2.4	—	A E H I J	20	普通	浅黄橙	五領	
31	土師器	鉢	—	1.2	3.3	A H I K	50	普通	にぶい橙	内外面赤彩 五領	
32	土製品	土錘	長さ6.5cm 幅1.8cm 孔径0.4cm 重さ21.5g			A B H I K	100	普通	にぶい橙		60-3
33	土製品	土錘	長さ6.5cm 幅1.8cm 孔径0.5cm 重さ25.2g			A C H I K	100	普通	明赤褐		60-3

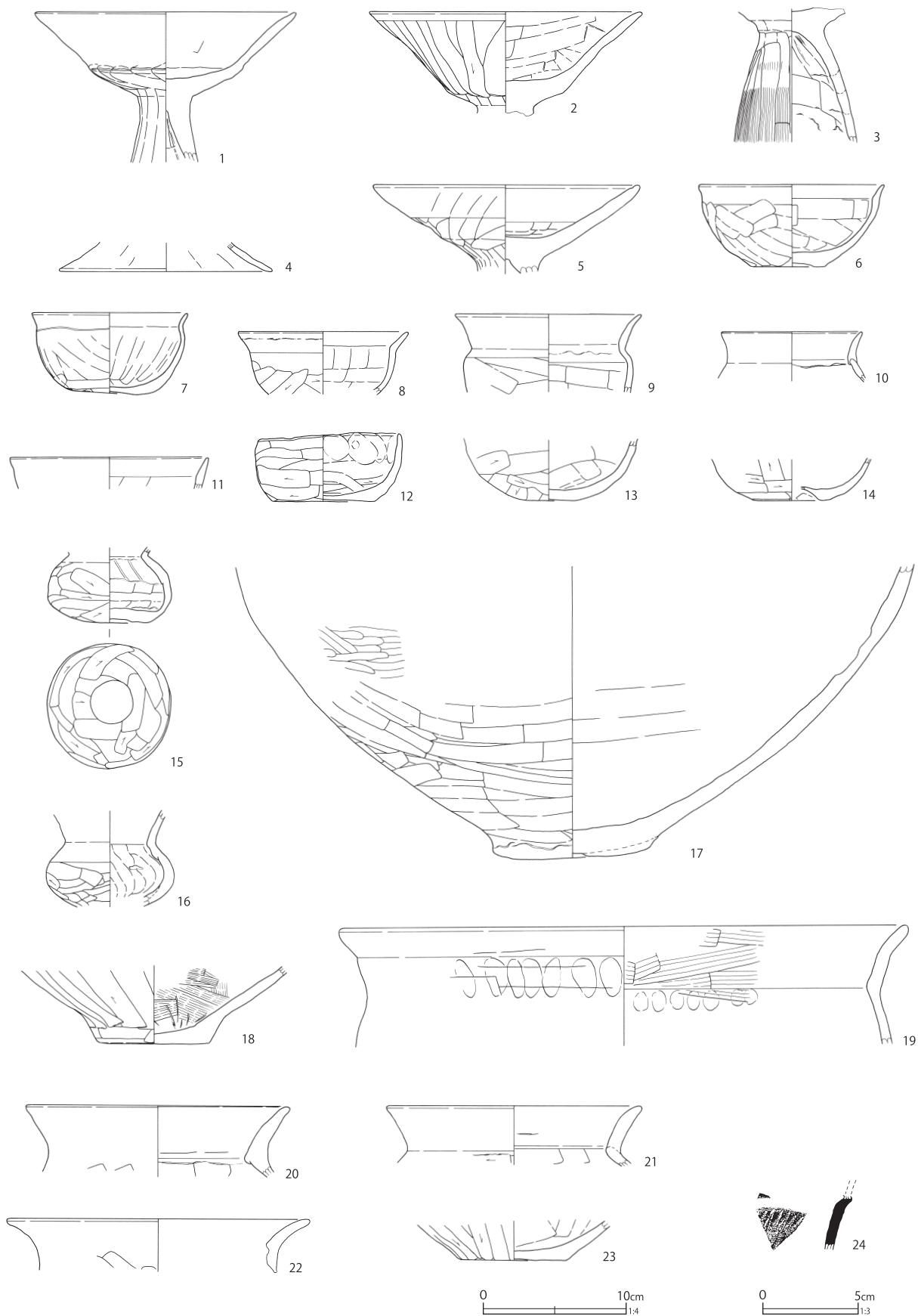


第80図 第32号住居跡

床面からは、柱穴2本を検出した。P1は楕円形と考えられる。調査区内での規模は、長径0.60m以上、短径0.50m、深さ0.55mである。覆土は自然堆積である。1の高坏が中層から出土している。他にも甕の破片が出でている。P2は半円形で径0.40m、深さ0.15mである。覆土は確認できなかった。いずれも柱痕は認められなかった。

遺物は土師器高坏、鉢、壺、甕、須恵器頸が構造の南側の下層からまとめて出土した。他にも

混入の古墳時代前期の壺、小型壺、台付甕が出土している。1～5は高坏である。下方に段を持って直線的に開く坏部に、細い柱状部が付く。3はやや太く、中位が張る。いずれもホゾ接合である。調整は3の外表面が刷毛目であるほかは、ヘラケズリもしくはヘラナデである。柱状部の上半には絞り目が認められる。6～14は鉢である。平底で体部が扁平である以外は、多様な形態である。6～10は口縁部がある。口縁部は横ナデ、体部は



第81図 第32号住居跡出土遺物

第35表 第32号住居跡出土遺物観察表（第81図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	高坏	(18.1)	—	—	A C E H I K	30	普通	橙	No.7	
2	土師器	高坏	(19.0)	7.0	—	A C H I K	60	普通	明赤褐	No.10	33-2
3	土師器	高坏	—	9.4	—	A B C D H I K	85	普通	明赤褐	No.4	33-3
4	土師器	高坏	—	2.0	(14.8)	A C E H I K	15	普通	明赤褐		
5	土師器	高坏	18.4	6.2	—	A B C D E H I	100	良好	明赤褐		33-4
6	土師器	鉢	12.8	5.7	5.2	A C D E H I	60	普通	橙	No.3	33-5
7	土師器	鉢	(10.8)	5.6	4.2	A C H I K	65	普通	橙		33-6
8	土師器	鉢	(11.8)	4.4	—	A C H I K	15	普通	橙	No.1	
9	土師器	鉢	(13.0)	5.5	—	A C E H I K	10	普通	明赤褐		
10	土師器	鉢	(9.8)	3.5	—	B E H I K	15	普通	明赤褐		
11	土師器	鉢	(13.8)	2.2	—	A H I K	10	普通	明赤褐		
12	土師器	鉢	9.7	4.6	7.0	A B D E H I K	95	普通	赤	No.6	33-7
13	土師器	鉢	—	4.3	3.3	A C H I K	50	普通	橙		
14	土師器	鉢	—	2.9	(4.0)	A C E H I K	20	普通	橙		
15	土師器	壇	—	5.2	2.9	A C H I	90	良好	明赤褐		33-8
16	土師器	壇	—	6.7	—	A C E H I	20	普通	褐		33-9
17	土師器	壺	—	20.6	11.0	A C E H I J	15	普通	橙	No.2 J3g 西側溝と接合	34-1
18	土師器	壺	—	5.4	(7.8)	A C H I K	35	普通	橙	No.1	34-2
19	土師器	甕	(39.4)	8.4	—	A C E H I	5	普通	橙		
20	土師器	甕	(18.4)	5.0	—	A B C H I K	25	普通	明赤褐	内面煤	
21	土師器	甕	(17.6)	4.2	—	A C H I K	20	普通	橙	P1	
22	土師器	甕	(21.0)	3.7	—	A C H I K	5	普通	橙		
23	土師器	甕	—	2.8	(7.4)	A B C E H I	30	普通	橙		
24	須恵器	甕	—	2.8	—	A I K	5	普通	灰	藤岡産	

ヘラナデもしくはヘラケズリである。11は鉢としたが、坏等の器種である可能性も考えられる。12は口縁内面に指頭によるオサエとナデが施され、横ナデが加えられている。13・14は底面中央が窪み、壇等の可能性がある。15・16は壇である。体部が扁平で、全体にヘラケズリが施されている。16の内面は指ナデである。17は大型壺の胴部下半である。ヘラナデ後ヘラ磨きが施されている。器面の傷みが激しく、剥落が著しい。18は壺の底部である。見込み部分に刷毛目が残る。19は大型の甕である。外面の口縁部下段、内面の頸部下位には指頭痕が残る。20～22は甕の口縁部、23は甕の底部である。24は須恵器甕の口縁部である。沈線の下位に5条1单位2段以上の細い特徴的な波状文が施されている。多孔質、藤岡産。

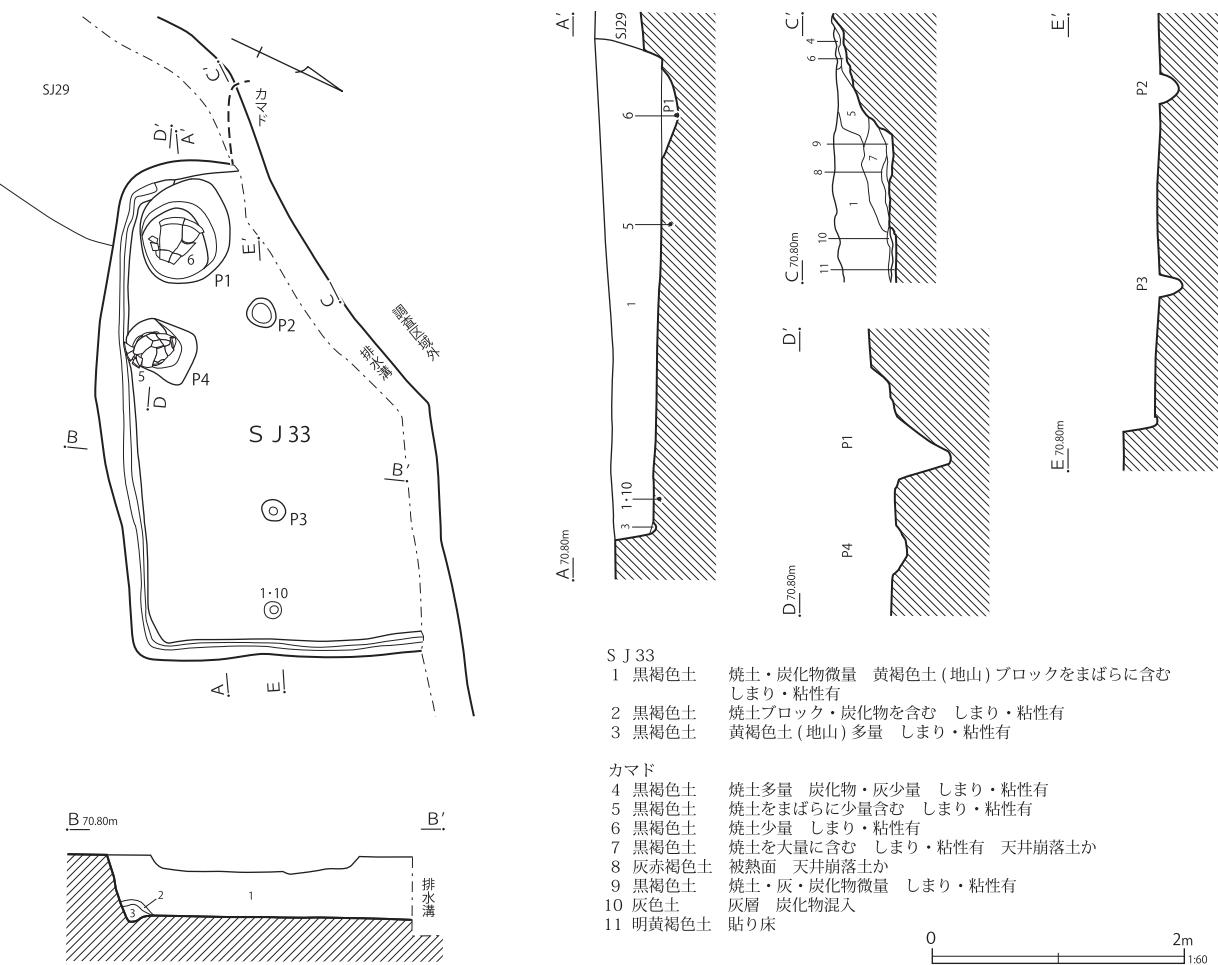
第33号住居跡（第82・83図）

C区の北側、I・J-3グリッドに位置する。遺構の北西側は調査区域外にかかる。法面部分

で、断面にカマドを確認した。第29号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。南側5.0mに同時期の第30号住居跡がある。

平面形は方形と推定される。調査範囲での長軸方位はN-60°-Eで、西カマドである。規模は、調査範囲で長軸方向3.95m、直交軸方向2.45mである。深さは0.35～0.50mで、床面は平坦である。覆土は黒褐色土で、自然堆積である。層が厚く、埋没が一度に進んだと考えられる。床面全体に貼床が施されていた。

カマドは西壁に設けられていた。断面で確認したのみである。規模は全長1.50mである。両袖は検出できなかった。燃焼部は突出せず、段を持って煙道に至る。全体に天井部が崩落した状態である。あまり明瞭ではないが、7・8層が天井崩落土、10層が灰層と考えられる。調査の工程上、出土位置を記録できなかつたが、4・7の完形に近い甕、瓶が出土している。

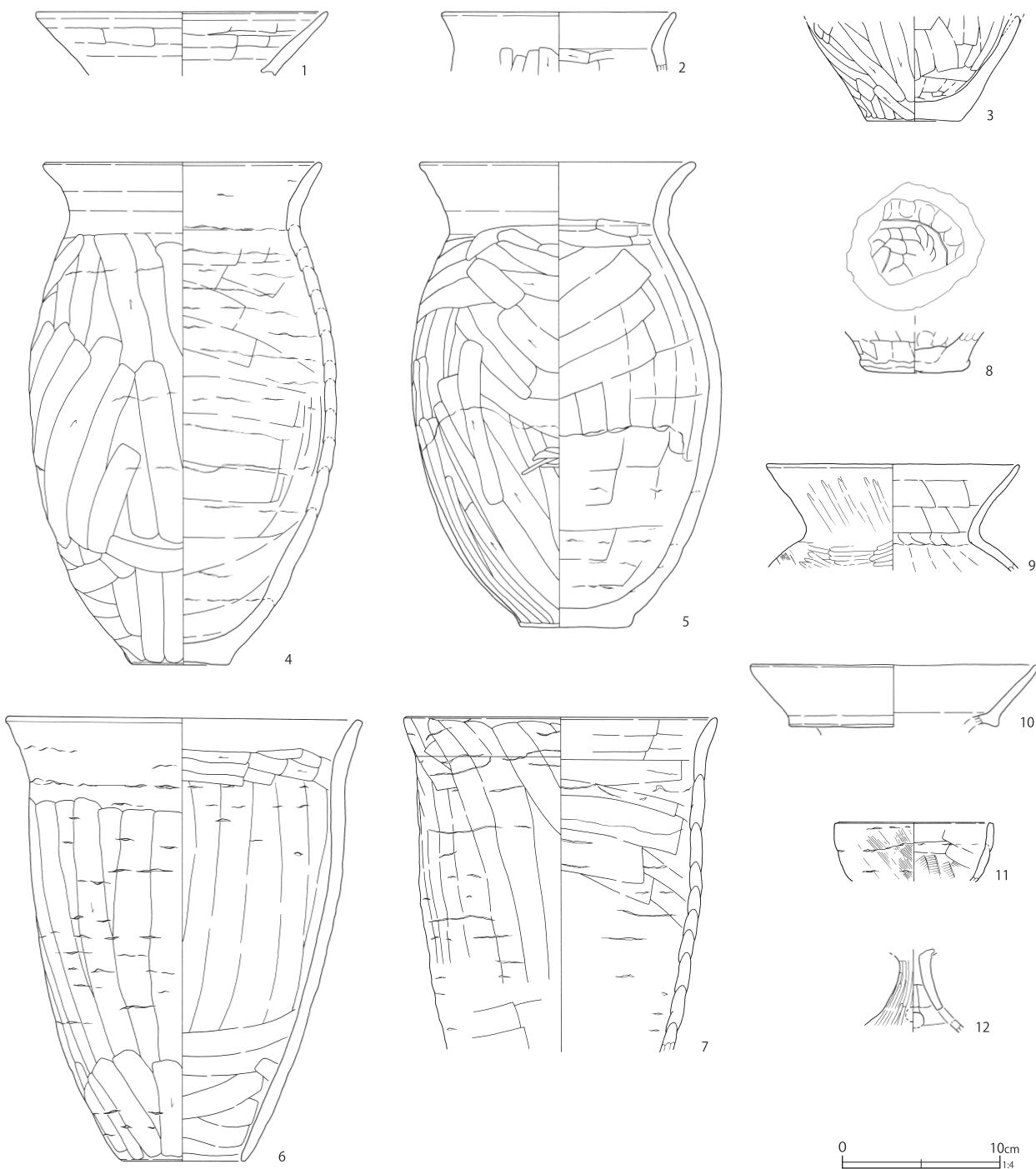


第82図 第33号住居跡

床面からは、柱穴4本、壁周溝を検出した。P1・4は大型で、柱穴以外の機能も考えられる。平面形は前者が楕円形、後者が不整な長方形である。規模はP1が長径0.85m、短径0.75m、深さ0.45m、P4が長径0.55m、短径0.45m、深さ0.10mである。いずれもテラス状の段があり、P1はその部分から完形の大型甌(6)が転倒して潰れた状態で出土している。P4も同様に完形の甌(5)が出土している。位置的にはP2・3が主柱穴の可能性がある。いずれも円形で、径0.20~0.25m、深さ0.15mである。覆土は確認できなかった。壁周溝は遺構の東側から南側に設けられていた。幅0.15~0.25m、深さ0.05mで、覆土は黄褐色土を多く含む黒褐色土であり、埋戻しの可能性がある。

遺物は床面付近を中心に、土師器の高壺、甌、

甌が出土した。覆土からは、混入の古墳時代前期の壺、高壺、鉢が出土している。1は高壺で、壺部下半の段の部分で剥離している。2~5・8は甌である。4は粘土紐の積み上げ単位が明瞭に認められる。底部は輪台状で、底面は無調整である。5は完形に近い。胴部のヘラケズリはやや不規則である。8は底部で、底面の粘土板に胴部の粘土紐を積み、内側に粘土を詰めて指で圧着している。6は大型甌である。開裂が多く、粘土紐の積み上げ単位が明瞭に認められる。7は胴部の張りがないため甌としたが、径が細く、長胴甌の可能性がある。粘土紐の積み上げ単位の凹凸が明瞭に認められる。9~12は古墳時代前期のものである。11は鉢で、積み上げ単位が明瞭である。刷毛目後ヘラナデが施されている。10は二重口縁壺と



第83図 第33号住居跡出土遺物

考えられる。風化のため、調整は不明である。

第36号住居跡（第84・85図）

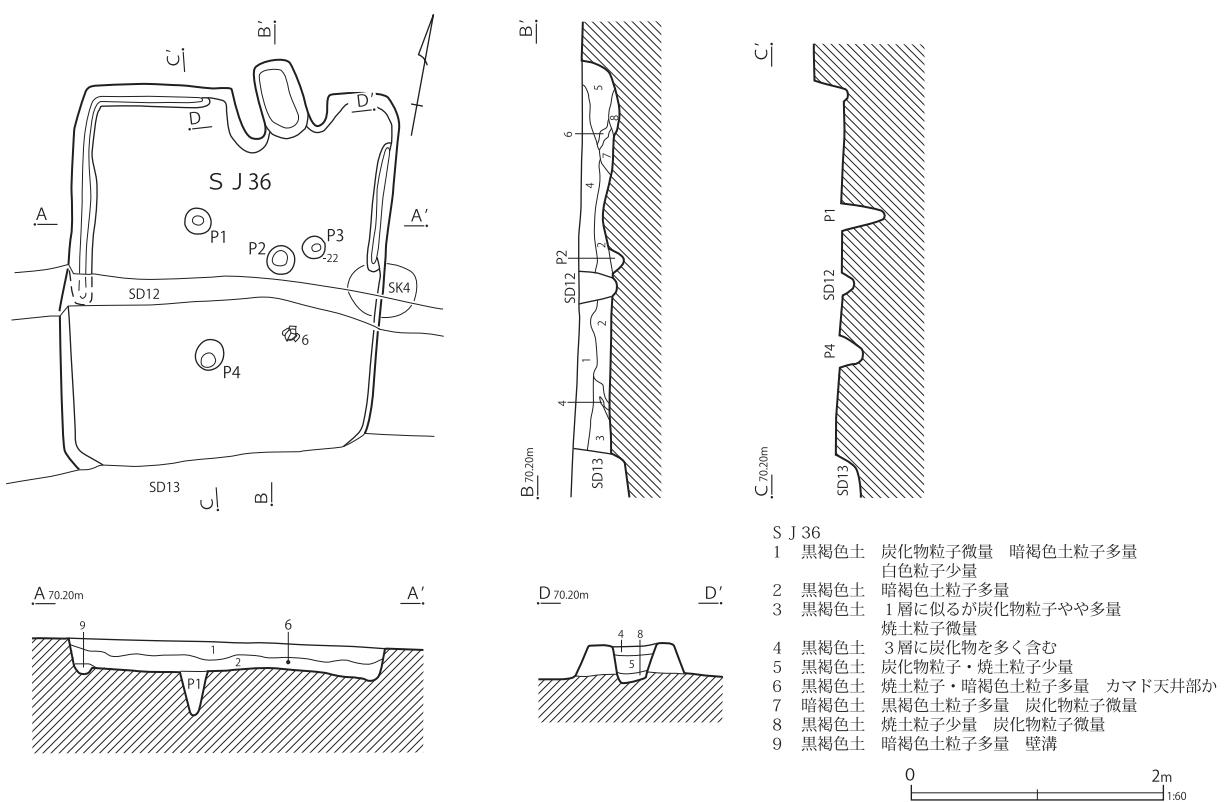
B区の北側、F-4グリッドに位置する。本調査区内では同時期の住居跡は分布していない。第2号河川跡の南岸2.0mに当たる。第12・13号溝跡・第4号土壙と重複し、そのいずれよりも古い。

平面形は縦長の長方形である。主軸方位はN-10°-Wで、北カマドである。規模は主軸方向2.90m、直交軸方向2.50mである。深さは0.20～0.25mで、床面は中央付近がやや高くなっている。

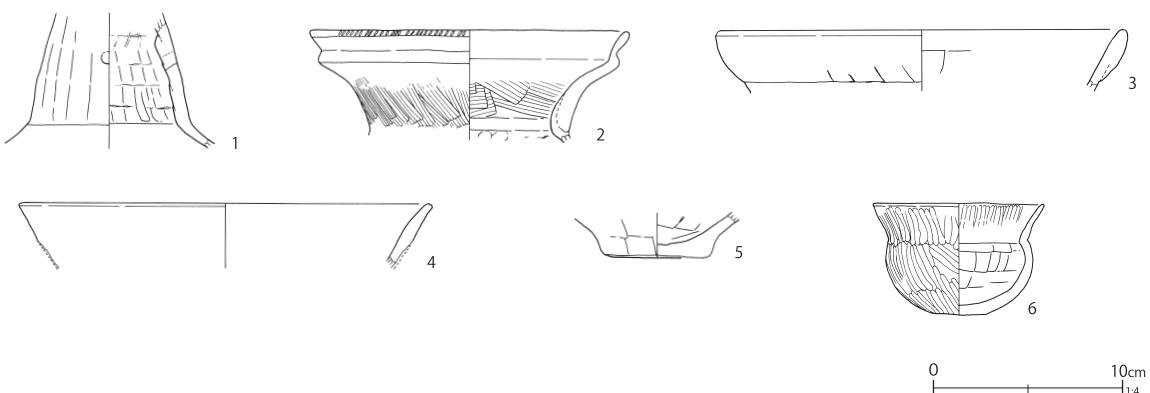
覆土は黒褐色土で、自然堆積である。

第36表 第33号住居跡出土遺物観察表（第83図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	高壺	(18.4)	4.0	—	A B C D H I J	25	普通	明赤褐	No.3	34-3
2	土師器	甕	(14.7)	3.8	—	A B C H I K	15	普通	にぶい橙		
3	土師器	甕	—	6.6	6.0	A C E H I	100	普通	赤褐	外面煤	34-4
4	土師器	甕	17.4	32.0	6.3	A C E H I	90	普通	橙	カマド	34-7
5	土師器	甕	17.2	29.6	7.0	A C E H I K	90	普通	明赤褐	No.2	35-1
6	土師器	甕	22.2	28	7.6	A C E H I	100	普通	橙	No.1	35-2
7	土師器	甕	(19.6)	21.2	—	A C E H I K	50	普通	にぶい赤褐	カマド	35-3
8	土師器	甕	—	2.6	7.0	A B H I K	60	普通	橙	カマド	34-5
9	土師器	壺	(16.0)	6.7	—	A B C D H I K	20	普通	明赤褐	五領	34-6
10	土師器	壺	(17.9)	3.9	—	A C E H I K	10	普通	橙	No.3 五領	
11	土師器	鉢	(9.5)	3.6	—	A C H I K	10	普通	明赤褐	五領	
12	土師器	高壺	—	5.3	—	A C E H I	40	普通	明赤褐	五領	



第84図 第36号住居跡



第85図 第36号住居跡出土遺物

第37表 第36号住居跡出土遺物観察表（第85図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	高壺	—	7.1	—	A C H I K	25	普通	橙		
2	土師器	壺	16.6	5.8	—	A B C E H I K	25	普通	明赤褐	五領	
3	土師器	壺	(21.6)	3.2	—	A C E H I K M	5	普通	明赤褐	五領	
4	土師器	壺	(21.6)	3.4	—	A C E H I K	15	普通	にぶい黄橙	五領	
5	土師器	甕	—	2.4	5.6	A C H I K	75	普通	橙	五領	
6	土師器	壺	8.9	5.8	—	A C H I K	90	普通	橙	No.1 五領	36-4

カマドは北壁に設けられていた。規模は全長0.80m、幅0.95mで、カマドの軸方位は西側にやや振れている。燃焼部はやや突出している。段を持って煙道に至ると考えられるが、削平されている。カマドは全体に天井が崩落した状態である。燃焼部は幅0.20mで、土壙状にやや凹んでいる。あまり明瞭ではないが、6層が天井崩落土と考えられる。床面、壁面はよく焼けていた。袖は黄灰色粘土の貼り付けである。

床面からは柱穴4本、壁周溝を検出した。位置としては、P1・4が主柱穴であろうか。いずれもほぼ円形である。規模は径0.20~0.25m、深さはP1が0.35m、P2が0.10m、P3が0.13m、P4が0.16mである。覆土は確認できなかった。壁周溝は遺構の北側、東側、西側に設けられていた。幅0.10~0.15m、深さ0.05mで、暗褐色土を多く含む黒褐色土で埋没しており、埋戻しの可能性がある。

遺物は少量で、覆土中から出土した。器種は土師器の有段口縁壺、高壺、甕が出土し、前期の壺、甕、壺が混入している。1は高壺である。下位が張る柱状部で、外面ヘラナデ、内面は粘土紐の積み上げ痕が明瞭で、指ナデが加えられている。外側から径0.70cmの穿孔が施されている。2~6は古墳時代前期のものである。2は二重口縁状の壺口縁部で、上段が短く、端部に薄いヘラによる刺突が施されている。3は複合口縁壺、4は二重口縁壺と考えられるが、いずれも風化が著しく調整は不明である。6の壺はほぼ完形である。外面全体と口縁部内面はヘラ磨き、底面と体部内

面はヘラナデが施されている。

（2）住居跡出土の石製品（第86図）

住居跡、土壙などの遺構出土の石製品は、紡錘車1点、丸玉1点、管玉1点、砥石1点と臼玉22点である。

なお、臼玉は穿孔されている面を小口面とし、穿孔開始面を上面または正面とし、反対側を下面または裏面とした。両面から穿孔したものは、側面と直交する木口面を上面または正面とした。

第4号住居跡出土石製品（第86図1・2）

1は滑石製の紡錘車で半分以上欠損している。残存部は光沢と細かな擦痕が観察され、ヘラ状の工具による磨きと想定される。穿孔部は横方向の回転痕と螺旋状の擦痕を確認でき、製作時と使用時の痕跡と考えられる。被熱している。

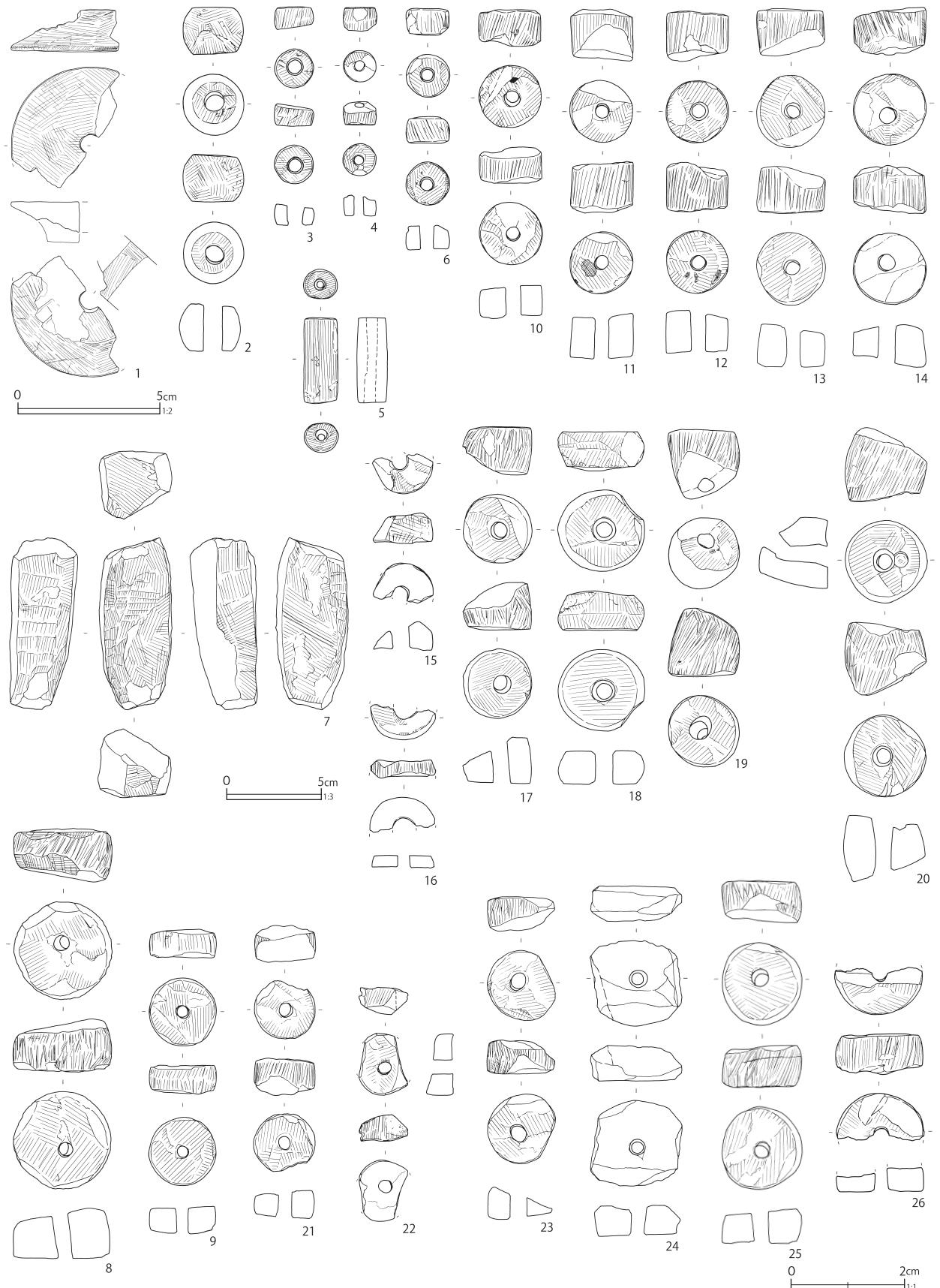
2は滑石製の丸玉で完形品である。丁寧に研磨されており、光沢を帶びている。穿孔部も丁寧に研磨していて回転痕等の製作時の痕跡を確認することはできない。

第13号住居跡出土石製品（第86図3）

3は滑石製の臼玉で、完形品である。比較的小さい。小口面も両面丁寧に研磨されており、他の臼玉とは性状が異なっている。穿孔部は、横方向の回転痕を確認することができる。

第14号住居跡出土石製品（第86図4・5）

4は滑石製の臼玉で、表面の大部分を欠損している。比較的小さい。側面に風化した割痕がありやや不整形ではあるものの、非常に丁寧な作りである。第13号住居跡出土の臼玉（第86図3）と同様な性状である。穿孔部は回転痕等の痕跡を確認



第86図 住居跡出土の石製品

第38表 住居跡出土石製品観察表 (第86図)

番号	器種	石材	最大径 (mm) 長さ (mm) : 幅 (mm)	厚さ (mm)	孔		重さ (g)	色調	側面研磨	備 考	図版
					上径 (mm)	下径 (mm)					
1	紡錘車	滑石	43.0 : 31.6	15.0	—	—	15.00	にぶい黄橙	有	SJ4	55-2
2	丸玉	滑石	10.7	8.4	3.7	3.5	1.47	黒	有	SJ4No.1 C	55-3
3	白玉	滑石	7.0	4.0	2.9	2.7	0.28	灰	有	SJ13 C	55-4
4	白玉	滑石	5.8	4.1	1.8	1.8	0.20	灰白	有	SJ14No.5 E	55-5
5	管玉	緑泥石	6.0	15.0	1.9	2.1	0.94	黒	有	SJ14No.9	55-6
6	白玉	滑石	7.7	4.7	2.5	2.4	0.48	灰白	有	SJ17No.1 C	55-7
7	砥石	凝灰岩	90.0 : 39.0	36.0	—	—	153.60	—	—	SJ16No.1 工具痕と使用痕混在	55-1
8	白玉	滑石	17.1	9.3	2.8	2.4	4.04	灰	有	SJ19 B	55-8
9	白玉	滑石	12.0	5.1	2.2	2.1	1.31	黄褐	有	SJ19No.1 C 側面の擦痕深め 側面不明瞭	55-9
10	白玉	滑石	11.0	6.3	2.8	2.5	1.26	灰オリーブ	有	SJ24カマド2No.2 C	55-10
11	白玉	滑石	11.0	9.2	2.3	2.5	1.74	灰黄	有	SJ24カマド2No.3 C	55-11
12	白玉	滑石	11.0	8.7	3.1	2.9	1.79	灰	有	SJ24カマド2No.1 C	55-12
13	白玉	滑石	12.0	8.3	2.9	2.9	1.93	灰	有	SJ24カマド2 B	55-13
14	白玉	滑石	12.7	8.4	3.1	3.0	2.03	綠灰	有	SJ24No.7 A	55-14
15	白玉	滑石	10.7	5.3	—	—	0.50	灰白	有	SJ24カマド2 E	55-15
16	白玉	滑石	11.5	3.2	—	—	0.23	灰	有	SJ24 A	55-16
17	白玉	滑石	12.2	8.3	2.9	3.2	1.72	灰	有	SJ24No.4 B	55-17
18	白玉	滑石	15.1	7.2	4.0	4.2	25.00	灰	有	SJ24No.6 E 側面の加工不明瞭 算盤形	55-18
19	白玉	滑石	12.6	12.1	3.0	3.9	2.59	灰	有	SJ24No.5 A	55-19
20	白玉	滑石	14.3	12.9	3.8	3.6	3.40	黄灰	有	SJ24貯蔵穴 C 穿孔ミス有り	55-20
21	白玉	滑石	10.7	6.3	2.5	2.8	0.86	にぶい黄橙	有	SJ27No.1 B	55-21
22	白玉	滑石	10.7	4.7	2.4	2.5	0.56	灰	有	SJ28No.3 A	55-22
23	白玉	滑石	12.0	6.1	2.9	3.0	1.20	灰白	有	SJ28床直 C	55-23
24	白玉	滑石	16.2	6.3	3.2	2.9	2.12	灰	無	SJ28P4 B 側面円形加工なし	55-24
25	白玉	滑石	14.2	7.5	3.1	2.7	2.35	灰白	有	SJ28No.1 C	55-25
26	白玉	滑石	15.5	7.1	2.7	2.5	1.30	灰白	有	SJ28P2 C 上半分欠損	55-26

することができなかった。

5は緑泥石の管玉で一部を発掘時に欠いているが、ほぼ完全な形で残っている。小口面、側面ともに丁寧に研磨されている。穿孔部は孔の中央部付近でズレを確認することができるため、両面からの穿孔と考えられる。

第16号住居跡出土石製品 (第86図7)

7は凝灰岩製の砥石である。全面に使用痕と思われる擦痕と、一部に工具の痕跡が確認できる。

第17号住居跡出土石製品 (第86図6)

6は滑石製の白玉で、ほぼ完形品である。比較的小さい。第13号住居跡出土の白玉 (第86図3) より若干大きいものの、小口面の丁寧な研磨状態から3と同様の性状を示している。穿孔部は横方

向の回転痕と縦方向の擦痕が確認できる。

第19号住居跡出土石製品 (第86図8・9)

8は滑石製の白玉で、完形品である。大型で一部に工具による削りが残っている。形状はやや丸みのある算盤玉形で、側面には溝状の擦痕が確認される。穿孔部は横方向の回転痕が確認され、孔の出入り口部分は摩滅している。

9は滑石製の白玉で、完形品である。薄い円筒形である。小口面の丁寧な研磨が確認されるが、側面の擦痕は風化が著しくやや不明瞭である。穿孔部は横方向の回転痕と縦方向の擦痕を確認できる。

第24号住居跡出土石製品 (第86図10~20)

10は滑石製の白玉で完形品である。薄い円筒形で、側面に溝状の擦痕が確認できる。穿孔部は横

方向の回転痕と縦方向の擦痕を確認することができる。

11は滑石製の臼玉で、完形品である。正面から側面にかけて風化した割痕があるが、形状は薄い円筒形と思われる。側面は風化によりやや不明瞭であるが、溝状の擦痕を確認できる。穿孔部は横方向の回転痕と縦方向の擦痕が確認される。

12は滑石製の臼玉で、完形品である。形状は薄い円筒形である。側面に溝状の擦痕を確認できる。穿孔部は横方向の回転痕と縦方向の擦痕を確認できる。

13は滑石製の臼玉で、完形品である。形状は薄い円筒形で、正面に工具痕のような削りを確認できる。側面に溝状の擦痕を確認できる。穿孔部は横方向に回転痕が確認できるが、一部摩滅により不明瞭である。

14は滑石製の臼玉で、裏面を欠損している。薄い円筒形で、側面に非常に深い溝状の擦痕を確認できる。穿孔部は横方向の回転痕が観察される。

15は滑石製の臼玉で、正面と側面の一部を除き欠損している。

16は滑石製の臼玉で、正面と側面の一部を除き欠損している。側面は溝状の擦痕が確認できる。穿孔部は横方向の回転痕が確認できる。

17は滑石製の臼玉で、完形品である。形状は薄い円筒形である。正面部の磨き残し以外は丁寧に小口面を研磨している。側面は溝状の擦痕を確認できるが、風化のためやや不明瞭である。穿孔部はやや摩滅しているが、横方向の回転痕を確認できる。

18は滑石製の臼玉で、完形品である。形状は側面に稜のある算盤玉形で、風化が著しい。小口面は比較的丁寧な研磨が施されているが側面は風化が著しく溝状の擦痕を確認することができなかつた。穿孔部も非常に不明瞭で詳細を確認することができなかつた。

19は滑石製の臼玉で完形品である。形状は不整形で、小口面の研磨を確認できるが、正面部には

平坦な面が作り出されていない。側面は溝状の擦痕を確認できるが、溝の方向は一様でなく無秩序である。穿孔部は横方向の回転痕が確認され、両面穿孔と思われる孔内の段差が確認された。

20は滑石製の臼玉で完形品である。形状は不整形で、正面に穿孔を失敗した痕跡が確認される。裏面には棒状のもので削ったような傷痕がある。側面は溝状の擦痕を確認することができる。穿孔部はやや摩滅しているが、横方向の回転痕が確認され、若干縦方向の擦痕も観察される。

第27号住居跡出土石製品（第86図21）

21は滑石製の臼玉で完形品である。形状は薄い円筒形である。側面に溝状の擦痕が確認される。穿孔部は摩滅により不明瞭ではあるが横方向の回転痕が確認される。

第28号住居跡出土石製品（第86図22～26）

22は滑石製の臼玉で裏面と側面の大部分を欠損する。形状は薄い円筒形で、残存部は比較的丁寧な磨きが施されている。穿孔部は摩滅していて不明瞭ではあるが、横方向の回転痕が確認される。

23は滑石製の臼玉で完形品である。形状は不整形で、正面部に工具痕と思われる削りを観察できる。側面は溝状の擦痕が確認される。穿孔部は横方向の回転痕と一部縦方向の擦痕が確認される。

24は側面に円形の加工が施されていないが、大きさと石材が同様なため、臼玉と判断した。穿孔部は摩滅していて不明瞭である。

25は滑石製の臼玉で完形品である。形状は丸みのある算盤玉形で、小口面は比較的丁寧に研磨されている。側面は深い溝状の擦痕を確認できるが、溝の方向は一様でなく無秩序である。穿孔部は横方向の回転痕が観察される。

26は滑石製の臼玉で半分欠損している。形状は薄い円筒状で、残存している小口面に擦痕を確認することはできない。側面は深い溝状の擦痕を確認できる。穿孔部は摩滅により不明瞭であるが、横方向の回転痕と縦方向の擦痕が観察される。

(3) 溝跡

古墳時代の溝跡は第4・6・10～13号溝跡である。A区以外の全ての調査区に分布し、密集した分布は見られない。

第4号溝跡（第87・89図）

C区の南端、M-2グリッドに位置する。遺構の東西は調査区域外にかかり、調査区を横断する形になっている。北側2.0mに第13号住居跡がある。規模が大きく、用水等の機能が考えられよう。

軸方位はN-73°-Wである。検出された長さは3.00mにとどまる。幅6.60m、深さは0.90～1.70mである。断面形は不整な逆台形である。覆土は灰黄褐色、褐灰色のシルト、黒褐色土を主体とし、砂礫層（9・14・18）を含んだ構造になっており、4段階の大きな単位が認められる。第1段階は15～18層、第2段階は10～14層、第3段階は4～9層、第4段階は1～3層である。第1～3段階の土層から古墳時代後期の遺物、第4段階の土層から平安時代の遺物が出土し、全体に古墳時代前期の遺物が混入する。

1～4・7は古墳時代後期のものである。1は壺蓋模倣壺である。風化が著しく調整は不明である。2は須恵器の壺である。外面黒灰色、内面赤褐色を呈し、断面サンドイッチ状である。平底短頸壺か。7は須恵器甕口縁の複合部である。多孔質で、チャートを含む。未野産。5は須恵系土師質土器の高台付壺である。10世紀前半。6は古墳時代前期と考えられる鉢である。表面が融けた状態である。口縁部に開けられた孔の部分と考えられる。

第6号溝跡（第87・89図）

D区の中央、北側、0-1・2グリッドに位置する。遺構の東西は調査区域外にかかり、調査区を横断する形になっている。北側2.0mに第6号住居跡がある。

軸方位は、N-73°-Wである。検出された長さは6.30mである。幅0.80～0.90m、深さは0.30mである。下端は幅が狭く、断面形は不整台形であ

る。西から東へと深くなっている。覆土は灰黄褐色土の单層である。

遺物は覆土中から散在して出土した。器種は、古墳時代後期の土師器の壺、壺、甕の破片である。8・9は壺蓋模倣壺である。8は風化が著しく調整不明である。

第10号溝跡（第87・89図）

C区の北側、J-3グリッドに位置する。遺構の南側は調査区域外に延びる。直交する方向に第11号溝跡が、西側直近に第30号住居跡、北側2.0mに第33号住居跡がある。

軸方位は、N-5°-Eである。検出された長さは5.30mである。幅1.15m、深さは0.10mである。下端は幅が広く、断面形は不整台形である。南から北へと深くなっている。覆土は確認できなかつた。

遺物は覆土中から散在して出土した。器種は、古墳時代後期の甕が多く、古墳時代前期のS字状口縁台付甕、刷毛目甕の破片が混入していた。12は小型のS字状口縁台付甕である。色調は灰白色を呈するが、在地の粘土が使われている。

第11号溝跡（第87図）

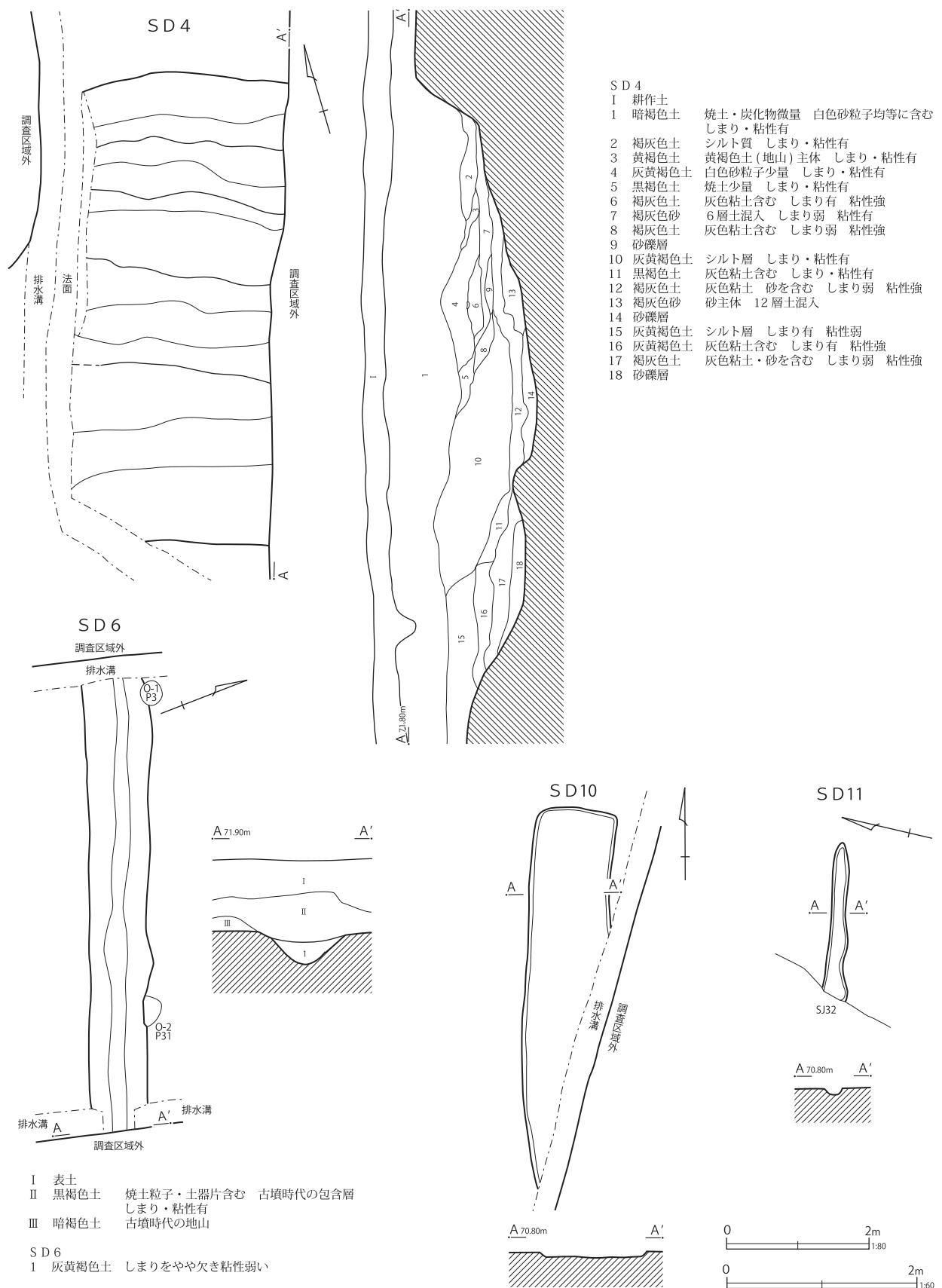
C区の北側、J-3グリッドに位置する。遺構の西側は調査区域外に延びる。第32号住居跡と重複し、本溝跡が新しい。同時期の遺構としては、直交する方向に第10号溝跡が、南側直近に第30号住居跡、北側3.0mに第33号住居跡がある。

遺物は出土していないが、重複関係、周辺の遺構の時期から古墳時代後期の遺構とする。

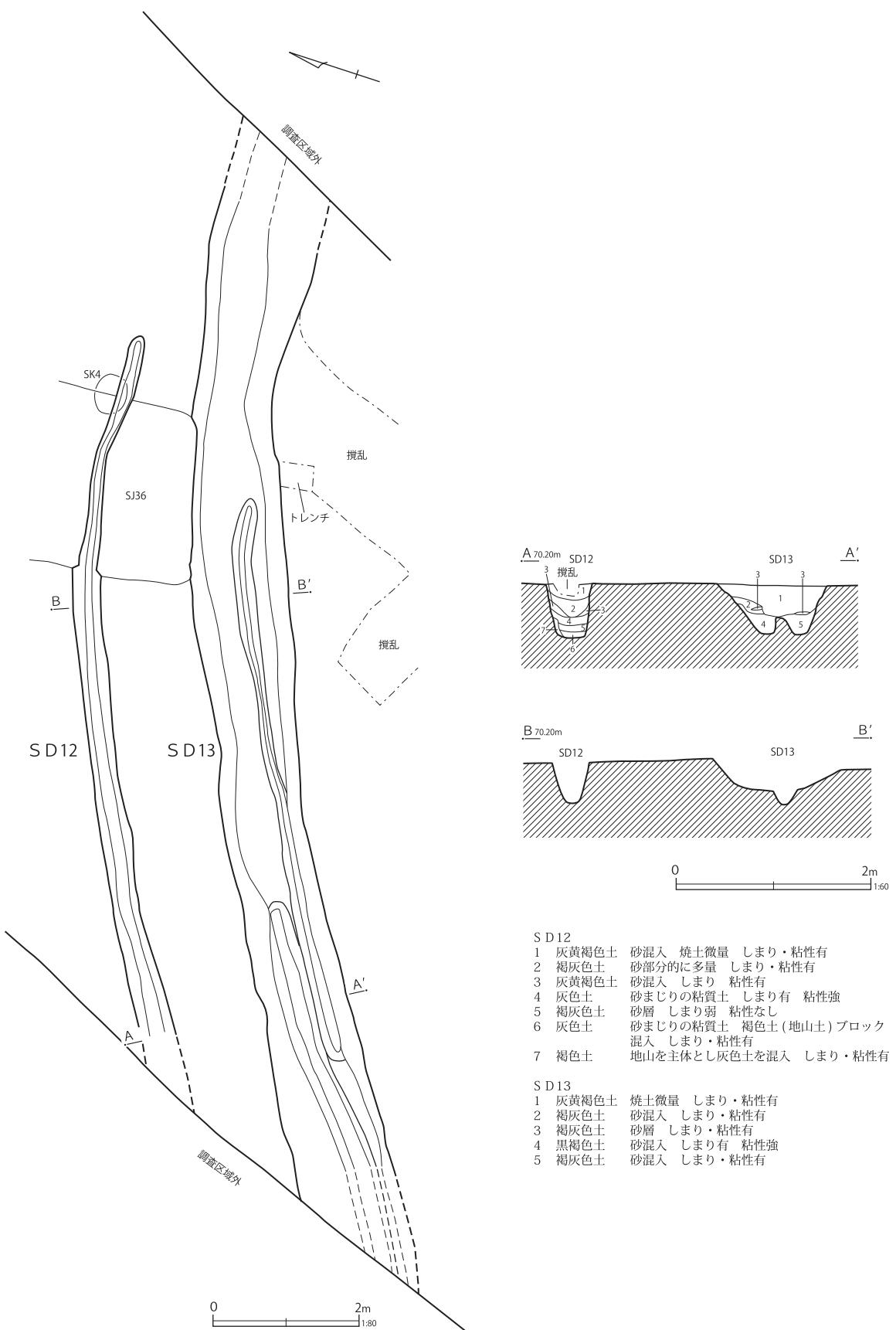
軸方位は、N-80°-Eである。検出された長さは2.20mである。幅0.20～0.30m、深さは0.05mである。西から東へと若干深くなっている。覆土は確認できなかつた。

第12号溝跡（第88・89図）

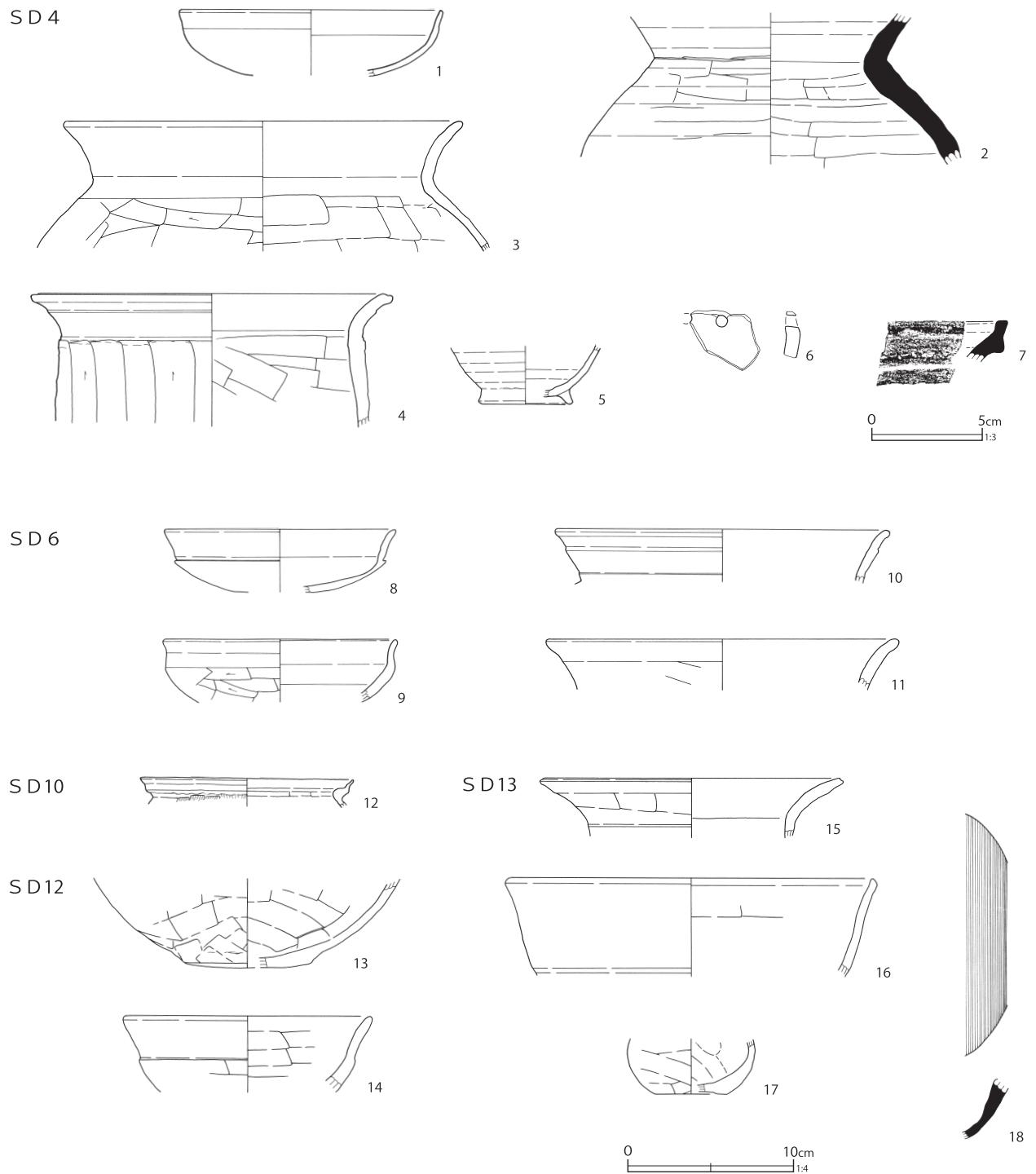
B区の北側、F-3・4グリッドに位置する。遺構の南西側は調査区域外に延びる。第36号住居跡、第4号土壙と重複し、本溝跡が新しい。南側



第87図 第4・6・10・11号溝跡



第88図 第12・13号溝跡



第89図 溝跡出土遺物

1.5mに並行して第13号溝跡が、南側4.5mに第34・37・38号住居跡がある。

覆土や出土遺物の様相から、第13号溝跡と同時に使われていた可能性が高い。

軸方位は、N—84°—Eである。検出された長さは10.40mである。幅0.15～0.30m、深さは0.40～

0.55mである。東から西へと深くなっている。断面形は箱形、もしくは高さのある逆台形である。覆土は、砂を多く含む灰黄褐色土、褐灰色土を主体とする自然堆積である。

遺物は少量で、古墳時代後期の土師器壺、甕、高坏の破片が、覆土中から散在して出土している。

第39表 溝跡出土遺物観察表（第89図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	壺	(15.8)	4.2	—	C H I K	15	普通	橙	SD4	
2	須恵器	壺	—	9.7	—	E H I	15	普通	褐灰	SD4 外面黒灰色、内面赤褐色	
3	土師器	甕	(24.0)	8.3	—	A C E H I K	40	普通	にぶい橙	SD4	37-4
4	土師器	甕	(20.8)	18.5	—	A H I K	20	普通	橙	SD4	37-5
5	須恵系土師	高台付壠	—	3.8	(5.6)	A C H I K	20	普通	橙	SD4 10C前半	
6	土師器	鉢	—	—	—	A H I K	5	普通	橙	SD4 長さ2.8cm 幅3.15cm	
7	須恵器	甕	—	1.9	—	A H I K	5	良好	灰	SD4 未野	
8	土師器	壺	(13.8)	4.0	—	A C E H I	25	普通	橙	SD6	
9	土師器	壺	(14.0)	4.0	—	A B H I K	15	良好	にぶい橙	SD6	
10	土師器	壺	(20.2)	2.4	—	A B C H I K	5	普通	にぶい黄橙	SD6	
11	土師器	甕	(21.2)	3.2	—	A C E H I	5	普通	にぶい橙	SD6	
12	土師器	台付甕	(12.8)	1.8	—	A B C H I	10	普通	にぶい黄橙	SD10	
13	土師器	壺	—	5.7	(7.6)	A C E H I K	20	普通	橙	SD12	
14	土師器	高壺	(15.0)	4.9	—	A B C E H I	5	普通	にぶい黄橙	SD12	
15	土師器	甕	(18.0)	3.7	—	A B C E H I	15	普通	橙	SD13	
16	土師器	壺	(22.0)	6.3	—	A C E H I	5	普通	明赤褐	SD13	
17	土師器	鉢	—	3.6	(4.4)	A C E H I	20	普通	橙	SD13	
18	須恵器	提瓶	—	2.7	—	H I K	15	良好	灰	SD13 群馬産	

13は壺の底部で内外面ヘラナデ、底面はヘラケズリである。14は高壺の壺部で器肉が厚い。

第13号溝跡（第88・89図）

B区の北側、F-4・5、G-3・4グリッドに位置する。遺構の東西は調査区域外に延びる。第36・39号住居跡と重複し、本溝跡が新しい。北側1.5mに並行して第12号溝跡が、南側2.0mに第34・37・38号住居跡がある。

覆土や出土遺物の様相から、第12号溝跡と同時に使われていた可能性が高い。

軸方位は、西側N-63°-E、東側N-78°-Eである。検出された長さは13.50mである。幅1.10~1.50m、深さは0.35~0.50mである。西から東へと深くなっている。断面形は下端が一段深くなる箱薬研形と逆台形の部分があり、遺構の西側は2箇所に平行の掘り込みがある部分も認められる。覆土は、砂を多く含む灰黄褐色土、褐灰色土を主体とする自然堆積である。

遺物は少量で、古墳時代後期の土師器甕を主体に、須恵器提瓶、古墳時代前期の壺、甕の破片が、覆土中から散在して出土している。15・18は

古墳時代後期のものである。15は小型の長胴甕で、全体が風化している。18は提瓶で、全体に力キ目が施されている。青灰色で重量感がある。群馬産。16・17は古墳時代前期のものである。16は駿河系の大型壺の口縁部と考えられる。内外面ヘラナデ後横ナデ。在地の粘土で作られた模倣品である。17は小型の鉢で、底部が輪台状で大きい。外面ヘラナデ、内面は指ナデである。古墳時代後期の可能性もあるが、焼成、色調からこの時期とする。

（4）土 壤

古墳時代後期の土壌は、A・B区から各1基が検出されている。

第3号土壌（第90図）

A区の南端、E-5グリッドに位置する。遺構の南側は調査区域外にかかる。

東西両側を河川跡で挟まれ、北東側3.0mに第1号祭祀跡の遺物集中地点がある。

平面形は、不整な楕円形と考えられる。軸方向はN-59°-Wである。規模は長軸0.75m、短軸は調査範囲で0.40mである。深さは0.15mである。

断面形は箱形に近い。底面はほぼ平坦である。覆土は焼土、炭化物を含む灰黄褐色土で、自然堆積である。河川跡が近いためか、粒径が大きい。

遺物は少量で、古墳時代後期の甕の破片が出土したのみである。

第4号土壙（第91・92図）

B区の北側、F-4グリッドに位置する。第36号住居跡、第12号溝跡と重複し、本遺構が最も新しい。南西側10.0mにG-3・4グリッドのピット群がある。

平面形は橢円形である。長軸方位はN-86°-Eである。規模は長軸0.60m、短軸0.40m、深さ0.35mである。断面形は逆台形である。底面はほぼ平坦である。覆土は焼土、炭化物を含む黒褐色土で、埋戻しの可能性がある。

遺物は少量で、古墳時代後期の土師器甕、壺、高坏の破片が散在して出土しているのみである。1は甕の底部である。底面までヘラケズリが施されている。

第40表 第4号土壙出土遺物観察表（第91図）

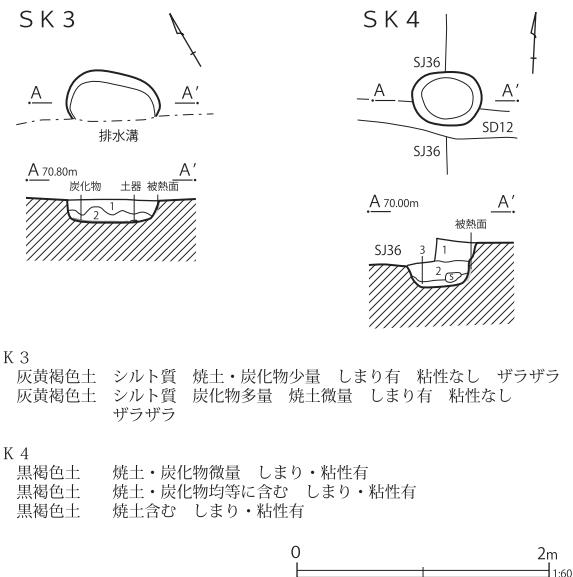
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	甕	-	2.1	(6.0)	B C H I K	70	普通	明赤褐		

（5）祭祀跡（第92～116図）

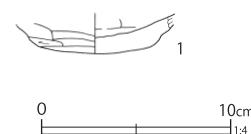
A区の南側からは祭祀跡が検出されている。溝や土壙などの施設を伴わず、複数の土器・鉄器が地表面に据え置かれた状態であった。

D-5グリッド南側、E-5グリッド北側を中心に、全体に広がった状態で分布する。北東側と南西側の2箇所に特に集中していた。北東側の広がりは、およそ東西3.6m、南北3.8m、南西側の広がりは東西4.6m、南北5.4mである。遺物を包含する土層は焼土・炭化物、白色粒子を含む灰黄褐色土、黒褐色土である。トレント10層の上面に堆積したものである。

D・E-5トレントの南側はこの土層が南側に



第90図 第3・4号土壙



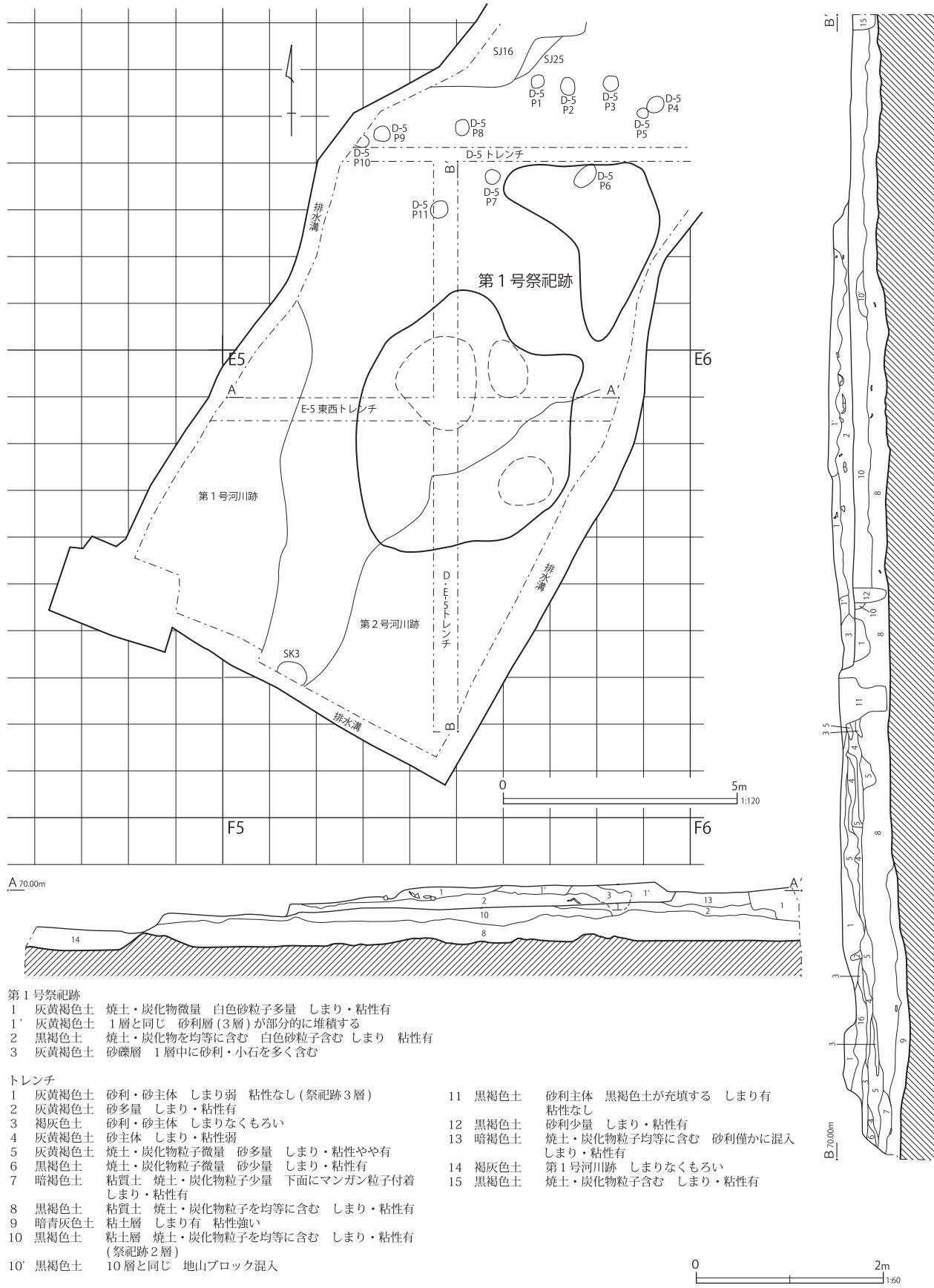
第91図 第4号土壙出土遺物

傾斜して堆積しており、位置的には第2号河川跡に面することから、河川にかかる祭祀跡と考えられる。

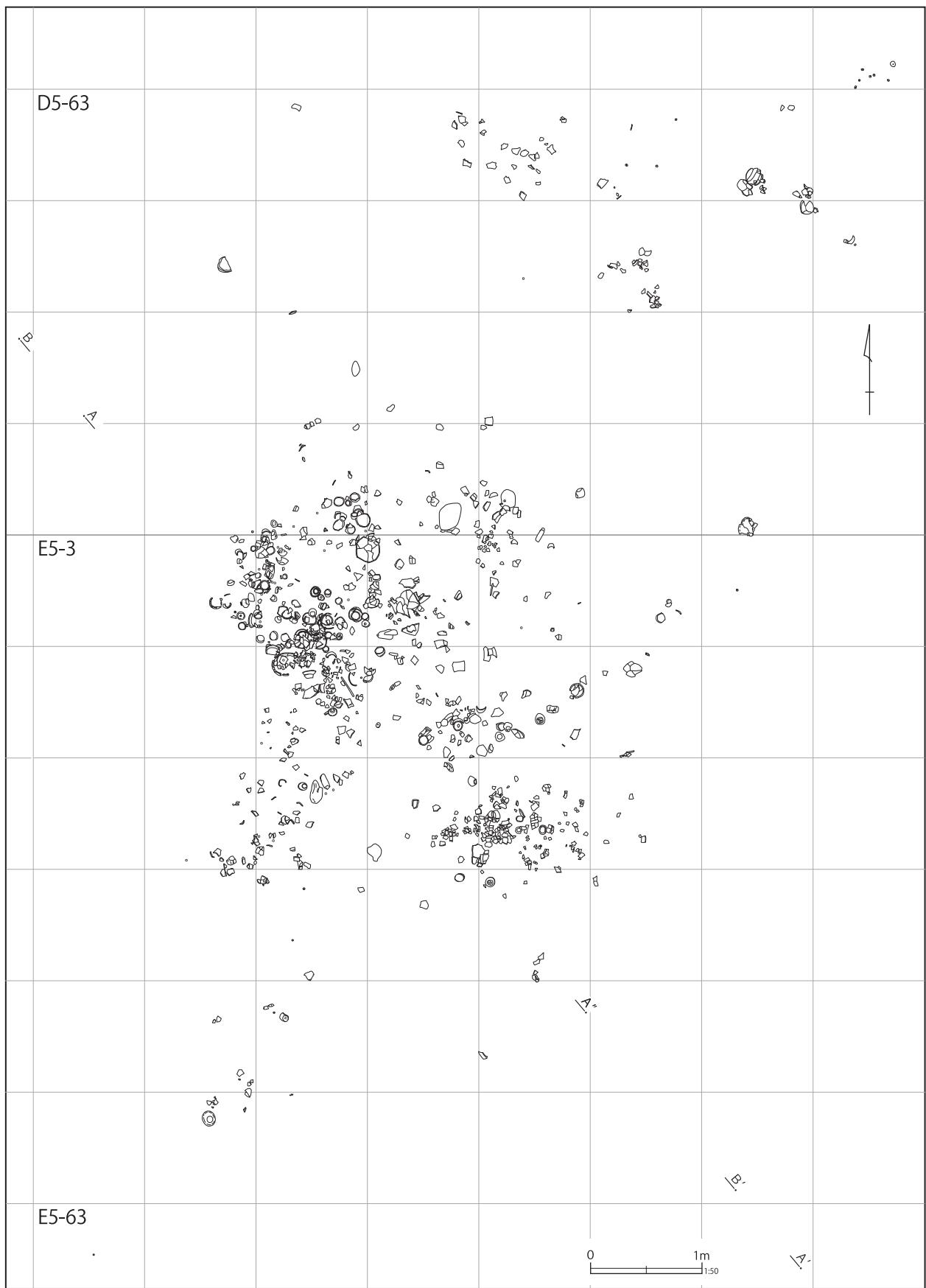
第1号祭祀跡の遺物出土状況について、全体を第92図に、分割した図を第93～97図に、器種別の図を第98～100図にそれぞれ示した。

第1号祭祀跡全体を見通すと、全体に均等かつ散漫な遺物の分布ではなく、大きく2つの地点に遺物の集中がみられ、それぞれの地点に更に幾つかのまとまりが見られることが分かる。

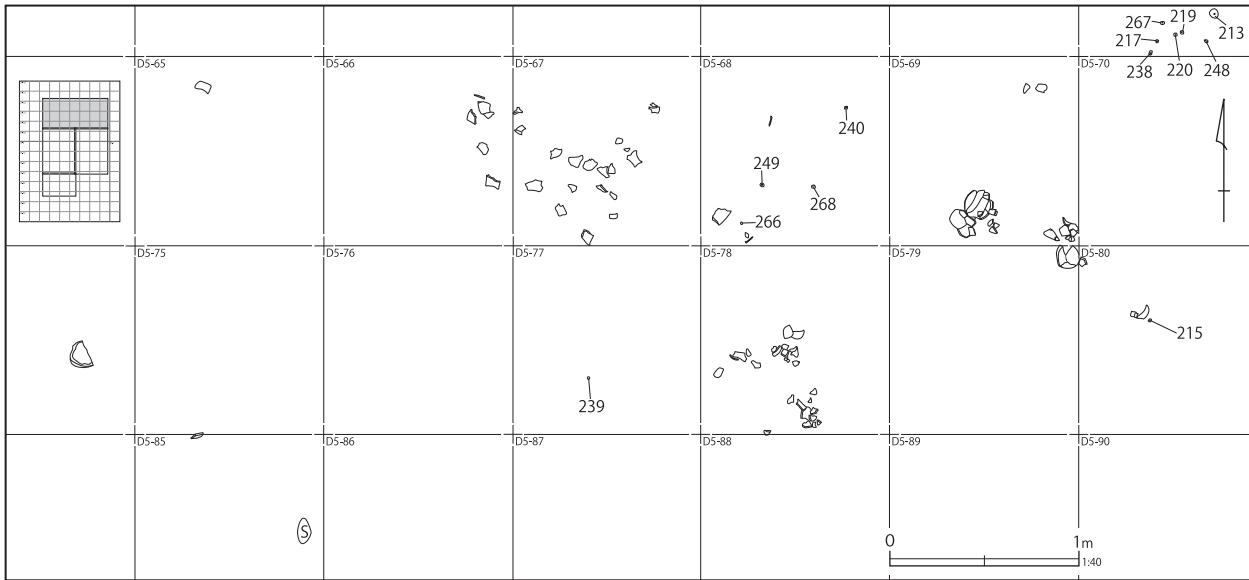
北東側のまとまりは散在的であり、南西側のまとまりは集中的である。北東側のまとまりをA群、南西側のまとまりをB群と呼称する。また、



第92図 第1号祭祀跡全体図



第93図 第1号祭祀跡遺物全体図



第94図 第1号祭祀跡遺物出土状況図（1）

A群とB群の中に見られるより細かいまとまりの各々をブロックと呼称し、第101図に示した。

A群は、4つのブロックから構成され、いずれのブロックも、遺物の分布は集中しない。

一方B群は、11個のブロックから構成されるが、5～7、9～11、14のブロックは遺物が密集し、8、12、13、15のブロックは遺物の集中が見られない。遺物の密度が高いブロックは、南西側のまとまりの中では、北西から南東に向けて続いているように見え、その周辺に遺物の密度が低いブロックが分布しているように見える。仮に前者をB1群、後者をB2群と呼ぶ。

次に、器種ごとの分布を見てゆく。まず、土師器壊では、A群については、実測可能個体が存在せず、僅かに1片がブロックに属さない形で検出されている。つまり、A群には、土師器壊は含まれていないと見て良いであろう。

一方、B群については、完形に近い壊の出土が目立ち、特にB1群にその傾向が顕著である。また、B2群には完形に近い壊の出土は希である。B1群中を更に細かく見てゆくと、5、9～11ブロックに集中的に分布している状況が見て取れる。更に、ブロック中でも、例えば9ブロックの北側、10ブロックの西側、11ブロックの北側など

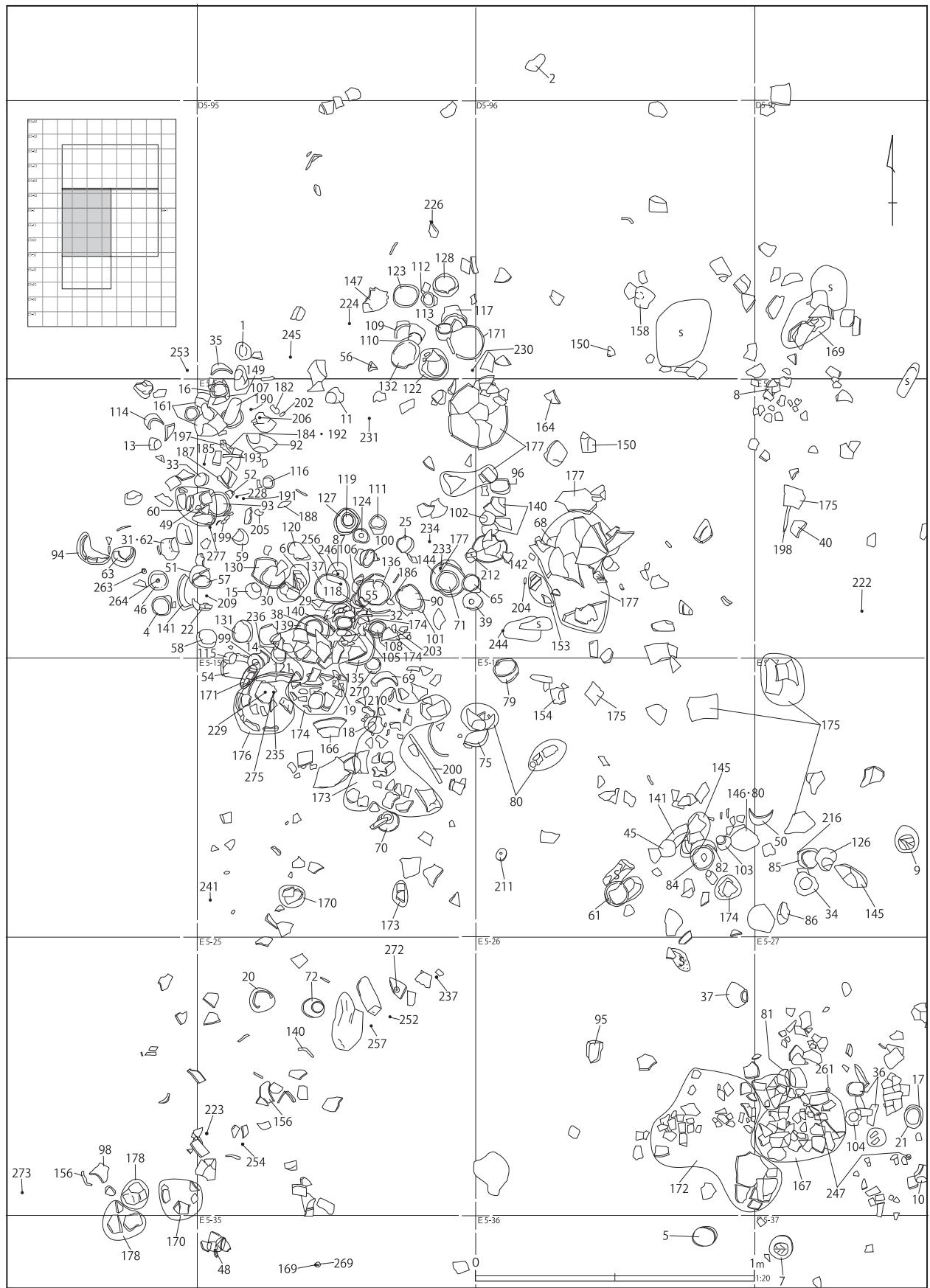
に集中する傾向が見られる。

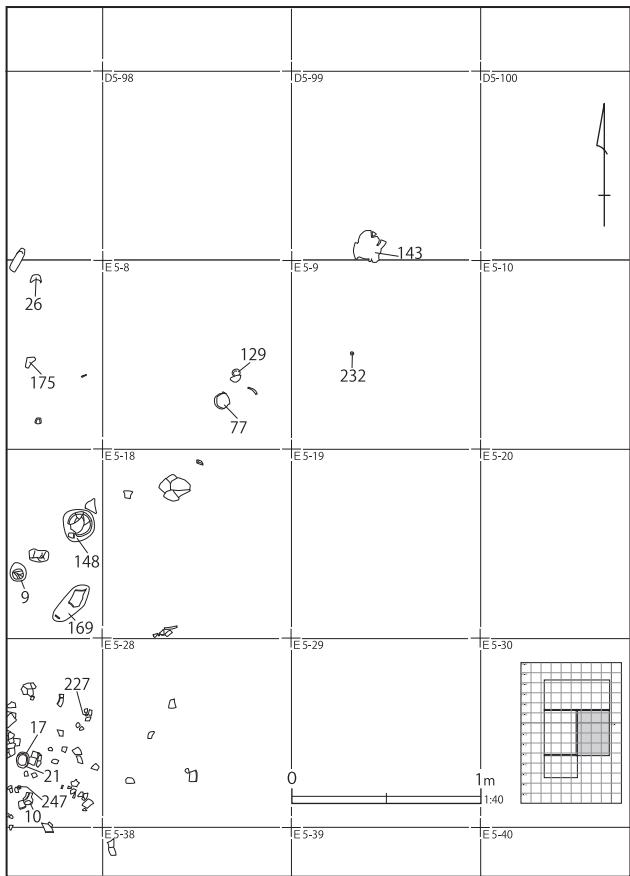
また、相互に接合しない土師器壊の破片は比較的少なく、各ブロックに散発的に見られるが、11、14ブロックには、ややまとまってみられる。また、7、12、15ブロックには全く含まれていない。

次に土師器甕を見てみると、A群については、図示できる個体は出土しておらず、破片が見られるのみである。

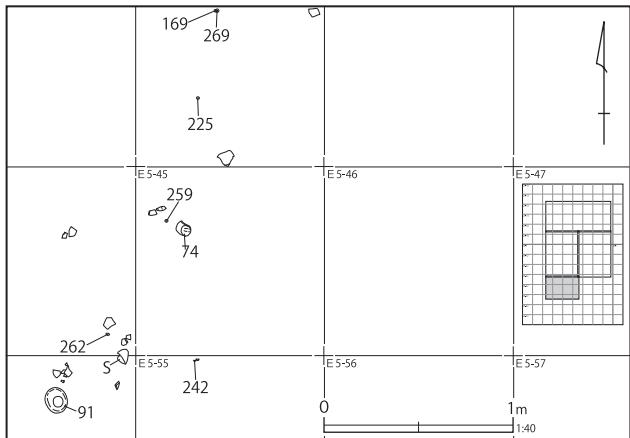
B群については、図示できる個体はB1群に集中する傾向が強いが、図示したB1群と同一と思われる破片がB2群からも少なからず出土している。9～11ブロックからは、完形に近い甕が出土し、一方、5～8、13、14ブロックからは、完形ではないが、図示可能な比較的大きな破片が出土している。その他の1～4、12、15ブロックからは、甕の大きな破片は出土していない。また、図示はできないが、同一個体と思われる破片の分布は、2、3、15以外のブロック全てにみられる。同一個体が見つからない単独の破片は、A群では、1、4ブロックに多く見られ、B群ではB1群に多く見られる。また、B1群でも例外的に10ブロックには、殆ど接合しない甕の破片は含まれていない。

土師器高壊はA群には見られず、B群のみから出土している。数量は極めて少なく、完形品は見





第96図 第1号祭祀跡遺物出土状況図（3）



第97図 第1号祭祀跡遺物出土状況図（4）

られない。5、8、14ブロックから各1片、13ブロックから2片（互いに接合）出土している。後世の搅乱により失われたものがある事を勘案しても、全てのブロックに1個体が含まれていたとは、考えられない。

土師器鉢は、土師器高壇同様にA群には見られず、B群のみから出土している。数量は極めて少なく完形品は見られない。7ブロックから1片、

5ブロックから2片（互いに接合）、9ブロックから3片、ブロック以外で8ブロックの北東側から1片、14ブロックの南側から2片（互いに接合）が出土している。

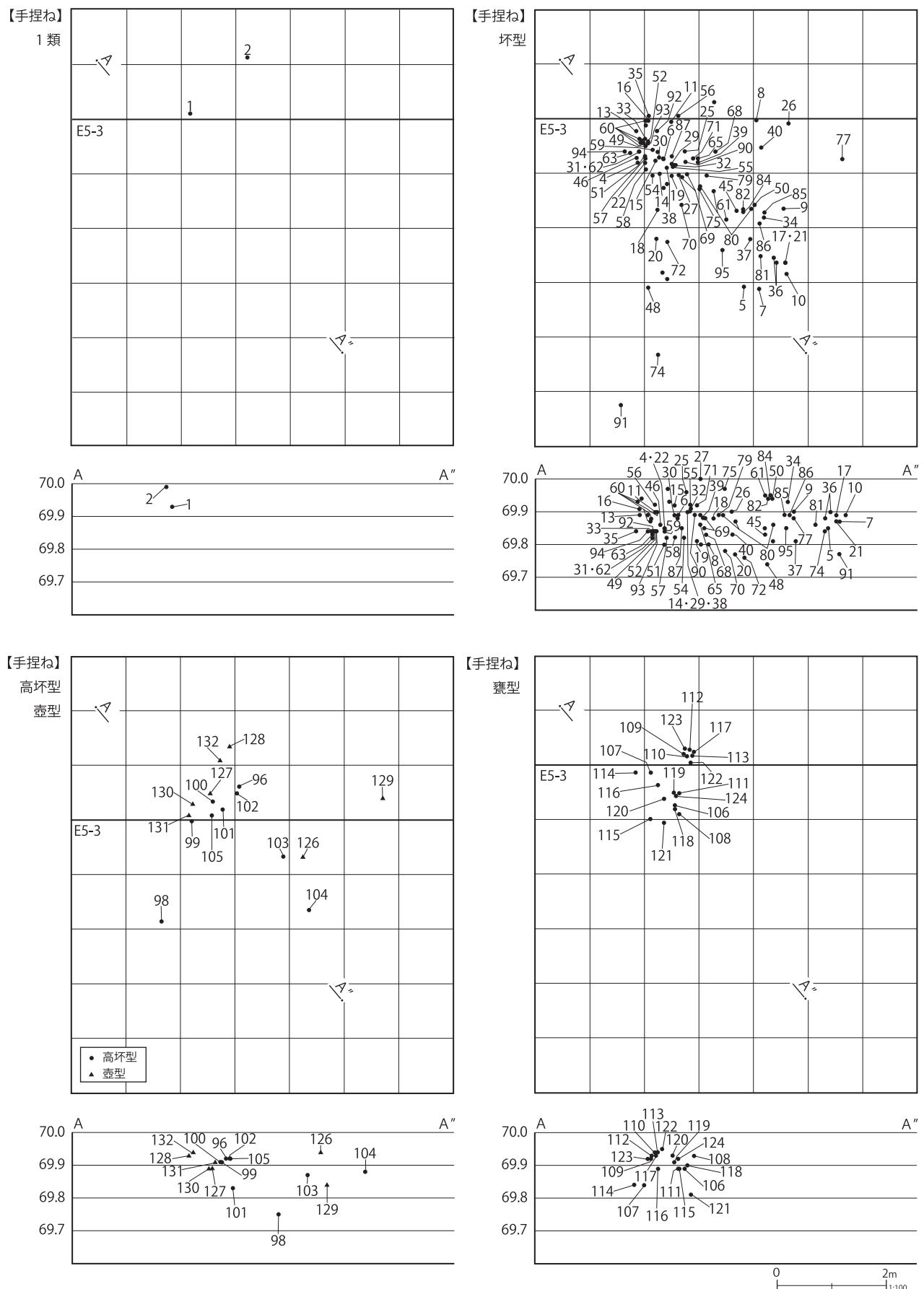
須恵器は、壺の破片が4点出土しているがいずれも小破片である。その中で出土位置が特定できるのは1点のみであり、10ブロックに見られる。

礫は、A群には見られず、B群の中で幾つかのブロックに2点程度含まれている。質量が100gを越えるものだけを抽出すると、5ブロックに2点、8ブロックに2点、10ブロックに2点、11ブロックに2点、12ブロックに1点、15ブロックに1点見られ、6、7、9、13、14ブロックからは、検出できなかった。

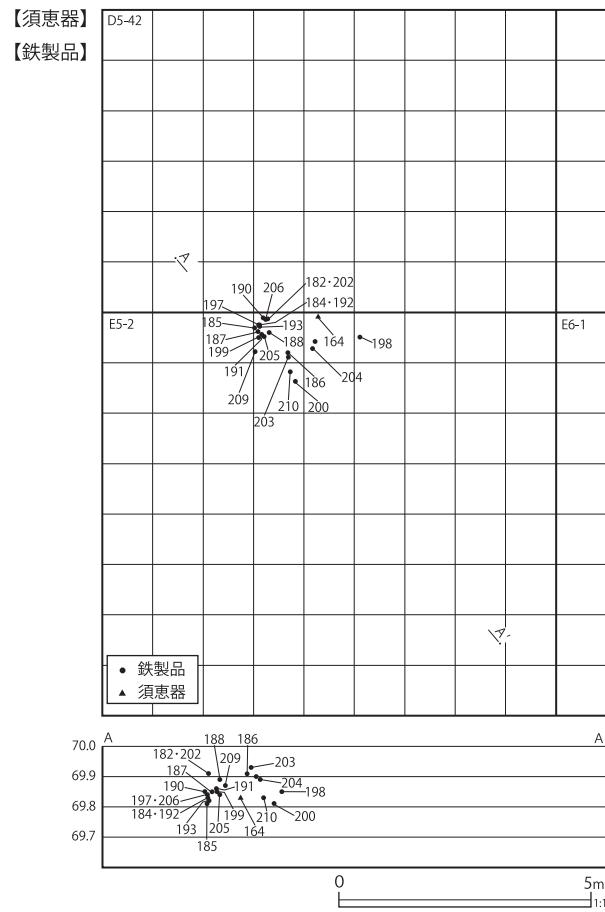
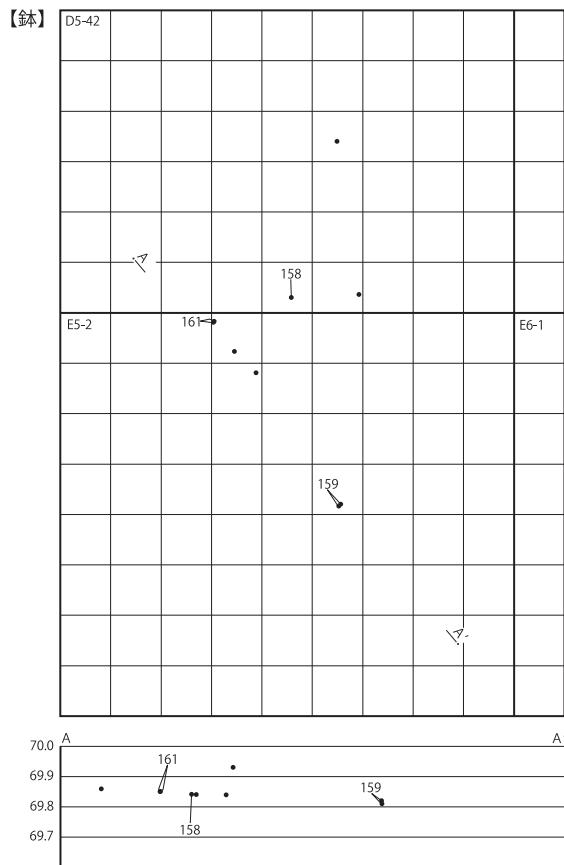
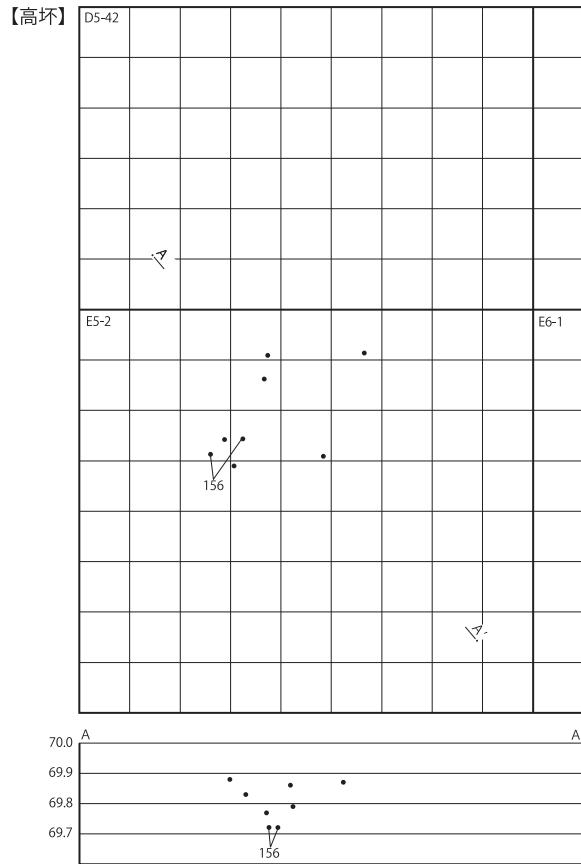
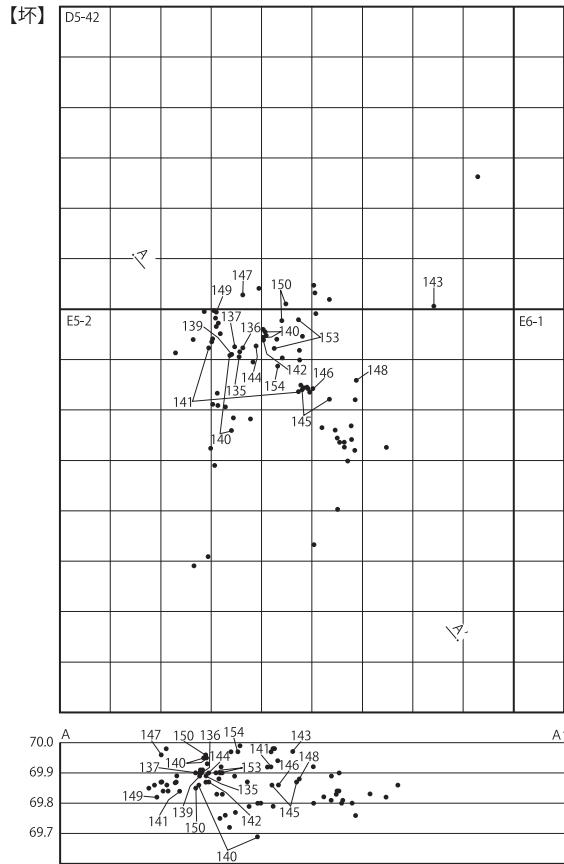
鉄製品は、A群には見られずB群のみから出土している。B群についても、5、8～10ブロックから出土しており、一部のブロックに集中している。5ブロックでは鉄鏃11点、刀子1点、棒状品1点、不明鉄製品1点、合計14点、8ブロックでは、鉄鏃1点のみ、9ブロックでは、鉄鏃2点、棒状品2点、合計4点、10ブロックでは、棒状品1点、不明鉄製品1点、合計2点が出土している。傾向としては、5、9の二つのブロックから集中的な出土が見られる。

石製品には、白玉と有孔円板が見られる。

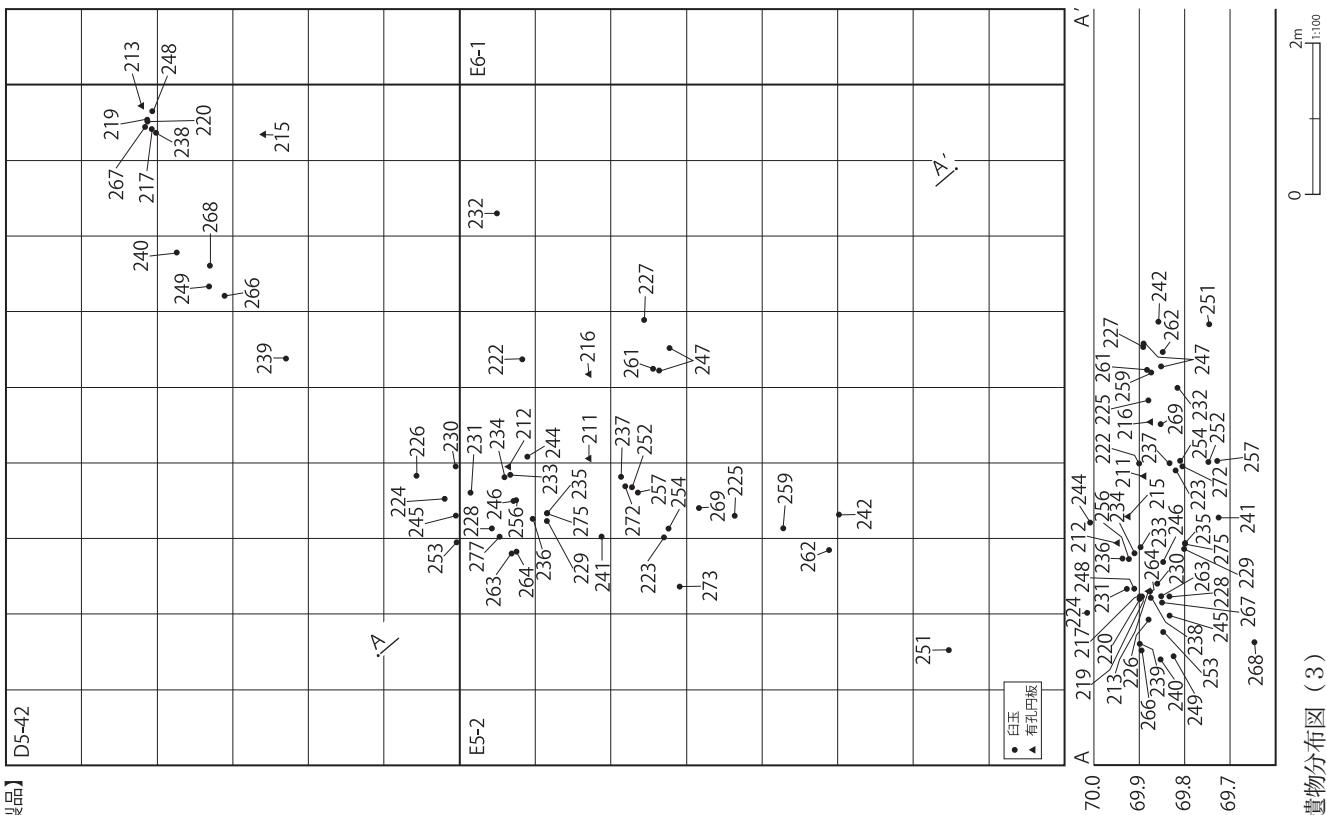
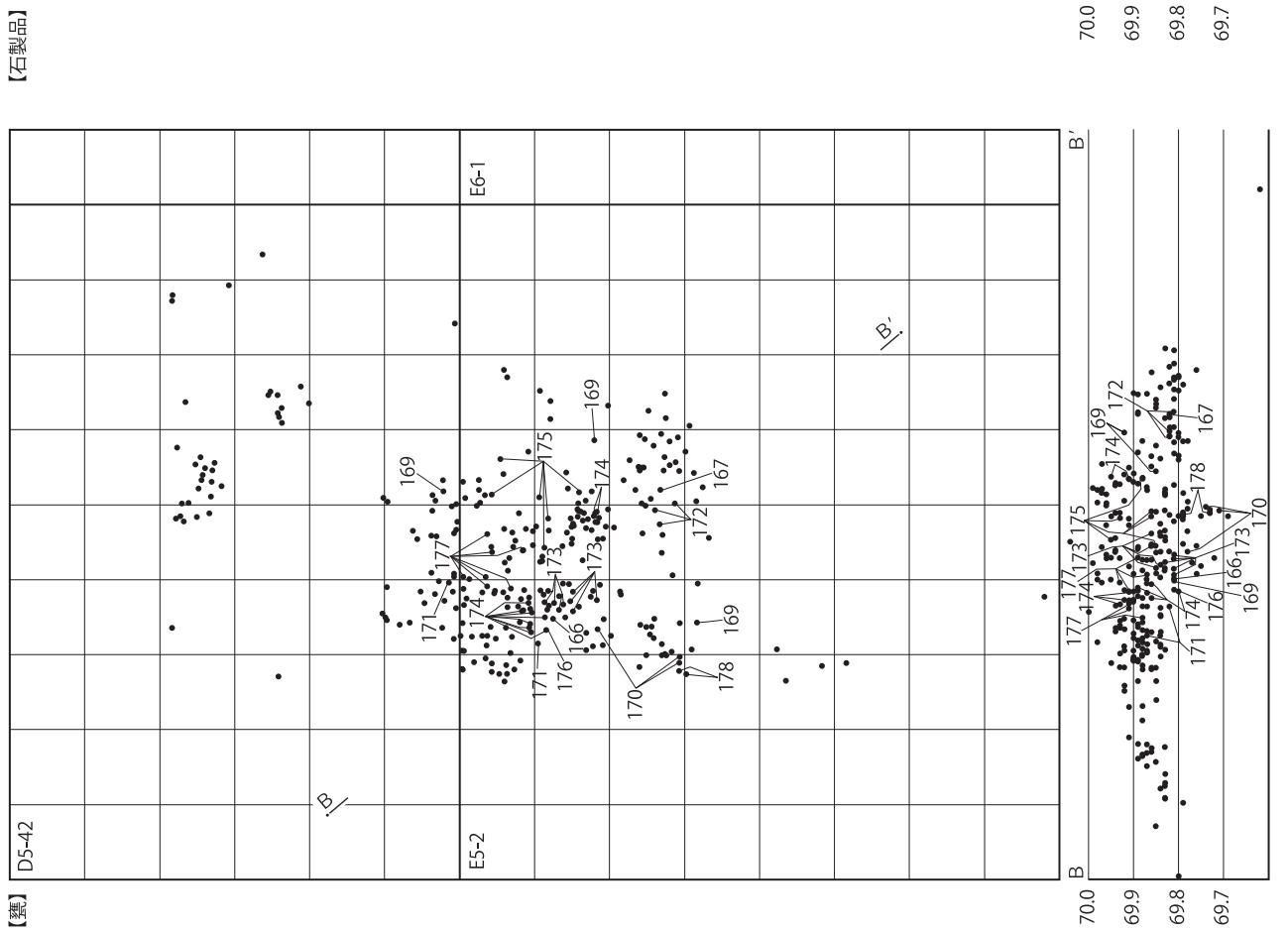
白玉については、A群では2、3ブロックから検出された。2ブロックでは4点、3ブロックでは6点、ブロック外から1点検出された。1、4ブロックからは検出されなかった。一方B群では5、6、8～10、13～15ブロックから検出された。5ブロック5点、6ブロック5点、8ブロック1点、9ブロック5点、10ブロック4点、13ブロック8点、14ブロック4点、15ブロック3点（うち2点は互いに接合）、ブロック外から4点検出された。7、11、12ブロックからは検出されなかった。3ブロックでは、一部分に集中してみられた。B群では、約半数のブロックからまとまって出土していた。



第98図 第1号祭祀跡遺物分布図（1）



第99図 第1号祭祀跡遺物分布図（2）



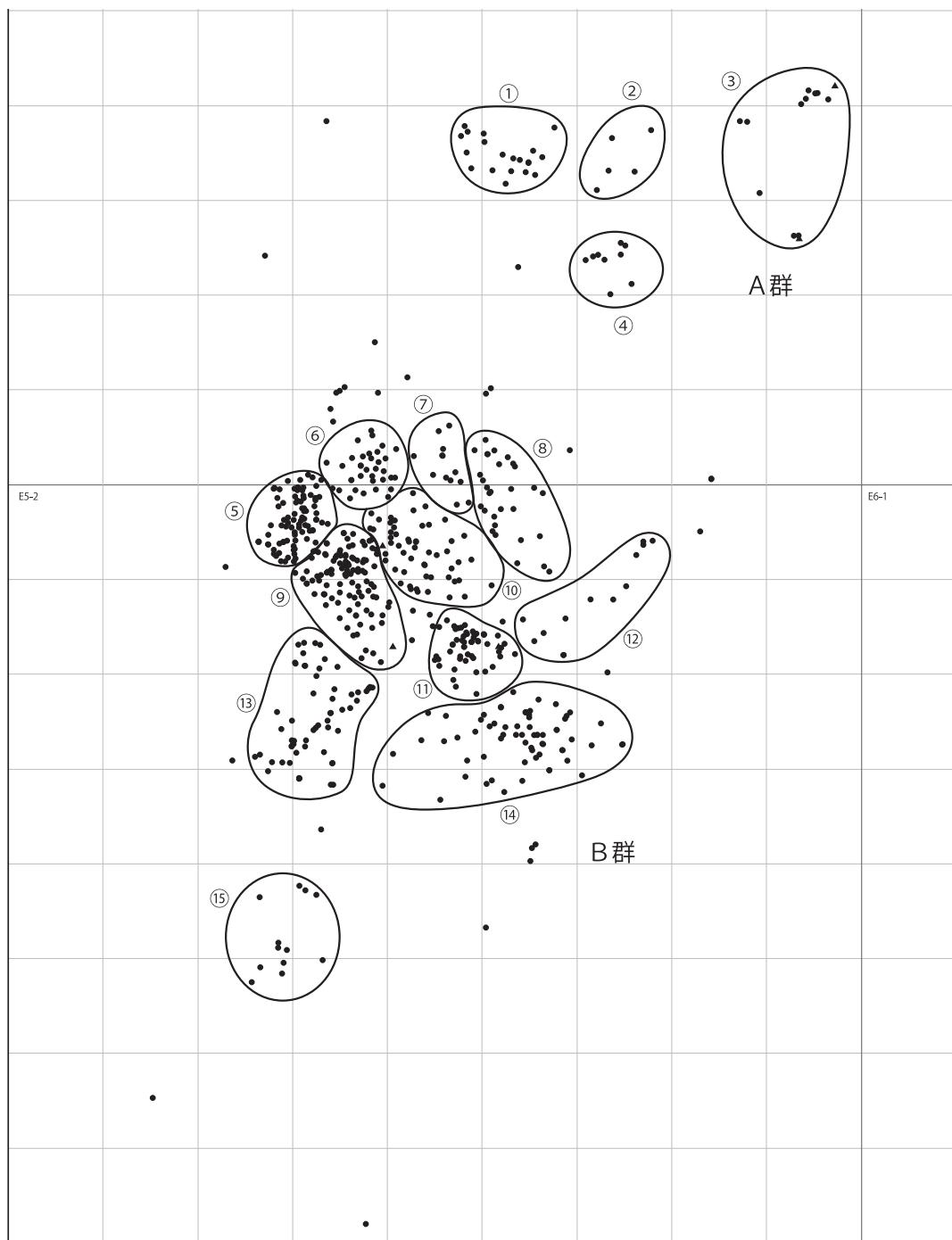
第100図 第1号祭祀跡遺物分布図 (3)

有孔円板は、A群の3ブロックのみから2点、B群の9ブロックと11ブロックから各1点出土した。3ブロックでは臼玉に隣接して、9ブロックでは、臼玉とは隣接せずに出土した。

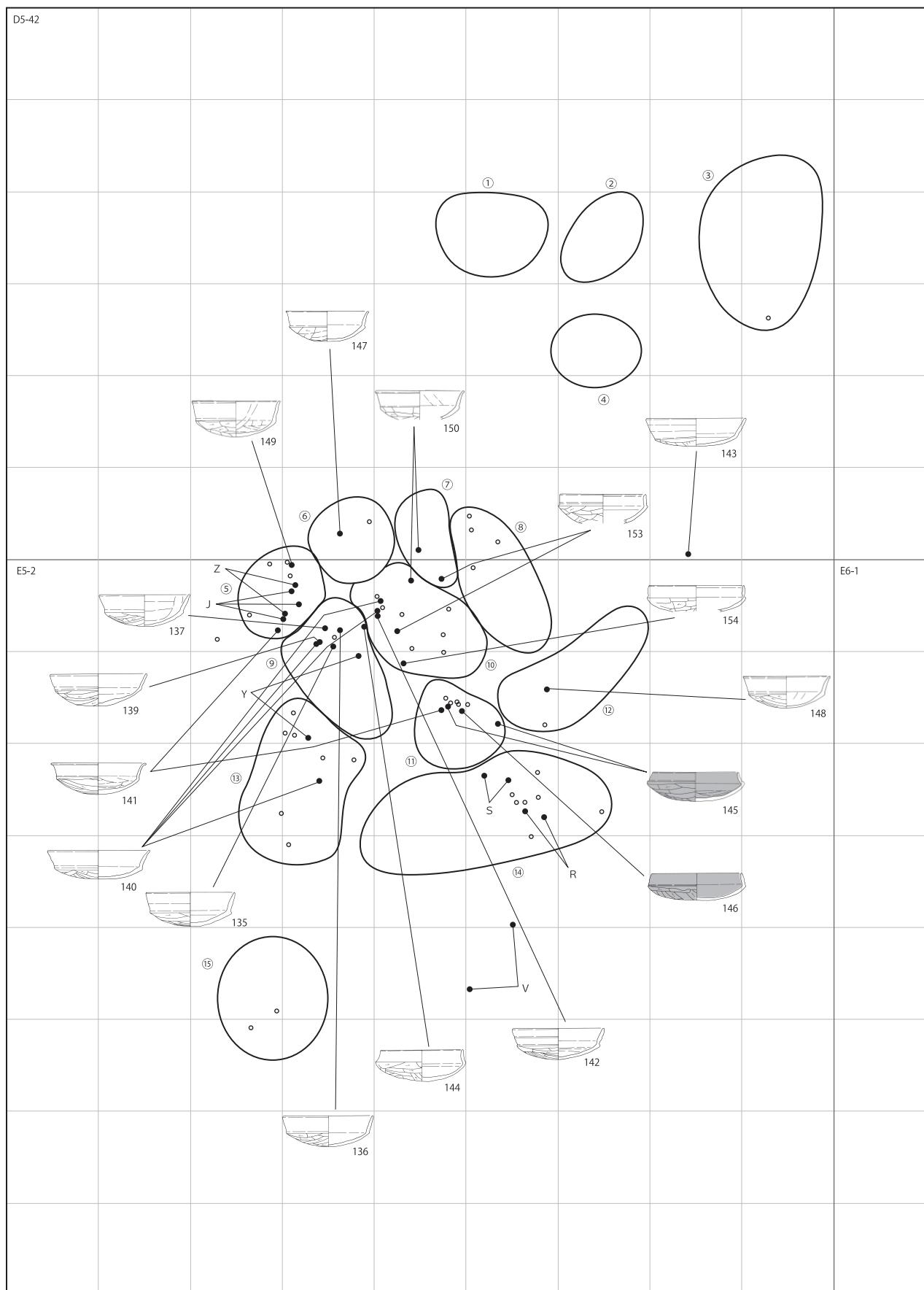
手捏ね土器は、A群からは検出されていない。B群については、5、6、9、11、13、14ブロックから比較的多く検出され、7、8、10、12、15ブロックからは、少数が検出された。

出土遺物は、土師器壺蓋模倣壺、壺身模倣壺、有段口縁壺、高壺、鉢、甕、手捏ね土器、須恵器甕といった土器が中心である。このほかに、鉄鎌、棒状品などの鉄製品、臼玉、有孔円板といった石製品がある。

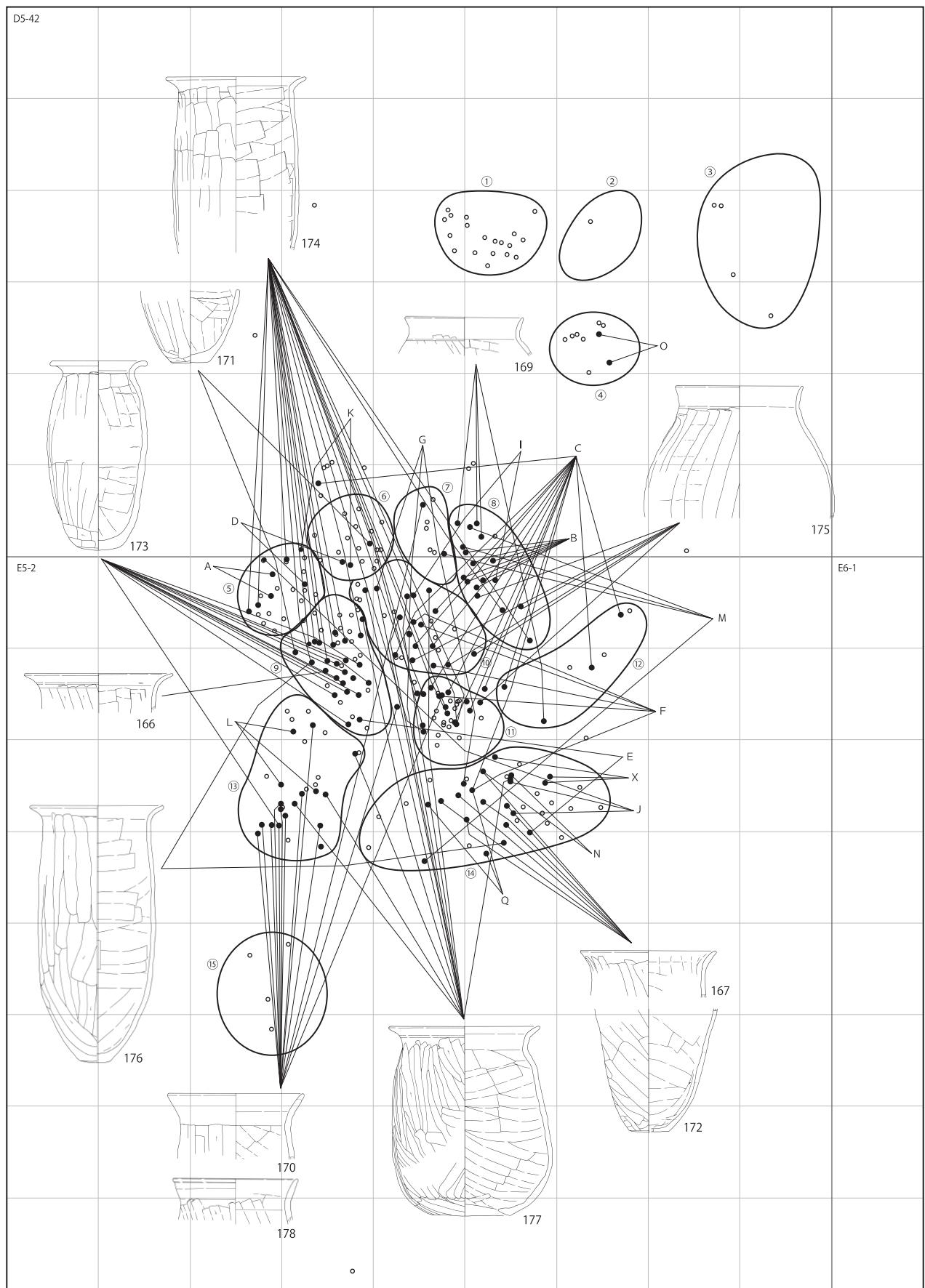
中でも、手捏ね土器、臼玉は、両者とも100点余りと点数が多く、本祭祀跡における一般的な祭祀用具であったと考えられる。



第101図 第1号祭祀跡遺物分布図（4）



第102図 第1号祭祀跡遺物分布図（5）



第103図 第1号祭祀跡遺物分布図（6）

1～133は手捏ね土器である。調整は基本的に指ナデである。成形手法、調整手法によって3群4系統、15類に分類できる。

群は、手捏ね土器が実物の模倣品と考える立場から、その写実性の度合いによって分けた。

第1群は、写実性が認められないもの、第2群は写実性がある程度認められるもの、第3群は写実性がかなり認められるものである。

第1群は、1・2が該当する。いずれも粘土塊の中央に窪みを作り出す低平な小型品である。1は全体に指頭痕とひびが見られ、2は底面と口縁端部に棒状圧痕が見られる。

第2・3群は、模倣したと思われる器種により、4系統に分けた。10系統は壺模倣、20系統は高壺模倣、30系統は甕模倣、40系統は壺模倣である。更にその製作の巧拙によってab系列に2分した。

10系統は9類に分けた。

11類は掌上で粘土を横方向に広げて成形し、内面の押圧痕が溝様の菊花状を呈する。a系列は3～12が該当する。底部から体部の立ち上がりが鈍角で、底面中央は凹んでおり、掌上での成形を示している。3・4は底径が大きく、直線的に立ち上がる。5～10は底径が中位で内弯して立ち上がる。11・12は底径が小さく、大きく開く。3・4・6・7・9・10・12は木葉痕が見られる。また3・5・7～9・12は底面に棒状圧痕が見られる。

b系列は13～44が該当する。13～24は底径が小さく直線的に立ち上がる。25～39は底部から開き中位から真直ぐ上に立ち上がる。40～44は底径が小さく、底部から大きく膨らむように立ち上がる。21の底部外周は部分的にそぎ落とされた形態をしており、木口状の圧痕が認められた。

31は菊花状の引き出し痕が1周し、引き上げた粘土が王冠状を呈する。底部は18・24・32・40はやや丸みを帯び、14・17・19・25・26・28・30・31・34・35・37・44で中央がやや凹む。木葉痕は17・22・29～31・36・37で見られる。30は鮮明、

31は多少潰れている。8には不明圧痕が認められる。底面の棒状圧痕は、15・22・30・35・36・40で認められる。

12類は、11類の底面に柱状に粘土円板を貼り付けたものである。a系列は45～54が該当する。45～48は底径が大きく、直線的に立ち上がる。49～54は底径が中位で、体部中位から内弯しながら大きく開く。ほとんどの個体が、体部と底部の接合の不具合によって、口縁部が大きく傾き、底部と体部の接合痕が明瞭である。また、見込み部分は、底部の圧着によって平坦である。49～52・54は、見込み部分に亀裂が認められる。底面は47・48の中央が、やや凹んでいる。木葉痕は45・46に見られるが不明瞭である。45・48～52・54には間隔はまちまちだが底面に、更に51・52は体部にかけて棒状圧痕が見られる。50・52・54は内面に赤色粒子が多く見られる。

b系列は55～59が該当する。55・56は底径が小さく、直線的に立ち上がる。11類b系列の可能性もある。57・58は底径が中位で、体部中位から内弯しながら大きく開く。器形の歪みが大きく、接合が乱雑であったと考えられる。59は底径が小さく、大きく膨らんで開く。菊花状引き出しによる波状口縁が内側に折り返され、平縁にされている。見込み部分に亀裂が見られる。木葉痕、棒状圧痕は見られない。55に不明な圧痕が見られる。

13類は、11類内面の菊花状引き出し痕がヘラナデによって平滑にされている。a系列は60が該当する。底面は平坦で、木葉痕は潰れている。口縁部は粘土の引出しが重なり、薄く三重になる。

b系列は61～65が該当する。62・63・65は口縁部に横ナデが施されている。菊花状引き出しの痕跡が見られる。61は口縁部が若干折り返され、62は体部に細かい押圧が加えられている。61は底部外周にヘラケズリが施されている。底面は61・64が平底、62・63は中央がやや凹み、65は丸みを帶びている。木葉痕は62で僅かに見られる。



第104図 第1号祭祀跡出土遺物（1）

14類は、13類の底面に粘土円板が貼付されたものである。a系列は66・67が該当する。67は全体にねじれた状態で、器表面に凹凸が見られる。両者とも口縁部には菊花状引出しの痕跡が見られる。底面は66が上げ底状、67が平底である。66は木葉痕、棒状圧痕が認められ、外周に細い切り込み状の痕跡が見られる。

15類は、13類の内面に、更に弧状のヘラナデを加えてナデ消し、整形したものである。内面は13類より更に平滑化されている。a系列は68～86が該当する。口縁部の余剰な粘土を寄せて肥厚させ、端部が平坦にされている。68～79は底部が段差をもって明瞭に作り出されている。80～86は底部が段差を持たずに体部に移行する。口縁部は横ナデが加えられ、菊花状の痕跡を残すものと、平坦化し、端面が作出されるものがある。68・70・83は菊花状の痕跡が明瞭に見られる。74・79は口辺部が作出されていた。84は口縁部、体部外面に粘土屑が付着する。69・71・74・76・79・86は内面整形時の粘土を寄せた高まりが見られる。底面は74・75・81が平底、それ以外は上げ底状を呈している。木葉痕は72・77・78・82・85では見られず、69・71は不明瞭で、それ以外は明瞭に認められる。棒状圧痕は、68～70・75・76・79～81・83・85・86で見られる。

b系列は87が該当する。小型で、口縁部には菊花状の痕跡が見られる。内面はヘラケズリ状を呈する。平底で、木葉痕、棒状圧痕は見られない。

16類は、15類の底面に粘土円板が貼付されたものである。a系列は88・89が該当する。88は底部から体部下半が残存するのみである。両者とも平底で、木葉痕、棒状圧痕が認められる。

17類は、15類に更に口縁部が明瞭に作出されている。b系列は90が該当する。最終工程として口縁部が明瞭に作出されており、歪みが著しい。口縁部は横ナデが施されているが弱く、段差は不明瞭である。外面はナデ調整である。体部に棒状圧

痕が認められる。底部は上げ底気味で粘土屑が付着する。掌上成形。底面には木葉痕が痕跡程度に認められる。

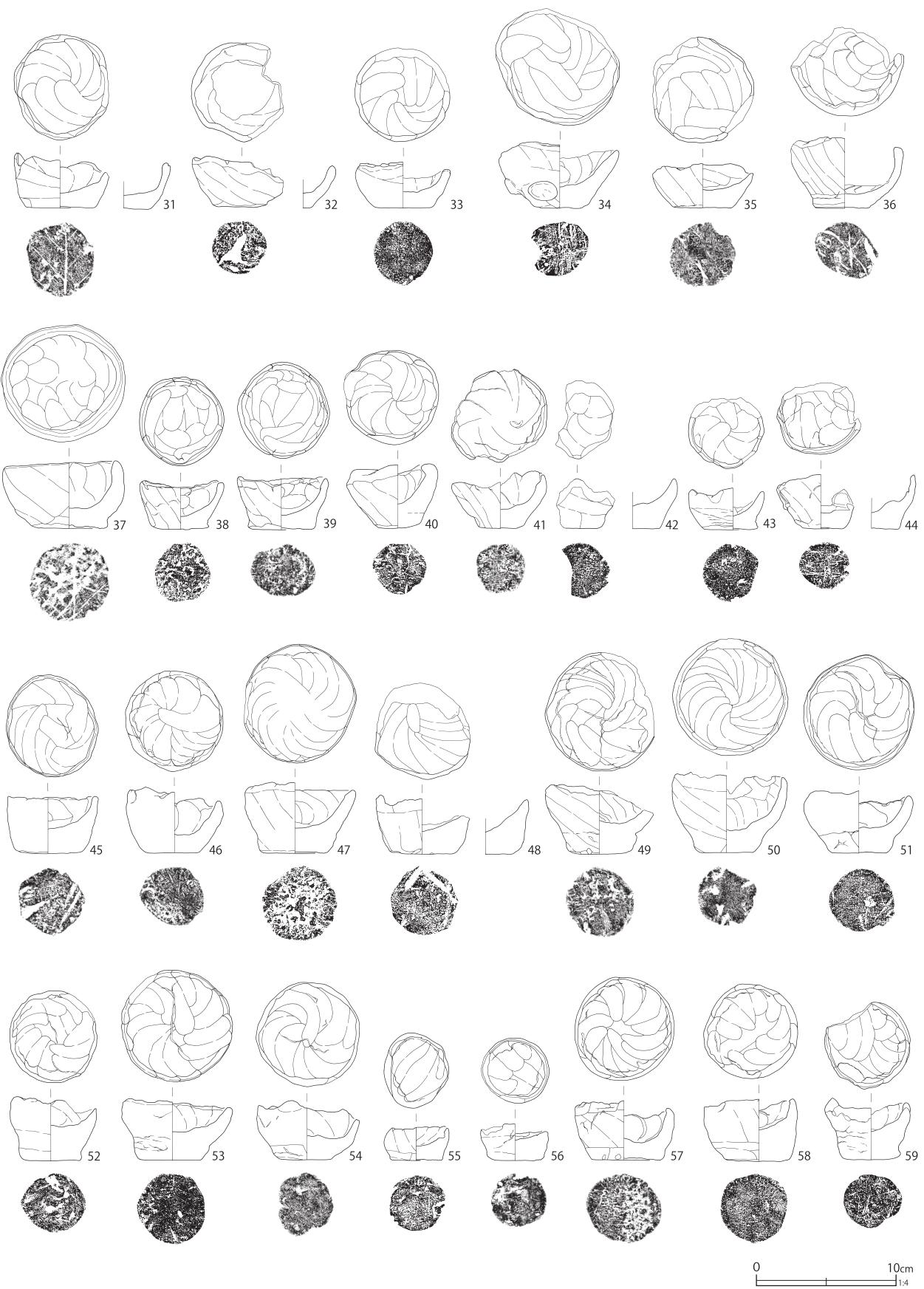
18類は、17類の底面に粘土円板が貼付されたものである。模倣壊に台を付けた形態である。a系列は91が該当する。口縁部が明瞭に作出されている。横ナデが施されているが弱く、段差は不明瞭である。平底で、木葉痕、棒状圧痕が認められる。

b系列は92～94が該当する。93は縦長の器形である。94は底部が欠損している。口縁部は明瞭に作出され、横ナデが施されている。92は段差が不明瞭である。93は横ナデが不明瞭で、弧状のヘラナデが顕著である。底面は92は凹凸のある平底、93は丸底である。92は木葉痕、棒状圧痕が認められる。93は底面、体部に棒状圧痕が認められる。

19類は、17類と同様だが、底面がヘラケズリされるものである。模倣壊とほぼ同様だが、口径が小さく、作りが悪い。口縁部、体部の調整手順は17類と同様である。a系列は95が該当する。口縁部は明瞭に作出され、内外面に横ナデが施されている。端部は丸く収められている。外面の口縁部と体部の境目は不明瞭である。体部外面下半は不規則なヘラケズリが施されている。内面には弧状のヘラナデが見られる。

20系統は高壊模倣である。台上に設置された粘土円柱が上方に引き出されたものである。他系統と比べて、底径が極めて小さく、体部が膨らんで壊部として表現され、器高が高いことによって分けられる。

21類は、底部の厚い臼形の体部を指頭押圧によって引き伸ばし、中位に膨らみのある塊形の壊部とするものである。底部の円柱部分が細長い印象を受け、厚い底部が脚部の表現になっている。いずれもやや小型である。a系列は96～98が該当する。体部内面の引き出しによるナデは縦方向で、規則的である。口縁端部は引き出しによる細かい波状を呈し、いずれも丸く収められている。



第105図 第1号祭祀跡出土遺物（2）

体部の外面は指ササエが顕著である。底部はやや丸みを帶びている。底部外周にはしわが認められる。底面は平坦だが、外周はやや丸みを帶びている。底面は木葉痕が見られず、96には不明な圧痕が、97には棒状圧痕、不明な圧痕が見られる。

b系列は99～101が該当する。歪みが著しい。99の見込み部分には中央に細かな亀裂が見られ、後から坏部を貼付したような感を受ける。口縁部は細かな波状を呈する。内面のナデが不規則で、a系列のような引き出し痕は見られない。底面は丸底気味で、凹凸が著しい。木葉痕は見られない。棒状圧痕は、99の体部・底面、101の体部に見られる。

22類は、21類同様だが、底部が薄く脚部が表現されないものである。いずれもやや小型である。a系列は102が該当する。体部内面の引き出しによるナデは縦方向で、規則的である。口縁端部は丸く収められている。底部外周にはしわが認められる。底面は平坦だが、外周はやや丸みを帶びている。木葉痕は見られず、体部に棒状圧痕が見られる。

b系列は103～105が該当する。歪みが著しい。内面のナデが不規則で、a系列のような引き出し痕は見られない。底面は103が上げ底状、104が平底、105が歪んだ丸底である。103には木葉痕が、105には不明な圧痕が見られる。

30系統は甕模倣である。高さのある形態で、台上に粘土円柱を設置し、上方に引き上げて成形する。外面は直線的で、部位は表現されておらず、内面は漏斗形を呈する。40系統より底径がやや小さく、器高が高い点で異なる。

31類は、高さのある臼形の形態である。底面は107がやや上げ底状の他は、凹凸はあるが平底である。a系列は106～113が該当する。法量に大小があり、口縁部は波状のものとナデが加えられやや平坦なものがある。いずれも、内面の指頭痕が顕著に認められる。108の体部には糲状の圧痕が

見られる。底面には木葉痕は認められない。108には板目状の痕跡が、111には編み物状の痕跡が見られる。110～113には棒状圧痕が認められる。10系統とは異なり、いずれもごく浅い。

b系列は114～116が該当する。法量に大小があり、115・116は小型、114は中型である。口縁部は波状を呈している。いずれも、内面の指頭痕が顕著に認められる。底面には木葉痕、棒状圧痕は見られず、114には不明な圧痕が多く付く。

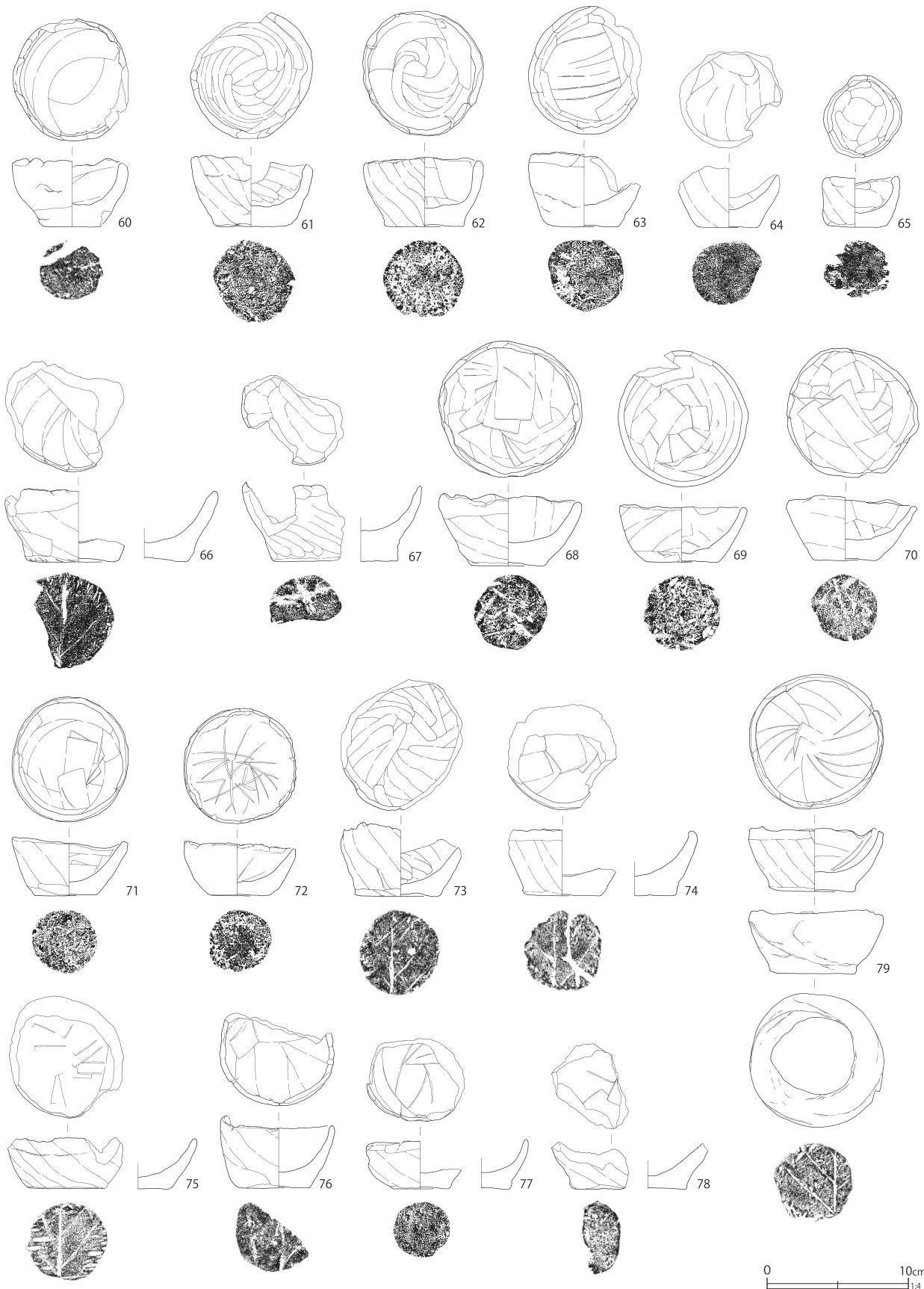
32類は、31類の内面に弧状のヘラナデを加えたものである。31類に対して高さのないものである。a系列は117～124が該当する。法量に大小があり、119・124は小型、それ以外は中型である。口縁部は波状である。底部は124が凹凸があり丸底気味、それ以外は平底である。122の底面には木葉痕が認められた。118～120・122には棒状圧痕が認められる。いずれもごく浅い。123には不明な圧痕が、117には種子圧痕が見られる。

40系統は壺模倣である。高さのない形態で、壺の底部までを作り、途中でやめたような形態をしている。台上に粘土円柱を設置し、上方に引き上げて成形する。外面は直線的で、部位は表現されておらず、内面は漏斗形を呈する。いずれも大型である。30系統とは大型である点と器高が低い点で異なる。

41類は、高さの低い盆形の形態である。a系列は125が該当する。口縁部は波状である。いずれも、内面に菊花状の引き出し痕が顕著に認められる。底面は上げ底状で、木葉痕が見られる。

42類は、41類の内面の引き出し痕にナデが加えられて消されているものである。a系列は126が該当する。口縁部は平坦で内剥ぎ状になっている。底面は上げ底状で、木葉痕が見られる。

b系列は127～133が該当する。132は全体に大きく開いている。131は内面が擂鉢状で31類aの可能性がある。口縁部は緩やかな波状を呈している。いずれも、内面にはナデが顕著に認められる



第106図 第1号祭祀跡出土遺物（3）

が溝状のものではない。底面は平底で、132はやや窪み、127・130はやや突出している。木葉痕は見られず、128・133は棒状圧痕が、127・132には不明な圧痕が見られる。

134～154は土師器の模倣壺である。完形の遺物が多い。底面図を付したものは、いずれもほぼ完形である。134～141・147～151は壺蓋模倣壺である。その形態によっておよそ3つに分けられる。134は口径に比して器高が高く、口縁部が直立気味でやや短い。135～137は、口縁部が直立気味でやや深身である。138～141・147・148・150・151は口縁部がやや外反し、壺身が浅めで扁平である。137～139・149・150は見込み部分から口縁部にかけて、横ナデの引き抜き痕が明瞭に残る。141は底面に、工具痕が明瞭に残る。148は内面が、150は外面口縁から内面が黒色を呈する。151は風化が著しく、調整不明である。

142・143・152は有段口縁壺である。前二者は大型で扁平、152はやや径が小さく、器高も高い。142は見込み部分から口縁部にかけて、横ナデの引き抜き痕が明瞭に残る。144～146・153・154は壺身模倣壺である。145・146は大型で扁平、黒色処理されている。145は底面中央に線刻が見られる。ヘラ記号の可能性が高い。146は内面にやや乱れた放射状の暗文が施され、他の資料より扁平である。153は径がやや小さく、内外面黒色処理されている。154は扁平で径が大きく、端部が内傾する。

155～157は高壺である。155の壺部は上段が短く、横ナデによって外反する。下半はヘラケズリである。接合部は太く、脚部は貼付接合で、短く太い。

158は尖底状の破片で、肉厚である。ヘラケズリを施し、指ナデを加えている。器種は不明だが、ここでは鉢としておきたい。159～161は鉢である。他遺構の出土資料同様に、形態が全く異なる。159は横ナデによって、口縁部と体部に明瞭

な境目を作出している。160は小型で、壺の可能性がある。体部は丸く、平底である。内面は刷毛目調整で黒色を呈している。

162～165は須恵器の壺である。162は口縁端部に面を持ち、163は端部が内剥ぎ状になる。165は上位がやや内弯している。164はしっかりした突帯の中に6条1単位の波状文が施されている。6世紀前半。いずれも群馬産である。

166～178は土師器甕である。166～168は口縁部が外反し、胴部が直立する。169は口縁部が直立気味に立ち上がり、肩がやや張る。170は器肉が厚く、口縁部が長い。全く傷んでおらず、未使用の可能性がある。171・172は胴部下半である。171は積み上げ単位の部分が剥離し、擬口縁状になっている。173は小型の長胴甕で肉厚である。器面の傷みが激しく、ボロボロで、接点がない部分が多い。特異な印象を受ける。174・176は長胴甕である。口縁部はやや直線的である。175・177は、胴部が張る形態である。特に177は下膨れの特異な形態で、内側から焼成後穿孔が施されている。

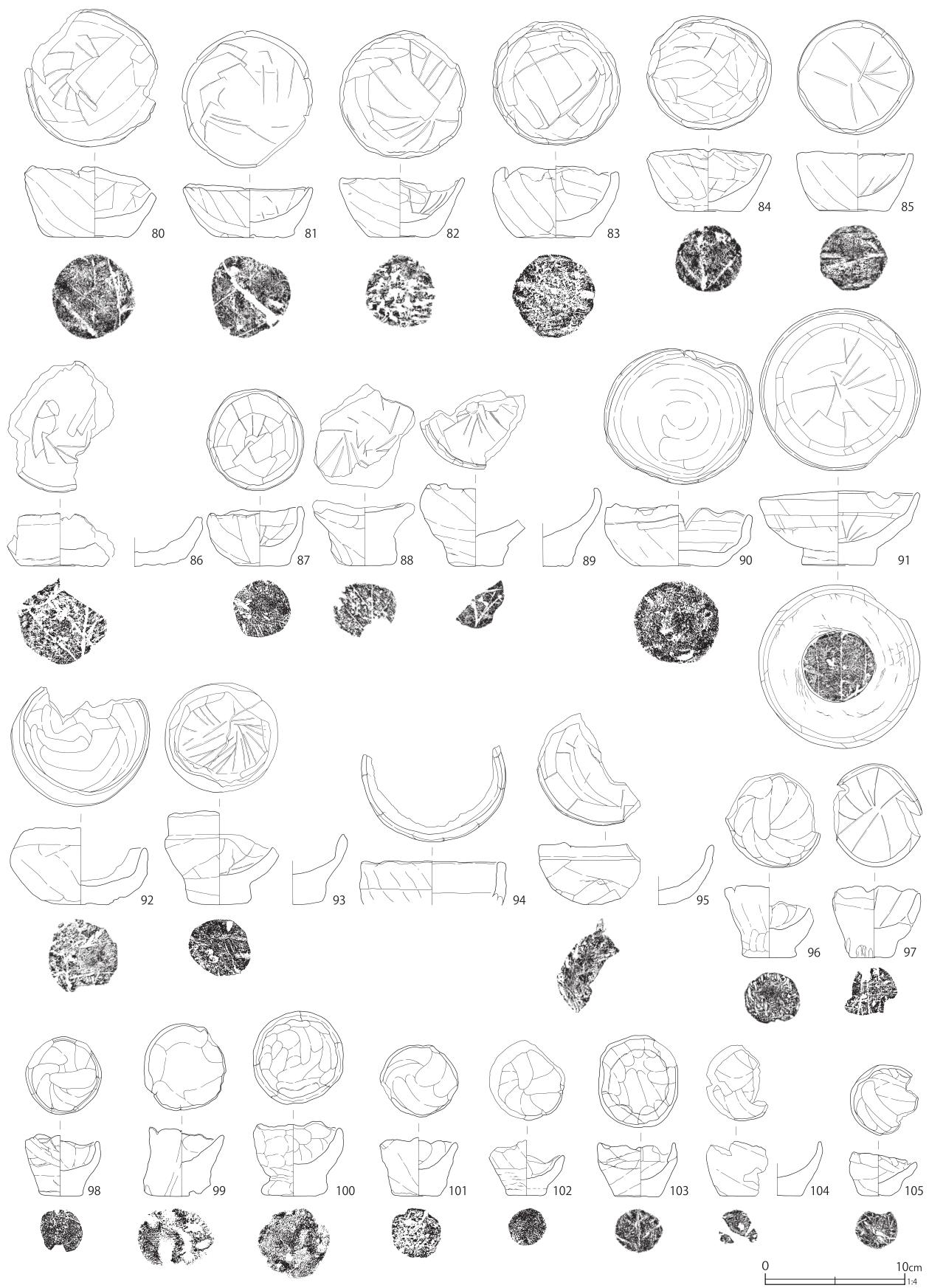
178は口縁部が直線的に延びる形態で、甕の可能性がある。器面が傷んでおらず、未使用の可能性がある。

179は单孔の甕である。見込み部分には不規則なナデが施されている。

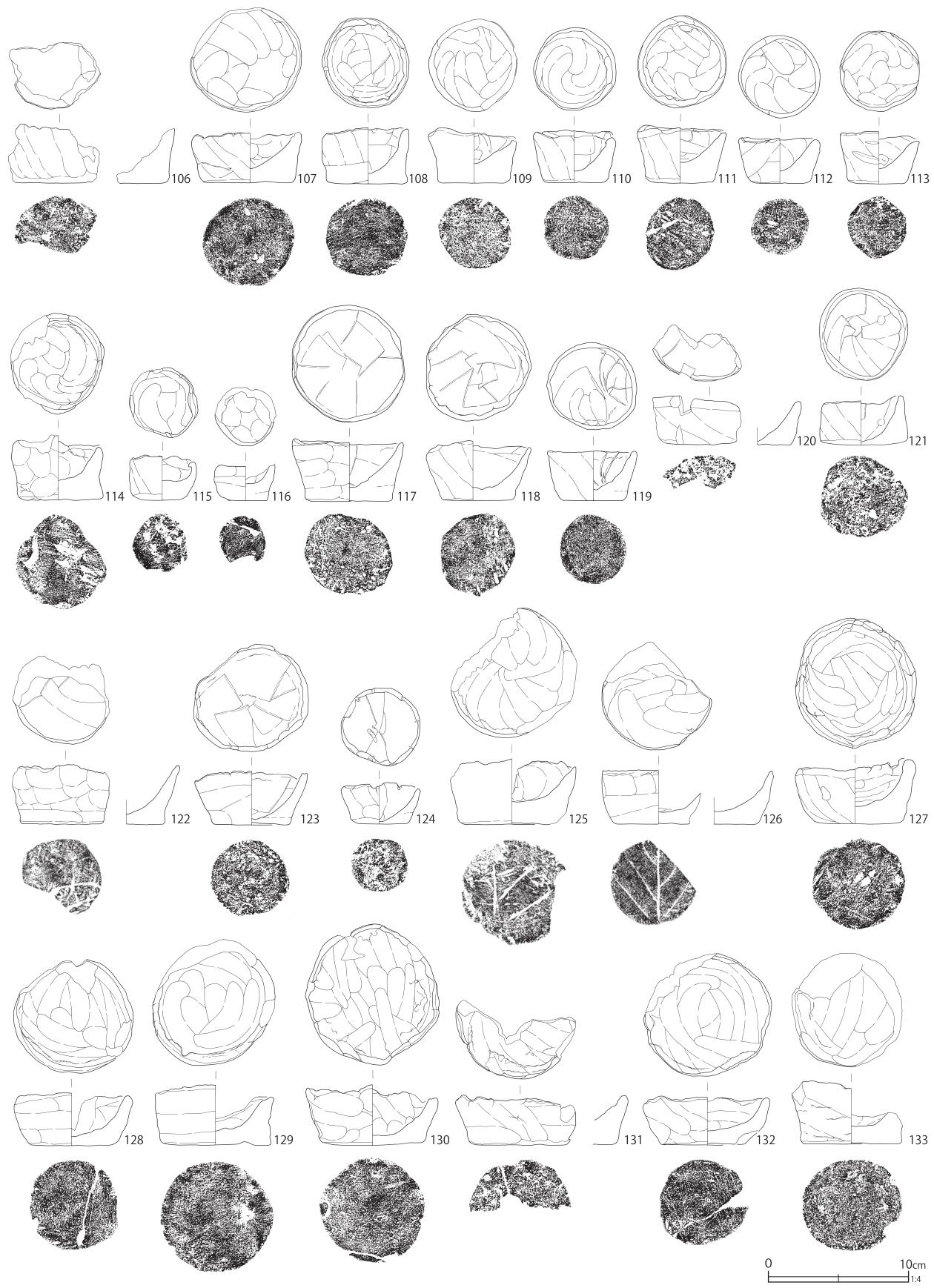
180・181は貝巣穴泥岩である。180は幅が特に大きい。

このほか、第1号祭祀跡からは土器や石製品とともに、鐵製品も多く出土している。

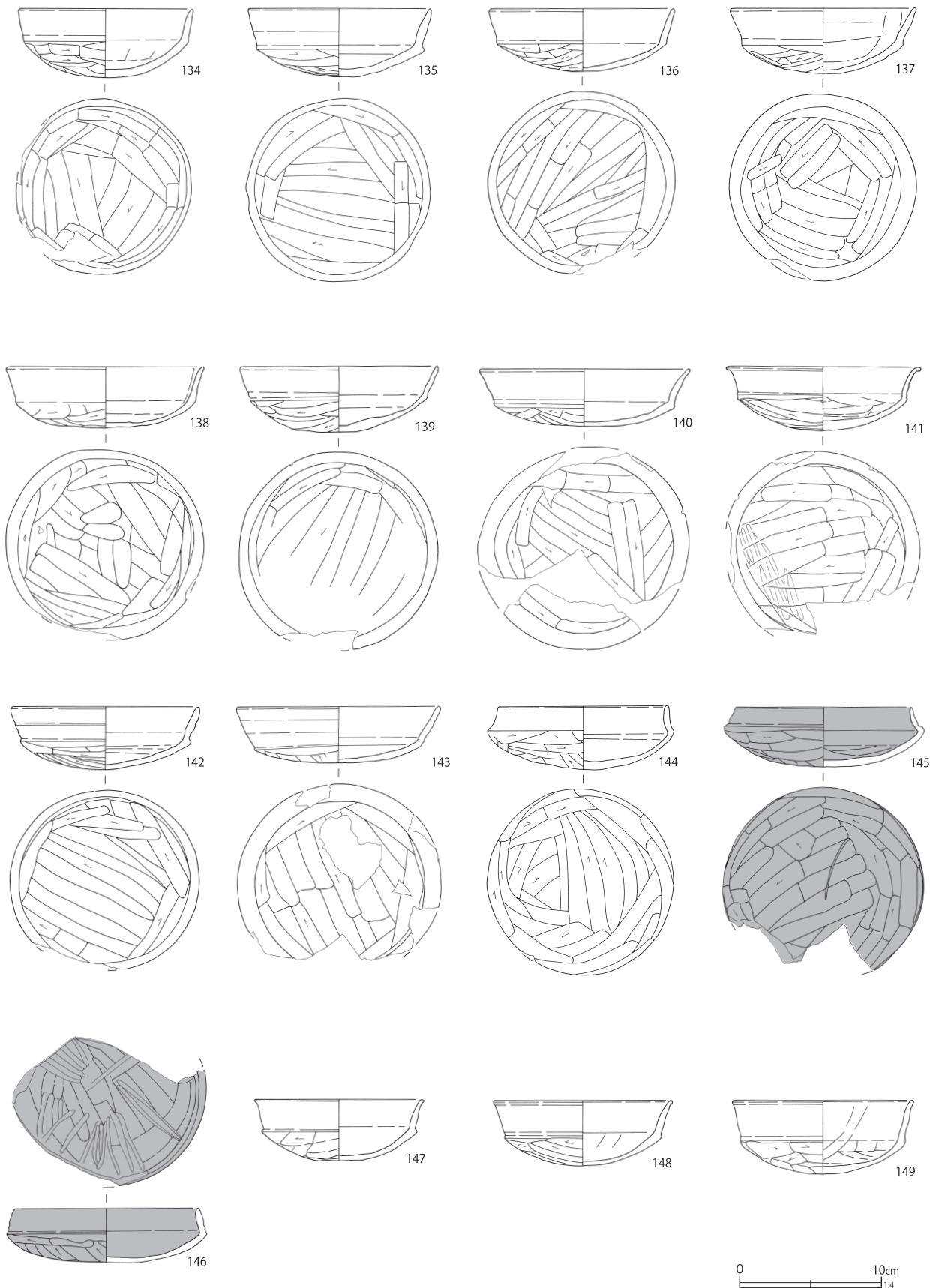
182～188・200は鐵鎌である。187は三角形鎌で、平造、逆刺は腸抉である。鎌被部は断面長方形である。188～198・200は長頸鎌である。鎌身部は長短があり、198は長三角形鎌である。184・186は片刃で、平刃造である。その他は両刃で両丸造である。鎌身関部は角関で平坦である。頸部の断面形は方形で、茎関は棘鎌被である。188～196は茎である。茎関は棘鎌被になっている。195は樹



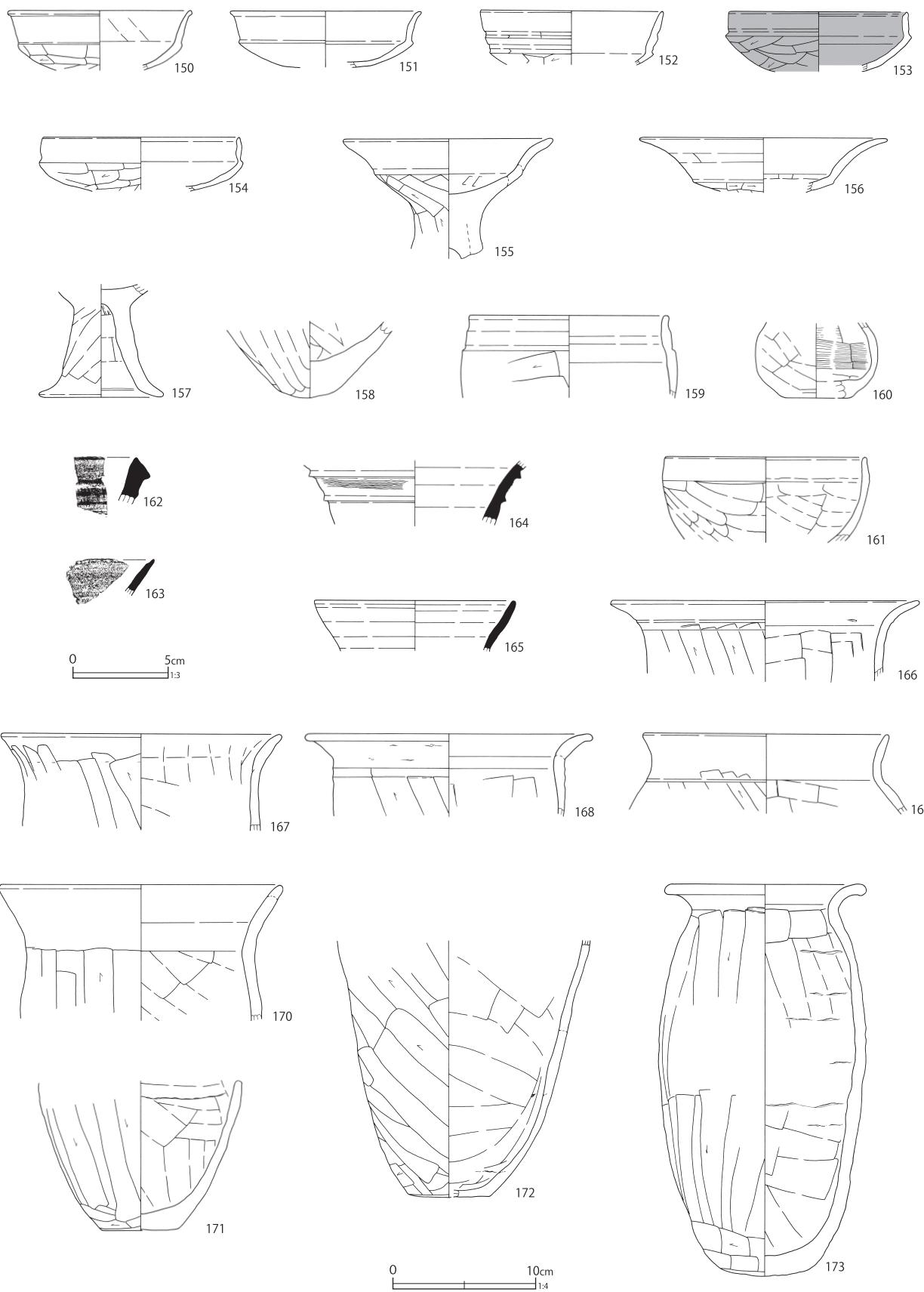
第107図 第1号祭祀跡出土遺物 (4)



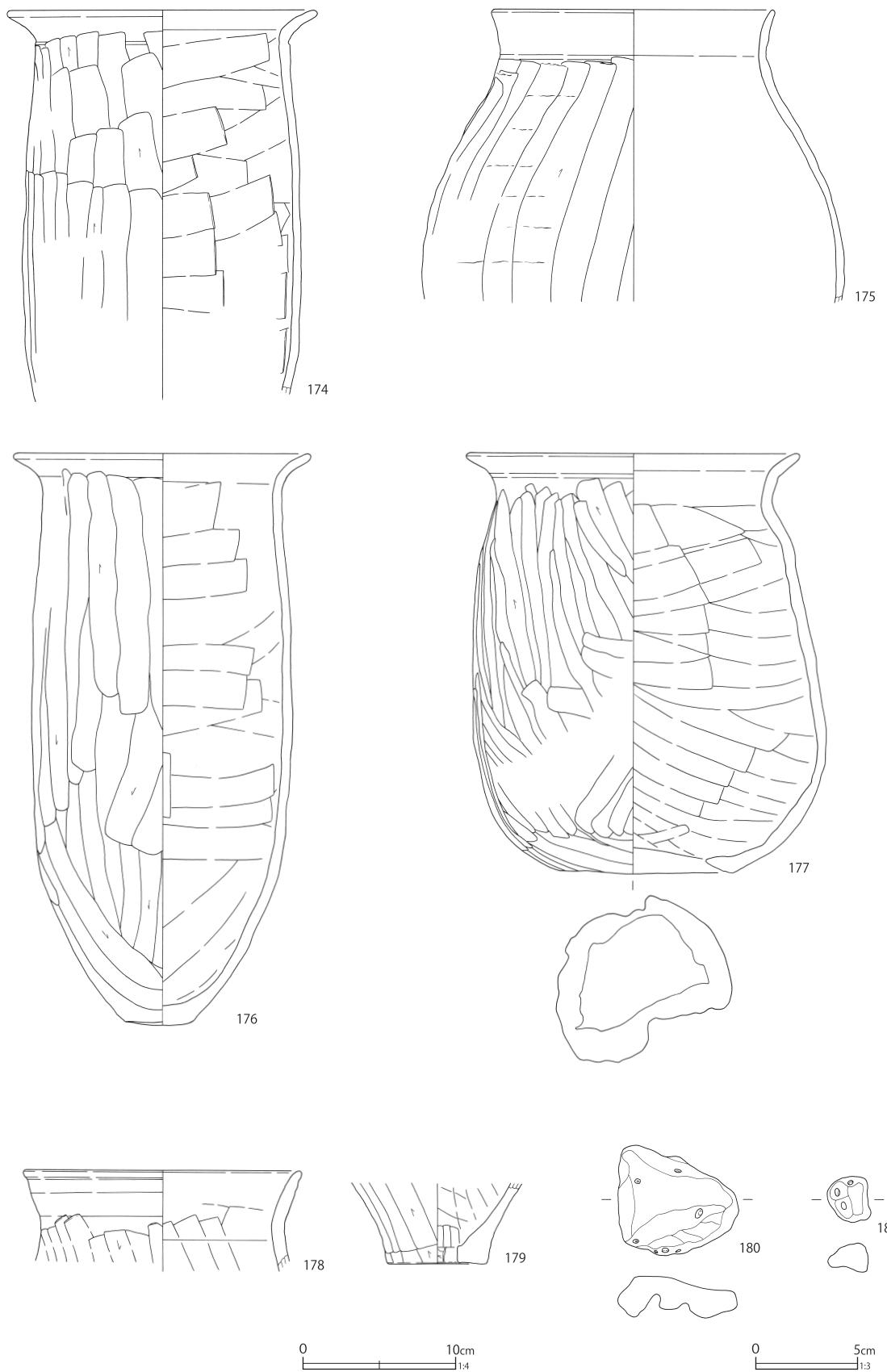
第108図 第1号祭祀跡出土遺物（5）



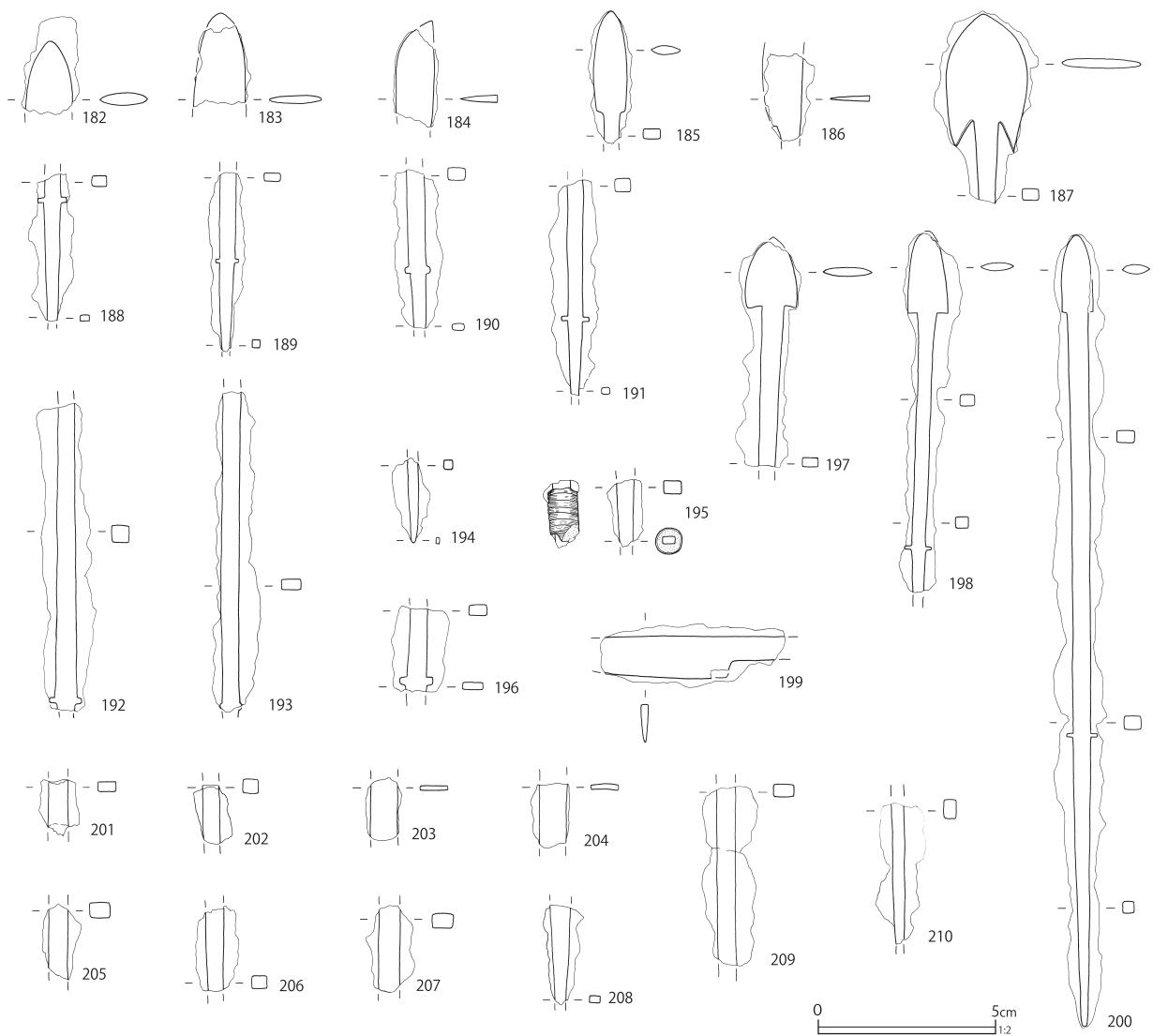
第109図 第1号祭祀跡出土遺物（6）



第110図 第1号祭祀跡出土遺物（7）



第111図 第1号祭祀跡出土遺物（8）



第112図 第1号祭祀跡出土遺物（9）

皮製の口巻が付いた茎である。

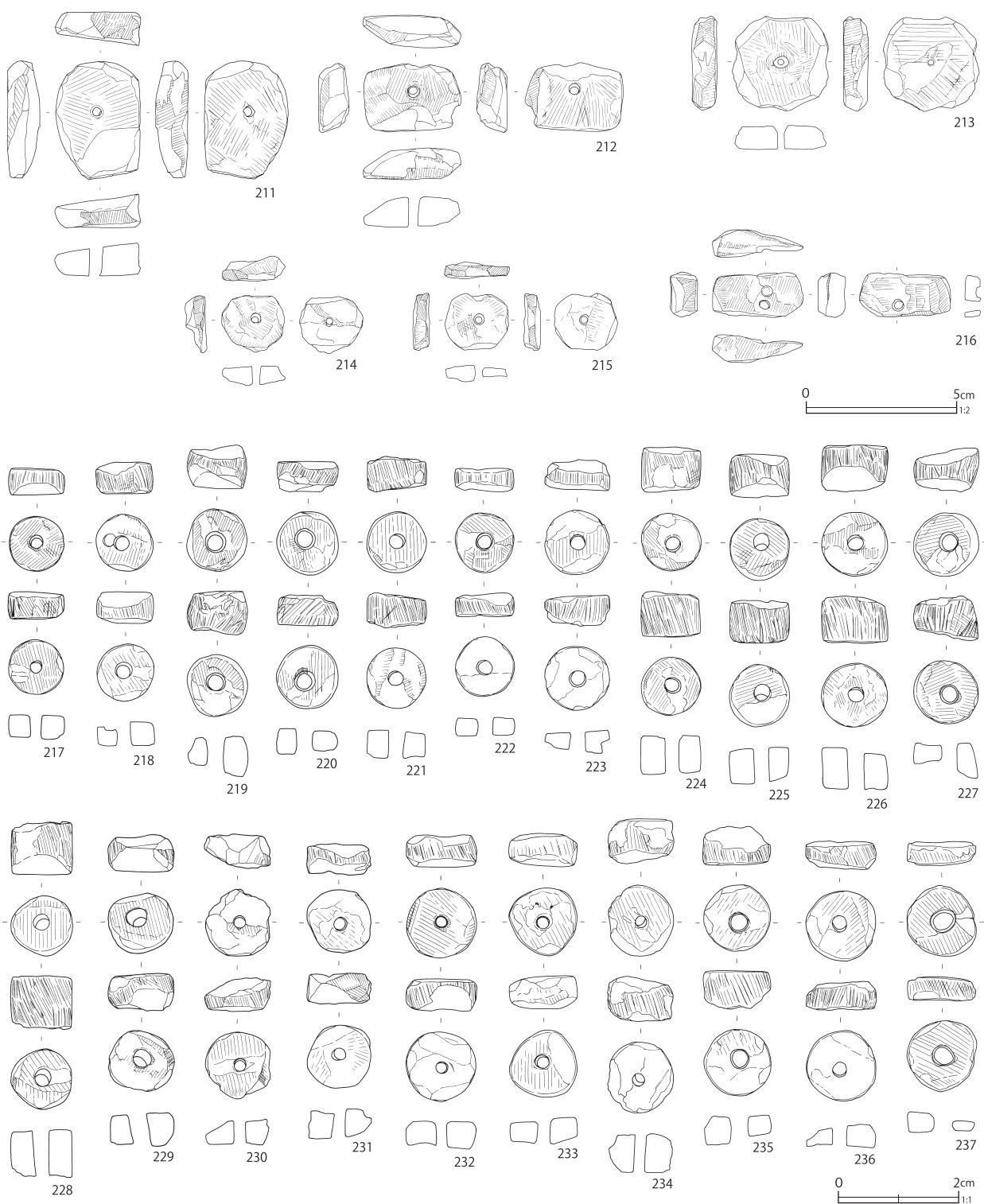
201～210は棒状の鉄製品である。203・204は断面形が扁平、それ以外は方形である。210はやや厚みがあり、他とは異なる製品の可能性がある。

第1号祭祀跡から出土した石製品は、有孔円板6点（第113図211～216）、白玉60点（第113図217～115図277）である。ここで有孔円板としたものは、非常に作りが粗雑であり、形状から器種を特定することが困難なため、便宜上有孔円板とした。

211～216は滑石製の有孔円板である。211は非常に粗雑な作りで、側面はほとんど加工されてい

ない。穿孔部は横方向の回転痕を確認できる。

212も非常に粗雑な作りでほぼ四角形状である。穿孔部は横方向の回転痕と若干縦方向の擦痕を確認できる。213も非常に粗雑な作りで、側面は工具による削りが確認できる。穿孔部を囲むような窪みが観察できるが、磨きにより不明瞭。穿孔部は横方向の回転痕が確認できる。214はやや小ぶりで、粗雑な作りとなっている。正面部は僅かに擦痕が確認されるのみで、ほとんど加工されていない。穿孔部は横方向の回転痕と縦方向に擦痕が確認できる。215はやや小ぶりで、粗雑な作りとなっている。穿孔部は横方向の回転痕と縦方向の



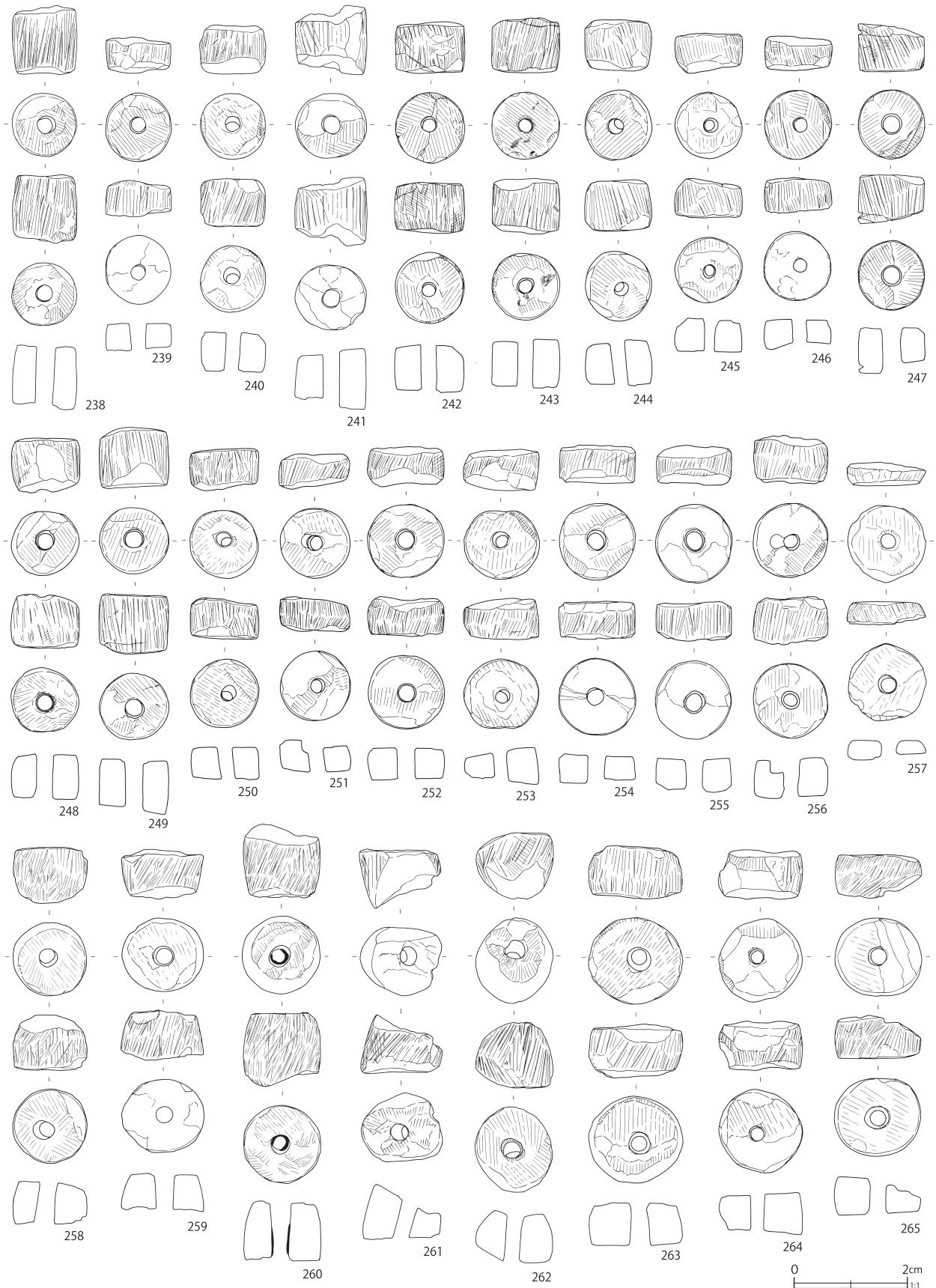
第113図 第1号祭祀跡出土遺物 (10)

擦痕が観察される。216は粗雑な作りではあるが、全面を加工している。形状は四角形状で正面に未貫通の穿孔の痕跡が確認できる。穿孔内部は摩滅しており、状態の確認には至らなかったが、両面

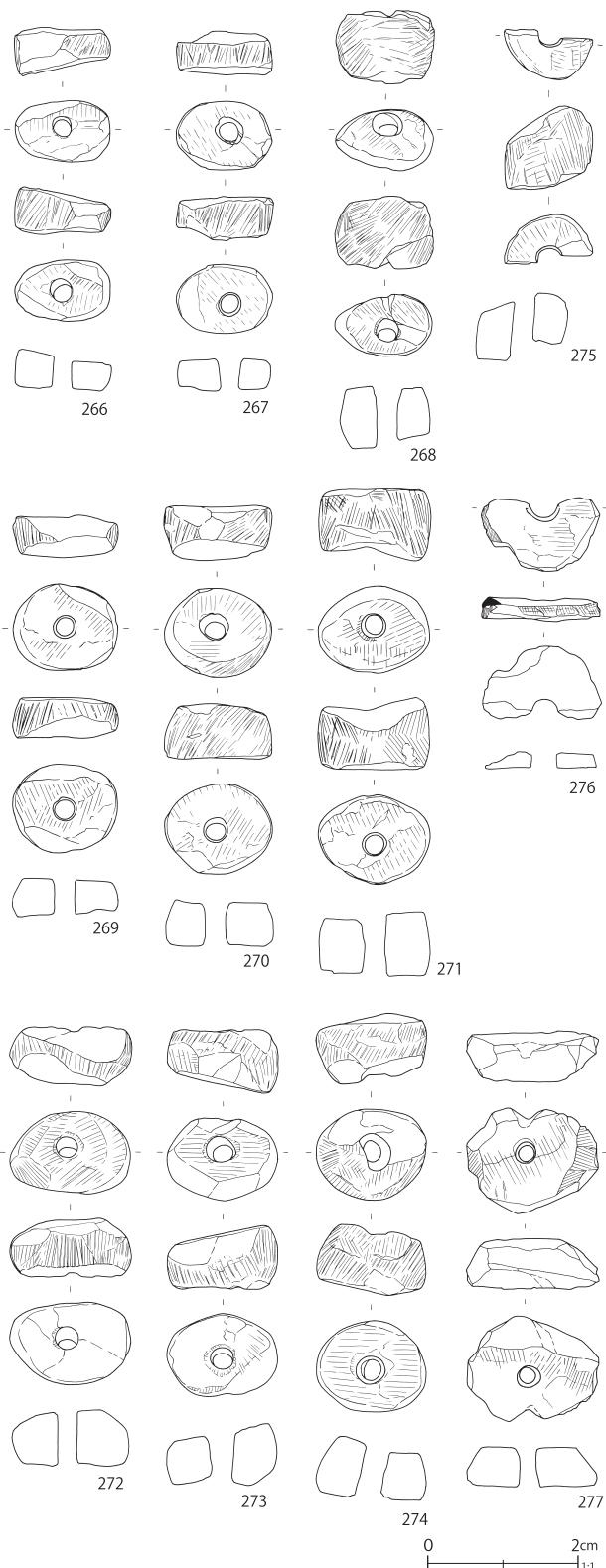
穿孔によると思われる孔内の段差が確認された。

臼玉は、大きさや石質が多様であったため、形状により区分した。

円筒形は224～226・228・238・240～244・248・



第114図 第1号祭祀跡出土遺物 (11)



第115図 第1号祭祀跡出土遺物 (12)

249の12点である。大きさにはばらつきが見られるものの、小口面と側面の研磨状態は比較的良好である。側面に溝状の擦痕が確認できる。241は裏面を欠損している。

薄い円筒形は217・218・221～223・227・235・236・239・246・247・250～255の17点である。小口面の研磨状態は個々に差異があり、側面には溝状の擦痕を観察できる。218・251は正面に未貫通の穿孔の痕跡が確認できる。222・223・232・236・239・246・254は裏面を欠損している。255は小口面の加工を確認することができなかった。

220・245・256～259・263・265の8点は丸みのある算盤玉形である。側面に稜を持つものは見られないが筒部分が弯曲しているものを区分した。小口面は比較的丁寧に成形しているが、側面の溝状の擦痕は粗く深めである。256は両面穿孔と思われる段差が孔内に観察できる。また正面部分に穿孔がずれた痕跡が観察される。259は裏面を欠損している。

不整形で側面に擦痕が見られるものは、260～262・265～274の13点である。側面に特徴を持ち、擦痕の方向が一様でなく無秩序なものが多い。中でも266～274は橢円形状をなし、側面に溝状擦痕に伴う稜が観察できる。

不整形で側面の調整が粗いものは、219・229～234・237・264・277である。側面に成形時の割痕を残している。230・231・233・234の4点は形状、材質と孔径がほぼ一致するため、同一母岩による製作と考えられる。229は終孔部に薄皮状の削り残しがわずかに確認できる。終孔部近くまで孔を開け、反対から薄皮を破るようにして穿孔したと想定される。

277は側面に円形の加工が施されておらず、種類の特定に至らなかった。また、275・276に関しては半分以上の欠損が確認されるため、分類対象外とした。

第41表 第1号祭祀跡出土遺物観察表 (第104~111図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	手捏ね	5.8	3.1	4.2	A C E H I	100	普通	にぶい赤褐	No.344	43-1
2	土師器	手捏ね	6.0	2.7	3.5	A C H I	90	普通	にぶい褐	No.433 底部木葉痕 棒状圧痕	43-2
3	土師器	手捏ね	6.4	4.2	5.2	A C E H I	95	普通	橙	確認面 底部木葉痕 棒状圧痕	43-3
4	土師器	手捏ね	6.3	3.5	4.7	A C H I K	100	普通	明赤褐	No.161 底部木葉痕	43-4
5	土師器	手捏ね	7.1	4.4	4.2	A C H I	100	普通	にぶい赤褐	No.596 棒状圧痕	43-5
6	土師器	手捏ね	—	5.1	5.1	A C E H I K	80	普通	にぶい橙	No.171 底部木葉痕	43-6
7	土師器	手捏ね	8.2	4.6	5.0	A E H I	100	普通	にぶい赤褐	No.573 底部木葉痕 棒状圧痕	43-7
8	土師器	手捏ね	—	5.2	6.1	A E H I K	70	普通	明赤褐	No.49 棒状圧痕 不明圧痕	43-8
9	土師器	手捏ね	9.2	4.5	5.0	A C H I K	100	普通	橙	No.328 底部木葉痕 棒状圧痕	43-9
10	土師器	手捏ね	—	4.9	—	A H I K	20	普通	にぶい褐	No.290 底部木葉痕 内面黒色	43-10
11	土師器	手捏ね	—	3.3	3.8	A C H I	75	普通	橙	No.211	43-11
12	土師器	手捏ね	—	3.9	4.3	A C H I	60	普通	橙	確認面 底部木葉痕 棒状圧痕 内面黒色	43-12
13	土師器	手捏ね	4.7	2.8	3.5	A E H I K	95	普通	にぶい赤褐	No.125	44-1
14	土師器	手捏ね	5.8	3.1	4.6	A C E H I	100	普通	にぶい褐	No.428	44-2
15	土師器	手捏ね	4.8	2.5	3.8	A C H I	100	普通	灰黄褐	No.362 底部棒状圧痕が不規則に残る	44-3
16	土師器	手捏ね	5.4	3.0	4.3	A C E H I	100	普通	橙	No.354 不規則な圧痕	44-4
17	土師器	手捏ね	5.1	3.5	3.6	A C H I	80	普通	にぶい褐	No.287 内面黒色 底部木葉痕	44-5
18	土師器	手捏ね	5.1	2.6	3.8	A C H I	75	普通	灰黄褐	No.237 剥離進む	44-6
19	土師器	手捏ね	5.7	3.4	3.9	A E H I K	60	普通	明赤褐	No.101 棒状圧痕	44-7
20	土師器	手捏ね	—	3.9	4.9	A C E H I	40	普通	明赤褐	No.104・E5g-15	44-8
21	土師器	手捏ね	7.1	4.5	4.4	D H K	100	普通	にぶい赤褐	No.288 木口状の圧痕	44-9
22	土師器	手捏ね	—	4.6	4.9	A C H I	55	普通	にぶい橙	No.167・E5g-5 底部木葉痕 棒状圧痕	44-10
23	土師器	手捏ね	—	3.0	3.7	A E I	70	普通	にぶい赤褐	D5g-98	44-11
24	土師器	手捏ね	—	3.3	—	A C H I K	65	普通	にぶい黄褐	E5g-8	44-12
25	土師器	手捏ね	—	1.7	4.3	A E H I K	90	普通	にぶい褐	No.370	45-1
26	土師器	手捏ね	—	3.4	3.3	A E H I K	85	普通	にぶい赤褐	No.52 内面黒色	45-2
27	土師器	手捏ね	4.9	3.7	3.9	A C E H	95	普通	にぶい橙	No.422 内面黒色	45-3
28	土師器	手捏ね	—	2.8	4.8	A C H I	65	普通	灰黄褐	確認面	45-4
29	土師器	手捏ね	7.0	3.4	3.5	A E H I K	80	普通	にぶい赤褐	No.385 底部平底 底部木葉痕	45-5
30	土師器	手捏ね	—	3.1	3.6	A C H I	95	普通	橙	No.172 底部木葉痕 棒状圧痕	45-6
31	土師器	手捏ね	—	3.9	5.0	A C H I	90	普通	橙	No.162 底部木葉痕 棒状圧痕 内外面黒色 62と入れ子状出土	45-7
32	土師器	手捏ね	—	3.6	3.8	A E H I K	60	普通	灰褐	No.387	45-8
33	土師器	手捏ね	6.6	3.2	4.2	A E H I K	90	普通	にぶい赤褐	No.146	45-9
34	土師器	手捏ね	8.2	4.7	3.9	A E H I K	90	普通	明赤褐	No.321 内面黒色	45-10
35	土師器	手捏ね	—	3.1	4.4	A E H I K	90	普通	褐灰	No.209 棒状圧痕か	45-11
36	土師器	手捏ね	—	5.1	3.9	A H I K	60	普通	にぶい褐	No.282・283 底部木葉痕 棒状圧痕	45-12
37	土師器	手捏ね	8.2	4.8	5.5	A E H I K	100	普通	明赤褐	No.319 底部木葉痕か	46-1
38	土師器	手捏ね	5.8	3.5	4.0	A C H I	100	普通	にぶい橙	No.424	46-2
39	土師器	手捏ね	6.2	3.8	4.7	A C H I	100	普通	にぶい褐	No.421	46-3
40	土師器	手捏ね	6.1	4.6	3.0	A C H I	95	普通	にぶい赤褐	No.465 棒状圧痕か	46-4
41	土師器	手捏ね	—	4.1	3.3	C H I J K	90	普通	橙	E5g-14 内面黒色	46-5
42	土師器	手捏ね	—	3.6	—	A C H I	70	普通	橙	確認面	46-6
43	土師器	手捏ね	—	3.0	3.9	A E H I	65	普通	にぶい赤褐	確認面	46-7
44	土師器	手捏ね	—	3.9	3.2	A C E H I	50	普通	橙	確認面	46-8
45	土師器	手捏ね	6.4	4.1	4.8	A C E H I	100	普通	橙	No.393 底部木葉痕 棒状圧痕	46-9
46	土師器	手捏ね	6.6	4.3	3.9	A D H I K	100	普通	明赤褐	No.157 底部木葉痕	46-10
47	土師器	手捏ね	—	5.1	4.9	A C H I	95	普通	にぶい赤褐	確認面 内面付着物あり 黒色	46-11
48	土師器	手捏ね	—	4.2	4.8	A E H I K	70	普通	にぶい赤褐	No.114 底部棒状圧痕	46-12
49	土師器	手捏ね	—	4.9	4.5	A B H I	85	普通	橙	No.148 底部棒状圧痕	47-1

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
50	土師器	手捏ね	7.2	5.7	3.9	A C D E H I K	95	普通	にぶい赤褐	No.28 棒状圧痕	47-2
51	土師器	手捏ね	7.3	4.4	3.9	A C E H I K	100	良好	橙	No.216 棒状圧痕	47-3
52	土師器	手捏ね	6.0	4.6	4.2	A C E H I	100	普通	明赤褐	No.147 棒状圧痕	47-4
53	土師器	手捏ね	8.0	4.4	4.4	A C E H I	95	普通	橙	確認面 内面黒色 底部木葉痕	47-5
54	土師器	手捏ね	7.4	4.2	4.0	A E H I K	100	普通	明赤褐	No.58 棒状圧痕	47-6
55	土師器	手捏ね	4.0	2.5	3.6	A C H I	100	普通	灰黄褐	No.384 不明圧痕	47-7
56	土師器	手捏ね	4.6	2.6	3.9	A C E H I	95	普通	褐	No.350 棒状圧痕	47-8
57	土師器	手捏ね	6.8	4.3	5.0	A C E H I K	100	良好	明赤褐	No.215 体部に棒状圧痕	47-9
58	土師器	手捏ね	6.5	4.4	4.5	A C E H I K	100	普通	にぶい褐	No.169	47-10
59	土師器	手捏ね	5.3	4.4	4.2	A C E H I	70	普通	にぶい橙	No.199	47-11
60	土師器	手捏ね	—	4.8	4.0	C E H I	90	普通	橙	No.140・143・144・359 内面黒色	47-12
61	土師器	手捏ね	—	5.0	5.7	A C E H I K	80	普通	褐	No.13	48-1
62	土師器	手捏ね	8.2	4.9	5.6	A C H I	100	普通	橙	No.162 内外面黒色付着物あり 底部木葉痕 31と入れ子状出土	48-2
63	土師器	手捏ね	—	5.2	4.9	A C H I	70	普通	橙	No.156	48-3
64	土師器	手捏ね	—	4.3	4.3	A C H I	40	普通	明赤褐	確認面	48-4
65	土師器	手捏ね	5.0	3.6	4.3	A H I K	100	普通	にぶい褐	No.420 網代状か 棒状圧痕	48-5
66	土師器	手捏ね	—	5.2	6.4	A C H I K	45	普通	明赤褐	E4g 側溝 底部木葉痕 棒状圧痕	48-6
67	土師器	手捏ね	—	4.6	—	A C E H I K	40	普通	橙	E5g-36 棒状圧痕	48-7
68	土師器	手捏ね	9.6	5.0	5.0	A C H I K	100	普通	橙	No.46 内面黒色 底部木葉痕 棒状圧痕	48-8
69	土師器	手捏ね	9.0	4.0	5.2	A C H I	90	普通	橙	No.63・99 棒状圧痕 内面炭化物付着	48-9
70	土師器	手捏ね	9.3	4.6	4.4	A C H I	100	普通	橙	No.86 底部木葉痕 棒状圧痕	48-10
71	土師器	手捏ね	8.2	4.1	4.4	A C H I	100	普通	橙	No.373 内面黒色 底部木葉痕	48-11
72	土師器	手捏ね	7.9	3.8	4.2	A C H I K	100	普通	橙	No.105	48-12
73	土師器	手捏ね	—	3.6	5.6	A C D E H I K	70	普通	橙	確認面 底部木葉痕 棒状圧痕	49-1
74	土師器	手捏ね	—	4.7	5.4	A C H I K	50	普通	にぶい褐	No.505 底部木葉痕	49-2
75	土師器	手捏ね	—	3.6	5.3	A E H I K	70	普通	にぶい橙	No.97 底部木葉痕 棒状圧痕	49-3
76	土師器	手捏ね	8.0	5.1	5.4	A E H I K	55	普通	にぶい赤褐	確認面 底部木葉痕 棒状圧痕	49-4
77	土師器	手捏ね	—	3.4	4.2	A C H I K	30	普通	橙	No.552	49-5
78	土師器	手捏ね	—	3.3	—	A E H I K	40	普通	にぶい褐	E5g-8	49-6
79	土師器	手捏ね	9.0	4.5	6.0	A C E H I	100	普通	橙	No.399 底部木葉痕 棒状圧痕	49-7
80	土師器	手捏ね	—	5.1	5.7	A C H I	70	普通	橙	No.299・308・398 E5g-16 底部木葉痕 棒状圧痕	49-8
81	土師器	手捏ね	9.3	3.8	5.7	A C E H I	80	普通	橙	No.275 底部木葉痕 棒状圧痕	49-9
82	土師器	手捏ね	8.8	4.2	4.4	A C D H I K	95	普通	明赤褐	No.21	49-10
83	土師器	手捏ね	9.0	5.1	5.4	A C H I K	100	普通	橙	底部木葉痕 棒状圧痕	49-11
84	土師器	手捏ね	8.8	4.5	4.5	A C H I	100	普通	橙	No.20 底部木葉痕 内面黒色	49-12
85	土師器	手捏ね	8.4	4.2	4.7	A C H I K	95	普通	橙	No.323 底部棒状圧痕	50-1
86	土師器	手捏ね	—	3.8	5.8	A C H I K	45	普通	明赤褐	No.320 E5g-17 底部木葉痕 棒状圧痕	50-2
87	土師器	手捏ね	6.8	4.2	4.0	A E H I K	100	普通	にぶい赤褐	No.184	50-3
88	土師器	手捏ね	—	4.6	—	A C H I	80	普通	にぶい赤褐	底部木葉痕 棒状圧痕	50-4
89	土師器	手捏ね	—	5.9	—	A C H I K	35	普通	にぶい黄橙	D5g-69 底部木葉痕 棒状圧痕	50-5
90	土師器	手捏ね	10.4	4.5	6.0	A C E H I	95	普通	橙	No.376 底部木葉痕 棒状圧痕	50-6
91	土師器	手捏ね	11.3	5.4	5.1	A C H I	95	普通	橙	No.490 E5g 底部木葉痕 棒状圧痕	50-7
92	土師器	手捏ね	9.1	5.5	4.8	A C H I K	70	普通	橙	No.201 底部木葉痕 棒状圧痕	50-8
93	土師器	手捏ね	—	6.7	4.2	A B C E H I	70	普通	橙	No.149 棒状圧痕	50-9
94	土師器	手捏ね	(10.0)	3.1	—	A C E H I K	50	普通	橙	No.154 黒斑あり	50-10
95	土師器	手捏ね	—	4.4	—	A C H I	30	普通	橙	No.274	50-11
96	土師器	手捏ね	—	5.1	3.9	A C E H I	70	普通	明赤褐	No.474 底部不明圧痕	50-12
97	土師器	手捏ね	6.3	5.1	3.1	A C E H I	80	普通	橙	確認面 棒状圧痕 不明圧痕	51-1
98	土師器	手捏ね	5.0	4.4	2.9	A H I K	95	普通	橙	No.117	51-2

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
99	土師器	手捏ね	5.5	4.9	4.8	A E H I K	100	普通	明赤褐	No.429 棒状圧痕	51-3
100	土師器	手捏ね	6.2	5.3	4.8	A E H I J	100	普通	にぶい橙	No.369	51-4
101	土師器	手捏ね	5.0	4.2	3.3	A E H I K	100	普通	にぶい赤褐	No.187 体部棒状圧痕	51-5
102	土師器	手捏ね	—	3.9	2.8	A E H I K	70	普通	にぶい赤褐	No.477 体部棒状圧痕	51-6
103	土師器	手捏ね	5.4	3.9	3.3	A C H I	95	普通	明赤褐	No.306 底部木葉痕	51-7
104	土師器	手捏ね	—	3.9	—	A H I K	70	普通	灰褐	No.280	51-8
105	土師器	手捏ね	4.5	3.1	2.5	E F H I	60	普通	褐灰	No.383 底部不明圧痕	51-9
106	土師器	手捏ね	—	4.1	—	A E H I K	30	普通	明褐	No.380	51-10
107	土師器	手捏ね	7.8	3.6	6.2	A C E H I	90	普通	にぶい橙	No.207	51-11
108	土師器	手捏ね	5.9	4.0	5.8	A C H I	100	普通	にぶい橙	No.382 底部板目状痕跡 体部糊状圧痕	51-12
109	土師器	手捏ね	—	3.9	5.0	A C H I	90	普通	にぶい赤褐	No.342	52-1
110	土師器	手捏ね	5.8	3.7	4.4	A C H I	100	普通	にぶい褐	No.340 底面平滑 棒状圧痕	52-2
111	土師器	手捏ね	6.2	4.1	4.8	A C H I	100	普通	橙	No.368 底部編物状痕跡 棒状圧痕	52-3
112	土師器	手捏ね	5.7	3.2	3.8	A B C E H I	100	普通	橙	No.338 棒状圧痕	52-4
113	土師器	手捏ね	5.6	3.7	3.9	A C E H I	100	普通	橙	No.347 棒状圧痕	52-5
114	土師器	手捏ね	6.3	4.6	6.0	A C E H K	100	普通	明赤褐	No.126 底部不明圧痕	52-6
115	土師器	手捏ね	4.7	3.2	3.9	A C H I	95	普通	にぶい橙	No.430	52-7
116	土師器	手捏ね	—	2.6	—	A C E H I	80	普通	褐灰	No.196 外面黒色	52-8
117	土師器	手捏ね	8.0	4.5	6.2	A C H I	100	普通	橙	No.348 種子圧痕	52-9
118	土師器	手捏ね	7.4	4.3	5.0	A C E H I	100	良好	にぶい赤褐	No.381 棒状圧痕	52-10
119	土師器	手捏ね	6.4	3.5	4.6	A E H I K	100	普通	にぶい赤褐	No.365 棒状圧痕	52-11
120	土師器	手捏ね	—	3.4	—	A C H I	20	普通	にぶい褐	No.361 棒状圧痕	52-12
121	土師器	手捏ね	5.5	3.5	6.0	A C E H I	100	普通	橙	No.102	53-1
122	土師器	手捏ね	—	4.2	6.0	A E H I K	40	普通	にぶい赤褐	No.343 底部木葉痕 棒状圧痕	53-2
123	土師器	手捏ね	8.1	3.8	5.6	A H I K	95	普通	にぶい橙	No.336 不明圧痕	53-3
124	土師器	手捏ね	5.5	2.9	4.2	A C E H I	95	普通	橙	No.367	53-4
125	土師器	手捏ね	—	4.7	—	A C H I	70	普通	橙	確認面 底部木葉痕 内面黒色	53-5
126	土師器	手捏ね	—	3.8	5.2	A H I K	60	普通	橙	No.322 底部木葉痕	53-6
127	土師器	手捏ね	8.2	4.7	6.2	A C D H I K	100	普通	にぶい赤褐	No.366 不明圧痕	53-7
128	土師器	手捏ね	8.0	3.7	6.3	A E H I K	80	普通	にぶい赤褐	No.339 棒状圧痕	53-8
129	土師器	手捏ね	—	4.3	7.8	A H I K	85	普通	にぶい橙	No.612	53-9
130	土師器	手捏ね	9.3	4.3	7.3	A C D H I K	100	普通	にぶい橙	No.363	53-10
131	土師器	手捏ね	—	3.5	—	A E H I K	40	普通	にぶい橙	No.364	53-11
132	土師器	手捏ね	9.0	3.5	—	A C E H I K	85	普通	灰褐	No.341 不明圧痕	53-12
133	土師器	手捏ね	—	4.5	7.2	A E H I	65	普通	橙	D5g-83 棒状圧痕	54-1
134	土師器	坏	12.1	4.8	—	A E H I K	90	普通	にぶい橙	確認面	
135	土師器	坏	12.9	4.8	—	A B C E H I	95	普通	橙	No.423	40-1
136	土師器	坏	12.8	4.5	—	A E H I K	90	普通	橙	No.378	40-2
137	土師器	坏	13.0	4.1	—	A C E H I K	100	普通	にぶい赤褐	No.377	40-3
138	土師器	坏	13.8	4.3	—	A E H I K	95	普通	にぶい赤褐	No.100	40-4
139	土師器	坏	13.8	4.6	—	A C H I K	95	普通	橙	No.411	40-5
140	土師器	坏	14.6	4.0	—	A H I K	80	普通	橙	No.107 · 177 · 472 · 473	40-6
141	土師器	坏	13.4	4.5	—	A C H I	80	普通	にぶい橙	No.168 · 304	40-7
142	土師器	坏	13.0	4.5	—	A C E H I	95	普通	橙	No.475	40-8
143	土師器	坏	14.1	4.0	—	A C H I J	75	普通	橙	No.510	40-9
144	土師器	坏	11.8	4.4	—	A C H I	100	普通	明赤褐	No.374	40-10
145	土師器	坏	12.3	4.2	—	A C H I	80	普通	橙	No.305 · 329 底部ヘラ記号 内外面黒色処理	41-1
146	土師器	坏	(12.9)	3.9	—	A C H I	35	普通	橙	No.308 内外面黒色処理	41-2
147	土師器	坏	(13.6)	4.3	—	D E H I K	30	普通	橙	No.335	
148	土師器	坏	12.4	4.6	—	A B H I K	90	普通	にぶい黄橙	No.557 E5g-17トレンチ	41-3
149	土師器	坏	12.6	5.2	—	A D E H I K	40	良好	明赤褐	No.210	41-4

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
150	土師器	壺	(12.8)	4.2	—	A H I K	20	普通	にぶい黄橙	No.43・442 外面口縁から内面全体黒色	
151	土師器	壺	(13.2)	3.9	—	E H I K	20	普通	橙	E5g-6と接合	
152	土師器	壺	(12.8)	3.7	—	A C H I K	15	普通	橙	確認面	
153	土師器	壺	(12.4)	4.1	—	A C E H I	20	普通	橙	No.296・297 内外面黑色処理	
154	土師器	壺	(14.0)	3.7	—	A C E H I K	20	普通	明赤褐	No.5	
155	土師器	高壺	(14.2)	8.4	—	B C E H I K	45	普通	橙	D5g-82	41-5
156	土師器	高壺	17.4	3.8	—	A B C E H I K	20	普通	橙	No.109・118	
157	土師器	高壺	—	7.9	8.7	A C E H I	80	普通	橙	E5g	41-6
158	土師器	鉢	—	4.0	—	A C E H I K	70	普通	橙	No.48	41-7
159	土師器	鉢	(13.9)	5.8	—	A H I K	10	不良	橙	No.569・570	
160	土師器	鉢	—	5.2	(4.6)	A H I K	15	普通	にぶい褐	D5g-99 内面黒色	
161	土師器	鉢	(14.0)	6.0	—	A B D E H I K	20	普通	赤褐	No.204・205	
162	須恵器	壺	—	2.4	—	H I	5	普通	灰	D5g-49 群馬産	60-4
163	須恵器	壺	—	1.9	—	I K	5	普通	灰	D5g-78 群馬産	60-4
164	須恵器	壺	—	4.6	—	A E I K	15	良好	灰	No.479・D5g-96 群馬産	
165	須恵器	壺	(14.0)	3.5	—	E H I	10	普通	灰	D5g-50 群馬産	60-4
166	土師器	甕	(21.4)	5.6	—	A B C E G H I K	20	普通	橙	No.62	
167	土師器	甕	(19.5)	6.7	—	A C E H I	30	普通	橙	No.601	41-8
168	土師器	甕	(19.4)	5.8	—	A C E H I	15	普通	明赤褐	確認面 外面煤	
169	土師器	甕	(17.0)	5.6	—	A B C E H I	60	普通	橙	No.50・499・558	41-9
170	土師器	甕	(19.7)	9.5	—	A C E H I K	20	普通	明赤褐	No.92・112・113	
171	土師器	甕	—	10.5	5.4	A C D E H I	100	良好	橙	No.58・413	41-10
172	土師器	甕	—	18.0	(5.7)	A B C E H I	30	良好	にぶい橙	No.594・607・608	42-1
173	土師器	甕	(13.4)	27.5	6.6	B E H I	30	普通	橙	No.70・74・77・79・80・82・83・85・87・E5g-15	42-2
174	土師器	甕	(19.7)	25.2	—	A B E H I	30	普通	橙	No.59・61・192・194・316・317・425・426・427・431・E5g-16・E5g-26	42-4
175	土師器	甕	(18.4)	18.9	—	A C E G H I K	40	普通	橙	No.6・53・301・325・401・464・E5g-17	42-3
176	土師器	甕	(19.0)	37.4	4.5	A C E H I	35	普通	にぶい橙	No.59	42-5
177	土師器	甕	21.4	27.4	—	E H I	70	普通	橙	No.45・188・293・298・372・478・481	42-6
178	土師器	甕	(18.0)	6.6	—	A B E H I K	25	良好	にぶい赤褐	No.115・116	
179	土師器	甕	—	5.3	(6.4)	A B H I K	40	普通	にぶい赤褐	E5g 内面・底面煤	
180	貝巣穴痕泥岩	—	長さ5.3cm 幅5.9cm 厚さ2.0cm 重さ46.03g					浅黄橙	E5g-16トレンチ		42-7
181	貝巣穴痕泥岩	—	長さ2.2cm 幅2.2cm 厚さ1.4cm 重さ5.26g					にぶい橙	O5g-10		42-8

第42表 第1号祭祀跡出土鉄製品観察表(第112図)

番号	器種	全長(cm)	刃 部			茎 部			重さ(g)	備 考	図版
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
182	鉄鎌	長さ2.0cm 幅1.3cm 厚さ0.3cm							2.8	No.231	60-5
183	鉄鎌刃部	2.1	2.1	1.5	0.2	—	—	—	2.5	D5g-86	60-5
184	鉄鎌	長さ2.7cm 幅1.05cm 背幅 0.2cm							3.2	No.138	60-5
185	鉄鎌	3.2	2.85	0.95	0.2	0.4	0.4	0.3	3.3	No.219	60-5
186	鉄鎌	長さ2.4cm 幅1.05cm 背幅0.15cm							2.4	No.379	60-5
187	鉄鎌	5.3	3.9	2.3	0.2	1.4	0.5	0.35	16.1	No.131	60-5
188	鉄鎌	長さ4.1cm 幅0.4cm 厚さ0.3cm							5.6	No.230	60-6
189	鉄鎌	長さ5.0cm 幅0.45cm 厚さ0.25cm							4.6	E5g-24	60-6
190	鉄鎌	長さ4.4cm 幅0.8cm 厚さ0.35cm							7.0	No.121	60-6
191	鉄鎌	長さ6.1cm 幅0.45cm 厚さ0.35cm							9.3	No.122	60-6

番号	器種	全長(cm)	刃 部			茎 部			重さ(g)	備 考	図版
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
192	鉄鎌	長さ8.7cm 幅0.5cm 厚さ0.5cm							16.4	No.138	60-5
193	鉄鎌	長さ8.9cm 幅0.55cm 厚さ0.3cm							12.7	No.130	60-6
194	鉄鎌	長さ2.4cm 幅0.25cm 厚さ0.25cm							1.5	E5g-4	60-6
195	鉄鎌	長さ1.9cm 幅0.5cm 厚さ0.4cm							1.5	E5g-4	60-6
196	鉄鎌	長さ2.35cm 幅0.55cm 厚さ0.3cm							5.4	E5g-4	60-6
197	鉄鎌	6.3 1.85 1.45 0.2 4.45 0.45 0.3							10.7	No.137	60-5
198	鉄鎌	10.1 2.3 1.15 0.2 7.8 0.4 0.3							13.7	No.134	60-5
199	刀子	長さ5.1cm 幅1.15cm 背幅0.2cm							8.3	No.132	60-5
200	鉄鎌	22.2 2.2 0.9 0.25 20.0 0.5 0.35							39.6	No.120	60-5
201	棒状品	長さ1.6cm 幅0.5cm 厚さ0.3cm							1.7	No.220	60-6
202	棒状品	長さ1.6cm 幅0.4cm 厚さ0.4cm							1.4	No.231	60-5
203	棒状品	長さ1.7cm 幅0.8cm 厚さ0.1cm							1.1	No.227	60-6
204	棒状品	長さ1.8cm 幅0.75cm 厚さ0.2cm							1.1	No.234	60-6
205	棒状品	長さ2.1cm 幅0.6cm 厚さ0.4cm							2.0	No.229	60-6
206	棒状品	長さ2.3cm 幅0.4cm 厚さ0.3cm							3.1	No.218	60-6
207	棒状品	長さ2.4cm 幅0.6cm 厚さ0.4cm							3.4	No.220	60-6
208	棒状品	長さ2.8cm 幅0.6cm 厚さ0.2cm							1.6	E5g-27	60-6
209	棒状品	長さ5.0cm 幅0.55cm 厚さ0.35cm							8.1	No.123	60-6
210	棒状品	長さ3.9cm 幅0.35cm 厚さ0.55cm							6.0	No.78 釘か	60-6

第43表 第1号祭祀跡出土石製品観察表 (第113~115図)

番号	器種	石材	最大径 (mm)		厚さ (mm) 長さ(mm) : 幅(mm)	孔		重さ (g)	色調	側面研磨	備 考	図版
			上径 (mm)	下径 (mm)								
211	有孔円板	滑石	39.0 : 28.5	11.0	4.5	4.0	19.63	灰白	一部有	No.273 A	56-2	
212	有孔円板	滑石	23.0 : 32.5	11.1	3.8	3.6	11.69	灰白	一部有	No.403 C	56-3	
213	有孔円板	滑石	31.8 : 31.5	8.0	5.0	3.0	14.88	灰黄	一部有	D5g-60No.1 A	56-4	
214	有孔円板	滑石	19.0 : 20.8	6.8	2.3	3.3	3.30	灰	有	E5g-4 C	56-5	
215	有孔円板	滑石	19.0 : 21.1	5.5	3.5	3.0	3.05	灰	一部有	No.511 C 穿孔	56-6	
216	有孔円板	滑石	14.8 : 30.2	9.5	3.6	4.0	5.55	灰白	一部有	No.391 B 穿孔ミス有り いびつな形状	56-7	
217	臼玉	滑石	9.1	4.4	2.2	2.0	0.66	黄灰	有	D5g-60No.8 C	56-8	
218	臼玉	滑石	9.5	5.2	2.8	2.7	0.78	灰白	有	No.3 C	56-9	
219	臼玉	滑石	10.0	7.2	3.3	3.3	1.01	灰白	有	D5g-60No.2 C	56-10	
220	臼玉	滑石	10.3	5.0	3.3	3.6	0.85	灰白	有	D5g-60No.3 C	56-11	
221	臼玉	滑石	9.9	5.8	2.5	2.5	0.93	灰白	有	確認面土器中 C	56-12	
222	臼玉	滑石	9.7	4.0	2.7	2.7	0.54	灰	有	No.405 B	56-13	
223	臼玉	滑石	10.8	5.3	2.6	2.8	0.84	オリーブ灰	有	No.224 B	56-14	
224	臼玉	滑石	10.0	7.5	2.5	2.7	1.25	灰白	有	No.1 B	56-15	
225	臼玉	滑石	9.9	7.1	2.7	2.6	1.12	灰白	有	No.501 C	56-16	
226	臼玉	滑石	11.0	7.8	2.7	2.7	1.47	灰	有	No.402 C 付着物有り	56-17	
227	臼玉	滑石	10.9	7.4	3.3	3.2	1.11	灰白	有	No.587 C	56-18	
228	臼玉	滑石	10.1	8.9	2.7	2.7	1.47	灰白	有	No.150 A	56-19	
229	臼玉	滑石	10.9	6.2	3.4	3.1	0.94	灰白	有	No.60 A 両面穿孔	56-20	
230	臼玉	滑石	10.7	5.6	2.0	2.0	0.88	灰黄	有	No.482 B	57-1	
231	臼玉	滑石	10.6	5.3	2.1	2.3	0.92	黄灰	有	No.232 C	57-2	
232	臼玉	滑石	11.6	5.4	2.0	2.0	1.18	灰	有	No.613 C	57-3	
233	臼玉	滑石	11.4	5.6	2.1	2.3	1.00	白	有	No.392 C	57-4	
234	臼玉	滑石	10.9	7.4	1.9	2.0	1.44	オリーブ灰	有	No.228 C	57-5	

番号	器種	石材	最大径 (mm)		厚さ (mm)	孔		重さ (g)	色調	側面研磨	備 考	図版
			長さ (mm)	幅 (mm)		上径 (mm)	下径 (mm)					
235	白玉	滑石	11.0	6.5	3.3	3.3	1.04	灰白	有	No.59 E		57-6
236	白玉	滑石	11.6	4.8	2.4	2.3	0.95	灰	有	No.404 C		57-7
237	白玉	滑石	11.5	4.0	4.1	3.7	0.77	灰白	有	No.225 C		57-8
238	白玉	滑石	11.2	12.1	3.2	2.9	2.45	灰白	有	D5g-60No.9 C		57-9
239	白玉	滑石	11.7	6.4	3.0	2.9	1.34	灰白	有	No.483 A		57-10
240	白玉	滑石	11.0	8.4	2.7	3.0	1.80	灰白	有	D5g-68No.10 C		57-11
241	白玉	滑石	12.6	12.2	3.3	3.1	2.32	灰	有	No.175 C 側面部分磨耗して不明瞭		57-12
242	白玉	滑石	12.1	9.1	2.7	2.5	2.48	灰	有	E5g No.486 C 鉄分付着		57-13
243	白玉	滑石	12.0	9.8	2.8	2.6	2.47	灰白	有	No.2 C		57-14
244	白玉	滑石	11.9	9.1	2.7	2.6	2.27	灰白	有	No.397 C		57-15
245	白玉	滑石	12.0	7.0	2.7	2.3	1.51	黄灰	有	No.152 B		57-16
246	白玉	滑石	11.7	6.3	2.5	2.3	1.33	灰	有	No.184内 C 付着物有り		57-17
247	白玉	滑石	11.7	8.7	3.7	3.7	1.81	灰白	有	No.222No.390 C		57-18
248	白玉	滑石?	12.0	9.5	3.2	3.0	1.96	白	有	D5g-60No.6 E 両面穿孔 側面と穿孔部に鉄分付着		57-19
249	白玉	滑石	12.4	10.7	3.6	3.5	2.53	白	有	D5g-68No.12 C		57-20
250	白玉	滑石	12.0	7.4	2.8	2.6	1.84	灰白	有	確認面土器中 B		57-21
251	白玉	滑石	12.4	6.1	3.8	2.6	1.57	灰	有	E5g No.491 C 穿孔ミス有		57-22
252	白玉	滑石	13.5	7.1	3.4	3.3	1.84	灰白	有	No.203 E		57-23
253	白玉	滑石	13.2	7.3	3.0	2.6	1.80	灰白	有	No.214 B		57-24
254	白玉	滑石	13.6	6.8	3.4	3.1	1.89	灰白	有	No.223 C		58-1
255	白玉	滑石	13.5	7.0	3.4	3.9	1.82	灰	有	E5g-14 C		58-2
256	白玉	滑石	13.1	8.3	5.3	3.2	2.44	白	有	No.226 B 穿孔ミス有り 両面穿孔か		58-3
257	白玉	滑石	13.7	4.1	3.7	3.0	1.03	灰	有	No.202 E		58-4
258	白玉	滑石	13.0	9.8	3.3	3.8	2.45	灰白	有	D5g-60No.5 A		58-5
259	白玉	滑石	14.3	8.9	3.6	2.8	2.14	灰	有	No.504 B		58-6
260	白玉	滑石	13.7	13.0	3.8	3.7	3.52	黄灰	有	D5g-60No.4 A 穿孔部全体に付着物		58-7
261	白玉	滑石	14.2	10.3	2.9	3.1	2.22	灰	有	No.221 C 両面穿孔か		58-8
262	白玉	滑石	13.7	11.7	3.5	3.7	2.91	灰白	有	No.508 C		58-9
263	白玉	緑泥石	16.6	9.4	3.7	4.1	3.80	灰	有	No.159 E 両面穿孔か		58-10
264	白玉	滑石	14.8	8.8	2.6	2.6	2.75	灰	有	No.153 C		58-11
265	白玉	滑石	15.2	7.7	3.2	4.3	2.53	灰白	有	E5g-14 C		58-12
266	白玉	滑石	12.6	6.4	2.6	2.9	0.89	灰白	有	No.526 C		58-13
267	白玉	滑石	12.9	5.7	3.7	3.0	1.02	灰	有	D5g-60No.7 C 両面穿孔		58-14
268	白玉	滑石	13.0	9.8	4.1	3.6	1.50	灰白	有	D5g-68No.11 C		58-15
269	白玉	滑石	13.9	5.6	3.1	3.1	1.53	灰白	有	No.499 C 不純物付着		58-16
270	白玉	滑石	14.3	7.4	4.1	3.3	1.81	灰白	有	E5g-24 C		58-17
271	白玉	滑石	14.8	9.7	3.4	3.3	2.54	灰白	有	E5g-24 C		58-18
272	白玉	滑石	15.9	7.8	2.9	3.0	2.06	黄灰	有	No.389 B		58-19
273	白玉	滑石	14.7	8.5	4.0	3.0	1.87	オリーブ灰	有	No.217 D		58-20
274	白玉	滑石	14.6	9.5	5.0	3.8	2.00	灰白	有	No.4 C 両面穿孔か		58-21
275	白玉	滑石	12.0	11.0	—	—	0.90	灰白	有	No.59 B		58-22
276	白玉	滑石	15.7	3.2	3.7	—	0.69	黄橙	ごく一部有	G4g 河川跡 C		58-23
277	白玉?	滑石	14.0 : 17.5	6.7	2.7	3.2	1.99	灰白	一部有	No.145 C 両面穿孔か 表裏面風化により不明瞭		58-24

(6) 河川跡

本調査では、A～C区から河川跡が検出されている。二つの大きな流路があると考えられる(第116図)。北から1号、2号と呼称し、C区北端の河川跡は、北西—南東方向で本流の流路跡とするには無理があるため、2号の支流としておきたい。

第1号河川跡(第116・117図)

A区の北西側、南西端、B区の北側、B・C-6、D・E-4、E・F-4グリッドに位置する。A・B区の西側を蛇行して流れていると考えられる。表土層の直下まで立ち上がりがあり、現在の女堀川の旧河川跡と考えられる。A区第19・23・26号住居跡と重複し、本河川跡がそれらの住居跡を壊している。また、A区の南端では第2号河川跡と重複し、本河川跡が新しい。

軸方位は、A区はほぼ南北方向、B区はN-62°-Eである。西側が調査区域外になり、幅、深さともに不明である。

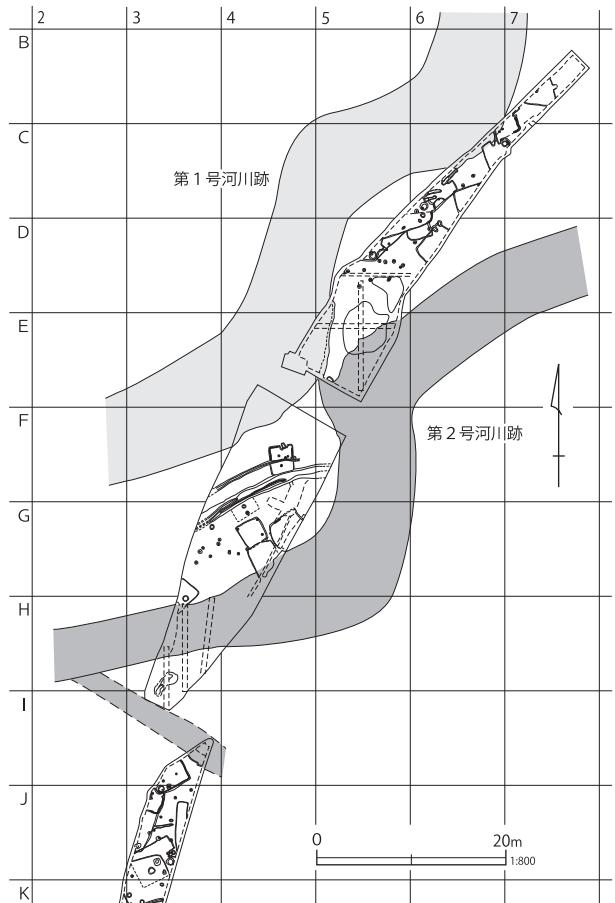
覆土は、淡黄灰色土、淡黄褐色土で、シルト、砂、砂利を主体とする。

遺物が出土しておらず、重複関係と堆積状況から、古墳時代以降から近代まで開口していたと考えられる。

第2号河川跡(第116～120図)

A区の南東端、B区の北側、南側のE・F-5、G・H-3・4グリッドに位置する。B区の南側を横断し、A・B区の東側を蛇行して流れていると考えられる。A区の南端では第1号河川跡と重複関係にあり、本河川跡が古い。また、B区第37・38号住居跡と重複し、本河川跡がそれらの住居跡を壊している。古墳時代後期の遺構は、本河川跡を避けて造られている。以上の重複関係から、本河川跡は、古墳時代前期より後に流路となり、古墳時代後期には本流であったと考えられる。

軸方位は、A区はN-55°-E、B区はN-80°-Eである。B区における幅は5.0mほどである。深さは1m以上掘り下げられなかつたため不明である。

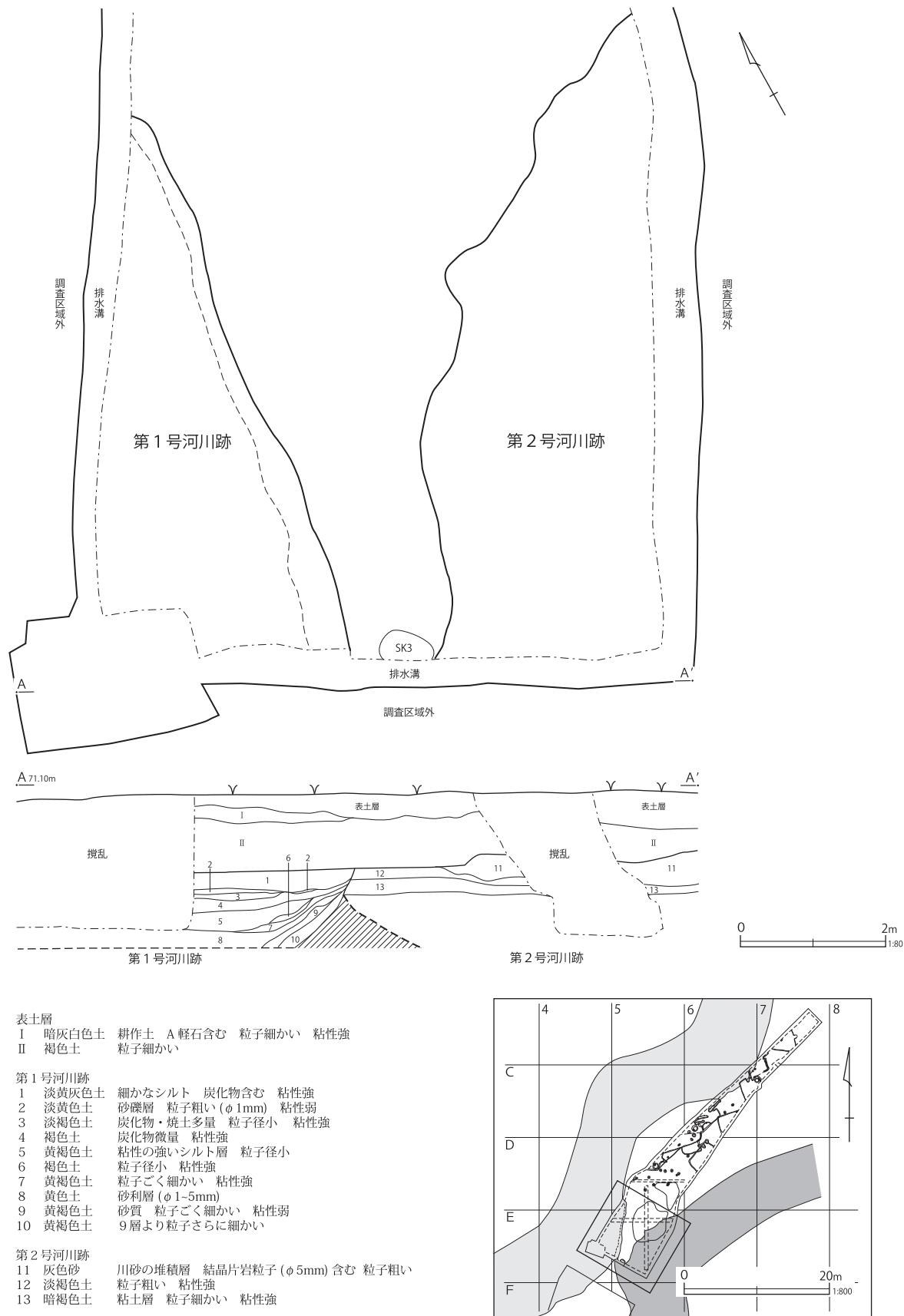


第116図 河川跡全体図

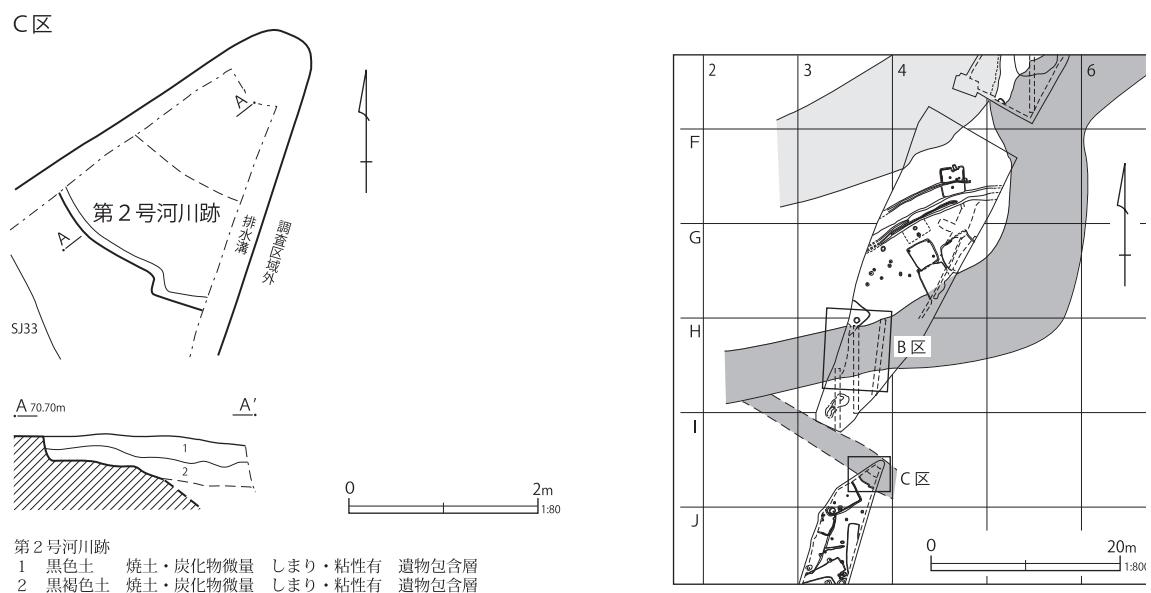
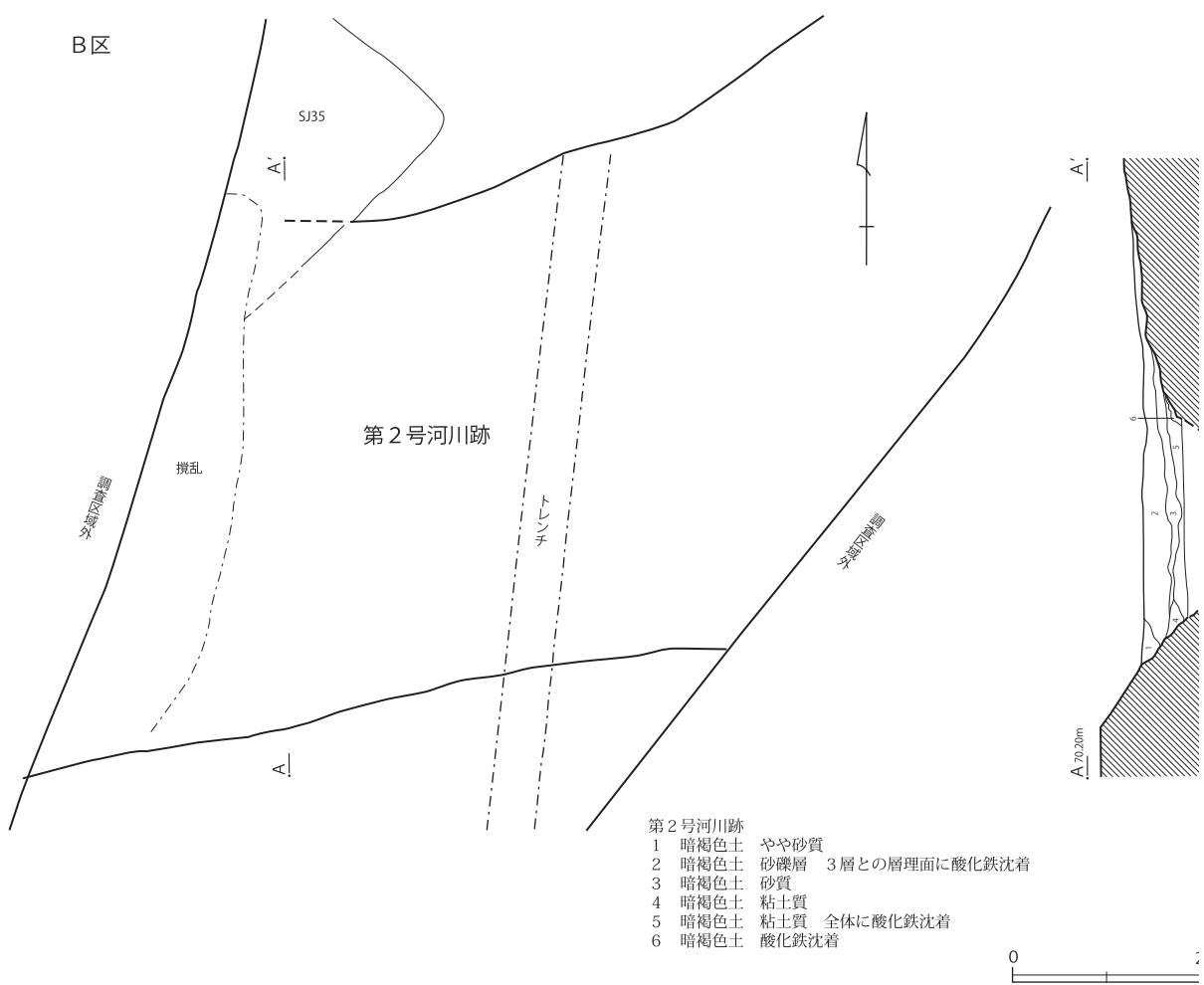
覆土は、暗褐色粘土、砂、砂利を主体とする。

遺物は、覆土全体から出土したが、A区南側に設けたトレチ下層の青色粘土直上から古墳時代前期の甌(第119図1)が、B区南側の下層から古墳時代前期の壺、甌(2・3)が出土し、河川跡の上限を示すと考えられる。B区南側河川跡の覆土中からは古墳時代後期の壺蓋模倣壺、壺、甌、高壺(4～15)が、C区の河川跡からは古墳時代後期の有段口縁壺、古墳時代中期の甌、高壺、古墳時代前期の器台(16～19)が出土している。

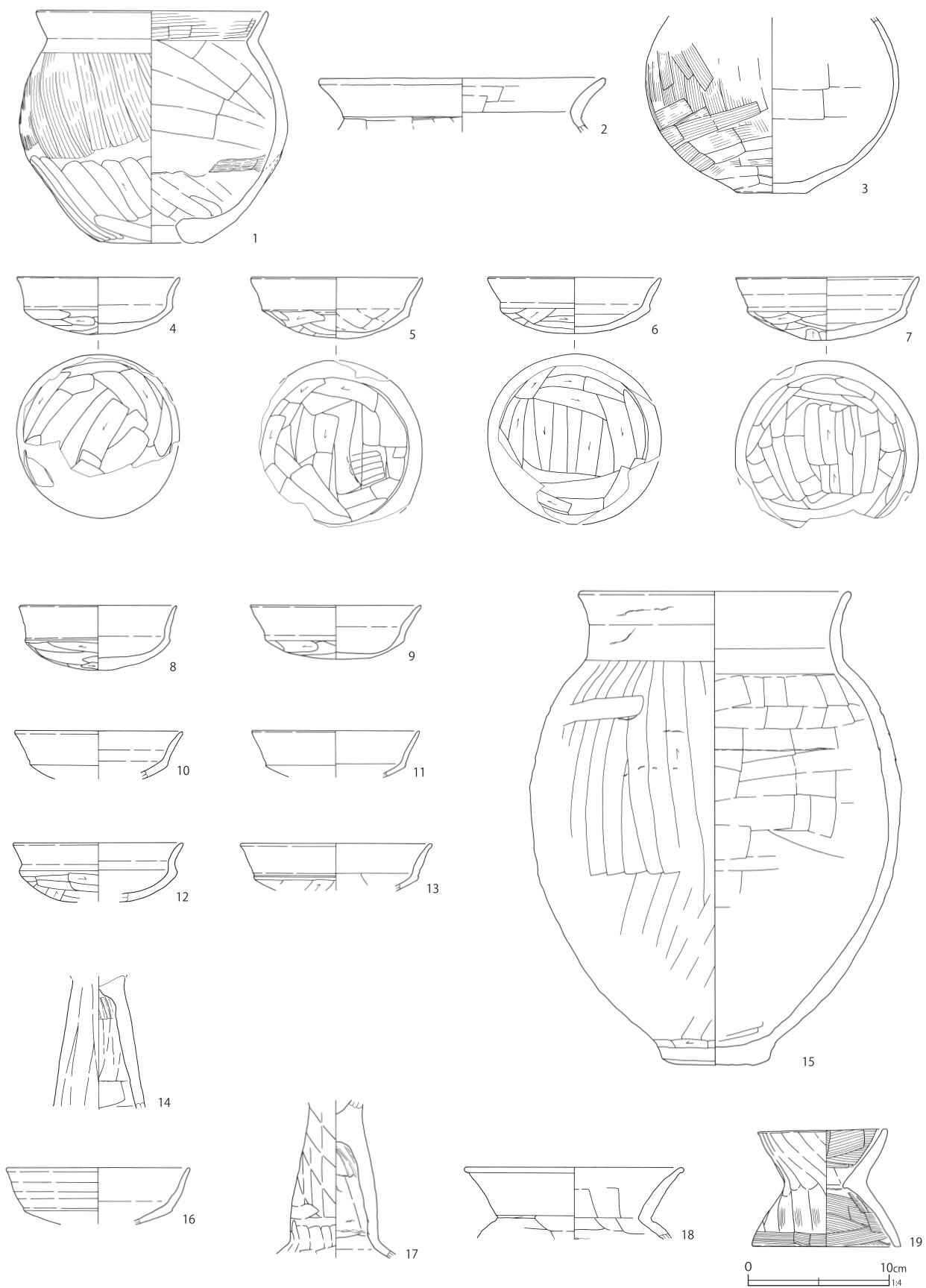
1～3は古墳時代前期のものである。1は甌である。単孔の甌としては珍しい甌形である。ベースは刷毛目調整で、口縁部は横ナデ、胴部下半はヘラケズリが加えられている。内面はヘラナデである。4～17は古墳時代後期のものである。4～13は壺蓋模倣壺である。7・13はやや径が大きいが、それ以外は径11.5～12.0mと小型で口縁部が



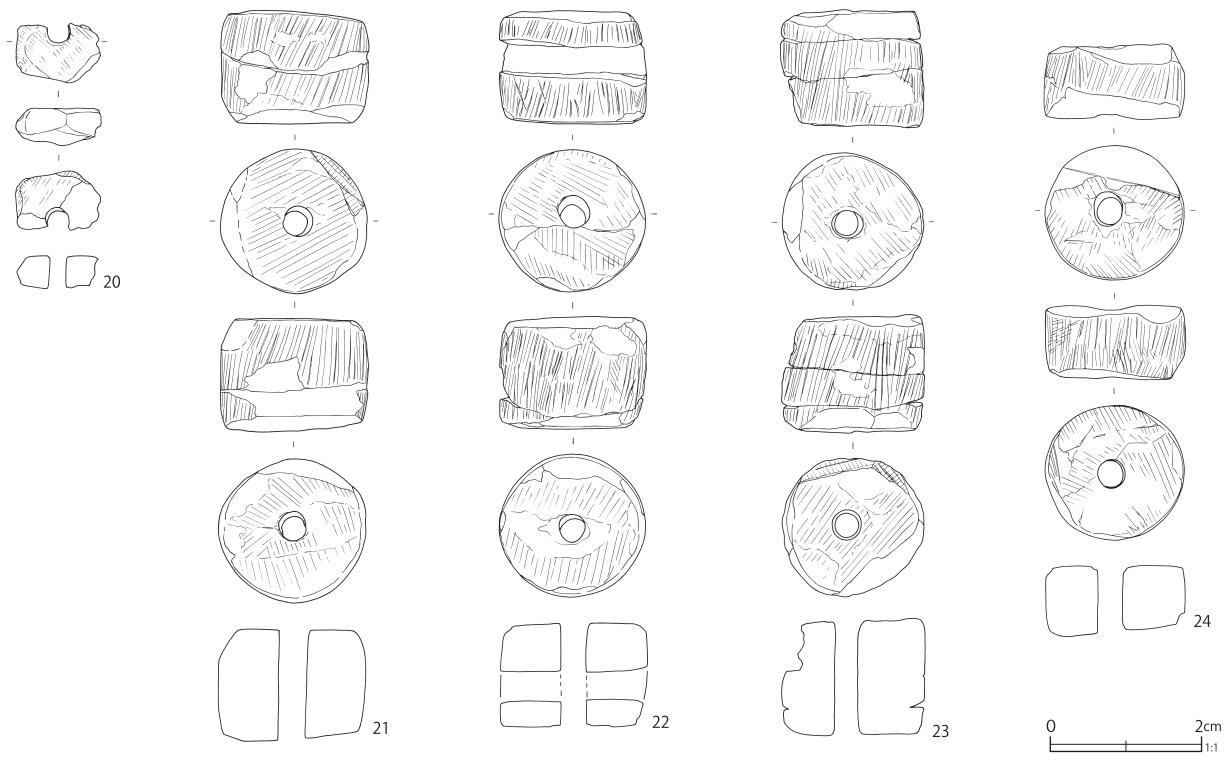
第117図 河川跡 (A区)



第118図 河川跡 (B・C区)



第119図 第2号河川跡出土遺物（1）



第120図 第2号河川跡出土遺物（2）

第44表 第2号河川跡出土遺物観察表（第119図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	甌	(16.2)	16.4	7.5	A C E H I	40	普通	橙	E5g-65 河川跡青粘土直上	38-1
2	土師器	甌	(20.2)	3.9	—	A B C E H I K	5	普通	橙	旧河川跡	
3	土師器	壺	—	12.4	5.0	A H I K	25	普通	明赤褐	H3g 旧河川跡	38-2
4	土師器	壺	11.6	4.1	—	A H I K	50	普通	明赤褐	G4g 河川跡	
5	土師器	壺	(12.0)	4.3	—	A D H I K	80	普通	橙	G4g 河川跡	
6	土師器	壺	(12.1)	4.0	—	A B H I K	60	普通	橙	G4g 河川跡	38-3
7	土師器	壺	12.8	4.5	—	A C H I	80	普通	橙	G4g 河川跡	
8	土師器	壺	(11.2)	4.6	—	A C H I	50	普通	橙	G4g 河川跡	
9	土師器	壺	12.2	3.8	—	A C H I	90	不良	橙	G4g 河川跡	38-4
10	土師器	壺	(12.0)	3.3	—	A E H I	10	普通	橙	H3g 河川跡	
11	土師器	壺	(12.0)	3.3	—	A E H I	40	不良	橙	G4g 河川跡	
12	土師器	壺	(12.0)	4.1	—	A H I K	20	普通	橙	河川跡	
13	土師器	壺	(13.6)	3.4	—	A H I K	20	普通	橙	G4g 河川跡	
14	土師器	高壺	—	9.4	—	A B C E H I	70	普通	橙	河川跡	
15	土師器	甌	(19.0)	33.5	(7.4)	A B C E H I	20	普通	にぶい橙	河川跡	38-7
16	土師器	壺	(13.0)	4.0	—	A C H I	5	普通	にぶい橙	河川跡	
17	土師器	高壺	—	11.2	—	A C E H I	70	普通	橙	河川跡	38-5
18	土師器	甌	(15.3)	5.0	—	A C D H I	5	普通	にぶい赤褐	河川跡 内外面黒褐色 二次加熱	
19	土師器	器台	9.0	8.2	10.6	A C H I	80	普通	橙	河川跡	38-6

第45表 第2号河川跡出土石製品観察表（第120図）

番号	器種	石材	最大径 (mm) 長さ (mm) : 幅 (mm)	厚さ (mm)	孔		重さ (g)	色調	側面研磨	備 考	図版
					上径 (mm)	下径 (mm)					
20	白玉	滑石	11.2	4.9	3.2	3.0	0.57	灰白	無	G4g B 円形の加工なし	59-1
21	白玉	滑石	19.4	14.9	3.7	4.0	8.93	黄灰	有	G4g A	59-2
22	白玉	滑石	19.4	16.6	4.3	3.5	7.45	灰白	有	G4g B	59-3
23	白玉	滑石	19.0	15.7	4.3	3.8	8.51	黄灰	有	G4g E	59-4
24	白玉	滑石	18.3	9.9	3.8	3.4	4.88	灰白	有	G4g B	59-5

外反する新しいタイプのものである。14・17は高壇である。14はホゾ接合で、臍の部分が脱落している。17はホゾ接合で、接合部が細い。外面はヘラナデ後、螺旋状にナデを加える。14・17は古墳時代中期に遡る可能性がある。18は古墳時代中期の甕で、口縁部が長めである。19は古墳時代前期の所謂上総型器台である。外面は刷毛目後に指ナデ、内面はヘラナデ後に刷毛目が施されている。

第2号河川跡から出土した石製品は、滑石製の白玉5点である。

20は側面が円形加工されていないが、大きさと石材等から白玉と判断した。小口面は比較的丁寧な研磨が、側面は工具による削りの痕跡が確認できる。穿孔部は摩滅によりほとんど確認できないが、わずかに横方向の回転痕を確認できる。

21~24は、石材、形状、孔径等の類似点から同時期に同一母岩から製作されたものと考えた。22は一部欠損、他は完形品である。いずれも円筒形、突出した大型品であり、24はやや扁平である。

いずれも細部の調整は粗い。

(7) ピット

今回の調査では、A~D区から120基の単独のピットを検出した。A区の第1号祭祀跡北側のD-5・6グリッド、B区の中央G-3・4グリッド、C区北側のJ-3グリッド、D区北側のO-1・2、Q・R-1・2グリッドに分布が集中している。明瞭な規則的配置は認められないが、D区南側のO-1・2グリッドでは、円形に近い配列が見られ、何らかの施設の可能性を考えられる。

形態は円形、もしくは橿円形で、一部に不整形のものがある。規模は、A区で径0.28~0.88m、深さ0.10~0.46m、B区で径0.26~0.46m、深さ0.08~0.36m、C区で径0.10~0.44m、深さ0.07~0.52m、D区で径0.15~0.71m、深さ0.04~0.51mとまちまちである。径0.30m前後、深さ0.20~0.30m前後の例が多い。

遺物は、土師器の小破片のみで、古墳時代後期のものと考えられる。

4. 平安時代の遺構と遺物

本調査では、D区から平安時代の住居跡1軒が検出されている。隣接する川越田遺跡でも、平安時代の住居跡は10軒検出されたに過ぎない。現在のところ本調査の第1号住居跡が最も南側になるようである。

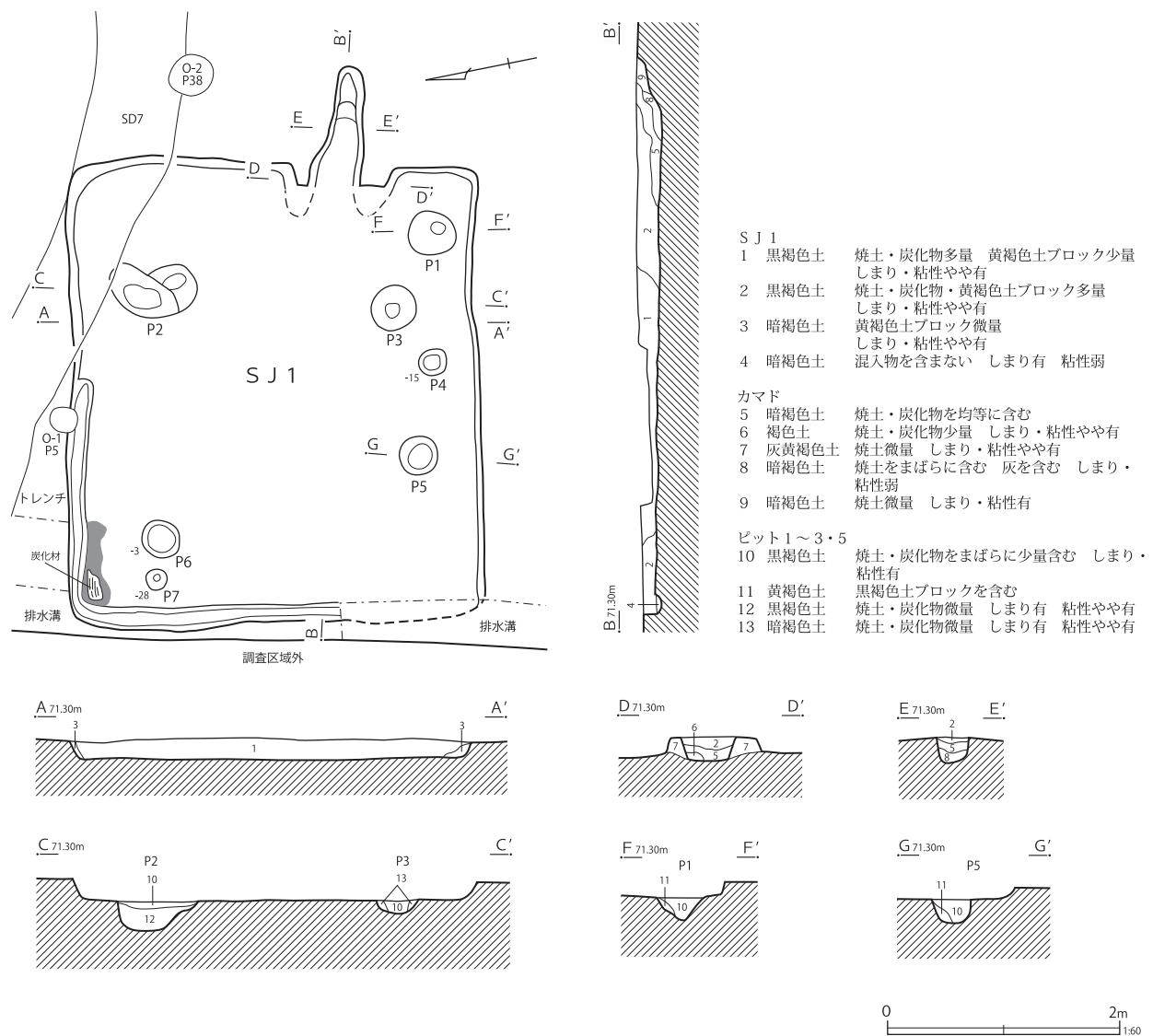
溝跡、土壌等は検出されなかった。

(1) 住居跡

第1号住居跡（第121・122図）

D区の中央、やや北側O・P-1・2グリッドに位置する。遺構の南西側が排水溝にかかるが、それ以外は遺構のほぼ全体を調査できた。第7号溝跡と重複し、本遺構の方が古い。

平面形は長方形である。主軸方位はN-105°-Eで、東カマドである。規模は、主軸方向4.10m、



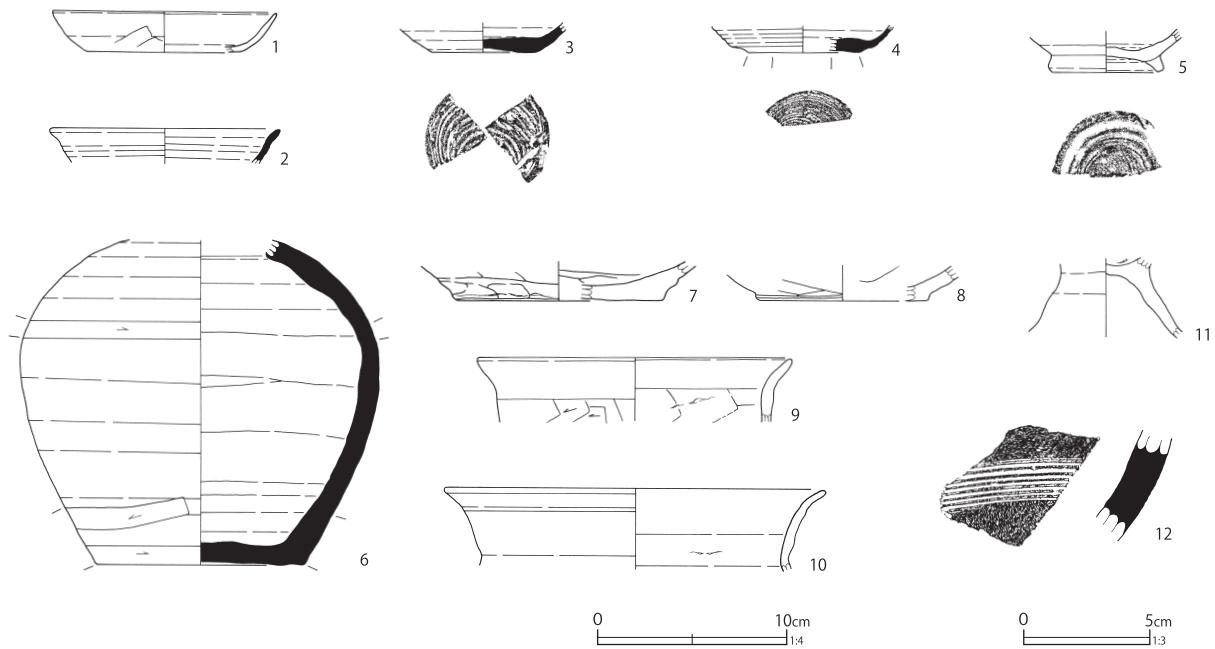
第121図 第1号住居跡

直交軸方向3.50mである。深さは0.20mで、床面はほぼ平坦である。覆土は、焼土、炭化物、黄褐色土を多く含む黒褐色土で、埋戻しの可能性がある。床面は南西隅が硬くしまっていた。また、北西コーナーには炭化物が集中し、炭化材が出土している。樹種はサクラ属である。

カマドは東壁に設けられていた。全長1.30m、幅1.00mである。燃焼部は突出し、段を持って煙道に至る。全体に天井部が崩落している。燃焼部は幅0.35mで細長い。不明瞭だが、5層が天井構築土、8層が灰層と考えられる。床面、壁面はあまり焼けていなかった。袖は粘土の貼り付け

で、基底部の灰黄色粘土がわずかに残り、その大きさを知ることができた。煙道は長さ0.40m、幅0.10m、深さ0.05~0.15mである。奥壁側へ向かつて徐々に浅くなっていた。床面、壁面はあまり焼けていなかった。

床面からは柱穴7本、壁周溝を検出した。位置としては、P2・3・5等が主柱穴に該当する可能性がある。P2が二つの柱穴が重複した形態をしている以外は、いずれもほぼ円形である。規模はP2が長軸0.75m、短径0.45m、深さ0.25mである。それ以外は径0.20~0.40mである。深さはP6が0.30mであるほかは、P1・4が0.15m、P



第122図 第1号住居跡出土遺物

第46表 第1号住居跡出土遺物観察表（第122図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	壺	(11.8)	2.1	(8.2)	C H I K	15	普通	橙		
2	須恵器	壺	(12.0)	1.8	—	A I K	5	良好	灰	多孔質 末野産	
3	須恵器	壺	—	1.7	6.0	E H I K	30	普通	灰	多孔質 末野産	
4	須恵器	壺	—	1.4	(5.8)	A E I K	25	良好	灰	重量感あり 末野産	
5	須恵系土師	高台付壺	—	2.2	(6.1)	A E H I K	20	普通	にぶい橙		
6	須恵器	壺	—	17.1	11.0	B E I	80	良好	褐灰	O2g-6・15と接合 末野産	23-1
7	土師器	壺	—	1.7	(9.0)	A C H I K	25	普通	にぶい橙		
8	土師器	壺	—	1.9	(9.0)	A C E H I K	20	良好	橙		
9	土師器	甕	(16.6)	3.4	—	A B C H I K	15	普通	にぶい橙		
10	土師器	甕	(20.0)	4.2	—	A C E H I	10	良好	明赤褐	カマド	
11	土師器	台付甕	—	4.2	—	A H I K M	70	普通	にぶい赤褐		
12	須恵器	甕	—	4.4	—	A E I K	5	良好	灰	P5 末野産	

3が0.10m、P5が0.20m、P7が0.28mである。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積である。柱痕等は認められなかった。壁周溝は遺構の北西側に設けられていた。幅0.15m、深さ0.05mで、覆土は暗褐色土の单層である。

遺物は僅少で、覆土中から平安時代の土師器壺、甕、台付甕、須恵器壺、壺、甕、須恵系土師質土器が出土している。1は土師器の壺である。低平で、風化が進み、調整は不明瞭である。2～4は須恵器壺である。片岩を含まないが、器面が

荒れ、末野産と考えられる。4は底部糸切り後周辺へラケズリが加えられている。5は須恵系土師質土器の高台付壺である。6の須恵器壺は胴部の上位と底部外周の一部にヘラケズリが加えられている。片岩を含む。末野産。12は須恵器大甕と考えられる。8条1単位のカキ目が加えられている。末野産か。7～10は土師器の壺・甕で外面調整はヘラケズリ、内面調整はヘラナデである。11は台付甕の脚台部である。調整は横ナデである。

5. 中・近世の遺構と遺物

本調査ではⅢで述べたように、複数の文化層が認められた。上面の文化層は中世以降に形成されたと考えられる。本項では上面において検出した遺構、遺物について報告する。合わせて、上面では確認できなかったが、下面で検出され、この時期に該当する溝跡、土壙についても報告する。

(1) 溝跡

中・近世の溝跡は、第1～3・5・7～9号溝跡である。C・D区のみに分布する。

第1号溝跡（第123図）

C区の中央、K・L-2・3グリッドに位置する。上面検出である。中央を試掘トレンチにより壊されている。遺構の東西は調査区域外に延びる。

軸方位はN-84°-Wである。検出された長さは4.40m、幅は1.40～1.60m、深さは0.05mほどである。底面は平坦で、断面形は皿形である。覆土は確認できなかった。

遺物は、古墳時代前期の甕、後期の土師器坏、甕の小破片が覆土中から出土した。

第2号溝跡（第123・124図）

D区の北側、O-1・2グリッドに位置する。上面検出である。遺構の東西は調査区域外に延びる。中央やや西側を試掘トレンチにより壊されている。

東西から南北方向に大きく曲がる形態である。軸方位は、遺構の西側がN-75°-W、遺構の東側がN-21°-Wである。検出された長さは7.60m、幅は0.40～0.60m、深さは0.20mである。底面は平坦で、西側へ若干傾斜している。断面形は不整逆台形である。覆土は確認できなかった。

遺物は、古墳時代後期の土師器坏、壺、甕が覆土中から出土した。

第3号溝跡（第123図）

D区の中央、P-1・2グリッドに位置する。上面検出である。遺構の東西は調査区域外に延び

る。中央やや西側を試掘トレンチにより壊されている。北側15.0mに第2号溝跡がある。

軸方位は、N-75°-Wである。検出された長さは6.50mである。幅0.50～0.70m、深さは0.15～0.30mである。底面は平坦で、西側へ若干傾斜している。断面形は不整逆台形である。覆土は確認できなかった。

遺物は出土していない。

第5号溝跡（第123図）

D区の北端、N-2グリッドに位置する。下面検出である。遺構の東西は調査区域外に延びる。第9・10号住居跡と重複し、本溝跡の方が新しい。南側10.0mに第7号溝跡がある。

軸方位はN-89°-Wである。検出された長さ2.20m、幅0.40m、深さ0.15mである。底面は平坦、断面形は皿形である。覆土は確認できなかった。

遺物は、古墳時代前期の小型甕、古墳時代後期の土師器坏、甕の小破片が覆土中から出土した。

第7号溝跡（第123図）

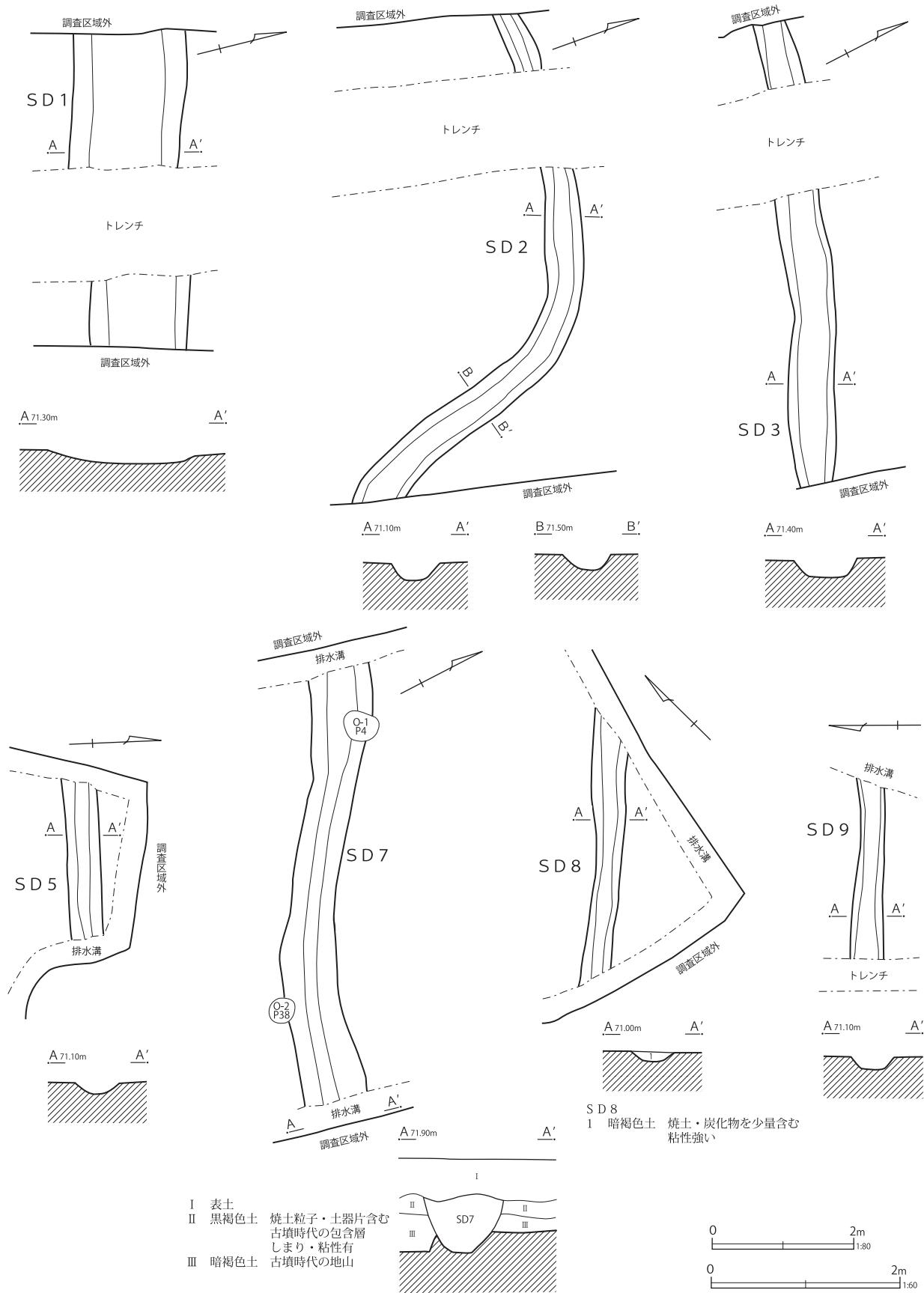
D区の北側、O-1・2グリッドに位置する。下面検出である。遺構の東西は調査区域外に延びる。第1号住居跡、第6号溝跡と重複し、本溝跡の方が新しい。北側10.0mに第5号溝跡がある。

途中から曲がる形態である。軸方位は、遺構の西側がN-50°-W、遺構の東側がN-69°-Wである。検出された長さは6.10mである。幅0.60～0.90m、確認面からの深さは0.20m、西側法面で確認できる深さは0.40mである。底面は平坦である。断面形は逆台形である。覆土は確認できなかつたが、古墳時代の包含層を掘り込んでいる。

遺物は、古墳時代後期の土師器坏、壺、甕が覆土中から出土した。

第8号溝跡（第123図）

D区の南端、R-1グリッドに位置する。下面検出である。遺構の両端は調査区域外にかかる。



第123図 第1・2・3・5・7・8・9号溝跡

北側のピット群が同一方向に分布しているが、関係は不明である。

軸方位は、N—50°—Eである。検出された長さは3.90m、幅0.35～0.50m、確認面での深さは0.10m、南側法面で確認した深さは0.35mである。底面は平坦で、南西側へやや傾斜する。断面形は逆台形である。覆土は暗褐色土の単層である。古墳時代の包含層を掘り込んでいる。

遺物は出土していない。

第9号溝跡（第123図）

C区の中央やや南側L—2・3グリッドに位置する。下面検出である。遺構の東側は調査区域外に、西側は遺構検出トレンチに延びる。第5号住居跡と重複し、本溝跡の方が新しい。

第47表 第2号溝跡出土遺物観察表（第124図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	壺	(12.6)	2.7	—	A H I K	10	普通	橙		

（2）土 壤

中・近世の土壤は、第1・2号土壤が該当し、D区から検出されている。

第1号土壤（第125図）

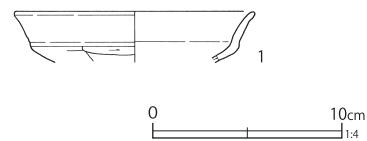
D区中央、P—2グリッドに位置し、北側10.0mに第7号溝跡が、南西側12.0mに第2号土壤がある。

平面形は橢円形である。長軸方位はN—12°—Eである。規模は長軸0.80m、短軸0.55m、深さは0.15mである。断面形は皿形で、底面は北側に傾いている。覆土は暗褐色土の単層である。

遺物は出土しなかったが、覆土の様相から中世以降と判断した。

第2号土壤（第125図）

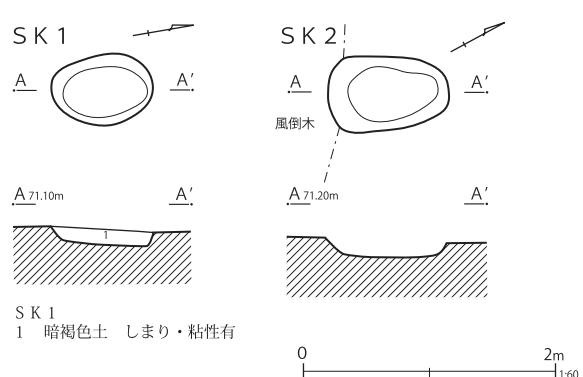
D区の中央、やや南側Q—1グリッドに位置する。南東側8.0mに第8号溝跡が、北東側12.0mに第1号土壤がある。



第124図 第2号溝跡出土遺物

軸方位は、遺構の西側がN—89°—Wである。検出された長さは2.50mである。幅0.30～0.50m、確認面からの深さは0.10mである。底面は平坦である。断面形は逆台形である。覆土は不明である。

遺物は、古墳時代前期の甕、古墳時代後期の土師器壺、甕の小破片が覆土中から出土した。



第125図 第1・2号土壤

平面形は不整な橢円形である。長軸方位はN—29°—Eである。規模は長軸1.00m、短軸0.60m、深さは0.15mである。断面形は皿形で、底面はほぼ平坦である。覆土は確認できなかった。

遺物は出土していないが、風倒木を掘り込んでおり、中世以降と判断した。

(3) 畠跡

A・C区からは、畠跡が2箇所検出されている。

第1号畠跡（第126図）

A区の中央、C・D-5・6グリッドに位置する。上面検出である。

さく跡の走行方向は、N-75°-Wである。0.90~1.30mのほぼ一定の間隔で、掘り込まれている。

各々の形態は、先端の丸い溝状を呈している。長さは最長7.70m、幅0.20~0.30m、深さはいずれも浅く、0.05~0.15mほどである。覆土は確認できなかった。遺物は出土していない。

第2号畠跡（第126図）

C区の北側、I-3、J・K-3グリッドに位置する。上面検出である。

さく跡の走行方向は、N-3°-Wである。1.10mのほぼ一定の間隔で、掘り込まれている。南側に離れた1条も同様の間隔を保っている。

各々の形態は、先端の丸い溝状を呈している。完掘されたものはないが、調査区内でも6.80m以上の長さがある。幅0.20~0.40m、深さはいずれも浅く、0.05~0.15mほどである。覆土は確認できなかった。遺物は出土していない。

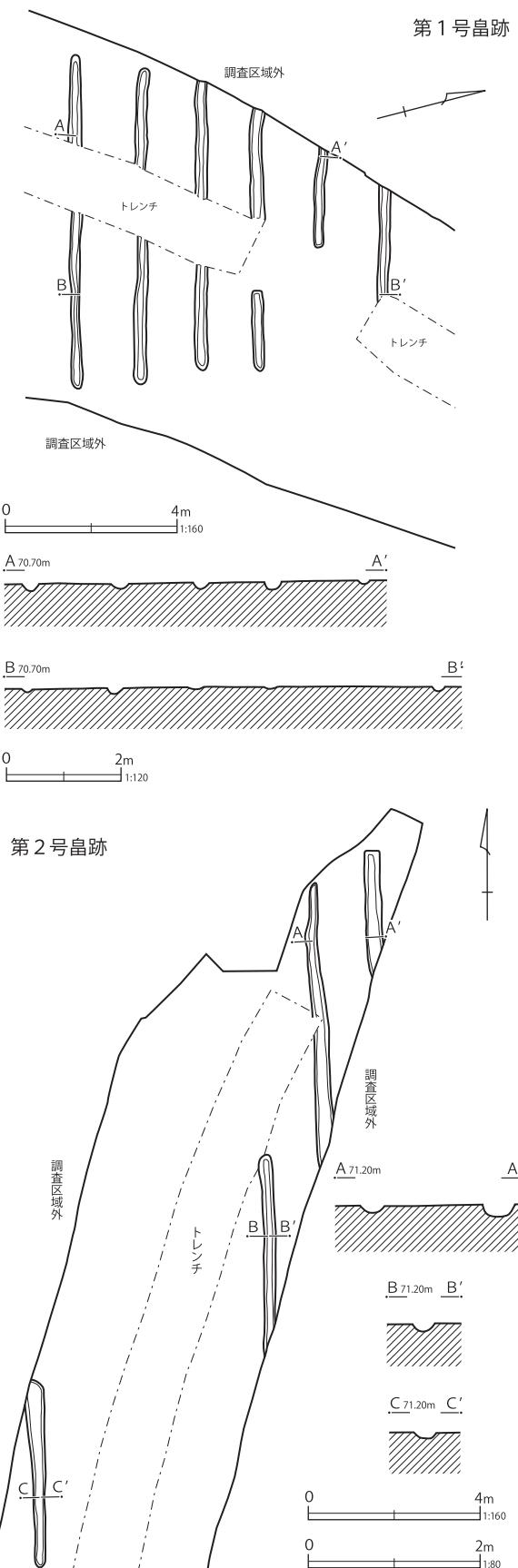
6. グリッド出土の遺物

(1) 土器（第127・128図）

遺構に帰属させることのできない遺物を、グリッドごとに取り上げた。

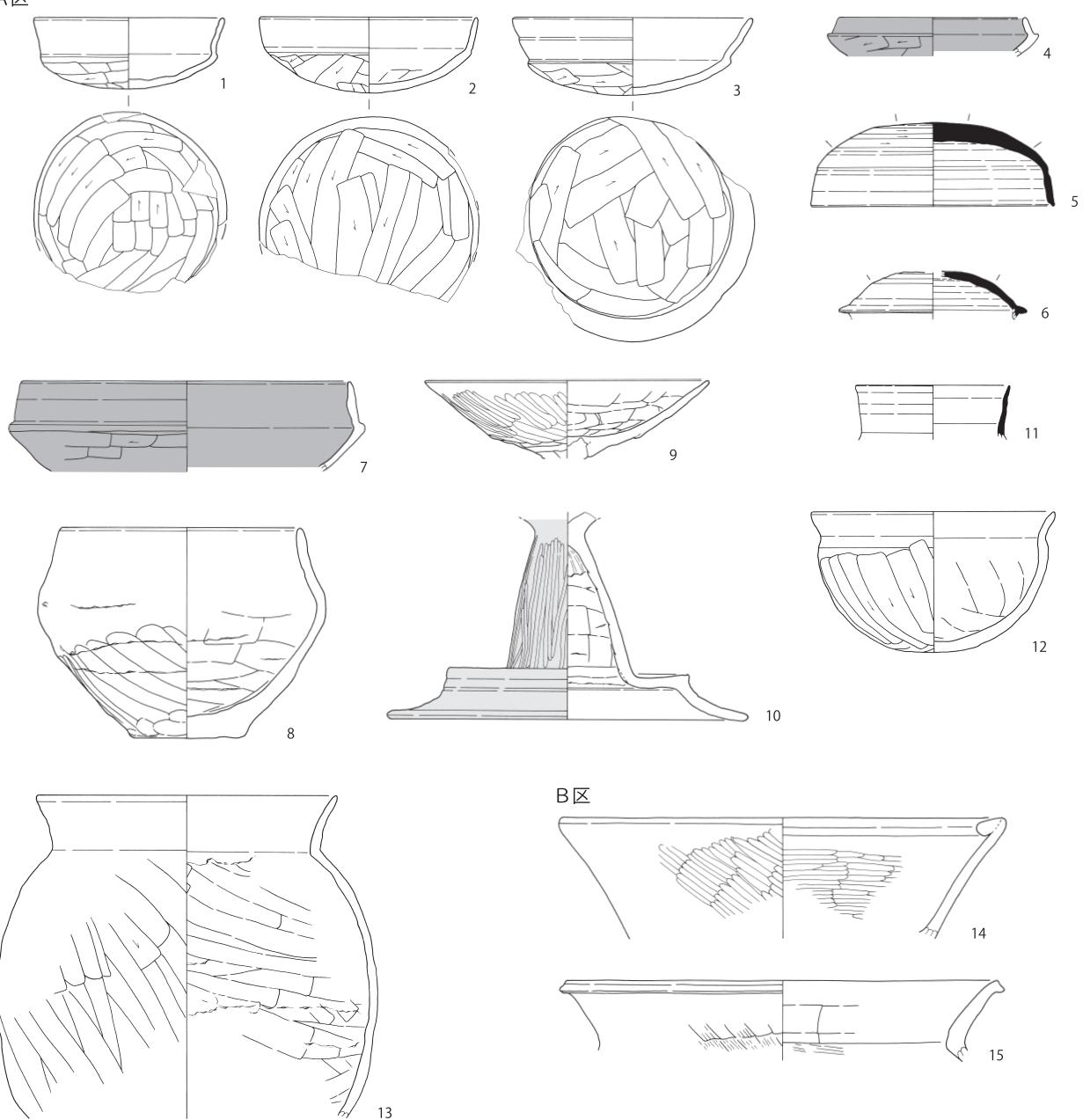
古代の遺物が、第1号住居跡のあるD区O-2グリッド近辺から出土するのみで、ほとんどが古墳時代後期の遺物である。古墳時代前・中期の遺物も出土しているが少量である。B区は古墳時代前期の遺物が多い。

また、調査区内には、D区を中心に風倒木痕が認められる。出土遺物はやはり古墳時代後期であることから、この時期に倒木の起こるような災害が起こった可能性が考えられる。

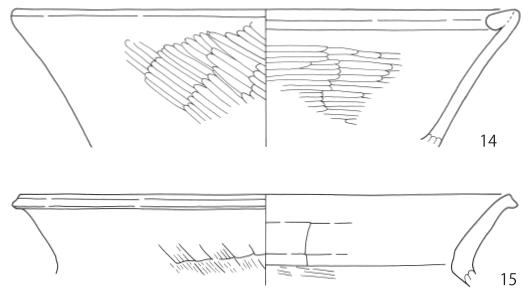


第126図 第1・2号畠跡

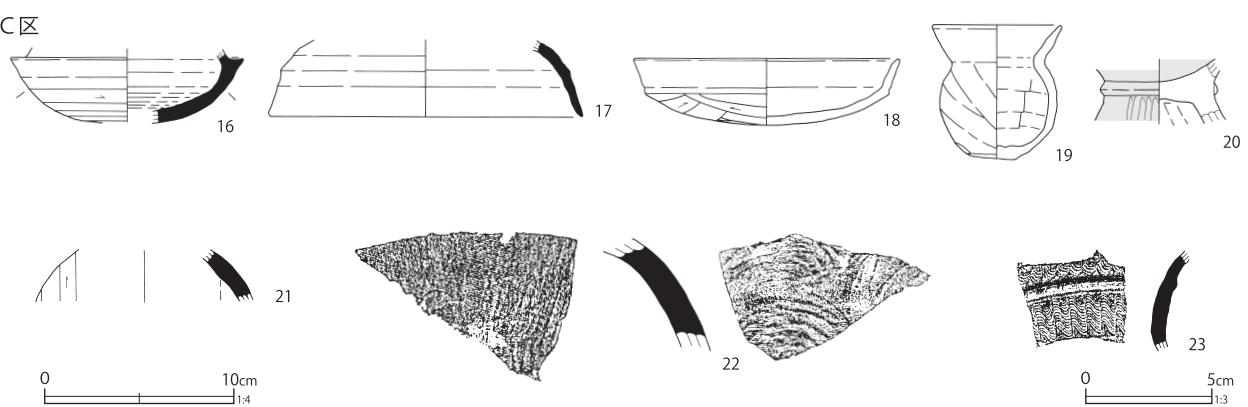
A区



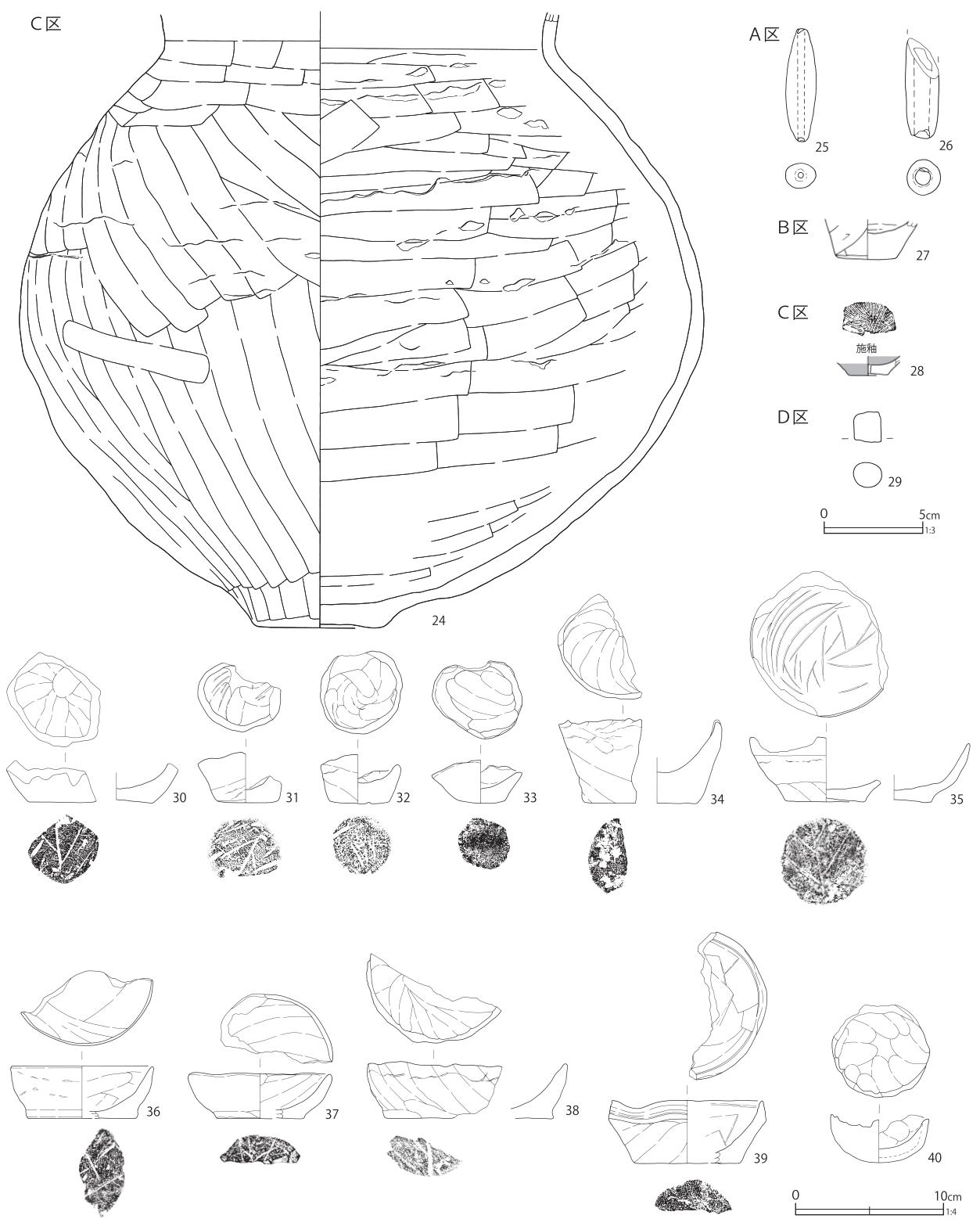
B区



C区



第127図 グリッド出土遺物（1）



第128図 グリッド出土遺物（2）

A区からは、古墳時代後期の土師器坏蓋模倣坏、坏身模倣坏、有段口縁坏、高坏、鉢、壺、甕、手捏ね土器、支脚、土錐、須恵器壺、坏蓋、蓋、甕、鉄製品として鉄鏃、鋤先、貝巣穴泥

岩、古墳時代中期の高坏、甕が出土している。

B区では、古墳時代前期の遺物が他の調査区に比して多い。古墳時代前期の壺、小型壺、甕、高坏、塙、鉢、甕、古墳時代後期の土師器坏蓋模倣

第48表 グリッド出土遺物観察表(第127~128図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	残存	焼成	色調	備 考	図版
1	土師器	壺	11.4	4.3	—	A H I K	70	普通	橙	D5g-69No.4	39-1
2	土師器	壺	13.0	4.5	—	A C D H I K	60	普通	明褐	A 区 GP6	39-2
3	土師器	壺	14.4	4.6	—	A C H I K	70	普通	橙	C5g 側溝	39-3
4	土師器	壺	(11.2)	2.3	—	A C H I K	30	普通	にぶい橙	D5g No.4 内外面黒色処理 外面煤	
5	須恵器	蓋	(14.6)	5.0	—	E I K	40	普通	灰	D5g-59・東側溝 藤岡産	39-4
6	須恵器	蓋	11.4	2.7	—	A I K	10	普通	灰	D6g 東側溝 末野産	
7	土師器	壺	(19.8)	5.4	—	A E I K	15	普通	灰黄褐	C5g 側溝 内外面黒色処理	
8	土師器	鉢	14.4	12.6	6.8	A E H I K	70	普通	にぶい赤褐	B7g 側溝	39-5
9	土師器	高壺	17.2	4.7	—	A C D E H I	90	普通	にぶい褐	D6g No.1	39-6
10	土師器	高壺	—	12.4	21.3	A C E H I	70	普通	橙	D5g No.29 外面赤彩	39-7
11	須恵器	小型壺	(9.2)	3.2	—	I K	10	良好	灰	D6g-21・31・41 群馬産	
12	土師器	鉢	(14.6)	8.3	—	A B C D H I K	20	普通	にぶい赤褐	D5g-69No.1 外面二次加熱	39-8
13	土師器	甕	(18.0)	19.3	—	A E H I K	25	普通	灰黄褐	D5g-64	
14	弥生	壺	(26.6)	7.2	—	A B E H I K	10	普通	橙	トレンチ1	
15	土師器	甕	(26.0)	4.8	—	A B C E H I K	15	普通	橙	G3g 東側溝	
16	須恵器	壺	—	3.9	—	I K	15	良好	灰	J3g-93 表採 群馬産	
17	須恵器	蓋	(16.5)	4.1	—	E H I K	5	良好	黄灰	K3g-21 西毛産	
18	土師器	壺	14.0	3.5	—	A C D H I K	40	普通	にぶい黄橙	J3g-95	
19	土師器	小型壺	6.8	7.0	2.4	A C E H I	90	普通	明赤褐	J3g-24	39-10
20	土師器	高壺	—	3.5	—	A C E H I	80	普通	橙	西側壁溝 内外面赤彩	
21	須恵器	瓶	—	2.7	—	H I K	5	普通	灰白	東側壁溝 群馬産	
22	須恵器	甕	—	4.5	—	A E J	5	良好	灰	L2g 藤岡産	
23	須恵器	甕	—	3.9	—	A E I K	5	良好	灰	J3g-32	
24	土師器	壺	—	41.5	8.6	A E H I K	70	普通	橙	J3g No.1 東側排水溝	42-9
25	土製品	土錐	長さ5.2cm 厚さ1.2cm 孔径1.4cm			A C H I K	100	普通	—	D6g-51	
26	土製品	土錐	長さ5.0cm 厚さ1.8cm 孔径0.75cm 重さ10.33g			A H I K	—	普通	橙	D5g No.60	
27	土師器	ミニチュア	—	2.1	3.1	A C E H I	70	普通	橙	F5g	39-9
28	陶器	ミニチュア	—	1.0	(2.0)	K	45	良好	にぶい橙	北側壁溝 捣鉢 内外面施釉	
29	土製品	不明	長さ1.5cm 幅1.4cm 重さ2.45g			A H I K	—	普通	橙	O2g-94	
30	土師器	手捏ね	—	2.8	—	A C H I	30	普通	橙	D6g 東側溝 底部木葉痕 棒状圧痕	54-2
31	土師器	手捏ね	—	3.4	4.1	A C E H I	40	普通	橙	J3g-62	54-3
32	土師器	手捏ね	5.2	3.2	4.0	A E H I	80	普通	橙	C5g 側溝	54-4
33	土師器	手捏ね	6.1	2.9	3.1	A C H I	90	普通	橙	D4g 側溝	54-5
34	土師器	手捏ね	—	5.7	—	A C H I	20	普通	橙	D6g 東側溝	54-6
35	土師器	手捏ね	(10.4)	4.0	5.7	A C E H I K M	65	普通	橙	D区 GP6-32 底部木葉痕	54-7
36	土師器	手捏ね	(9.6)	3.5	(7.4)	A H I K	30	普通	橙	D6g-32	54-8
37	土師器	手捏ね	(9.7)	3.1	(6.0)	A C H I K	30	普通	にぶい橙	K3g 底部木葉痕 複数の痕跡あり	54-9
38	土師器	手捏ね	—	3.8	—	A C H I	40	普通	橙	C5g 側溝 底部木葉痕	54-10
39	土師器	手捏ね	(10.2)	4.2	(7.1)	A E H I	40	普通	明赤褐	F5g-23・33	54-11
40	土師器	手捏ね	6.5	3.3	—	A C E H I	70	普通	褐	D6g No.31	54-12

壺、有段口縁壺、高壺、鉢、壺、甕、古墳時代中期の高壺が出土している。

C区からは、古墳時代後期の土師器壺蓋模倣壺、壺身模倣壺、有段口縁壺、高壺、鉢、壺、甕、甕、土錐、須恵器壺、壺蓋、甕、高壺、フラスコ形

瓶、甕、古墳時代中期の高壺、古墳時代前期の甕、台付甕、高壺、鉄製品、粘土塊が出土している。

D区からは、古墳時代後期の土師器壺蓋模倣壺、壺身模倣壺、有段口縁壺、高壺、鉢、壺、甕、甕、土錐、須恵器壺、甕、古墳時代前期の

甕、台付甕、不明土製品、古代の坏、高台付坏が出土している。

5・6は須恵器の蓋である。5は坏蓋で、天井部外面は回転ヘラケズリである。MT15併行。藤岡産。6はかえり蓋で、長頸壺などの器種の蓋と考えられる。TK209併行。末野産。9・10は古墳時代中期の高坏と考えられる。9は坏部が浅く、ホゾ接合で、臍の部分が脱落している。10は所謂有段脚の高坏である。脚部はやや長めで、段がしっかりとしている。ホゾ接合で、臍の部分で剥離する。外面赤彩。8・12は鉢である。8の上半部は破片が一部残るのみで、様相が不明瞭である。11は須恵器小型壺の口縁部である。青灰色を呈し硬質である。群馬産。14は弥生時代中期の壺の口縁部である。端部の内側に粘土が貼付されている。内外面ヘラナデ後ヘラ磨き。

16・17・21～23は須恵器である。16は坏である。下半回転ヘラケズリ。群馬産。17は坏蓋である。黒灰色を呈する。TK43併行。凝灰岩を含む。西毛産。21はフラスコ形瓶と考えられる。やや多孔質で、灰白色を呈する。群馬産。22は甕の肩部破片である。外面平行タタキ目、内面青海波文。針状物質を含む。藤岡産。23は甕の口縁部である。4条1単位の波状文が施されている。堅緻で断面赤紫色。在地産と考えられるが産地は不明である。24は大型壺である。歪みが著しく、本来口縁部が真っ直ぐ付いていたのか疑問が残る。粘土の積み上げ痕が、開裂として多くみられる。内外面ヘラナデと考えられるが、風化が著しく不明瞭である。内面全体が黒色を呈する。胎土は砂質が強い。

25・26は土錘である。全体に指ナデが施されている。27はミニチュアである。外面ヘラケズリ、内面指ナデである。古墳時代後期である可能性もある。28は近世のミニチュアの擂鉢である。内外面飴釉。内面に擂目が見られる。

29は棒状の土製品で性格不明、風化著しい。

30～40は手捏ね土器である。内面の菊花状引き

出しは、30～34で明瞭に、36～38は痕跡的に認められる。木葉痕は30～32、35～38に見られる。35は潰れて不明瞭、36は重複している。棒状圧痕は、30で体部に3箇所、底面に8箇所、32は底部外周に、35は底面中央に、37は体部に認められる。32は底面に不明な溝状の圧痕が3箇所見られる。

11類a系列（第1号祭祀跡の分類による。以下同）は30が該当する。底部は上げ底状。

11類b系列は、31～33が該当する。31・32は底径が大きく、直線的に立ち上がる（ア）。33は底径が小さく大きく開いて立ち上がる（イ）。（ア）は小型で、底面は平坦である。31は底部が明瞭に作出されている。底部外周の断面形が隅丸方形で、立ち上がりが丸く、掌上成形である。（イ）は体部が歪み、底部が丸底状で、耳皿状の形態である。

14類a系列は34が該当する。やや器高が高く、底部が突出する。外面に粘土单位がしわ状の開裂状に多く見られる。底部は厚く底面は平坦である。

17類a系列は35～38が該当する。第1号祭祀跡出土資料よりも、器高が低く、底径が大きい。35は口径が大きく、口縁部も作出され、底部は突出する。風化が著しい。口縁部外面は若干肥厚し、横ナデが加えられている。内面は弧状ヘラナデの細く当たりの強い痕跡が見られる。36・38の口縁部外面には粘土を引き上げた際にできたしわ状の開裂が間隔をおいて一周している。口縁部に僅かに段差がある。36の外面にはナデが施されている。

第17類b系列は39が該当する。口縁部は明瞭に作出されている。大きな波状を呈し、横ナデが施されている。底部は突出する。内面には弧状ヘラナデが明瞭である。底面はヘラナデである。

40は手捏ね土器中唯一丸底のものである。器面の風化が著しく、調整は不明瞭である。口縁部が小さな波状を呈し、小さな単位の指オサエで口縁部が作出されている。

（2）鉄製品（第129図）

今回の調査では、鉄製品も多く出土している。

1～3は鉄鎌である。1・2は長頸鎌で、両丸造りである。鎌身部は1が短く、2は長めである。1の逆刺は脇抉である。2の鎌身関部は角関で平坦である。3は茎で、茎関は棘笠被になっている。

4～7は棒状の鉄製品である。4・6は断面形が円形、5は扁平、7は方形である。6の先端は丸く收められている。

8は風呂鋤の鋤先で、所謂U字形鋤先である。刃部は直線的で、平面形は方形に近い。装着部はソケット状である。

9は用途が不明なものである。クリップ状の形態を呈する。

(3) 石製品 (第130図)

グリットからは剣形石製模造品、有孔円板、砥

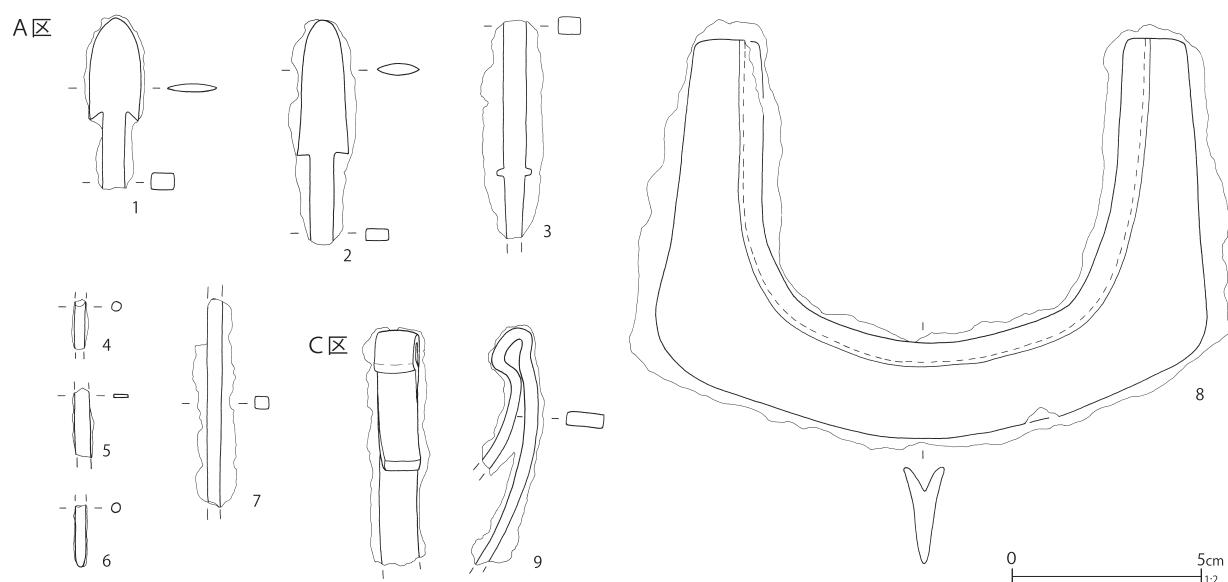
石と不明石製品が各1点、白玉が8点出土した。

1は緑泥片岩製の剣形石製模造品で、上部を欠損している。製作は極めて緻密で、工具による削り出し後、丁寧に研磨が施されている。

2は砂岩製の砥石である。中央部分に細かな擦痕と刃研痕と思われる溝状の擦痕を確認できる。

3は滑石製の有孔円板である。非常に粗雑な作りで、側面はわずかに円形に加工した痕跡を残す。

4～11はいずれも滑石製の白玉である。4～7は比較的小さい。4・5は丁寧なつくりで、7・8はやや粗雑である。5の裏面は穿孔工程の痕跡がごくわずかにではあるが確認できた。5と11には両面穿孔に起因する孔内段差が見られ、4・7には側面に、8には正面と側面に、風化した割痕



第129図 グリッド出土鉄製品

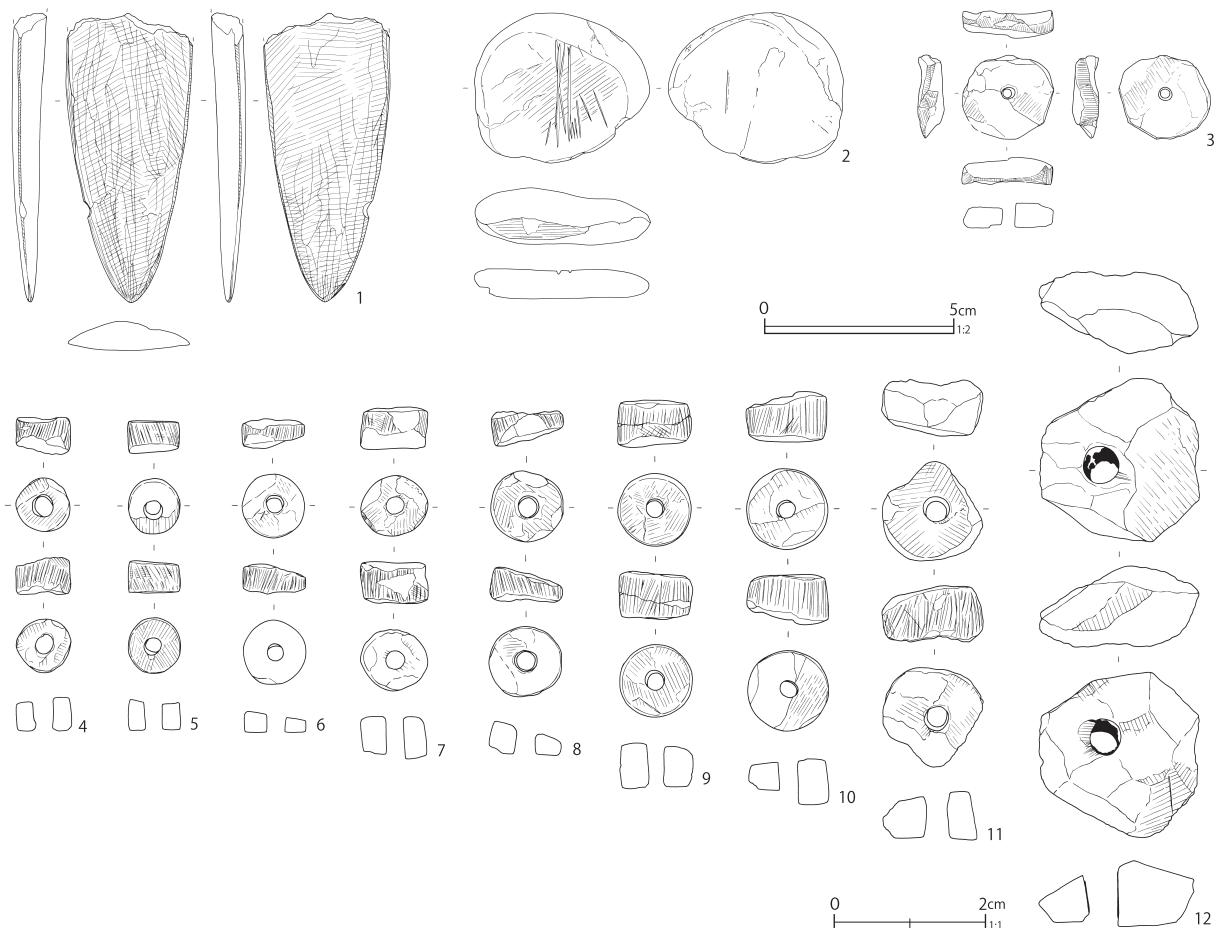
第49表 グリッド出土鉄製品観察表 (第129図)

番号	器種	全長(cm)	刃 部			茎 部			重さ(g)	備 考	図版
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
1	鉄鎌	4.5	2.7	1.3	0.2	1.8	0.6	0.45	5.8	D6g-13	60-5
		5.9	3.5	1.4	0.3	2.4	0.6	0.3	11.6	D5g No.1	60-5
		5.7	—	—	—	5.7	0.55	0.4	12.3	D6g-P2 No.1	60-7
4	棒状品	長さ1.3cm 幅0.3cm×0.25cm						0.2	D5g-65	60-7	
5	棒状品	長さ1.8cm 幅0.4cm 厚さ0.1cm						0.4	D5g-95	60-7	
6	棒状品	長さ1.6cm 幅0.25cm×0.25cm						0.2	D5g-95	60-7	
7	棒状品	長さ5.5cm 幅0.35cm 厚さ0.35cm						5.0	D6g-P2 No.2	60-7	
8	鋤先	長さ10.5cm 幅14.6cm 刃幅2.5cm						260.7	D6g-32	60-7	
9	不明品	長さ6.3cm 幅1.0cm 厚さ0.35cm						13.1	J3g 溝内	60-7	

が見られる。5は正面の大部分を調査時に欠失し、10は裏面の一部が剥落している。また、11には一部欠損箇所が見られるが、風化の状況から製作時の欠損と想定される。

12は不明石製品である。ほとんど加工されてお

らず、器種は不明である。



第130図 グリッド出土石製品

第50表 グリッド出土石製品観察表（第130図）

番号	器種	石材	最大径 (mm)	厚さ (mm)	孔		重さ (g)	色調	側面研磨	備 考	図版
			長さ (mm) : 幅 (mm)		上径 (mm)	下径 (mm)					
1	剣形模造品？	緑泥片岩	76.0 : 33.3	9.0	—	—	24.75	緑	有	B7g-68No.16 削り後横方向に研磨 最後に側面と先端を調整	59-6
2	砥石	砂岩	46.0 : 39.8	8.0	—	—	21.97	黄褐	—	D5g-69 片面に溝状の刃研ぎ痕	59-7
3	有孔円板	滑石	23.5 : 23.8	7.0	3.5	2.7	4.85	黄灰	有	D5g-75G トレンチ A	59-8
4	白玉	滑石	7.1	4.9	2.8	2.4	0.33	オリーブ灰	有	A区排土中 B	59-9
5	白玉	滑石	7.0	4.3	2.6	2.3	0.34	灰白	有	B7g-68No.18 B 両面穿孔？	59-10
6	白玉	滑石	8.3	3.9	2.4	2.1	0.36	灰	有	B7g-59No.4 B	59-11
7	白玉	滑石	8.7	5.6	2.3	2.5	0.60	灰	有	B7g-57No.1 C	59-12
8	白玉	滑石	9.5	4.5	2.9	3.0	0.50	灰	有	D5gP6No.1 C	59-13
9	白玉	滑石	9.7	6.3	2.4	2.6	0.97	黄灰	有	D6g No.31 D	59-14
10	白玉	滑石	10.7	6.6	2.5	2.5	1.08	黄灰	有	D6g No.31 B	59-15
11	白玉	滑石	13.3	7.4	3.5	3.3	1.48	灰白	一部有	D5gP6No.2 C	59-16
12	白玉？	滑石	20.8	10.8	4.5	3.9	4.55	灰黄	無	A区表採 E 側縁部形成無 孔径も他の白玉に比べ大きい	59-17

V 科学分析

本調査では、古墳時代後期、平安時代の住居跡の床面から炭化材が出土している。この資料は、通常知ることのできない住居跡の建築部材についての情報を伝えるものとして貴重である。

1. 川越田遺跡出土炭化材の樹種同定

(1) はじめに

川越田遺跡は本庄市児玉町高関に所在し、女堀川右岸の自然堤防上に立地する、古墳時代後期を中心とした集落遺跡である。遺跡では竪穴住居跡や土壙などが検出され、遺構内より炭化材が出土した。ここではこれらの炭化材の樹種同定を行なった。

(2) 試料と方法

試料は竪穴住居跡であるSJ1、SJ5、SJ11のP-2、SJ13、SJ28、SJ30、SJ33のP-1、SJ34、SJ37から各1点、土壙であるSK3から1点の、計10点である。各試料の時期は、出土遺物よりSJ11、34、37が古墳時代前期、SJ3、5、13、28、33、SK3が古墳時代後期、SJ1が平安時代と考えられている。なお、SJ34とSJ37の試料は床面直上で検出された。SJ5およびSJ28の試料は住居覆土から、SJ11の試料はP-2の壁面上方にはりついていた薄い材、SJ13のNo.8は床面からやや浮いた位置から、SK3の試料は土壙底部近くにはりついていた材が、それぞれ採取された。また、SJ1の試料は住居の隅の床面直上で検出された。

分析に先立ち、確認できる試料については、残存半径と残存年輪数の計測を行なった。残存半径は試料に残存する半径を直接計測し、残存年輪数は残存半径内の年輪数を計測した。

炭化材の樹種同定は、試料をまず乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンス

そこで、出土炭化材について自然科学の研究者による樹種同定を行うこととした。乾燥によって急速に破壊が進むことから、調査時に分析機関に委託した。

パッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製 VE-9800）にて検鏡および写真撮影を行なった。

(3) 結果

同定の結果、針葉樹のモミ属1分類群と、広葉樹のクリとコナラ属クヌギ節（以下クヌギ節と呼ぶ）、コナラ属コナラ節（以下コナラ節と呼ぶ）、クワ属、サクラ属の5分類群の、計6分類群が産出した。クワ属が最も多く3点みられ、クリが2点、モミ属とクヌギ節、コナラ節、サクラ属が各1点産出した。また材の劣化が激しく、広葉樹までの同定に留めた試料が1点あった。年輪計測の結果では、試料No.9のクワ属のように残存半径1.3cm内に4年輪みられるような、残存半径に対して年輪数が比較的少ない試料や、試料No.4のクワ属のように残存半径0.9cm内に14年輪がみられるような、残存半径に対して年輪数が比較的多い試料がみられた。同定結果を表1に、一覧を付表1に示す。

次に同定された材の特徴を記載し、各樹種の走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) モミ属 *Abies* マツ科 図版1 1a-1c (No.10)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ1~10列程度となる。分野壁孔は小型のスギ型で、1分野に4~5個みられる。また、放射組織の末端壁は数珠状に肥厚する。

モミ属には高標高域に分布するシラビソ、オオ

第51表 川越田遺跡出土炭化材の樹種同定結果

樹種	時代 遺構	古墳時代前期				古墳時代後期				平安時代		
		SJ34	SJ37	SJ5	SJ11 P-2	SJ13 No.8	SJ28	SJ30	SJ33 P-1	SK3	SJ1	合計
モミ属			1								1	
クリ						1			1		1	2
コナラ属クヌギ節				1								1
コナラ属コナラ節					1							1
クワ属		1				1		1				3
サクラ属										1	1	
広葉樹									1			1
合計		1	1	1	1	1	1	1	1	1	10	

シラビソ、ウラジロモミ、低標高域に分布するモミなどがあり、いずれも常緑高木である。材はやや軽軟で、切削その他の加工は容易、割裂性も大きい。

(2) クリ *Castanea crenata* Siebold. et Zucc. ブナ科 図版1 2a-2c (No.5)

年輪のはじめに大型の道管が1～2列並び、晩材部では径を徐々に減じた道管が、火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で単列である。

クリは北海道の石狩、日高以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で耐朽性が高い。

(3) コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 図版1 3a-3c (No.2)

年輪のはじめに大型の道管が1～2列並び、晩材部では径を急に減じた、厚壁で丸い道管が単独で放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、温帯から暖帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で切削などの加工はやや困難である。

(4) コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinns* ブナ科 図版2 4a-4c (No.3)

年輪のはじめに大型の道管が1～2列並び、晩

材部では径を急に減じた、薄壁で角張った道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属コナラ節にはコナラやミズナラなどがあり、温帯から暖帯にかけて広く分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なミズナラの材は、やや重く強韌で切削加工はやや難しい。

(5) クワ属 *Morus* クワ科 図版2 5a-5c (No.4)

年輪のはじめに大型の道管が数列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が多数複合し、斜め方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1～3列が直立する異性で、幅1～5列となる。

クワ属にはヤマグワやマグワなどがあり、温帯から亜熱帯に分布し日本全国の山中にみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で保存性が高いが、切削加工はやや困難である。

(6) サクラ属（広義） *Prunus* s.l. バラ科 図版2 6a-6c (No.1)

小型の道管が単独ないし2～4個不定方向に配列し、やや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1列が直立する異性で、1～5列となる。

広義のサクラ属には、モモ属、スモモ属、アン

第52表 今井川越田遺跡出土木材の樹種同定結果

(パリノ・サーヴェイ株式会社, 1997に基づき作成した)

樹種	時期 器種	古墳時代後期（6～7世紀）					合計
		網台目盛り板	杭	加工板材	加工棒材	加工材	
カヤ						1	1
モミ属	1	2	6	5	3		17
スギ			1	1			2
サワラ					1		1
針葉樹				1			1
針葉樹樹皮						1	1
クマシデ属イヌシデ節						1	1
クリ	1				1	5	7
コナラ属アカガシ亜属				1		1	2
コナラ属コナラ亜属						1	1
コナラ属クヌギ節				3	2	8	13
コナラ属コナラ節		1	2	5		12	20
ケヤキ				1		2	3
エノキ属						1	1
ヤマグワ			1	1			2
イヌエンジュ						1	1
ムクロジ	1				1		2
カエデ属					1		1
ウコギ属				2		1	3
トネリコ属						1	1
広葉樹樹皮						2	2
合計		1	4	9	17	15	83

ズ属、サクラ属、ウワミズザクラ属、バクチノキ属がある。樹種同定ではモモ属、バクチノキ属以外は他のサクラ属と識別できないため、広義のサクラ属とした。

(7) 広葉樹 Broad-leaf wood

道管と木部組織は確認できたが、劣化が激しくて科以下の同定が行なえず、広葉樹までの同定に留めた。

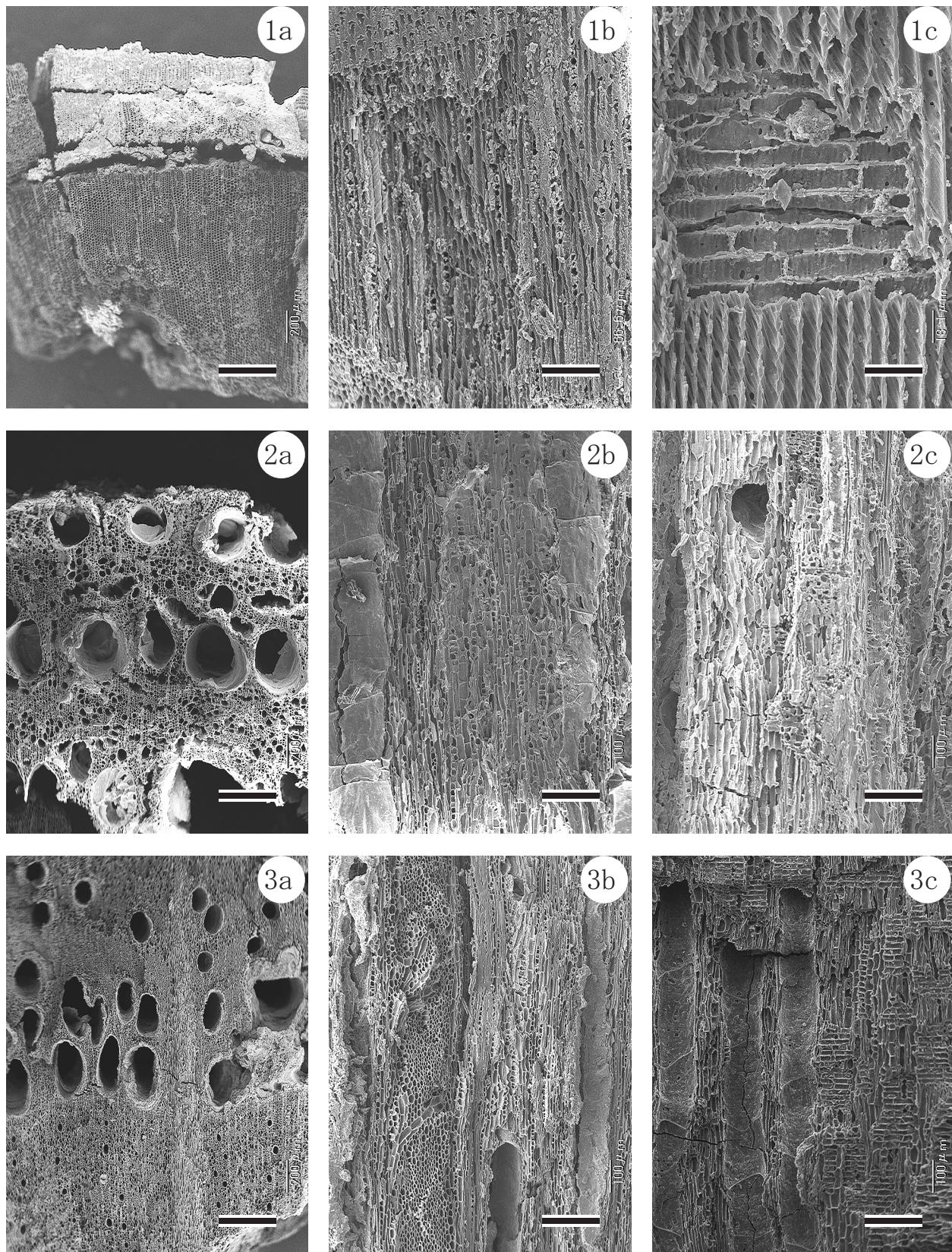
(4) 考察

出土した炭化材のうち、用途の推定が可能な材は古墳時代後期のSJ30と古墳時代前期のSJ37から出土した材の2点のみであった。SJ30の炭化材はカマドのすぐ外の床面直上で出土しており、燃料材の残渣であった可能性がある。樹種はクワ属であった。クワ属は、重硬で強靭な材で耐朽性が高く、燃料材としての利点は少ないという材質をもつ樹種である。一方、SJ37で出土した炭化材は、出土状況より垂木などの部材である可能性を考えられている。樹種はモミ属であった。モミ属は、

木理通直な材で、軽軟で加工性が良いという材質を持つ樹種である。

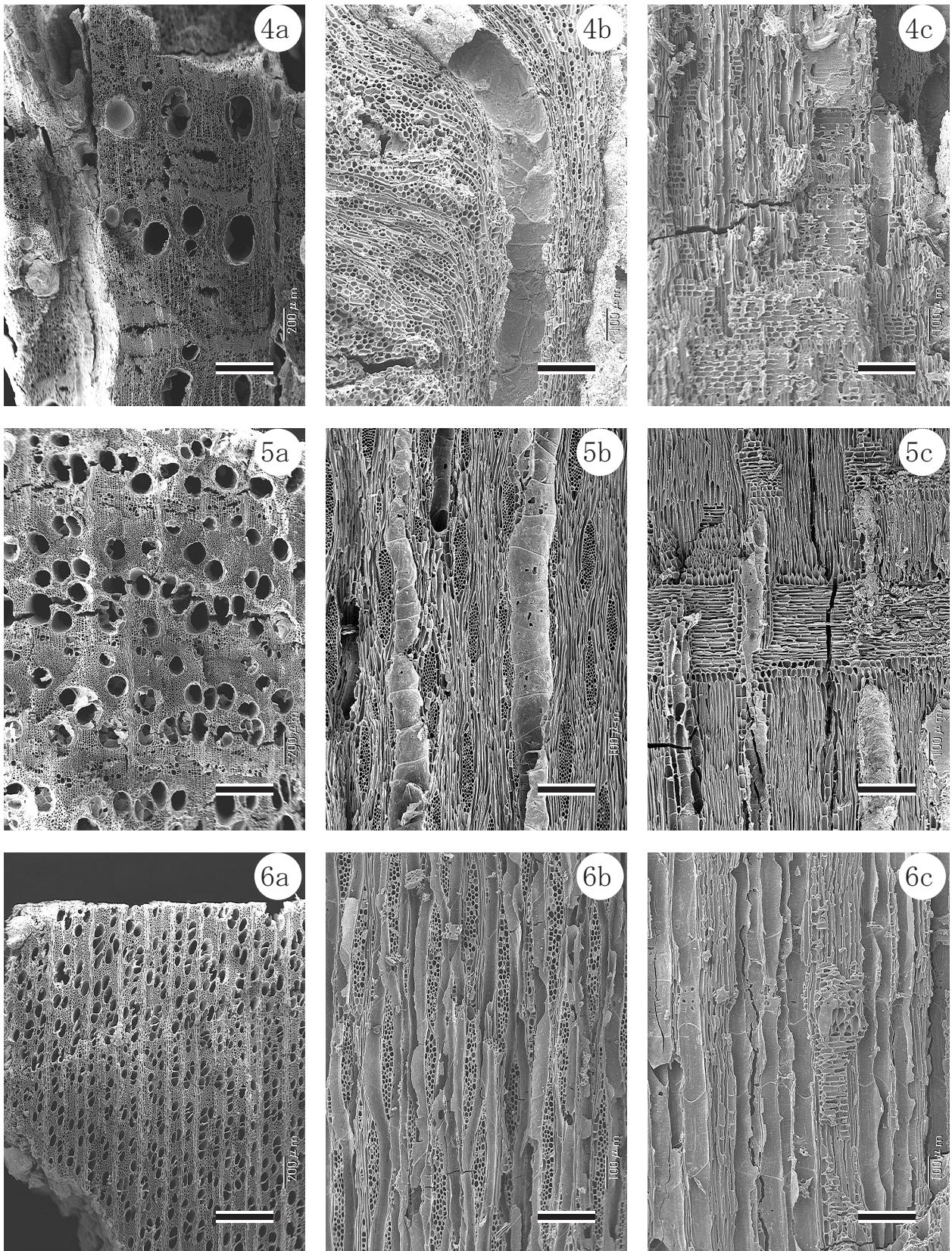
その他の竪穴住居跡および土坑SK3から出土した炭化材は用途不明であった。これらの用途不明の炭化材にみられたクリやクヌギ節、コナラ節は、重硬かつ強靭で、割裂性が高いという材質を持つ樹種である。また燃料材としてみると、高い火力は得られないが長時間燃焼し続けるという材質を持つ。またサクラ属は比較的軽軟であるが、加工性が良いという材質をもち、燃料材としての利用も多い樹種である（伊東ほか, 2011）。

川越田遺跡に近接する今井川越田遺跡では、古墳時代後期（6～7世紀）の旧流路跡で出土した木製品や自然木の樹種同定が行われている（パリノ・サーヴェイ株式会社, 1997）。その結果（表2）をみると、今回の川越田遺跡でみられたクワ属やモミ属は、今井川越田遺跡の自然木ではみられず、クワ属に含まれるヤマグワが加工棒材と加工材で各1点、モミ属は木製品で17点産出してい



1a-1c. モミ属 (No.10) 2a-2c. ケリ (No.5) 3a-3c. コナラ属クヌギ節 (No.2)
a: 横断面・b: 接線断面・c: 放射断面

第131図 川越田遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真 (1)



4a-4c. コナラ属コナラ節 (No.3) 5a-5c. クワ属 (No.4) 6a-6c. サクラ属 (No.1)
a: 横断面・b: 接線断面・c: 放射断面

第132図 川越田遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真 (2)

第53表 川越田遺跡出土炭化材の樹種同定

料No.	遺構名	遺 物 名	樹 種	試		
				残存半径 (cm)	残存年輪数	時 代
1	SJ1	炭化物サンプル	サクラ属	3.5	15	平安時代
2	SJ5 フク土	炭化物サンプル②	コナラ属クヌギ節	2.2	10	古墳時代後期
3	SJ11 P-2	炭サンプル	コナラ属コナラ節	—	—	古墳時代前期
4	SJ13	No.8	クワ属	0.9	14	古墳時代後期
5	SJ28	炭化物サンプル	クリ	1.5	11	古墳時代後期
6	SJ30	—	クワ属	—	—	古墳時代後期
7	SK3	炭化物	クリ	—	—	古墳時代後期
8	SJ33 P-1	炭化物	広葉樹	—	—	古墳時代後期
9	SJ34 床直	炭化物	クワ属	1.3	4	古墳時代前期
10	SJ37 床直	部材？	モミ属	—	—	古墳時代前期

た。一方、クリやクヌギ節、コナラ節は、木製品と自然木の両方で認められた。また今井川越田遺跡で行われた花粉分析によると、古墳時代後期～平安時代の古植生はアカガシ亜属やコナラ亜属を主体とし、クルミ属—サワグルミ属、ニレ属—ケヤキ属などを伴う広葉樹林が広がっていたと考えられている（榆井、1997）。今回の川越田遺跡の竪穴住居跡や土壙で検出されたクリやクヌギ節、コナラ節などは、今井川越田遺跡でも自然木で産出しており、遺跡周辺に生育していた樹種に由来する可能性が高い。一方、今井川越田遺跡と川越田遺跡でモミ属やクワ属が木製品では認められるのに対して、花粉分析や自然木の樹種同定ではほ

とんど確認されなかった理由としては、遺跡周辺に生育していた量が少なかった、または全く生育していなかった可能性があり、他の地域より移入された材であった可能性が考えられる。

特に今回、燃料材の可能性が推定されたSJ30のクワ属は、今井川越田遺跡では自然木で確認されず加工木のみで2点確認されている点、同じく今井川越田遺跡の花粉分析で該当する分類群の花粉化石が産出していない点を考慮すると、燃料材であったとすれば、他地域から運ばれてきた材（木製品）が燃料材に転用された可能性が考えられる。

引用文献

- 伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌、238p、青海社
 榆井 尊（1997）今井川越田遺跡の花粉化石群
 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編「今井川越田遺跡Ⅲ—第2分冊ー」：377-381、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
 パリノ・サーヴェイ株式会社（1997）今井川越田遺跡における古植生と植物利用。埼玉県埋蔵文化財調査事業団編「今井川越田遺跡Ⅲ—第2分冊ー」：369-376

VI 調査のまとめ

1. 調査の成果

川越田遺跡H地点の調査では、古墳時代前期・後期、平安時代の集落跡、古墳時代後期の河川跡、祭祀跡、中・近世の溝跡、河川跡が検出された。

調査では二面の遺構面が確認された。上層の遺構確認面からは、中・近世の溝跡3条、畠跡2箇所、河川跡1箇所が検出された。河川跡は古代から近世の旧女堀川の流路跡である。

下層の遺構確認面では、中・近世から古墳時代の遺構が確認され、住居跡39軒、溝跡10条（中・近世4条、古墳6条）、土壙5基（中・近世3基、古墳2基）、ピット120基が検出された。B区から古墳時代前期の住居跡が、調査区のほぼ全域から古墳時代後期の遺構が検出された。

古墳時代前期の遺構はほぼB区に限って分布している。出土遺物は土師器である。本地域の特徴である、色調が白色を呈するS字状口縁台付甕を組成に含む。他に所謂山陰系口縁のS字状口縁台付甕や北陸系の大型器台が出土している。

その後、B区の南側に新たな河川の流路が形成されたため、B区には住居跡が見られない。

古墳時代後期は、A・C・D区で遺構が広く展開する。密集度が高い点は、川越田遺跡の既調査区や今井川越田遺跡と共に通する。住居跡は6世紀代を中心とし、特に祭祀跡と同時期に集落が拡大する点は注目される。出土遺物は、土師器、須恵器、臼玉、石製模造品、紡錘車、土錐である。

後期ではA区南側で後述するVI期に形成された第1号祭祀跡が特筆される。100個以上の手捏ね土器のほか、土師器坏、甕、高坏、臼玉、鉄鎌が出土し、第2号流路跡に面した河川祭祀と考えられる。手捏ね土器は大型で調整痕が明瞭である。臼玉は直径1cm以上の大型品で特徴的である。

河川跡は二つの流路跡として整理できた。第1

号河川跡は現在の女堀川の旧流路である。第2号河川跡は、古墳時代を中心とする河川跡で、古墳時代前期から後期の遺物が出土している。B区の古墳時代前期の住居跡群を壞している。

平安時代の住居跡は1軒検出され、本遺跡ではこの時期の遺構で最も南側に位置する。集落の南限を示すと考えられる。須恵器、土師器、須恵系土師質土器が出土している。

中・近世の遺物はほとんど出土しておらず、A区は水田、B区以南は畠跡として利用されていたと考えられる。

2. 出土土器について

川越田遺跡H地点からは縄文時代中期、後期、弥生時代前期、古墳時代前期から後期、平安時代、中・近世の遺物が出土している。遺物の出土状況は覆土中から散在して出土する場合がほとんどだが、第30・33号住居跡では床面から多量の完形に近い土器が出土している。

古墳時代の土器については、既に隣接するD地点の資料について、大谷徹氏により時期区分と検討が行われている。また、前期については筆者が検討した（大谷2011）。

以下では、大谷氏の時期区分に従って、本調査における良好な一括遺物について検討する。

I期は、第35・37号住居跡があげられる。甕の口縁部、胴部の形態、S字状口縁台付甕の様相から古段階に位置づけられる。

II・III期は、本調査では、僅かにB区グリッド出土の有段高坏（第127図10）が挙げられるのみである。

IV期は2時期に区分できる。古段階は第15号住居跡が該当する。坏蓋模倣坏は口縁部が内彎もししくは直立し、端部調整が加えられないものが主体である。和泉式的な丸塊が伴出する。甕は胴部中

位に最大径がある。

新段階は壺蓋模倣壺の口縁部が長く直立し、端部調整が加えられる。第13号住居跡が該当するが、この資料には端部調整は加えられていない。TK47型式の須恵器が伴出している。

今井川越田遺跡では良好な資料がなく、大谷氏が挙げた川越田D地点第25号住居跡の資料は古・新の中間的な様相である。TK23~47型式の須恵器が伴出する段階である。

V期古段階は、第31号住居跡が該当する。壺蓋模倣壺の口縁部はやや外反気味に短くなる。深身の壺身模倣壺が組成に加わる。

V期新段階は、第26号住居跡が該当する。壺蓋模倣壺の口縁部は直線的に更に外反し、やや外反気味に短くなる。MT15併行の壺が出土している。

VI期は第3・16・20・24・28・30号住居跡が該当する。模倣壺は全体に口径15~16cmと大型化し、浅い扁平な器形が特徴である。壺蓋模倣壺は、口縁部が更に外反する個体が多くなる。また、この時期以降に有段口縁壺が確実に見られる。有段口縁壺はほとんどが黒色処理されている。28号住居跡からはTK10併行の壺が出土している。

VII期からX期は良好な資料が見られなかった。

XI期は内屈口縁壺、北武藏型の壺の出現をもつて画した。第4・5号住居跡が該当する。壺蓋模倣壺は径10~11cmとごく小さく、口縁部は体部との境目が不明瞭で、短く直立、もしくは外反する。有段口縁壺も同様の形態である。甕は上位に横位、もしくは斜位のヘラケズリが施され、口縁部は大きく外反する。第4号住居跡35は側縁部が一部に残り、歪んだ皿形である。第5号住居跡からはTK217併行のごく小型の須恵器壺、壺蓋、時期は不明だが、短脚1段の高壺が出土している。

今井川越田遺跡とは、概ね川越田III期が今井川越田I期、V期がII期、VI期がIII期、以下VII~XI期が各々IV~VII期に対応すると考えられる。

後張遺跡との関係では、IV期がVIa・b、V期

がVII、VI期がVIII期に対応する。

須恵器との関係、実年代については川越田IIで示された通りである。今回の成果とも合わせて示せば、第IV期古段階がTK23、5世紀第3四半期、第IV期新段階がTK47、5世紀第4四半期、第V期がMT15、6世紀第1四半期、第VI期がTK10、6世紀第2四半期から中葉、第VII期がTK43、6世紀第3四半期を中心とする後葉、VIII・IX期がTK209、6世紀末から7世紀前半、X・XI期がTK217、7世紀前半から中葉に位置づけられよう。

川越田遺跡H地点は、これまでの調査での知見同様に、4世紀後半から7世紀中葉に亘る300年間続いた集落跡と考えられる。

3. 遺構の変遷

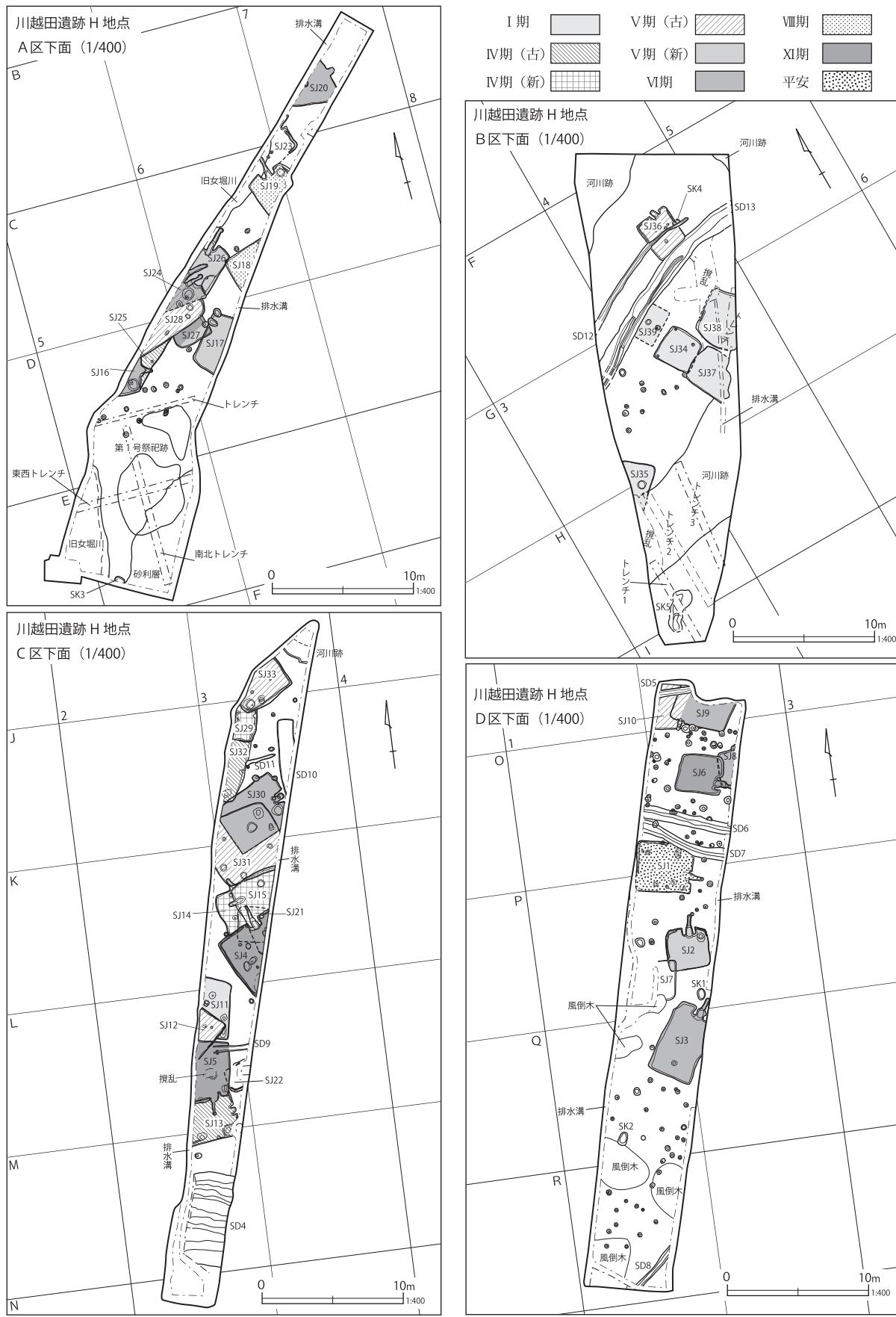
I期の住居跡は、B区に集中して分布する。第11・34・35・37~39号住居跡が該当する。軸方向がほぼ揃っており、短期間に展開したと考えられる。一辺約2.0~4.0mの小型で、方形もしくは長方形と考えられる。柱穴、貯蔵穴、壁周溝等の施設が検出され、11・34・37号住居跡からは炭化材が出土しており、一時期の焼失も考えられる。

II・III期はH地点では住居跡が見られない。

IV期古段階は第13・25号住居跡が該当する。A・C区に各1軒分布する。第13号住居跡のカマドは小規模で礫の支脚が用いられている可能性がある。

IV期新段階は、14・15・29号住居跡が該当する。全てC区に分布している。15号住居跡は長軸5.50mでやや大型だが、全掘できた例が少なく、格差の詳細は不明である。14号が北カマド、15号が西カマドで、いずれも煙道が長く伸びている。

V期古段階は、第10・12・31・33・36号住居跡が該当する。B・D区に各1軒、それ以外はC区に分布する。31号は長軸5.20mで、やや大型である。C区の中央に位置し、3~4.0mの規模の他



第133図 遺構変遷図

の住居跡とほぼ軸方向も揃っており、計画的な造営が窺える。カマドは33号が西カマド、36号が北カマドである。36号の燃焼部は壁からやや突出し、向かって左側へ曲がっている。

V期新段階は、第17・26・27号住居跡が該当する。いずれもA区に分布する。26号は重複が著しく、不明瞭だが大型の可能性も考えられる。いずれもほぼ同一の軸方向で、東カマドである。燃焼部は壁内に收まり、26号の煙道は長く延びている。30号では転用支脚が用いられている。

17・27号は、VII期からX I期にかけての遺物が出土しているが、重複関係と一部にV～VI期と考えられる遺物が含まれているため本期に含めた。VI期に下がる可能性もある。

VI期は、第3・8・9・16・20・24・28・30号住居跡が該当する。H地点では、最も集落が隆盛した時期である。A・D区に分布し、各々の調査区内ではほぼ軸方向が揃っている。大まかにA区、D区北側、D区中央の3箇所に分布が分かれている。D地点の密集した造営状況とは、やや様相を異にする。第3号住居跡は長方形で長軸5.40m、30号は長軸4.90mでやや大型、28号は完掘できていないが、調査区内で6.20mあり、大型である。それ以外は全体の規模が不明瞭だが、調査区内の様相からは3～4.0mの小型と考えられる。確実ではないが、大小の組み合わせも考えられよう。

軸方向は調査区ごとに異なり、A区は東西方向に近く、C区は南北から北東一南西である。カマドも同様で、3号が北、9号が南、それ以外は東カマドである。燃焼部は3・24号が壁内に收まり、9・16・20号は突出する。16・20・24号はカマドを壊した後に片付けられており、袖の構築土も検出できなかった。16号のカマドはピット状を呈し、掘り方の可能性も考えられる。24号は付け替えが行われ、古いカマドの埋戻し土から白玉が出土している。廃絶に伴う祭祀的な行為が窺える。また、3号からは礫支脚が出土している。

28号は覆土中から、白玉や桃の種、上層からは炭化材が出土している。住居跡に伴うかは不明瞭で、第1号祭祀跡の北側にあることから、近傍で祭祀が行われた可能性も考えられる。

VII期の遺構はH地点では不明瞭である。

VIII期は第18・19号住居跡が該当し、A区に分布する。19号は遺物によって時期の判別ができないが、18号とほぼ同軸方向であり、VIII期に含めた。

18号は完掘されていないため不明だが、19号は長軸2.90mで小型である。19号のカマドは北カマドで、燃焼部は壁内に收まり、煙道が長く延びる。

IX・X期の遺構は、H地点では不明瞭である。

X I期は、第2・4～6号住居跡が該当する。C区南側・D区北側にまとまって分布している。2号は遺物が出土していないが、5号と同軸方向であるため、本時期に含めた。軸方向は、4号が北西、6号が東で多様である。平面形は縦長の長方形である。規模は4号が調査区内でも4.7mありやや大型、その他は3～4mで小型である。カマドは燃焼部が壁を掘り込み、煙道が長い。

4号のカマドの両脇には柱穴があり、何らかの施設が設けられていたと考えられる。

以上の展開をまとめると、H地点では第I期から集落の造営が始まるがII・III期は途絶し、IV期から再び造営が始まり、V期以降本格化する。集落の最終段階まで途絶することはない。

住居跡は調査区が狭小なため、規模が窺えるのは20軒にとどまる。一辺5～6mの大型、4m前後の中型、3m以下の小型が認められるが、傑出した規模のものは検出されなかった。

カマドは全体に方位のまとまりではなく、東方向が最も多く、次いで北方向が多い。袖は黄灰色の粘土もしくはシルトの貼り付けによって構築されている。4号はカマドの構築材に土師器甕の破片を用いている。支脚はグリッド出土遺物として、土製支脚が数点出土している。3号・13号からは礫支脚が出土している。30号では転用支脚が用い

られている。煙道はXI期の例は長く延びる。

施設としては、貯蔵穴、柱穴、壁周溝がある。貯蔵穴は径80cmほどで、いずれもカマドの右側に造られていた。第4号住居跡には床下土壙が認められた。第26号住居跡の東壁際にも土壙状の掘り込みが認められた。

祭祀跡は壺蓋模倣壺の形態から、ほぼ本調査におけるVI期の資料、D地点47号住併行と考えられる。6世紀前半と考えられる群馬産須恵器の壺の破片が伴出している点もその傍証となろう。厳密には新旧に分かれる可能性もあるが、それはVI期即ちTK10の年代幅が広いことに起因する。従つて、祭祀跡は30年ほどの時間幅で形成された可能性が考えられる。

本遺跡は、II・IIIで述べたように、遺跡の西側に同時期の集落である今井川越田遺跡が隣接する。北東側の後張遺跡も同時期の集落跡であり、本遺跡との密接な関係が推定される。詳しくは別に譲るが、川越田、今井川越田、後張の3遺跡は一つの遺跡群として各遺跡間で相補的な展開になっている。その遺跡をつなぐのが当時の女堀川とその支流であったと考えられる。既に瀧瀬が検討したように（瀧瀬1997）、女堀川は遺跡間をつなぎ、水田経営の要であるとともに、本調査B区でも見られたように集落を壊す存在でもあった。折しもVI期は川越田、今井川越田の集落の拡大期に当たる。より安定した居住環境への志向が、川への祭祀に表れていると考えられる。

4. 祭祀跡について

（1）祭祀跡の構成

本調査では、手捏ね土器と臼玉、鉄鎌を使用した祭祀跡（第1号祭祀跡）が検出された。

祭祀跡は、既述のようにA・B群、15ブロックから構成されている。A群はあまり集中せず、土師器甕、臼玉、有孔円板のみが出土している。B群は、密集して分布し、手捏ね土器、土師器壺・

甕・高壺・鉢、鉄器が用いられ、須恵器の破片、礫が少量出土している。臼玉は、15ブロック中10ブロックから3～8点出土している。

こうした遺物群は、層位的な上下関係や、出土土師器からVI期を中心とした一定の幅がある時期のものと捉えられる。多量の遺物の遺存は、その時間幅の中で累積した結果と考えられる。一つのブロックは、こうした期間の内の、一回の祭祀に用いられた遺物が廃棄された単位である可能性が高い。

上述のように、手捏ね土器と臼玉は各ブロックから出土する場合が最も多い。両者は、本祭祀跡における最も基本的な祭祀用具と考えられる。

一方、鉄鎌とその可能性がある鉄器は、B群5・9ブロックに集中して分布し、限定された使用が窺える。

各々のブロックの差異は、祭祀の同時期の執行単位の差異ではなく、時間的に異なる祭祀であることを示すものと考えられる。

本遺跡同様の手捏ね土器を用いた祭祀遺跡の比較例としては、茨木県稻敷市尾島貝塚（人見1989）がある。

同遺跡では、石製模造品を中心とした5世紀代の祭祀と、土製模造品を中心とした6世紀中葉の祭祀が行われている。後者の祭祀跡は多くのユニットから構成される。臼玉が少ないが、壺・手捏ね土器・鏡形土製品・勾玉・鍔形土製品のセット、手捏ね土器・刀子のセット、手捏ね土器と壺・甕の土器のセット、手捏ね・甕・壺・壇・土製臼・鉄鎌・円板形模造品のセットによって、各ユニットは構成され、壺の形態から3時期の変遷が推定されている。本遺跡の祭祀跡と相通する状況と考えられ、各ユニットにおけるセットの差異は時間差と考えられる。

また、いずれにも手捏ね土器が用いられており、やはり手捏ね土器が最も基本的な祭祀用具であることが分かる。

それは、古墳時代後期における手捏ね土器が、住居跡からの単独あるいは数個単位での出土例が最も多いことからも窺える。川越田遺跡でもD地点15軒、今井川越田26軒の住居跡で出土例がある。決して大きな割合でないことから、数軒単位での保有と見ることもできるが、個々の住居跡単位の一般的な祭祀用具と考えて大過ないであろう。

同様に、白玉も祭祀遺物として広く一般性が認められるのはよく知られている。

一方、実際の土器の有無、鉄器の有無は、時期差のみでなく、祭祀の性格の違いを反映すると考えられる。同一の祭祀跡でも、本遺跡や尾島貝塚のようにブロックごとに土器の有無が認められる場合が一般的であり、手捏ね土器に通ずる目的での使用が窺える。手捏ね土器と並んで、土器によって構成される古墳時代の祭祀跡が最も多いことが、それをよく示している。

片や鉄鎌が祭祀跡から出土する例はごく少なく、前述の尾島貝塚や、石段状の祭祀施設から大量の石製模造品、鏡、鉄器、土師器、須恵器とともに出土した群馬県富岡市久保遺跡（井上1988）や、複数のブロックから40本以上が出土した群馬県赤城村宮田諏訪原遺跡（小林ほか2005）、などが知られるに過ぎない。尾島貝塚は霞ヶ浦、久保遺跡は赤城、榛名山や鏑川、宮田諏訪原遺跡は榛名山が、それぞれ祭祀の対象と推定されている。特に後二者は一般的な祭祀ではなく、特別な祭祀、執行者も、より上位の階層と推定されている。

本祭祀跡では対象を明示できないが、検出された場所が、川縁であることから、川あるいは水に関わる祭祀であったと推定される。

前述のように、本遺跡の祭祀跡は、各々のブロックに廃棄された祭祀用具の時間的な累積として理解される。手捏ね土器、白玉の組み合わせを基本とした祭祀が繰り返し行われていたと考えられる一方で、土器使用祭祀、鉄鎌使用祭祀は限定

的に行われたと考えられる。こうした祭祀は、手捏ね土器の祭祀と内容が異なり、あるいは用具の希少性から強い効果が期待された祭祀であった可能性も考えられる。

他の祭祀遺跡との比較からも、本遺跡で見られるような手捏ね土器と白玉のセットは、古墳時代後期における祭祀用具の組み合わせとして、最も基本的なセットであったことは明らかである。

これに、祭祀の目的や内容に応じて、鉄鎌など他の器物を加えたのであろう。

祭祀の行われたVI期は、H地点では最も住居跡が多く、集落としても拡大に向かっている時期である。その時期に頻々と祭祀を繰り返した点に、集落全体の意志が示されていると思われる。

（2）手捏ね土器について

本遺跡の手捏ね土器については、前述のように3群4系統15類に分類した。詳しくは別に譲るが、製作技法について詳細に検討したところ、決して安い場当たり的なものではなく、精良な粘土から土師器製作用具を用いて製作していると推定された。手捏ね土器の製作に当たっては、土師器の製作者が、実際の土師器の製作工程を踏襲して当たっていたと考えられる。

特に、坏模倣の手捏ね土器は、模倣坏の製作途中の未製品とも言えるもので、まさに土師器製作工人の手によると考えられる。

手捏ね土器は、土師器製作者の手に成る坏模倣、甕模倣といった祭祀用専用器種なのである。

課題としては、分類したそれぞれの類型が、どのようにブロックを構成しているのか、更に本遺跡における手捏ね土器の製作技法、使用方法が、果たして一般的なものであるのかを検討する必要がある。

また、白玉についても製作技法による分類を試みたが、本報告では言及できなかった。その類型と分布についても検討を行わねばならない。

こうした課題の検討によって、本遺跡の祭祀

跡、また祭祀跡を通した遺跡の位置づけも可能になると考えられる。

引用・参考文献

- 赤熊浩一 1988『将監塚・古井戸 歴史時代編Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第71集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
井上 太 1987「久保遺跡」『富岡市史 自然編・原始・古代・中世編』富岡市
大谷 徹 2011『川越田遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第375集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
柿沼幹夫他 1978『東谷・前山2号墳・古川端』埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集 埼玉県教育委員会
柿沼幹夫他 1979『下田・諫訪』埼玉県遺跡発掘調査報告書第21集 埼玉県教育委員会
恋河内昭彦 1995『飯玉東Ⅱ・高繩田・樋越・梅沢Ⅱ・東牧西分・鶴蒔・毛無し屋敷・石橋』児玉町文化財調査報告書第17集 児玉町教育委員会
恋河内昭彦 1996『辻堂遺跡Ⅰ』児玉町文化財調査報告書第19集 児玉町教育委員会
小久保徹他 1978『東谷・前山2号墳・古川端』埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集 埼玉県教育委員会
小林 修ほか 2005『宮田諫訪原遺跡Ⅰ・Ⅱ』赤城村埋蔵文化財発掘調査報告書第30集 赤城村教育委員会
坂本和俊 1984『Ⅲ 埼玉県』『古墳時代土器の研究』古墳時代土器研究会
杉山秀宏 2005「付編1宮田諫訪原遺跡出土の鉄器について」『宮田諫訪原遺跡Ⅰ・Ⅱ』赤城村埋蔵文化財発掘調査報告書第30集 赤城村教育委員会
鈴木徳雄 1996「古代北武藏の開発と集落—埼玉県北部の灌漑方式の変化を中心に—」『月刊文化財』11月号 No.398
瀧瀬芳之他 1997『今井川越田遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第191集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
立石盛詞他 1982・1983『後張一本文編・図版編Ⅰ・Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第15・26集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
富田和夫他 1985『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第46集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
富田和夫 2002『熊野遺跡(A・C・D区)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第279集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
長谷川勇他 1983『二本松遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告書第5集1分冊 本庄市教育委員会
長谷川勇他 1984『本庄遺跡群発掘調査報告書—夏目遺跡・三塙山古墳 三塙山7号墳—』本庄市埋蔵文化財調査報告第6集 本庄市教育委員会
長谷川勇他 1985『夏目遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告書第5集2分冊 本庄市教育委員会
長谷川勇他 1986『本庄遺跡群発掘調査報告書Ⅲ—社具路遺跡・三塙山1号～6号墳—』本庄市埋蔵文化財調査報告第8集 本庄市教育委員会
長谷川勇他 1987『社具路遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第5集3分冊 本庄市教育委員会
人見暁朗 1989『一般県道新川・江戸崎線道路改良工事内埋蔵文化財調査報告書 尾島貝塚 宮の脇遺跡 後九郎兵衛遺跡』茨城県教育財團文化財調査報告第46集 茨城県教育財團
福田 聖 2011『古墳時代前期の土器様相』『川越田遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第375集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
本庄市 1976『本庄市史』資料編 本庄市史編集室
本庄市 1986『本庄市史』通史編Ⅰ 本庄市史編集室
増田一裕 1987『東富田遺跡群発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第10集 本庄市教育委員会
増田一裕 1987『南大通り線内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』本庄市埋蔵文化財調査報告第9集1分冊 本庄市教育委員会
増田一裕 1989『南大通り線内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』本庄市埋蔵文化財調査報告第9集2分冊 本庄市教育委員会
増田一裕 1991『南大通り線内遺跡発掘調査報告書Ⅲ』本庄市埋蔵文化財調査報告第9集3分冊 本庄市教育委員会
増田一裕 1996『社具路遺跡第9地点発掘調査報告書』本庄市遺跡調査会報告第5集 本庄市遺跡調査会
増田一裕 1997『市内遺跡発掘調査報告書～西富田地区編～』本庄市埋蔵文化財調査報告書第22集 本庄市教育委員会
和久裕昭他 2004『社具路遺跡—第4地点—』本庄市遺跡調査会報告第7集 本庄市遺跡調査会
和久裕昭他 2004『社具路遺跡—第13地点—』本庄市遺跡調査会報告第10集 本庄市遺跡調査会